

**海石西遺跡 角落し遺跡  
廻り田遺跡  
近世山陰道跡（馬橋地区）  
神出西遺跡**

**2018年3月**

**国土交通省浜田河川国道事務所  
島根県教育委員会**



# 序

一般国道9号は、京都府京都市を起点として山口県下関市に至る主要幹線道路であり、山陰地方諸都市を結び、日本海沿岸各地域における経済的・文化的活動に重要な役割を果たしています。

国土交通省中国地方整備局浜田河川国道事務所では、浜田市から益田市にかけて急勾配やカーブが連続する区間が多い一般国道9号において、一般国道9号の代替機能及び、安全・円滑な交通を確保し、地域経済の活性化に役立つことを目的として、三隅・益田道路の建設を進めています。

道路整備に際しては、埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ、関係機関と協議しながら進めていますが、回避することができない埋蔵文化財については、道路事業者の負担によって必要な調査を実施し、記録保存を行っています。

三隅・益田道路においても、道路予定地内にある埋蔵文化財について島根県教育委員会と協議し、同教育委員会の協力のもと平成27年度から発掘調査を行っています。

本報告書は、平成27・28年度に実施した、海石西遺跡・角落し遺跡・廻り田遺跡・近世山陰道跡（馬橋地区）・神出西遺跡の発掘調査結果をまとめたものです。本書が郷土の埋蔵文化財に関する貴重な資料として、学術ならびに教育のために広く活用されることを期待するとともに、道路事業が文化財の保護にも十分留意しつつ行われていることへの理解を深めるものとなれば幸いです。

最後に、今回の発掘調査及び本書の作成に当たり、ご尽力いただいた島根県教育委員会ならびに関係者の皆様に対し、深く感謝申し上げます。

平成30年3月

国土交通省中国地方整備局

浜田河川国道事務所長 浜崎 宏幸

# 序

本書は、島根県教育委員会が国土交通省中国地方整備局浜田河川国道事務所から委託を受けて平成 27 年度から平成 28 年度に実施した一般国道 9 号（三隅・益田道路）建設予定地内に所在する海石西遺跡、角落し遺跡、廻り田遺跡、近世山陰道跡（馬橋地区）、神出西遺跡の発掘調査結果をまとめたものです。

これらの遺跡は浜田市三隅町から益田市遠田町の海岸部から丘陵にかけて立地しています。浜田市三隅町には高城跡など三隅氏に関連する中世の遺跡が存在し、益田市遠田町周辺には県内でも有数の規模を誇る大元 1 号墳が存在するなど、古くから注目された地域でした。しかしながら、当地で確認されている遺跡は限られました。

今回の発掘調査で、浜田市三隅町所在の海石西遺跡では弥生時代中期から古墳時代初め頃の土器群や、集落ではほとんど出土しない平安時代の緑釉陶器が発見されました。また、角落し遺跡では平安時代末頃の土器や木製品が多数見つかるなど大きな成果を上げることができました。

益田市遠田町所在の神出西遺跡では弥生時代の溝状遺構が発見され、遠田川流域で連綿と人々が生活していたことがわかりました。今回の調査成果は、島根県西部の沿岸部の歴史を知る上で、貴重な資料となりました。

本書が、この地域の歴史と埋蔵文化財に対する理解と関心を高めるために広く活用されることを願っています。

最後になりますが、発掘調査及び本書の作成にあたりご協力いただきました地元住民の皆様や国土交通省中国地方整備局浜田河川国道事務所並びに、浜田市と益田市をはじめとする関係機関の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成 30 年 3 月

島根県教育委員会

教育長 鴨木 朗

# 例言

1. 本書は国土交通省中国地方整備局浜田河川国道事務所から委託を受けて、島根県教育委員会が平成 27 年度と平成 28 年度に実施した一般国道 9 号（三隅益田道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果をとりまとめたものである。

2. 本報告書の発掘調査対象遺跡及び事業年度は下記のとおりである。

平成 27 年度	海石西遺跡（浜田市三隅町三隅 352-2 外） 神出西遺跡 1 区～3 区（益田市遠田町 1075-2 外） 角落し遺跡（浜田市三隅町古市場 465-1 外）
平成 28 年度	近世山陰道路（馬橋地区）（益田市土田町 838-3 外） 廻り田遺跡（浜田市三隅町岡見町 2555 外） 神出西遺跡 4 区（益田市遠田町 1072-2 外）
平成 29 年度	整理等作業・報告書作成

## 3. 調査組織

調査主体	島根県教育委員会
平成 27 年度事務局	廣江耕史（埋蔵文化財調査センター所長）、渡部宏之（総務課長）、池淵俊一（管理課長）、大庭俊次（調査第三課長）
調査担当者	伊藤徳広（調査第三課企画員）、川崎英司（同課臨時職員）、世良 啓（同）、三浦竜之介（同）
平成 28 年度事務局	萩 雅人（埋蔵文化財調査センター所長）、渡部宏之（総務課長）、池淵俊一（管理課長）、林 健亮（調査第三課長）
調査担当者	久保田一郎（調査第三課企画員）、伊藤徳広（同）、松山智弘（同課嘱託員）、川崎英司（同課臨時職員）、世良 啓（同）、佐伯幸俊（同）
平成 29 年度事務局	萩 雅人（埋蔵文化財調査センター所長）、石橋 聰（総務課長）、池淵俊一（管理課長）、間野大丞（調査第三課長）
調査担当者	伊藤徳広（調査第三課企画員）、柿田愛子（同課臨時職員）

4. 発掘調査作業（安全管理、発掘作業員の雇用、機械による掘削、測量等）については次の機関に委託した。

平成 27 年度：大畑建設株式会社（益田市大谷町）

平成 28 年度：大畑建設株式会社（益田市大谷町）

5. 発掘調査にあたっては、以下の方々から御指導いただいた。（五十音順・肩書きは当時）

阿部志朗（島根県立浜田高等学校教諭）、柳原博英（浜田市教育委員会）、杉原和恵（防府市教育委員会）、田中克子（NPO 法人アジア水中考古学研究所）、中村唯史（三瓶自然館）、箱崎和久（奈良文化財研究所）、山本信夫（山本考古学研究所）また、以下の方々から御協力、御助言をいただいた。（五十音順・肩書きは当時）

木原 光、山本浩之、長澤和幸、松本美樹、佐伯昌俊、中司健一（益田市教育委員会）、川本裕司、藤田大輔（浜田市教育委員会）、渡辺正巳、佐々木昇二、寺戸和幸、細田恒之（鎌手公民館）

6. 挿図中の北は測量法に基づく平面直角第Ⅲ系X軸方向を示し、座標系XY座標は世界測地系による。レベルは海拔高を示す。
7. 本書で使用した第2図～第4図は国土地理院発行1/25,000地形図(三隅・高島・石見横田・益田・仙道・都茂郷)を、第5図・第16図・第48図・第57図・第65図は国土交通省浜田河川国道事務所が作成した計画平面図1/1,000を使用して作成したものである。
8. 本書に掲載する土層は『新版 標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修に従って表記した。
9. 発掘調査に伴って、出土鉄製品の保存処理を次の機関に委託した。

平成28年度：(公財)大阪市博物館協会  
平成29年度：(公財)大阪市博物館協会
10. 本書に掲載した遺構・遺物の写真は伊藤・久保田が撮影した。また、掲載した遺構図・遺物実測図の作成・浄書は、各調査員・臨時職員・整理作業員が行ったほか、埋蔵文化財調査センター職員の協力を得た。
11. 本書の執筆は、第1章～第7章は伊藤を行い、第8章は各節ごとに執筆者を明記している。
12. 本書の編集は伊藤を行った。
13. 著は各章ごとに連番を振り当該頁下に配置し、参考文献等は各章末にまとめて示した。写真、挿図及び表の番号は全体の通し番号により表示した。
14. 本書に掲載した遺物及び実測図・写真などの資料は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センター(松江市打出町33番地)にて保管している。
15. 本書で用いた土器の分類及び編年観は下記論文・報告書に依拠している。
  - (1) 弓生土器  
松本岩雄 1992『石見地域』『弥生土器の様式と編年－山陰・山陽編－』木耳社
  - (2) 土師器  
島根県教育委員会 2010『久城東遺跡・若葉台遺跡・久城西I遺跡・久城西II遺跡・原浜遺跡』
  - (3) 須恵器  
榎原博英 2010『石見国の須恵器生産と出雲産須恵器』『出雲国の形成と国府成立の研究』
  - (4) 陶磁器  
太宰府市教育委員会 2000『太宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－』

# 本文目次

第1章 調査の経過	1
第1節 調査にいたる経緯と経過	1
1. 事業計画の概要	1
2. 埋蔵文化財保護部局への照会と調整	1
3. 法的手続き	2
第2節 発掘作業と整理作業	2
第2章 遺跡の位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
1. 浜田市の位置	4
2. 益田市の位置	4
第2節 歴史的環境	4
1. 浜田市三隅町	4
2. 益田市東部（益田川以東）	5
第3章 海石西遺跡の発掘調査	11
第1節 遺跡の位置と環境	11
1. 遺跡の位置	11
2. 地理的環境	11
第2節 発掘調査と整理作業の経過	12
1. 発掘調査の経過	12
2. 整理等作業の経過	13
第3節 発掘調査の概要	14
1. 調査の方法	14
2. 基本層序	14
3. 検出した遺構と遺物	15
第4節 小結	19
第4章 角落し遺跡の発掘調査	21
第1節 遺跡の位置と環境	21
1. 遺跡の位置	21
2. 地理的環境	21
第2節 発掘調査と整理作業の経過	21
1. 発掘調査の経過	21
2. 整理等作業の経過	22

第3章 発掘調査の概要	22
1. 調査の方法	22
2. 基本層序	23
3. 検出した遺構と遺物	25
第4章 小結	46
 第5章 回り田遺跡の発掘調査	47
第1節 遺跡の位置と環境	47
1. 遺跡の位置	47
2. 地理的環境	47
第2節 発掘調査と整理作業の経過	47
1. 発掘調査の経過	47
2. 整理等作業の経過	47
第3節 発掘調査の概要	47
1. 調査の方法	47
2. 基本層序	48
3. 検出した遺構	48
第4節 小結	52
 第6章 近世山陰道跡（馬橋地区）の発掘調査	57
第1節 遺跡の位置と環境	57
1. 遺跡の位置	57
2. 地理的環境	57
第2節 発掘調査と整理作業の経過	57
1. 発掘調査の経過	57
2. 整理等作業の経過	57
第3節 発掘調査の概要	57
1. 調査の方法	57
2. 基本層序	58
3. 検出した遺構と遺物	59
4. 包含層出土遺物	64
第4節 小結	64
 第7章 神出西遺跡の発掘調査	67
第1節 遺跡の位置と環境	67
1. 遺跡の位置	67
2. 地理的環境	67
第2節 発掘調査と整理作業の経過	68

1. 発掘作業の経過	68
2. 整理等作業の経過	69
第3節 発掘調査の概要	70
1. 調査の方法	70
2. 基本層序	70
3. 検出した遺構と遺物	72
4. 包含層出土遺物	78
第4節 小結	80
 第8章 自然科学分析	 81
第1節 神出西遺跡発掘調査に係る花粉及び植物珪酸体分析	81
第2節 三隅益田道路発掘調査出土木製品の樹種	89
第3節 神出西遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）	94
第4節 蛍光X線分析	97
 第9章 総括	 99
第1節 三隅川下流域における遺跡の形成	99
第2節 近世山陰道推定地について	99

## 挿図目次

第1図	事業の位置	1
第2図	事業予定地内の埋蔵文化財包蔵地 (S=1:100,000)	3
第3図	浜田市三隅町の遺跡 (S=1:25000)	6
第4図	益田市東部の遺跡 (S=1:50000)	11
第5図	海石西遺跡の位置 (S=1:4000)	11
第6図	海石西遺跡 調査区配置図 (S=1:1000)	12
第7図	海石西遺跡 遺構配置図 (S=1:100)	13
第8図	海石西遺跡土層図 (S=1:100)	14
第9図	海石西遺跡 遺物出土状況図 (S=1:150)	15
第10図	海石西遺跡 出土遺物実測図 1(S=1:3)	16
第11図	海石西遺跡 出土遺物実測図 2(S=1:3)	17
第12図	海石西遺跡 出土遺物実測図 3(S=1:3)	18
第13図	海石西遺跡 出土遺物実測図 4(S=1:3)	19
第14図	海石西遺跡 出土遺物実測図 5(S=1:3)	19
第15図	海石西遺跡 出土遺物実測図 6 (S=1:2、 S=1:1)	20

第 16 図	角落し遺跡の調査位置図 (S=1:4000)	22
第 17 図	角落し遺跡 調査区配置図 (S=1:1500)	23
第 18 図	角落し遺跡土層図 (S=1:100,S=1:200)	24
第 19 図	角落し遺跡 遺構配置図 (S=1:500)	25
第 20 図	角落し遺跡 SX01 検出状況 (S=1:30)	26
第 21 図	角落し遺跡 SX01 出土遺物実測図 1(S=1:3)	27
第 22 図	角落し遺跡 SX01 出土遺物実測図 (S=1:3)	28
第 23 図	角落し遺跡杭列検出状況 (S=1:50)	29
第 24 図	角落し遺跡杭列 1 出土遺物実測図 (S=1:6)	30
第 25 図	角落し遺跡杭列 2 検出状況 (S=1:50)	30
第 26 図	角落し遺跡 出土遺物実測図 1(S=1:3)	31
第 27 図	角落し遺跡 出土遺物実測図 2(S=1:3)	32
第 28 図	角落し遺跡出土遺物実測図 3(S=1:3)	32
第 29 図	角落し遺跡 出土遺物実測図 4(S=1:3)	33
第 30 図	角落し遺跡 出土遺物実測図 5(S=1:3)	34
第 31 図	角落し遺跡 出土遺物実測図 6(S=1:3)	34
第 32 図	角落し遺跡 出土遺物実測図 7(S=1:3)	35
第 33 図	角落し遺跡 出土遺物実測図 8(S=1:3)	36
第 34 図	角落し遺跡 出土遺物実測図 9(S=1:3)	37
第 35 図	角落し遺跡 出土遺物実測図 10(S=1:3)	37
第 36 図	角落し遺跡 出土遺物実測図 11(S=1:3)	38
第 37 図	角落し遺跡出土遺物実測図 12(S=1:3)	38
第 38 図	角落し遺跡 出土遺物実測図 13(S=1:3)	39
第 39 図	角落し遺跡 出土遺物実測図 14(S=1:3)	40
第 40 図	角落し遺跡 出土遺物実測図 15(S=1:3)	40
第 41 図	角落し遺跡 出土遺物実測図 16(S=1:3)	41
第 42 図	角落し遺跡 出土遺物実測図 17(S=1:3)	42
第 43 図	角落し遺跡 出土遺物実測図 18(S=1:3、 S=2:3)	42
第 44 図	角落し遺跡 出土遺物実測図 19(S=1:3)	43
第 45 図	角落し遺跡 出土遺物実測図 20(S=1:3、 S=1:6)	44
第 46 図	角落し遺跡 出土遺物実測図 21(S=1:2)	45
第 47 図	角落し遺跡 出土遺物実測図 22(S=1:3)	45
第 48 図	廻り田遺跡の調査位置図 (S=1:5000)	48
第 49 図	廻り田遺跡遺構配置図 (S=1:500)	49
第 50 図	廻り田遺跡 調査前測量図 (S=1:300)	50
第 51 図	廻り田遺跡調査後測量図 (S=1:300)	51
第 52 図	廻り田遺跡土層図 (S=1:80)	52

第 53 図	廻り田遺跡塚状遺構 1 実測図 1( 平面図 S=1:50 、土層図 S=1:80)	53
第 54 図	廻り田遺跡塚状遺構 2 実測図 1( 平面図 S=1:50 、土層図 S=1:80)	54
第 55 図	廻り田遺跡 SD01・SD02 検出状況 ( 平面図 S=1:30 、土層図 S=1:40)	55
第 56 図	廻り田遺跡 SX01 検出状況 (S=1:30)	55
第 57 図	近世山陰道路の調査位置図 (S=1:3000)	58
第 58 図	近世山陰道路 調査前測量図 (S=1:600)	60
第 59 図	近世山陰道路 調査後測量図 (S=1:600)	60
第 60 図	近世山陰道路遺構配置図 (S=1:300)	61
第 61 図	近世山陰道路土層図 (S=1:60)	62
第 62 図	近世山陰道路石垣実測図 (S=1:80)	63
第 63 図	近世山陰道路石垣 1 ~ 5 実測図 (S=1:80, S=1:100)	64
第 64 図	近世山陰道路 出土遺物実測図 (S=1:1, S=1:3)	65
第 65 図	神出西遺跡の調査位置図 (S=1:2000)	67
第 66 図	神出西遺跡 調査区配置図 (S=1:600)	68
第 67 図	神出西遺跡遺構配置図 (S=1:400)	69
第 68 図	神出西遺跡上層図 1(S=1:200)	70
第 69 図	神出西遺跡上層図 2(S=1:200)	71
第 70 図	神出西遺跡 SK01 検出状況 ( 平面図 S=1:40)	72
第 71 図	神出西遺跡 SD01 検出状況 ( 平面図 S=1:150 、断面図 S=1:20)	72
第 72 図	神出西遺跡 SD01 出土遺物実測図 (S=1:3)	72
第 73 図	神出西遺跡 SD02 検出状況 ( 平面図 S=1:20)	73
第 74 図	神出西遺跡 SD02 出土遺物実測図 1(S=1:3)	74
第 75 図	神出西遺跡 SD02 出土遺物実測図 2(S=1:3)	75
第 76 図	海石西遺跡 SD02 出土遺物実測図 3 (S=1:6)	75
第 77 図	神出西遺跡 SD03・SD04 実測図 (S=1:30)	75
第 78 図	神出西遺跡 SD03・SD04 出土遺物実測図 (S=1:3)	76
第 79 図	神出西遺跡旧河道路出土遺物実測図 1(S=1:3)	77
第 80 図	神出西遺跡旧河道路出土遺物実測図 2(S=1:6, S=1:8)	78
第 81 図	神出西遺跡出土遺物実測図 1(S=1:3)	79
第 82 図	神出西遺跡出土遺物実測図 2(S=1:3)	80
第 83 図	試料採取地点・採取層準 (左 : レンチ平面図 右 : 分析試料採取地点近辺の断面図)	81
第 84 図	花粉ダイアグラム	83
第 85 図	植物珪酸体ダイアグラム	84
第 86 図	曆年較正年代グラフ (参考)	96

## 表目次

表 1	事業予定地内の埋蔵文化財包蔵地一覧	3
表 2	浜田市三隅町の遺跡	6
表 3	益田市東部の遺跡	8
表 4	植物珪酸体分析同定対象分類群	82
表 5	微化石概査結果	82
表 6	花粉組成表	83
表 7	植物珪酸体組成表	84
表 8	分析資料一覧	89
表 9	放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$ 補正值)	96
表 10	放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、曆年較正用 $^{14}\text{C}$ 年代、較正年代)	96
表 11	分析結果 (Pb フィルタ)	97
表 12	分析結果 (Cd フィルタ)	98
表 13	海石西遺跡遺物観察表	101
表 14	角落し遺跡遺物観察表	101
表 15	近世山陰道路（馬橋地区）遺物観察表	106
表 16	神出西遺跡遺物観察表	107

## 本文写真目次

図版 1	木材 (1)	92
図版 2	木材 (2)	93

# 写真目次

図版 1	上空から見た海石西遺跡（西から）	図版 22	遺物出土状況（上から）
図版 2	調査前状況（南東から）	図版 23	遺物出土状況（上から）
	遺跡と背後の丘陵（北東から）	図版 24	遺物出土状況（南から）
	遺跡と東側の丘陵（南西から）	図版 25	遺物出土状況（南西から）
図版 3	土層堆積状況（南東から）	図版 26	遺物出土状況（北西から）
	北壁土層堆積状況（南東から）	図版 27	遺物出土状況（北から）
図版 4	遺物出土状況（南東から）	図版 28	遺物出土状況（北西から）
	遺物出土状況（南東から）	図版 29	遺物出土状況（南から）
図版 5	遺物出土状況（西から）	図版 27	遺物出土状況（東から）
	完掘状況（西から）		発掘調査状況（南東から）
図版 6	遺物出土状況（南から）	図版 28	1 区上層遺物出土状況（南西から）
	遺物出土状況（東から）		2 区下層調査状況（南西から）
図版 7	遺物出土状況（南から）	図版 29	1 区・2 区調査状況（南から）
	遺物出土状況（上から）		角落し遺跡から日本海を臨む
	遺物出土状況（南から）		（南東から）
図版 8	調査状況（南西から）	図版 30	2 区完掘状況（南東から）
	調査状況（西から）	図版 31	3 区調査状況（東から）
図版 9	出土遺物(1)	図版 30	上空から見た角落し遺跡（上から）
図版 10	出土遺物(2)	図版 32	2 区と 6 区〔未調査区〕（南東から）
図版 11	出土遺物(3)	図版 31	出土遺物(1)
図版 12	出土遺物(4)	図版 32	出土遺物(2)
図版 13	角落し遺跡を上空から臨む（東から）	図版 33	出土遺物(3)
図版 14	角落し遺跡を上空から臨む（南から）	図版 34	出土遺物(4)
	角落し遺跡を上空から臨む（西から）	図版 35	出土遺物(5)
図版 15	調査前状況（東から）	図版 36	出土遺物(6)
	2 区南西壁面土層堆積状況（北東から）	図版 37	出土遺物(7)
図版 16	1 区サブトレンチ土層堆積状況 (北から)	図版 38	出土遺物(8)
	2 区下層土層堆積状況（西から）	図版 39	出土遺物(9)
図版 17	SX01 検出状況（北西から）	図版 40	出土遺物(10)
	SX01 検出状況（南から）	図版 41	出土遺物(11)
図版 18	上層杭列出土状況（北から）	図版 42	出土遺物(12)
図版 19	上層杭列検出状況（南西から）	図版 43	出土遺物(13)
	上層杭列検出状況（西から）	図版 44	出土遺物(14)
図版 20	上層杭列出土状況（北から）	図版 45	出土遺物(15)
	上層杭列出土状況（西から）	図版 46	出土遺物(16)
図版 21	下層杭列出土状況（西から）	図版 47	出土遺物(17)
	下層杭列出土状況（東から）	図版 48	出土遺物(18)
		図版 49	出土遺物(19)

図版 50	出土遺物 (20)		塚状遺構 1 盛土除去後状況
図版 51	出土遺物 (21)		(北西から)
図版 52	出土遺物 (22)	図版 78	塚状遺構 1 旧表土除去後状況
図版 53	出土遺物 (23)		(南西から)
図版 54	出土遺物 (24)		塚状遺構 2 表土除去状況 (北から)
図版 55	出土遺物 (25)		塚状遺構 2 表土除去後状況 (北から)
図版 56	出土遺物 (26)	図版 79	塚状遺構 2 表土除去後状況 (西から)
図版 57	出土遺物 (27)		塚状遺構 2 表土除去後状況
図版 58	出土遺物 (28)		(南東から)
図版 59	出土遺物 (29)		塚状遺構 2 表土除去後状況 (西から)
図版 60	出土遺物 (30)	図版 80	塚状遺構 2 西側土層堆積状況(西から)
図版 61	出土遺物 (31)		塚状遺構 2 西側土層堆積状況
図版 62	出土遺物 (32)		(南西から)
図版 63	出土遺物 (33)		塚状遺構 2 土層堆積状況 (南東から)
図版 64	出土遺物 (34)	図版 81	塚状遺構 2 東側土層堆積状況(東から)
図版 65	出土遺物 (35)		塚状遺構 2 盛土除去後状況 (西から)
図版 66	出土遺物 (36)		塚状遺構 2 旧表土除去後状況
図版 67	出土遺物 (37)		(西から)
図版 68	出土遺物 (38)	図版 82	平坦面土層堆積状況 (西から)
図版 69	出土遺物 (39)		平坦面土層堆積状況 (南東から)
図版 70	出土遺物 (40)		平坦面土層堆積状況 (北東から)
図版 71	調査前塚状遺構 (東から) 益田方面を臨む (北東から)	図版 83	平坦面土層堆積状況 (北から)
図版 72	完掘状況 (上空から) 浜田方面を臨む (南西から)		平坦面完掘状況 (南西から)
図版 73	調査前状況 (北東から) 調査前状況 (南西から) 調査前状況 (東から)	図版 84	平坦面完掘状況 (西から)
図版 74	調査状況 (東から) 表土除去状況 (東から) 表土除去状況 (西から)	図版 85	溝状遺構 1 検出状況 (北東から)
図版 75	平坦面表土除去後状況 (南西から) 表土除去状況 (東から)	図版 86	平坦面と溝状遺構 2 完掘状況 (南西から)
図版 76	塚状遺構 1 表土除去状況 (東から) 塚状遺構 1 表土除去状況 (南東から) 塚状遺構 1 磁散分布状況 (北西から)	図版 87	溝状遺構 1 完掘状況 (南西から)
図版 77	塚状遺構 1 北側土層堆積状況 (北東から) 塚状遺構 1 西側土層堆積状況 (北西から)	図版 88	溝状遺構 2 完掘状況 (北東から) 近世山陰道路 (馬橋地区) を臨む (南から)
			石垣 1・2 検出状況 (南東から)
			近世山陰道路 (馬橋地区) 調査前状況 (西から)
			石敷き検出状況 (東から)

図版 89	石敷き検出状況（北から） 石敷き検出状況（東から）	コンクリート壁検出状況（西から） コンクリート壁検出状況（南東から）
図版 90	石敷き検出状況（南東から） 石敷き検出状況（東から）	図版 107 出土遺物（1） 図版 108 出土遺物（2）
図版 91	石敷き検出状況（東から） 石敷き検出状況（西から）	図版 109 神出西遺跡 1 区から 3 区を臨む (北東から)
図版 92	石敷き下部検出状況（東から） 石敷き下部完掘状況（南東から）	神出西遺跡 1 区から 3 区を臨む (北西から)
図版 93	石敷き完掘状況（東から） 石敷き完掘状況（東から） 石敷き完掘状況（東から） 石敷き完掘状況（東から）	図版 110 神出西遺跡 4 区完掘状況（北から） 図版 111 神出西遺跡 1 区から 3 区を臨む (上から)
図版 94	石敷き完掘状況（東から） 石敷き完掘状況（東から）	神出西遺跡 1 区から 3 区を臨む (南西から)
図版 95	石敷き・溝跡完掘状況（東から） 石敷き・溝跡完掘状況（東から）	図版 112 神出西遺跡 2 区・3 区北西壁土層堆積状況（北東から） 神出西遺跡 4 区東壁土層堆積状況
図版 96	石敷き完掘状況（北から） 石敷き完掘状況（北から）	図版 113 神出西遺跡 1 区完掘状況（北西から） 神出西遺跡 3 区完掘状況（北東から）
図版 97	溝跡 1・石垣 4 完掘状況（南東から） 溝跡 1 土層堆積状況（南東から）	図版 114 神出西遺跡 4 区完掘状況（南東から） 神出西遺跡 4 区完掘状況（北から）
図版 98	溝跡 2 検出状況（東から） 石敷き周辺土層堆積状況（北東から）	図版 115 神出西遺跡 SD01 検出状況（南東から） 神出西遺跡 SD01 土層堆積状況
図版 99	石敷き及び溝跡 1・2 検出状況 (南東から) 溝跡 1・石垣 4 検出状況（南東から）	図版 116 神出西遺跡 SD01 遺物出土状況 (北から)
図版 100	石垣 4 検出状況（南西から） 石垣 4 完掘状況（南東から）	SD01 調査状況（南東から） SD01 完掘状況（北西から）
図版 101	石垣 4 完掘状況（南西から） 石垣 4 上部・平坦面 5 土層堆積状況 (南から)	図版 117 SK01 土層堆積状況（北西から） SK01 完掘状況（南東から）
図版 102	石垣 1 完掘状況（東から） 石垣 1 完掘状況（南から）	図版 118 SD02 調査状況（東から） SD02 完掘状況（南西から）
図版 103	石垣 1・平坦面 1 完掘状況（南西から） 石垣 2・平坦面 2 完掘状況（南から）	図版 119 SD02 完掘状況（西から） SD02 完掘状況（東から）
図版 104	石垣 3 完掘状況（南東から） 石垣 3 完掘状況（南西から）	図版 120 SD02 遺物出土状況（南東から） SD02 遺物出土状況（上から）
図版 105	平坦面 5 完掘状況（西から） 水路（石敷き）検出状況（南から）	図版 121 SD02 遺物出土状況（南から） SD02 検出状況（西から）
図版 106	石敷き周辺検出状況（南東から） 標柱出土状況	SD02 遺物出土状況（北東から） 図版 122 SD02 土層堆積状況（東から）

- SD02 完掘状況（上から）
- SD03・04 完掘状況（南東から）
- SD03・04 完掘状況（南東から）
- 図版 123 SD03・SD04 土層堆積状況（南東から）
  - SD04 遺物出土状況（南東から）
  - SD04 遺物出土状況（上から）
- 図版 124 旧河道遺物出土状況（南東から）
  - 旧河道遺物出土状況（南東から）
- 図版 125 旧河道土層堆積状況（南東から）
  - 旧河道遺物出土状況（北東から）
- 図版 126 旧河道遺物出土状況（南東から）
  - 旧河道遺物出土状況（北東から）
- 図版 127 旧河道遺物と遠田川（北西から）
- 図版 128 3区調査状況（南西から）
  - 旧河道と遠田川（南東から）
- 図版 129 出土遺物(1)
- 図版 130 出土遺物(2)
- 図版 131 出土遺物(3)
- 図版 132 出土遺物(4)
- 図版 133 出土遺物(5)
- 図版 134 出土遺物(6)
- 図版 135 出土遺物(7)
- 図版 136 出土遺物(8)
- 図版 137 出土遺物(9)
- 図版 138 出土遺物(10)
- 図版 139 出土遺物(11)
- 図版 140 出土遺物(12)
- 図版 141 出土遺物(13)
- 図版 142 出土遺物(14)
- 図版 143 出土遺物(15)

# 第1章 調査の経過

## 第1節 調査にいたる経緯と経過

### 1. 事業計画の概要

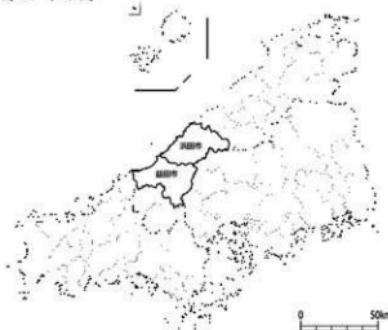
一般国道9号は、京都府京都市から山口県下関市に至る山陰地方の諸都市を結ぶ幹線道路である。近年は都市部を中心にしばしば交通渋滞が発生し、都市間の円滑な連携や生活環境の確保が困難な状況となってきており、その様相は島根県下でも例外ではない。海岸沿いを通る浜田市や益田市では急勾配でカーブが連続する区間が多く、交通渋滞や交通事故などが発生している。また緊急時の代替道路の確保が難しいのが現状である。こうした状況を解決するため、国土交通省により三隅益田道路の事業化が図られ、平成23年10月30日に三隅・益田道路として都市計画決定された。三隅益田道路は、浜田市三隅町森溝上の石見三隅インターチェンジを起点として、益田市遠田町の遠田インターチェンジまでを結ぶ延長15.2kmの自動車専用道路として、平成24年度に事業化され、平成27年度に工事着手している。

### 2. 埋蔵文化財保護部局への照会と調整

この計画・事業化にあたり、国交省から島根県教育委員会に対して、三隅益田道路建設予定地内遺跡の存否について照会があった。これを受け島根県教育委員会では、浜田市と益田市の両教育委員会の協力のもと、平成25年2月と平成26年2月から3月に分布調査を実施した。その結果、周知の遺跡に加え、試掘確認調査を要する要注意箇所を確認し、発掘調査及び試掘確認調査が必要な旨を有無について平成26年5月13日付け島教文財第161号で回答した。その後も工事用道路等の付帯工事に伴う分布調査を数次にわたって行っている。

島根県教育委員会と国土交通省は地元教育委員会も含めて協議を重ね、分布調査の結果を踏まえた試掘確認調査を平成26年度から国庫補助事業により実施した。本報告で扱う遺跡については以下のとおり試掘確認調査を実施した。

1. 海石西遺跡 平成26年10月
2. 角落し遺跡 平成26年11月、平成27年5月
3. 回り田遺跡 平成27年5月



第1図 事業の位置

4. 近世山陰道跡（馬橋地区） 平成 27 年 4 月～6 月

5. 神出西遺跡 平成 26 年 11 月

3. 法的手続き

海石西遺跡・角落し遺跡・神出西遺跡は平成 27 年 3 月 23 日付け国中整浜調設第 144 号で、廻り田遺跡・近世山陰道跡（馬橋地区）は平成 27 年 9 月 8 日付け国中整浜調設第 87 号で文化財保護法第 94 条第 1 項の規定による通知が国土交通省から島根県教育委員会教育長あて提出された。それに対して島根県教育委員会は、試掘確認調査の結果を踏まえ、海石西遺跡・角落し遺跡・神出西遺跡は平成 27 年 3 月 23 日付け島教文財第 35 号の 103 で、廻り田遺跡・近世山陰道跡（馬橋地区）は平成 27 年 9 月 8 日付け島教文財第 120 号の 40 で記録作成のための発掘調査の実施を勧告している。

埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施することとなり、国土交通省と工程上の協議を経て発掘調査を実施した。文化財保護法第 99 条第 1 項の規定による通知は下記のとおりで、埋蔵文化財調査センター所長から島根県教育委員会教育長あてに提出している。

1. 海石西遺跡 平成 27 年 5 月 25 日付け島教埋第 192 号

2. 角落し遺跡 平成 27 年 10 月 1 日付け島教埋第 292 号

3. 廻り田遺跡 平成 28 年 8 月 25 日付け島教埋第 278 号

4. 近世山陰道跡（馬橋地区） 平成 28 年 4 月 19 日付け島教埋第 21 号

5. 神出西遺跡 平成 27 年 6 月 22 日付け島教埋第 193 号

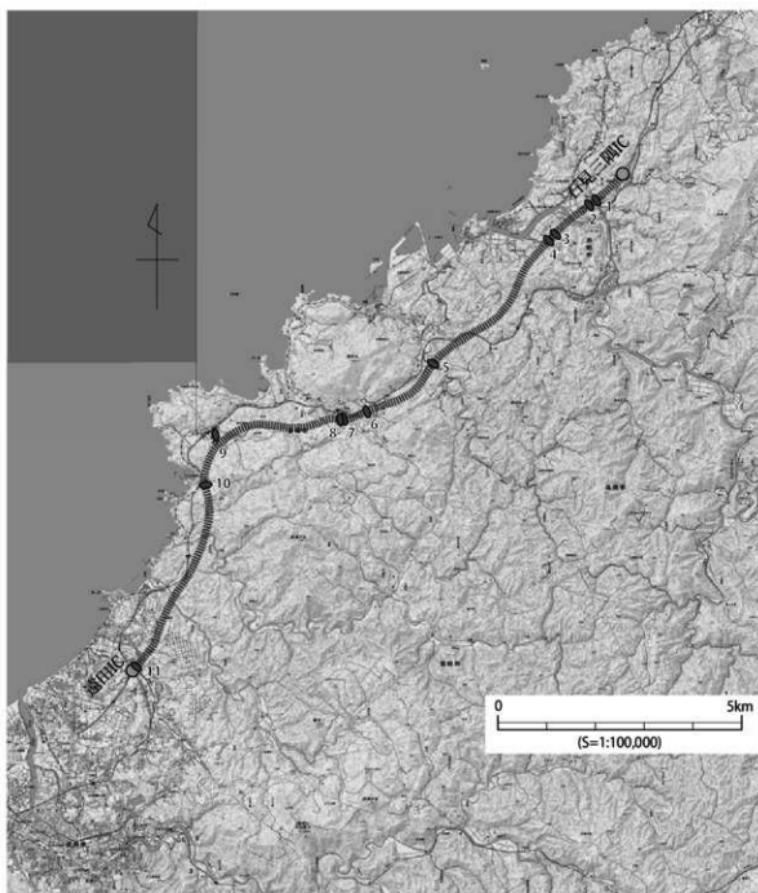
平成 27 年 4 月 27 日付け島教埋第 61 号

## 第2節 発掘作業と整理作業

平成 27 年度 調査員 1 名、調査補助員 2 名の 1 班で調査を実施した。海石西遺跡と神出西遺跡、角落し遺跡の 3 遺跡を対象とした。海石西遺跡は 6 月 30 日に現地調査を完了した。神出西遺跡は 10 月 2 日に現地調査を終了したが、古墳時代の遺構が調査範囲外へ続くことが判明した。28 年度に発掘調査を行うこととなった。角落し遺跡は 1 区から 5 区の調査を終えたが、事業の進捗の関係により遺跡全体の調査を行うことができなかったため 29 年度に実施することとなった。なお、角落し遺跡では 11 月 4 日に中村唯史氏の現地指導を受けている。整理作業は現地調査が終了した平成 28 年 1 月から実施した。実測等は調査員と補助員が行った。

平成 28 年度 調査員 2 名、嘱託職員 1 名、調査補助員 4 名の 2 班で調査を実施した。近世山陰道跡（馬橋地区）と榎坂窯跡、廻り田遺跡、神出西遺跡の 4 遺跡を対象とした。近世山陰道跡（馬橋地区）は 9 月 14 日、廻り田遺跡は 11 月 11 日に調査を終了した。神出西遺跡は 12 月 21 日に調査を終えている。なお、榎坂窯跡は 11 月 15 日に調査を終了した。榎坂窯跡は平成 30 年度以降に報告書の刊行が予定されている。なお、9 月 8 日に榎原博英氏、9 月 21 日に阿部志朗氏の現地指導を近世山陰道跡と廻り田遺跡で受けた。整理作業は現地調査が終了した平成 29 年 1 月から実施した。遺物の実測等は調査員、嘱託職員、補助員が行っている。

平成 29 年度 平成 27 年度と 28 年度に調査を行った 5 遺跡について調査員 1 名、調査補助員 1 名の 1 班で報告書の作成を実施した。遺物の実測は調査補助員を中心に行った。



第2図 事業予定地内の埋蔵文化財包蔵地 (S=1:100,000)

表1 事業予定地内の埋蔵文化財包蔵地

1 茄立横穴	2 海石西遺跡	3 嶺口古墓	4 角落し遺跡	5 普済田古跡	6 織り田遺跡
7 近世山陰道跡(馬橋地区)	8 櫻坂窯跡	9 蔵廻り遺跡	10 国ヶ崎遺跡	11 神出西遺跡	

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

本書掲載の遺跡は島根県西部の浜田市と益田市に存在する。遺跡の分布が広範囲となっているため、本章では浜田市及び益田市の位置と環境についてそれぞれ概略を述べ、各遺跡の詳細な地理的環境は第4章以下に記述する。

### 1. 浜田市の位置

浜田市は島根県西部、石見地方の中央に位置している。平成17年10月1日に旧浜田市と三隅町、金城町、旭町、弥栄村が合併し新たな浜田市として誕生した。北は日本海、南は中国山地で広島県と接している。市内全体に山地が広範囲に広がっており、沿岸部にも大麻山(599m)など500m級の山が存在する。平野は海岸沿いに認められるが比較的広い沖積地としては浜田川下流と周布川下流がある。集落は平野や山間部の盆地などに形成されているため、市内での人口密度の差が非常に大きい。交通は東西に国道9号と江津ICから石見三隅ICまでつながる高速道路の山陰道、南北には中国横断自動車道広島浜田線が通るなど交通の要衝となっている。また、島根県唯一の国際貿易港である浜田港も存在している。市内に一級河川は存在しないが、平野に向けて各河川が中国山地から流れしており、昭和58年に旧三隅町を中心に大雨による水害なども起こっている。

### 2. 益田市の位置

益田市は島根県西部、石見地方の西寄り、浜田市の西隣に位置している。平成16年11月1日に旧益田市と美都町、匹見町が合併し新たな益田市として誕生した。北は日本海、南は広島県、西は山口県と接している。市内には一級河川の高津川と二級河川の益田川によって形成された広い沖積地(益田平野)はあるが、それ以外は河川沿いの小規模な平野や盆地である。市域の南半分は中国山地からつづく山間部となっている。集落は益田平野を中心とする山間部の盆地などに形成されているが、浜田市と同様に市内での人口密度の差が非常に大きい。交通は浜田益田間を抜けて津和野町へ続く国道9号、日本海沿いに山口県萩市へ繋がる国道191号が通っている。吉賀町から津和野町を経由し流れ込む高津川は日本一の清流に選ばれるなど水質が非常に良好である。益田市内には萩・石見空港も開港しており、島根県西部と山口県萩地方の空の玄関としての役割も担っている。

## 第2節 歴史的環境

### 1. 浜田市三隅町

浜田市三隅町の遺跡は主に三隅川河口周辺の海岸部近くと、山間部に形成されたものに大きく分けられる。遺跡の主な種別は城跡、製鉄遺跡、古墳、古墓、窯業遺跡で集落跡はほとんど確認されていない。これは過去に発掘調査がほとんど実施されていないことを反映している。

【旧石器時代・縄文時代】旧石器時代・縄文時代に確実にさかのぼる遺跡は知られてない。

【弥生時代】三隅町井野に所在する大谷遺跡では井川川が氾濫した折に弥生時代後期の甕が確認されている。これまでのところ集落跡や墳墓など遺構の伴う遺跡が確認された例は無い。

【古墳時代】古墳時代になると各所で遺跡が確認されている。三隅町三隅の薙立横穴では工事中に発見された横穴墓1穴が調査されている。玄室は幅2.6m、高さ1m、奥行き2.6mで平面形が正方形に近い。玄室内からは人骨や大刀、須恵器、玉類など多くの副葬品が出土した。追葬があったと考えられており、初葬は7世紀前半、追葬は7世紀後半にまで下る。薙立横穴から1.4km西の三隅川近くの丘陵裾には高田横穴群がある。三隅川に面した丘陵斜面に造られた横穴で薙立横穴とほぼ同時期の横穴墓群。合計7穴確認されている。これまでに発掘調査等で出土した遺物

は須恵器や鉄鎌や大刀などの鉄器が出土している。三隅町小野には横穴式石室を伴う小野古墳が存在したが、すでに消滅している。三隅町岡見の青浦古墳は海岸沿いに造られた古墳である。横穴式石室を伴う古墳であるが、墳丘は削平されており墳形は確認できない。石室内も大部分が破壊されており残存長2.8m、奥壁は幅1.65mである。遺物の出土は無く時期は不明である。三隅町井野には先述の大谷遺跡で須恵器と土師器が採集されている。同じ井野の大谷古墳は、標高158m、平地から比高差約9mの井野川を臨む丘陵斜面に築かれた古墳である。直径約10mの円墳で横穴式石室が確認できる。古くから石室は開口しており、遺物の出土は無く時期は不明である。

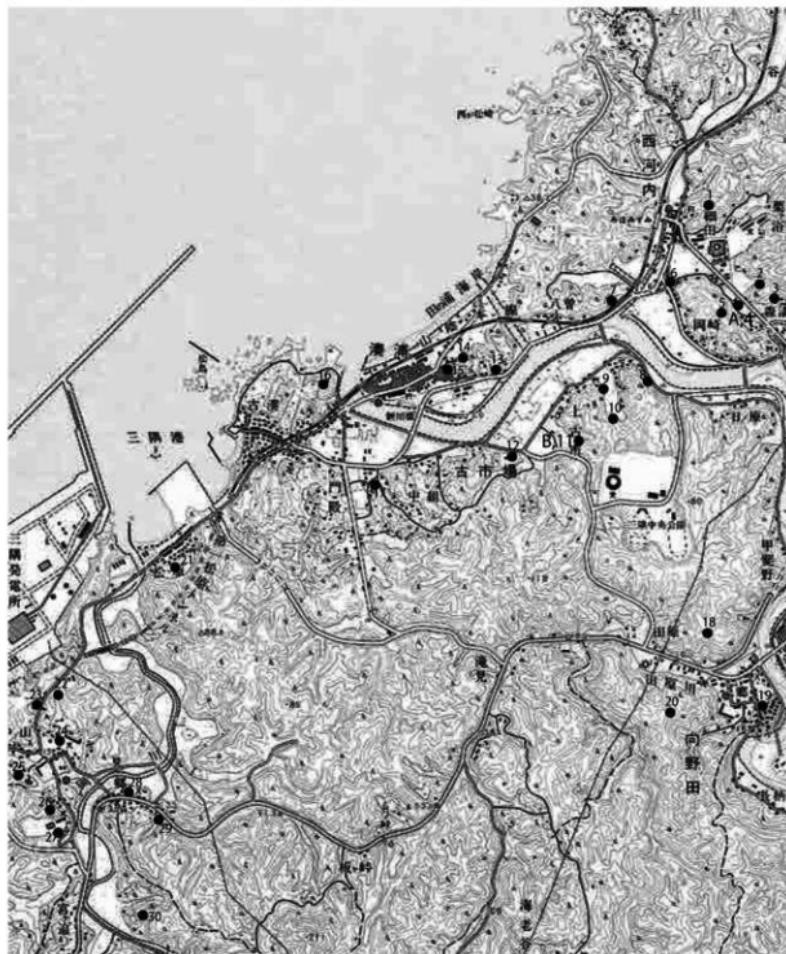
#### 【古代】三隅町内に古代の遺跡でほとんど確認されていない。

【中世】中世の浜田市三隅町を語る上で三隅氏は外せないだろう。三隅氏は石見国那賀郡三隅郷を基盤にして石見西部地域に勢力を張った中世の在地豪族である。系図等の記すところによると、石見益田御神本（みかもと）氏の一族で、地頭職を得て高城（三隅城）に拠り、三隅氏を称したといわれている。また、三隅川河口の三隅湊には海辺領主の大賀氏がいたことが古文書の調査でわかっている。この大賀氏は三隅湊を抱えて船舶を所有し、三隅氏や大内氏から領地や自由通行権などの権益を保障されており、大名領國を越えて経済活動を行っていたようである。三隅町内には多くの城跡が残されている。高城は三隅氏の本城で、三隅川と三隅の町、街道を見下ろす位置にある。高城が築かれた高城山中腹には三隅氏の菩提寺とされる龍雲寺が存在する。三隅氏は南北朝の動乱期は南朝方に与し、北朝方の益田氏と争うなど一大勢力であったが、戦国時代になり台頭してきた毛利氏に攻められ高城は落城する。この高城には多くの支城及び陣城が存在している。河内城跡、井村城跡（井野城跡）、針藻城跡、次郎丸城跡など、各城の様相は縄張図で知られているのがほとんどで、発掘調査は行われていない。三隅町岡見にある城跡で、今回の事業地内に存在する普源田砲跡は岡見川に面した丘陵に築かれている。尾根上に3つの郭・斜面には帯郭が存在し、平成27年度の試掘調査では郭と帯郭に柱穴が検出されたことから掘立柱建物跡が建てられていたと考えられる。古墓は三隅町井野の久瀬遺跡では宝塚印塔と五輪塔、中国陶器の壺と銭貨が出土している。壺は13世紀後半から14世紀前半のものである。銭貨は北宋銭がほとんどで明銭が一部含まれていた。三隅町黒沢には笠取りの墓といわれる五輪塔群が存在する。三隅町古市場の輝口古墓には福光石製の一石五輪塔を数基伴う基壇が存在した。同じ古市場の三隅川を臨む丘陵斜面には火葬骨と土師器片皿が出土した地蔵塼遺跡が存在する。

【近世以降】浜田市三隅町内では製鉄遺跡が数多く残されている。多くは近世以降の操業と考えられるが、未調査のため中世にさかのぼる可能性は捨てきれない。三隅町岡見の中山鉛遺跡は発掘調査が実施された唯一の遺跡である。発掘調査の結果、押立柱や小舟等の地下構造は確認され、近世末の磁器が出土している。高殿の規模を15m×10mほどと想定している。また近世以降に石見地方の各地で生産された瓦・陶器の窯跡も存在する。近世までさかのぼる窯跡が存在するのか今後の調査が待たれる。また浜田から益田、津和野へ抜ける近世山陰道跡が当地を通っている。

#### 2. 益田市東部（益田川以東）

益田市は石見地方で最大規模の平野部を有し、また古くから交通の要衝として栄えたところで、石見地方の中でも数多くの遺跡が存在する地域である。その中でも益田川以東に位置する久城地域から遠田地域にかけては、国指定史跡となっているスクモ塚古墳や石見地方最大の前方後円墳である大元1号墳など著名な遺跡も多い。

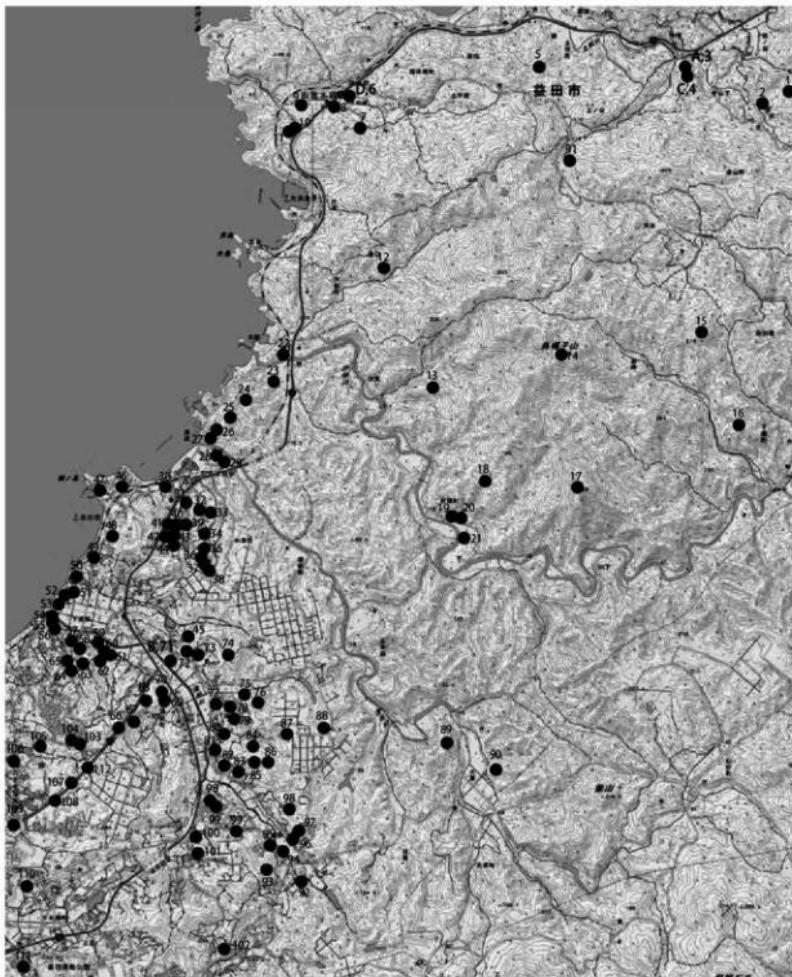


第3図 浜田市三隅町の遺跡 (S=1:25000)

表2 浜田市三隅町の遺跡

A. 4	海石西遺跡	1	八ノ木磐跡	11	角落し遺跡	21	松原遺跡
B. 11	角落し遺跡	2	海石遺跡	12	安達寺跡	22	齊藤窯跡
		3	丸立横穴	13	高田横穴群	23	山岡窯跡
		4	海石西遺跡	14	三隅石堀	24	同見中学校脇遺跡
		5	梅ヶ城跡	15	桂葉寺横古墓	25	森井窯跡
		6	成田郷三角田記念碑	16	針瀬城跡	26	次郎丸磐跡
		7	風呂ノ木岩跡	17	小金町城跡	27	中山跡跡
		8	地蔵畠遺跡	18	城ヶ迫磐跡	28	鍋遺跡
		9	古市城跡	19	青電城跡	29	たかのだん遺跡
		10	岬口古墓	20	陣ノ尾磐跡	30	音源田磐跡

【旧石器時代・縄文時代】久城町の丘陵地帯に位置する久城西II遺跡では旧石器時代末～縄文時代草創期の尖頭器が出土している。同じく堂ノ上遺跡でも有茎尖頭器が出土している。この地域では人類の活動が1万年以前まで遡ることが知られている。縄文時代後期～晩期の遺物が、三宅御土居跡、土井後遺跡で出土するなど益田平野の南側に遺跡の存在が知られる。また、久城町の丘陵地帯では、若葉台遺跡で縄文時代中期頃とみられる落とし穴が確認されている。沖手遺跡では丸木舟が2艘が出土しており、C14年代測定から縄文時代後期末～晩期初頭頃のものと推測さ



第4図 益田市東部の遺跡 (S=1:50000)

表3 益田市東部の遺跡

A. 3	近世山陰道路（馬橋地区）	21	天道山城跡	47	鶴ノ鼻古墳群	73	宝珠庵遺跡	99	辻遺跡
B. 71	神出西遺跡	22	木部郷古墳群	48	高芝遺跡	74	櫛城跡	100	地下田南遺跡
C. 4	模坂窯跡	23	井元遺跡	49	佐々木窯跡	75	北ノ平経塚	101	地下田北遺跡
D. 6	巖屋り遺跡	24	城ヶ須城跡	50	前浜遺跡	76	木原古墳	102	谷上古墳
		25	上の岬古墳	51	前浜古墳	77	北ヶ迫遺跡	103	尾堤古墳群
		26	岬山遺跡	52	ウエ古墳	78	神明北遺跡	104	吉ヶ古墳
1	大内新介弘直墓	27	寺ノ前古墳	53	スケ入道遺跡	79	神明古墳	105	第2工場跡
2	金山下鉢跡	28	水濱島古墳	54	鹿窓跡	80	神明遺跡	106	スケモ塙古墳
3	近世山陰道路（馬橋地区）	29	水濱島遺跡	55	木屋ヶ森古墳	81	平遺跡	107	久城西Ⅰ遺跡
4	模坂窯跡	30	大道古墳群	56	邊棲遺跡	82	柳ヶ森古墳	108	若葉台遺跡
5	鎌手丸山古墳	31	片子遺跡	57	前原遺跡	83	貝崎古墳	109	久城東遺跡
6	巖屋り遺跡	32	片子東遺跡	58	道遺跡	84	東ノ段遺跡	110	聖塙古墳
7	神納古墳	33	曰ヶ追遺跡	59	森ノ上北遺跡	85	燈籠ノ辻遺跡	111	四ツ塙古墳群
8	佐々木窯跡	34	杉迫遺跡	60	森ノ上東遺跡	86	大元古墳群	112	久城西Ⅱ遺跡
9	平原遺跡	35	本片子東遺跡	61	寺田遺跡	87	木原益奥遺跡		
10	芝窓跡群	36	本片子窓跡	62	森ノ上西遺跡	88	金堀古墳群		
11	中塚窓跡群	37	朵ヶ迫窓跡	63	原南遺跡	89	大草城跡		
12	大石鉢跡	38	本片子南遺跡	64	原口東遺跡	90	大草古墳		
13	瀬の上鉢跡	39	本片子北遺跡	65	第9号西遺跡	91	上の谷鉢跡		
14	鳥帽子山城跡	40	岩ヶ本遺跡	66	原浜遺跡	92	杜山古墳		
15	宇治城跡	41	西片子遺跡	67	浜松南遺跡	93	吉ヶ益古墳		
16	高倉山城跡	42	朵ヶ迫西遺跡	68	浜松遺跡	94	三反田遺跡		
17	平家ヶ根城跡	43	寺野遺跡	69	高内古墳	95	三百田遺跡		
18	かんば鉢跡	44	朵ヶ迫東遺跡	70	大山遺跡	96	森ヶ内古墳		
19	細屋敷鉢跡	45	山城遺跡	71	神出西遺跡	97	石仏古墳		
20	赤糞土居跡	46	鶴ノ鼻遺跡	72	神出遺跡	98	原ヶ益遺跡		

れている。この時期に、「古益田湖」が次第に埋まっていったものとされている。

【弥生時代】久城町の沖手遺跡では、弥生中期の水路とみられる溝が検出されおり、陸化された沖積地で次第に水田開発が進む様子が明らかとなっている。益田川右岸の丘陵地帯では原浜遺跡（後期初頭）、久城西Ⅰ遺跡、（後期）、久城東遺跡（後期）、堂ノ上遺跡（後期）で竪穴住居跡が見つかっている。また、専光寺脇遺跡では弥生時代中期後半頃とみられる方形貼石墓などが確認されている。

【古墳時代】この地域は、石見地方の中でも数多くの古墳が存在、前期から後期を通じて有力な首長墳が継続的に築造されている。前期には、三角縁神獣鏡が出土した四塚山古墳群や、近年益田市教育委員会において発掘調査が行われた全長約 86 m の前方後円墳である大元 1 号墳がある。中期には、久城地区の丘陵上にスクモ塙古墳が築造されている。埴輪列や葺石を伴う二段築成の墳丘をもつ。墳形はこれまで墳長 57 m の造り出し付き円墳という見方が有力であったが、島根県教育委員会において近年行なわれた測量調査及び益田市教育委員会による周辺の発掘調査によって墳長約 100 m の前方後円墳となる可能性も指摘されている。後期では、墳長 49 m の前方後円墳で、周囲に塚や外堤を伴う小丸山古墳や、4 基の前方後円墳を含む 50 基以上の古墳が存在する鶴ノ鼻古墳群などが知られている。また、かつては 30 基以上あったとされる片山横穴墓群など、益田平野南東部の丘陵を中心に横穴墓が数多く造られている。土田町には鎌手丸山古墳が存在する。直径約 12m で高さ 4m の円墳である。古墳表面には葺石と見られる礫が点在している。埋葬施設や副葬品については明らかで無く、築造時期も不明である。このように数多くの古墳が存在する一方、集落遺跡で様相の分かるものは少なかったが、近年徐々に調査例が増えている。久城地区では、久城西Ⅰ遺跡で古墳時代中期～後期の竪穴住居跡や加工段が、若葉台遺跡では古墳時代中期の竪穴住居跡が検出されている。これらの集落の形成とスクモ塙古墳の造営との関連性が注目される。古墳時代後期になると須恵器窯跡が益田市の北東部に点在するようになる。芝窓跡、中塚窓跡が西平原町に存在する。芝窓跡が 6 世紀末で、中塚窓跡は 7 世紀初めとされる。津田町には杉迫窓跡で畑地造成に伴い窓壁と須恵器の破片が出土している。朵ヶ迫窓跡では灰原

資料と思われる須恵器が多数出土しているが時期は不明である。

**【古代】**久城町の久城東遺跡では8世紀後半頃の掘立柱建物が15棟以上と作業場と考えられる平坦面、溝状構造が検出されている。鍛冶に関係する楕円形鋳物や鉄片が出土しており、鍛冶工房が存在したと考えられる。遠田町の原浜遺跡では小型の炭窯が約10基検出され、C14年代測定から7~8世紀頃のものと推定されている。本片子窯跡は古墳時代終末期~奈良時代前半の窯跡である。須恵器とともに瓦も生産されていたことから、この時期に益田市周辺に古代寺院が存在した可能性も推測される。染羽天石勝神社や久城地区にある櫛代賀姫神社など、5社が『延喜式』の式内社として記載されている。また、益田川下流域にあった安福寺、妙福寺、福王寺、藏福寺、専福寺の5ヶ寺が、万寿3年(1026年)の大津波によって流失した、という伝承も残っている。

**【中世】**平安時代末期には益田荘、長野荘といった荘園が成立する。鎌倉時代以降は益田氏の拠点として発展しており、益田氏に関連する遺跡が数多く存在する。三宅御土居跡は益田氏の居館で、東西が最大約190m、南北が最大約110mの屋敷地をもち、川や堀、土塁によって周囲の防御を固めている。七尾城跡は、三宅御土居跡から益田川を隔てた対岸の丘陵上に位置している。本丸や二の段の發掘調査では礎石建物跡や庭の跡などが確認され、出土遺物から16世紀中頃~後半には居城として機能していたことが明らかとなった。七尾城下から三宅御土居跡の周辺は益田氏と関わりのある社寺が数多く見られ、中世の城下町に由来する地割りや地名も残されている。益田川下流域では、沖手遺跡で平安時代末~近世前半にかけて大規模な集落が営まれており、貿易陶磁などが多数出土している。また、中須西原遺跡は中世後半を中心とする集落遺跡で、船着場跡とみられる礎敷き遺構が検出された。これらの遺跡から、益田川下流域が中世の交易・流通に密接に関わる地域であったことが窺われる。戦国期には、益田川支流の今市川沿いに今市船着場が成立し、益田氏の貿易港や市場として機能したと考えられている。益田市内には益田氏代々の墓と伝わる五輪塔など中世の石塔が数多く残されている。

**【近世以降】**益田氏は関ヶ原の戦い後、長門国須佐へ移ることになった。その後の益田はおおよそ高津川を境に、東部が浜田藩、西部が津和野藩に分かれて治められた。また製鉄遺跡や窯業遺跡が各地で確認されている。近世山陰道跡は土田町から西平原町、木部町、津田町、遠田町の各所に残っており、現在も少しづつ形を変えながら往来に利用されている。

#### 【参考文献】

(浜田市西部)

島根県教育委員会 1997『石見の城館跡』島根県中近世城館跡分布調査報告書〈第1集〉

島根県教育委員会 2002『増補改訂島根県遺跡地図II(石見編)』

島根県教育委員会 2011『近世山陰道推定地(力石地区・荒磯谷地区・原地区・カモト地区)片良ケ平遺跡・馬ノ太郎遺跡・北ヶ迫遺跡』一般国道9号(浜田・三隅道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書2

浜田市教育委員会 2011『島根県浜田市遺跡地図III(三隅自治区)史跡石見国分寺跡(塔東側の確認調査)』

本田博之 2017『中近世移行期西日本海地域の流通と海辺領主』企画展石見の戦国武将―戦乱と交易の中世―』島根県立石見美術館

三隅町教育委員会 1983『中山たら遺跡緊急発掘調査報告』

三隅町教育委員会 1993『三隅町の文化財』

## 第2章 遺跡の位置と環境

(益田市東部)

大川 清 田中義昭 西垣丹三 1958『島根県益田市西平原遺跡』『古代』早稲田大学

島根県教育委員会 1997『石見の城館跡』島根県中近世城館跡分布調査報告書〈第1集〉

島根県教育委員会 2002『増補改訂島根県遺跡地図II(石見編)』

島根県教育委員会 2007『沖手遺跡 - I 区の調査 -』一般国道9号(益田道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書

3

島根県教育委員会 2010『久城東遺跡・若葉台遺跡・久城西I遺跡・久城西II遺跡・原浜遺跡』一般国道9号(益田道路)

建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書6

島根県教育委員会 2011『堂の上遺跡』一般国道9号(益田道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書7

島根県古代文化センター 2015『日本海沿岸の潟湖における景観と生業の変遷の研究』島根県古代文化センター研究論集

第15集

瀬戸浩二・渡辺正巳 2015『第4節「古益田湖」の諸相』『日本海沿岸の潟湖における景観と生業の研究』島根県古代文化センター研究論集第15集 島根県古代文化センター

林 正久 2006『益田平野の成り立ちと沖手遺跡』『沖手遺跡 - I 区の調査成果 -』島根県教育委員会

増野晋次 2001『益田・鶴ノ鼻古墳群について』『松江考古』第9号 松江考古学講話会

益田市誌編纂委員会 1975『益田市誌』上巻

益田市教育委員会 1982『国営農地開発事業関係埋蔵文化財調査報告書 本片子遺跡・木原古墳』

益田市教育委員会 1984『鶴ノ鼻古墳群発掘調査概報』

益田市教育委員会 1986『益田市遠田地区遺跡分布調査報告書I』

益田市教育委員会 1987『益田市遠田地区遺跡分布調査報告書II』

益田市教育委員会 1988『益田市遠田地区遺跡分布調査報告書III』

益田市教育委員会 1990『小丸山古墳発掘調査報告書』

益田市教育委員会 1991『三宅御土居跡I』

益田市教育委員会 1993『益田市関連遺跡群I - 慶達寺・七尾城跡 -』

益田市教育委員会 1994『益田市関連遺跡群II』

益田市教育委員会 1995『益田市関連遺跡群III』

益田市教育委員会 1998『七尾城跡・三宅御土居跡 益田市関連遺跡群発掘調査報告書』

益田市教育委員会 2000『中世今市船着場跡文化財調査報告書』

益田市教育委員会 2001『身近なまちづくり支援街区事業 歴史的環境整備地区沖田七尾線街区事業に伴う曉音寺発掘調査報告書』

益田市教育委員会 2003『市内遺跡発掘調査報告書I(七尾城跡・三宅御土居跡・沖手遺跡・中世石造物分布調査)』

益田市教育委員会 2009『古代の益田を歩いてみよう』

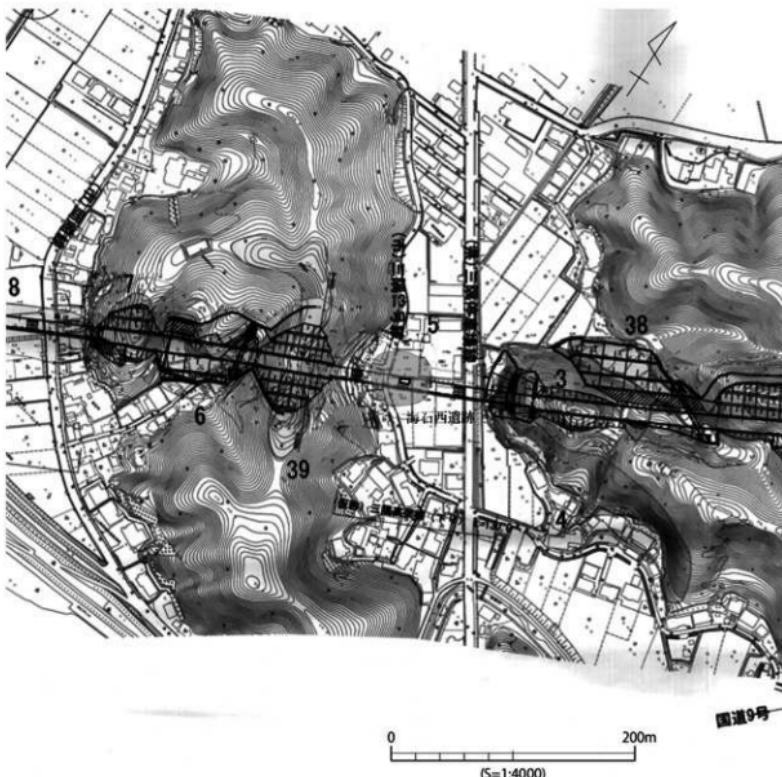
益田市教育委員会 2009『中世の益田を歩いてみよう』

## 第3章 海石西遺跡の発掘調査

### 第1節 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置 海石西遺跡は浜田市三隅町三隅地内に位置している。遺跡の東側には県道211号が通っている。この県道は国道9号とJR三保三隅駅を結ぶ県道で、両側には住宅と水田が立地している。遺跡は県道沿いの水田地帯で確認された。

2. 地理的環境 中國山地を源流として浜田市三隅町の中心市街地を通り日本海に注ぐ2級河川三隅川の右岸に遺跡は存在する。遺跡は南東から北西にむけて広がる狭い谷に形成されている。この谷の両側には谷に沿って丘陵が続いている。南西側の丘陵は河口の直前で大きく西に流れを変える三隅川の攻撃面に位置しており、遺跡は攻撃面の反対側にあたる。したがって、遺跡からは三隅川を視認することはできない。分布調査では地表面で遺物を採集することはできなかったが、丘陵際



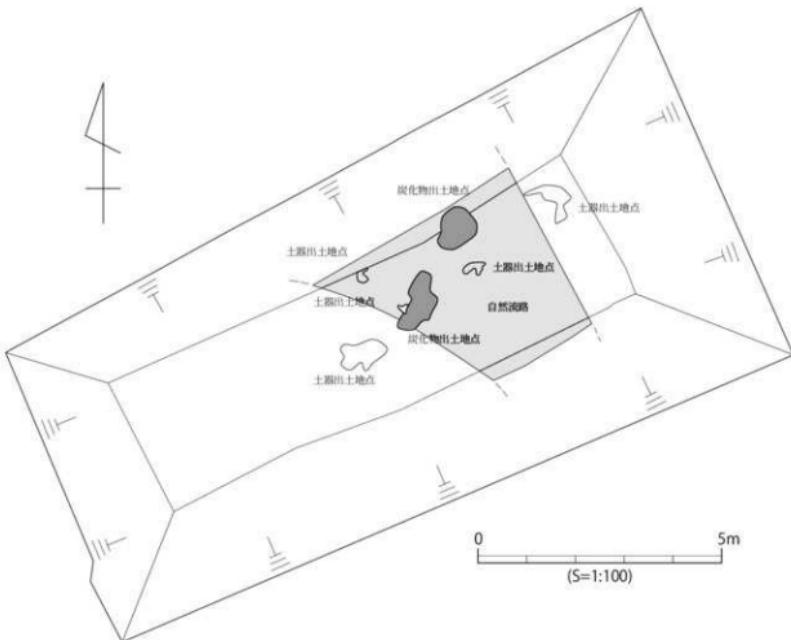
第5図 海石西遺跡の位置 (S=1:4000)

第6図 海石西遺跡 調査区配置図 ( $S=1:1000$ )

に集落などが形成されている可能性があること、東側の丘陵斜面に薦立横穴墓が存在し、過去の調査で、大刀や須恵器、玉類が出土していることから試掘調査を実施した結果、古代から中世の遺物が発見されたため調査を行った。調査前の水田の標高は 5.4m であった。

## 第2節 発掘調査と整理作業の経過

1. 発掘調査の経過 本遺跡の発掘調査は平成 27 年 6 月に行った。平成 27 年度は 6 月 1 日から 6 月 30 日にかけて実施した。調査区は最近まで水田耕作が行われていた。試掘確認結果から遺物包含層の上面まで重機により掘削を行った。その後、人力による包含層掘削と遺構検出、遺構掘削

第7図 海石西遺跡 遺構配置図 ( $S=1:100$ )

を実施した。遺物包含層は非常に粘質が高く、掘削や遺構検出は困難であった。遺構は確認できなかったが、自然流路が調査区を横断しており、その周辺に弥生時代中期後半から古墳時代初めの土器が良好な遺存状態で出土した。自然流路には炭が堆積している部分もあり、周辺に集落の存在が予想されたが、調査区内には遺構は確認できなかった。6月30日をもって調査は終了した。終了に先立ち高所作業車による高所からの写真撮影を行っている。埋め戻し後、7月22日に国土交通省へ引き渡しを行っている。なお、調査中は近隣住民がほぼ毎日調査の見学に訪れた。皆さん興味津々で見学するだけでなく、写真を撮影する方や質問をする方も多かった。質問の応答だけでなく出土品に触れてもらう等も積極的に行なった。地元の歴史や文化について非常に関心が高い地域で、発掘調査にもご協力やご配慮をいただいた。

**2. 整理等作業の経過** 遺物の水洗・注記・接合作業は現地調査に並行して実施し、冬期は埋蔵文化財調査センターにて前述した作業を継続し、統一して復元・実測等の整理作業を行った。平成29年度に本遺跡の出土品を通覧して遺物実測・写真撮影を行っている。現地調査終了後に整理した図面・写真等の記録類についても、出土品と併せて総合的な整理検討を行い、遺構・遺物のトレース、写真、割付、原稿執筆を行った。画像処理・図版作成・編集等にはAdobe社のソフトを使用した。

### 第3節 発掘調査の概要

1. 調査の方法 調査前の現地の状況は水田である。調査中も周囲には水田が存在し、稲作を行っていた。試掘確認調査の結果に基づいて、包含層までバックホーを用いて表土及び造成土を取り除く必要があった。重機掘削は、バケットに平爪を装着して、少しづつ漉き取るようにして面的に掘り下げた。土層観察を行いながら、包含層まで若干余裕を持たせたところで掘削を停止した。その後はスコップ・ジョレンを用いた人力による掘削を行った。

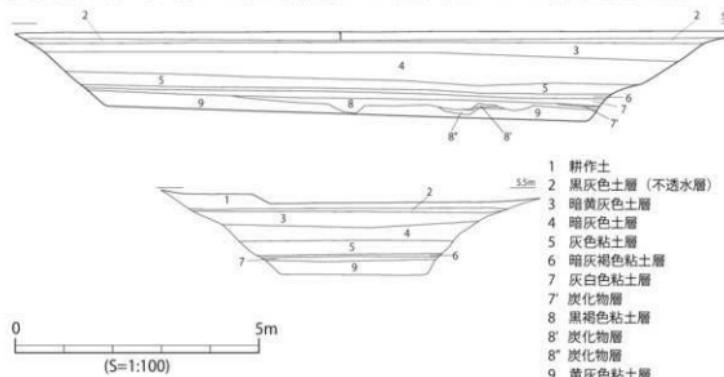
遺物包含層についてはスコップを用いて人力で掘り下げたが、遺物が集中する力所については移植ゴテ・草削りにより掘り下げた。出土状況の有意性が低いものは、取り上げに際しては調査地点と層位の記録を行った。遺構検出は、ジョレンにより大雑把に精査した後、草削りを用いて丁寧に削り、遺構の検出に努めた。出土する遺物の粗密に応じて適宜移植ゴテ等の道具を併用し、遺構検出にはジョレン・草削りを使用した。

土層断面については写真撮影を行い、必要に応じて断面図を作成した。出土遺物については、必要に応じて出土状況を記録した後、取り上げを振って取り上げた。

遺構の平面図は、コンピュータ・システム株式会社の遺跡調査システム「SITE」を用いて測量し、出力後補正を行った。断面実測図についてはオートレベルを用いて測量を行い、高低差のある壁面については平面図と同様に調査システムを用いた記録作成を行った。遺構等の写真は、原則として報告書に掲載が見込まれるものは $6 \times 7$ 判フィルム（モノクロネガ・カラーポジフィルム）による撮影を行い、それ以外はデジタルカメラで撮影した。

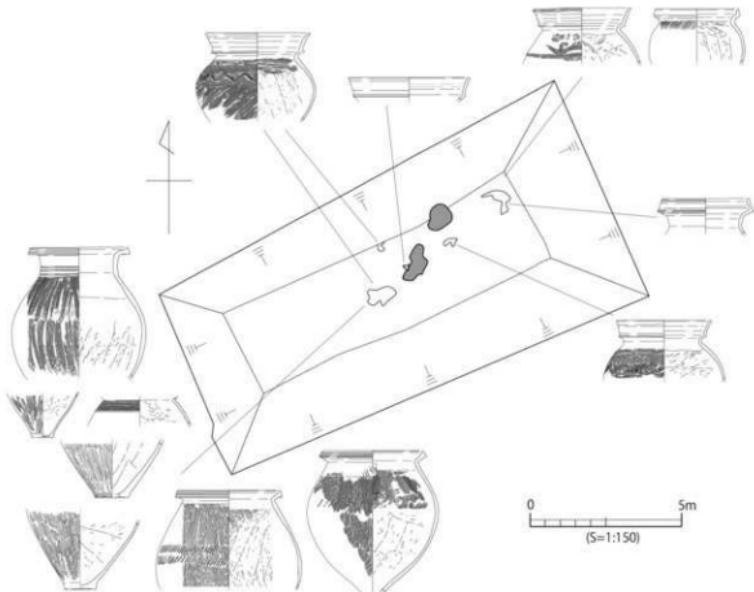
現地調査期間は平成27年6月1日から6月30日、調査面積は120m<sup>2</sup>、調査体制は調査員1名と調査補助員2名である。

2. 基本層序 基本層序は、上から1層水耕作土層、2層黒灰色土層（床土）、その下に3層暗黄灰色土層と4層暗灰色土層が堆積している。その下に遺物包含層である5層灰色粘土層が堆積している。この層は古代から中世の遺物が出土していた。その下層には6層暗灰褐色粘土層と7層灰白色粘土層があり中世から弥生時代後期までの遺物が出土している。出土遺物は摩滅により表



第8図 海石西遺跡土層図 (S=1:100)

面が風化していた。さらに下の9層は黄灰色粘土層である。9層の上部10cmまでに遺物が出土している。9層の出土遺物の年代は弥生時代前期から古墳時代初めである。さらに下の層は安全上の問題で調査区を全面的に掘り下げる調査はできなかったが、部分的に掘り下げを行い、9層は遺物が含まれる上部10cmよりさらに50cm下方までは堆積していることを確認しているが、遺物は出土しなかったため調査を終了した。8層は9層上面に形成された自然流路内に堆積した黒褐色粘土層で、8<sup>o</sup>層と8<sup>o</sup>層は自然河道底面に堆積する炭化物である。自然河道内からは弥生時代後期から古墳時代初めの土器が出土している。



第9図 海石西遺跡 遺物出土状況図 (S=1:150)

3. 検出した遺構と遺物 調査の結果、遺構は人工的でない自然流路を確認した。遺物は弥生時代前期から中世まで出土している。弥生土器は前期頃の甕の底部をはじめ、中期後半の壺や甕、後期の壺や甕などが出土している。弥生時代前期の甕の底部は非常に細片で図化できなかった。古墳時代の遺物は土師器と須恵器である。土師器は古墳時代初めの甕が多い。須恵器は5層や6層から出土している。古代以降は、奈良時代の須恵器の杯や綠釉陶器2点、中世の土師器の皿などが出土している。そのほか、中世に大陸から輸入された渡来鏡が出土している。

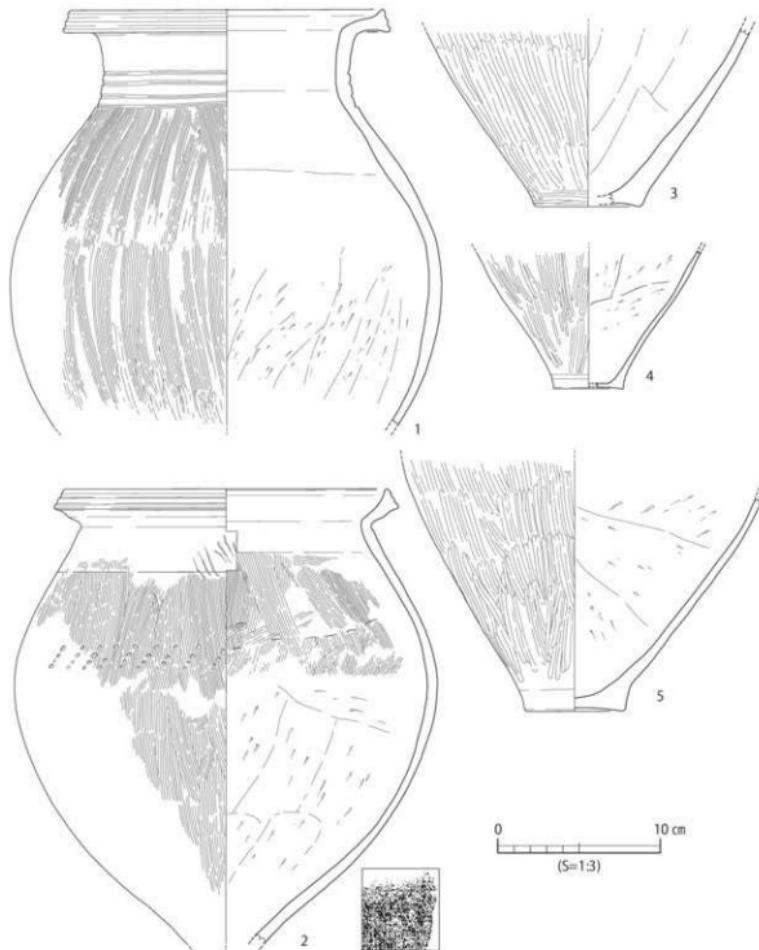
#### 自然流路（第9図）

調査区を南東から北西へ流れていたと考えられる幅およそ4mの自然流路が1条検出された。人為的に掘り下げる溝などの遺構では無く、流水による作用で地面が削れ流路となったものであると考えられる。その自然流路のくぼみを利用して土器を廃棄したのではないかと考えている。

自然流路跡の埋土は黒褐色粘土層で弥生時代後期から古墳時代前期の土器が出土している。土器は同一個体の破片がまとめて出土している地点が數ヵ所あり、ほとんど摩滅していなかった。自然流路跡には炭化物の集中地点もあったが、こちらも人為的なものではないと判断した。

包含層出土遺物（第10図～第15図） 本遺跡で出土した遺物の時期は弥生時代前期から9世紀までである。主な出土遺物の時期は弥生時代中期後半、弥生時代後期、9世紀である。

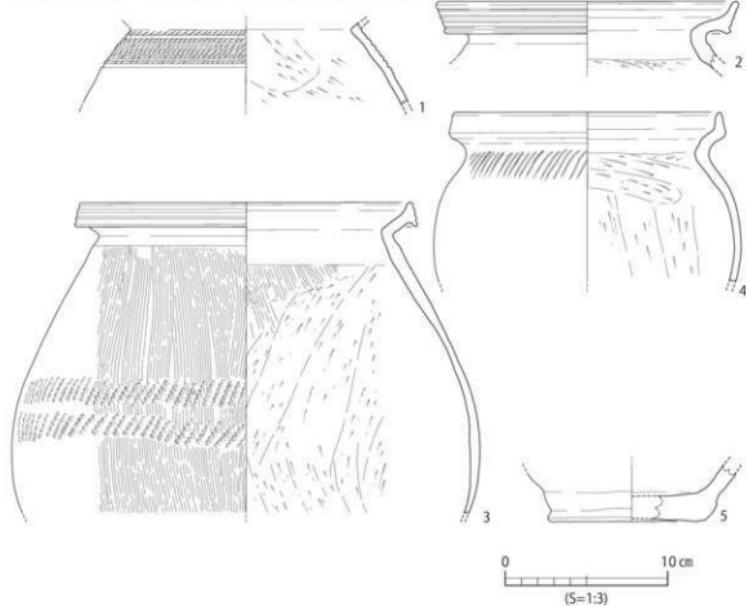
第10図から第11図までは弥生土器である。第10図1は弥生土器の壺で2は甕である。1は胴部下半まで、2は底部近くまで残存している。1の外面はナデと胴部下間にヘラ磨きが縦に施さ



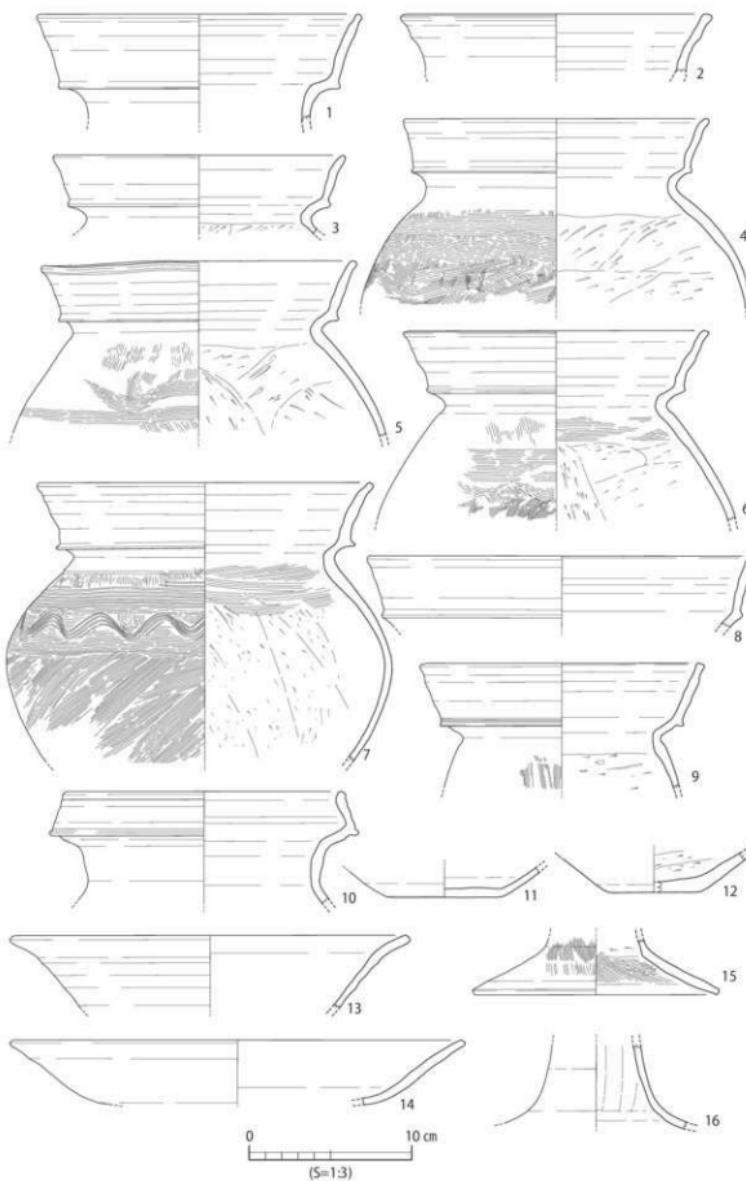
第10図 海石西遺跡 出土遺物実測図 1(S=1:3)

れている。2は胴部の肩に1単位4点の列点文が施されている。外面にヘラ磨きは見られない。2は頸部近くの胴部上端にひっかき傷状の線条痕が2単位見られる。下方の単位には3本、上方の単位には4本ある。線条痕は一定の幅では無く、上方側あるいは下方側が細くなっている。3から5は壺あるいは甕の底部である。全て外面はヘラミガキで内面はヘラ削りである。底部外面は3点ともわずかに上げ底になっている。4は特に器厚が薄い。1と2は石見IV-2様式と考えられる。3から5も胴部内面の調整がヘラ削りであることから同じ時期のものと考えられる。第11図1から4は甕である。1は頸部が「く」の字状に強く屈曲する。胴部の外面上部には沈線文が横方向に引かれており、沈線文の間には刺突文が連続して施されている。刺突文は6段で間には無文帯が存在する。2も頸部が「く」の字状の甕で胴部内面の調整は上半部がヨコナデとハケ目で大部分は斜位のヘラ削りである。3は口縁部外面に擬凹線文が4条横方向に施されている。4の口縁部外面は無文で外面が下方へ突出しておらず、稜線が明瞭で無い。3と4は胴部内面の調整はヘラ削りで、4の胴部外面には斜めに刺突文が連続して施されている。5は甕あるいは壺の底部で底部も胴部も分厚く大きい。1と2は石見IV-2様式、3と4は石見V-2様式と考えられる。

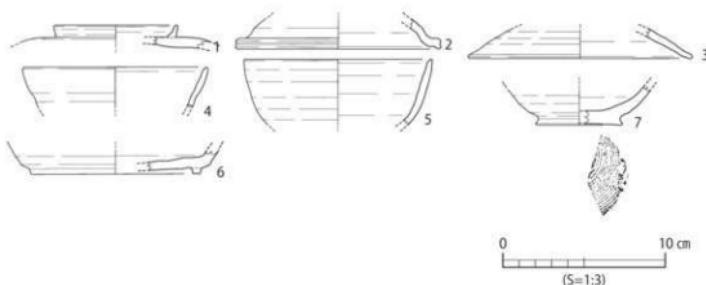
第12図は古墳時代初め頃の土師器である。1と10は壺である。二重口縁で1は外傾、10は内傾する。2から9は二重口縁の甕である。2と9は口縁部が外湾している。先端は尖らず極端に薄くなるものの無い。外面の文様は4と5から7は波状文が見られる。胴部内面はヘラ削りを中心とし頸部近くにはハケ目を施すものも存在する。9は胴部が口縁部に比べ幅が小さいが、特殊なもの



第11図 海石西遺跡出土遺物実測図2(S=1:3)



第12図 海石西遺跡出土遺物実測図3 (S=1:3)



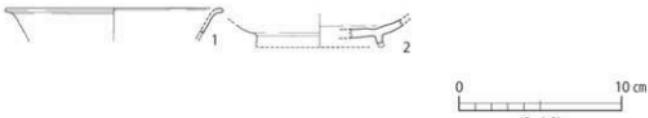
第13図 海石西遺跡出土遺物実測図4(S=1:3)

では無く、甕の一形態であると考えられる。11と12は甕か甕の底部である。平底である。13から16は高环である。13と14は环部、15と16は脚部である。13と14の环部外面には段はつかず、口縁端部に向かって外湾している。第12図の土師器は益田1期とその前後であろう。

第13図は須恵器である。1から3はつまみが附属する环蓋で、1には輪状つまみが残存している。4から7は环で、4は壁が直線状で、5と7は丸みを帯びている。6は高台付き环の底部で底部外面は回転ヘラ削り後に高台を貼り付けている。7の底部は回転糸切りである。8世紀後半のものと考えられる。

第14図は緑釉陶器である。1は口縁部のみの破片で外傾し外湾している。内外面施釉で釉薬には光沢が見られる。胎土は褐色の土師質である。2は椀底部である。貼り付け高台で内面に施釉されている。釉は濃緑色で胎土は土師質で褐色である。防長産緑釉陶器のうち長門産と考えられる。9世紀の属すると考えられる。

第15図は土製品と金属器である。1は土錘である。色調は須恵器に近いが、土師器の焼成が良好なものだと考えられる。上方は欠損している。2は開元通宝である。保存状況は良好である。直

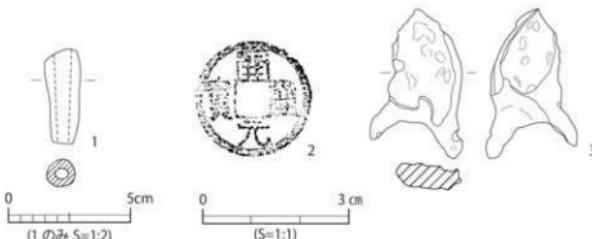


第14図 海石西遺跡出土遺物実測図5(S=1:3)

径は2.4cmで、裏面に文字等は鋳出されていない。3は不明銅製品である。古墳時代初めの土師器と同じ層から出土している。何らかの銅製品が溶けたものと考えられるが、器種は不明である。当センターで蛍光X線分析を実施した結果、表11と表12の結果となり、極めて銅成分が多い金属だと判明した。本来は銅鐵などの製品であった可能性はあるが鉛や錫の含有量が少なく、青銅製品として合金になっていたかわからない。

#### 第4節 小結

今回の海石西遺跡の発掘調査では、標高4mから下で弥生時代前期から中世までの遺物と、弥生時代末から古墳時代初め頃に存在した自然河道を確認した。人為的な遺構ではなく、住居などの生活



第15図 海石西遺跡出土遺物実測図6 (S=1:2、S=1:1)

の痕跡を直接示す遺構は見つかっていない。堆積していた土層のほとんどは粘土層で低湿地遺跡の様相であった。主な遺物の時期は、弥生時代中期後半、古墳時代初め、そして平安時代である。弥生時代中期後半の土器は遺存状況が良好で、復元が可能な壺や甕が多い。遺構は存在しなかったため、遺跡の南西の丘陵裾あたりに集落が形成されている可能性がある。また、第7図1は広島県北部から島根県東部に見られる塙町式土器の壺胴部と考えられる。島根県では最も西で出土した塙町式土器の可能性が高い。古墳時代初め頃の土器群も非常に遺存状況は良かった。この土器群は自然河道周辺で出土しており、自然河道に廃棄されていた可能性がある。遺存状況が良好のことから、集落遺跡が近隣の南西丘陵裾部に形成されている可能性が高い。平安時代の遺物では綠釉陶器が2点出土しており注目される。綠釉陶器は官衙遺跡や寺社などで出土することが多い。海石西遺跡周辺にはこれまでそのような遺跡の存在は認められない。したがって、今後周辺で新たな遺跡の存在が確認される可能性が高いと考えられる。

## 第4章 角落し遺跡の発掘調査

### 第1節 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置 調査対象地は、浜田市三隅町古市場に位置している。浜田市三隅川河口の南で、三隅川の後背湿地と湿地に繋がる谷とその斜面に存在する。調査前は湿地部が近年まで水田耕作を行っていた休耕田で、谷部は近年になって耕作を行っていない状態であった。谷部は谷奥からの湧水が湿地へと流れ込んでいる。谷には水田耕作のために平坦面が数段築かれており、段に際には針葉樹の植林も見られた。丘陵斜面や裾部からは當時湧水があり、地下水が豊富な地域である。斜面は大変もろい結晶片岩層でできており、板状に剥離する性質がある。したがって、斜面崩落が起こりやすく、遺跡内にも斜面が崩落した形跡が残っていた。

2. 地理的環境 調査前の遺跡の標高は高いところで約5m、低いところで約3mである。三隅川河口に続く平地と谷地形、斜面からなる。斜面を登れば三隅川河口や高島まで見渡せる。谷部の見通しは悪く、周囲からも谷奥までは望めない。昭和58年に鳥根県西部を襲った水害では三隅川が氾濫し、周辺に水があふれた。本遺跡周辺の宅地は2階まで床上浸水の被害に遭っており、遺跡の所在する環境は當時の湧水以外にも河川の氾濫による影響を受けやすい地形だと言える。近年は谷部での耕作は行われていなかったようである。周辺住民の聞き取りでは谷部は深田で耕作が非常に困難であったと伺っている。

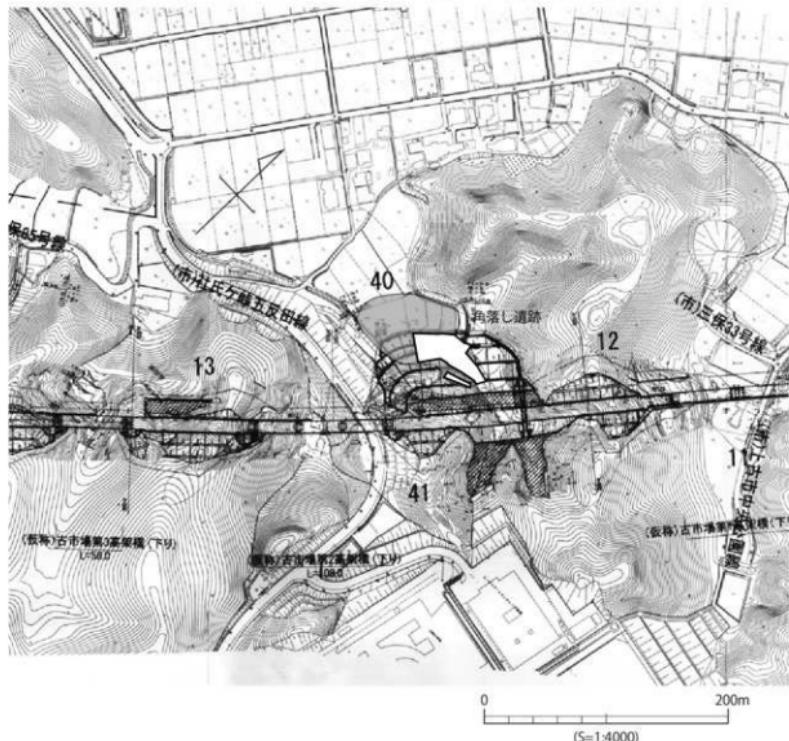
### 第2節 発掘調査と整理作業の経過

1. 発掘調査の経過 本遺跡の発掘作業は平成27年10月1日から平成28年2月10日にかけて実施した。調査前の遺跡は平地が休耕田で、斜面は山林であった。調査はバックホーを利用し表土掘削を行ったが調査区までの侵入路が存在せず、斜面の崩落部分を利用して重機進入路を仮設で設置し、1区と2区の表土掘削を先行して行った。3区は先行する2つの調査区の表土掘削後に実施した。4区は調査面積が狭く、12月9日に調査を開始した。5区は当初調査範囲外としていたが、2区と3区の遺物出土状況から遺跡が広がると考えられたため、国土交通省浜田河川国道事務所と協議を行い、事業範囲内は発掘調査を行うこととなり、10月22日から調査を行った。各調査区とも表土層除去後、人力による包含層掘削と遺構検出、遺構掘削を実施した。1区と2区では杭列、5区では土器溜まりが確認された。遺物は弥生時代前期から室町時代までの土器や陶磁器、木製品が幅広く出土している。4区の調査は平成28年1月14日に終了し、その他の調査区は2月10日に調査を終了した。狩猟に先立ち、ラジコンヘリによる空中写真撮影を行っている。その後、埋め戻しなどを経て3月24日には国土交通省へ現地を引き渡した。2区の南西側の調査区は平成29年度に調査を行う予定となっており、便宜上その調査部分を6区とした。6区については、平成29年度に行われた調査で、弥生時代前期から鎌倉時代の遺構や遺物が出土しており、1区・2区と同様の低湿地遺跡だと判明している。6区の報告書については平成30年度以降に刊行予定である。

2. 整理等作業の経過 遺物の水洗・注記・接合作業は現地調査に並行して実施し、冬期は埋蔵文化財調査センターにて前述した作業を継続し、続いて復元・実測等の整理作業を行った。平成29年度に本遺跡全区の出土品を通覧して遺物実測・写真撮影を行っている。現地調査終了後に整理した図面・写真等の記録類についても、出土品と併せて総合的な整理検討を行い、遺構・遺物のトレークス、写真、割付、原稿執筆を行った。画像処理・図版作成・編集等にはAdobe社のソフトを使用した。

### 第3節 発掘調査の概要

1. 調査の方法 調査前の現地の状況は、丘陵緩斜面は山林、平地及び谷部は休耕田であった。調査前の地形により調査区を5つに分け、区毎に調査の進行管理を行った。試掘確認調査の結果に基づいて、包含層や遺構面までバックフォーを用いて表土及び造成土を取り除いた。重機掘削は、バケットに平爪を装着して、少しずつ漉き取るようにして面的に掘り下げた。土層観察を行なながら、包含層あるいは遺構面まで若干余裕を持たせたところで掘削を停止した。その後はベルトコンベアを設置し、スコップ・ジョレンを用いた人力による掘削を行った。



第16図 角落し遺跡の調査位置図 (S=1:4000)

遺物包含層についてはスコップを用いて人力で掘り下げたが、遺物が集中するカ所については移植ゴテ・草削りにより掘り下げた。出土状況の有意性が低いものは、取り上げに際しては調査区単位で層位の記録のみを行った。遺構検出は、ジョレンにより大雑把に精査した後、草削りを用いて丁寧に削り、遺構の検出に努めた。出土する遺物の粗密に応じて適宜移植ゴテ等の道具を併用し、遺構検出にはジョレン・草削りを使用した。

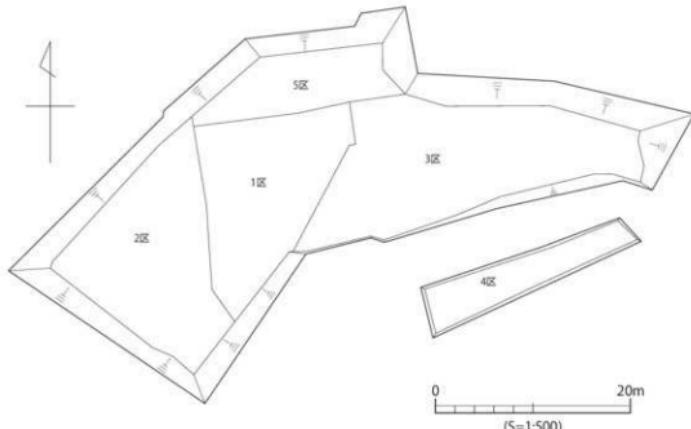
遺構の埋土掘削には移植ゴテ・草削りを使用した。掘削にあたっては上層観察を行いつづり下げる。遺構の検出状況については写真撮影を行い、必要に応じて断面図を作成した。遺構や包含層からの出土遺物については、適宜、出土状況を記録した後、取り上げNoを振って取り上げた。

遺構の平面図は、コンピュータ・システム株式会社の遺跡調査システム「SITE」を用いて測量し、出力後補正を行った。断面実測図についてはオートレベルを用いて測量を行い、高低差のある壁面については平面図と同様に調査システムを用いた記録作成を行った。遺構等の写真は、原則として報告書に掲載が見込まれるものは $6 \times 7$ 判フィルム(モノクロネガ・カラーポジフィルム)による撮影を行い、それ以外はデジタルカメラで撮影した。

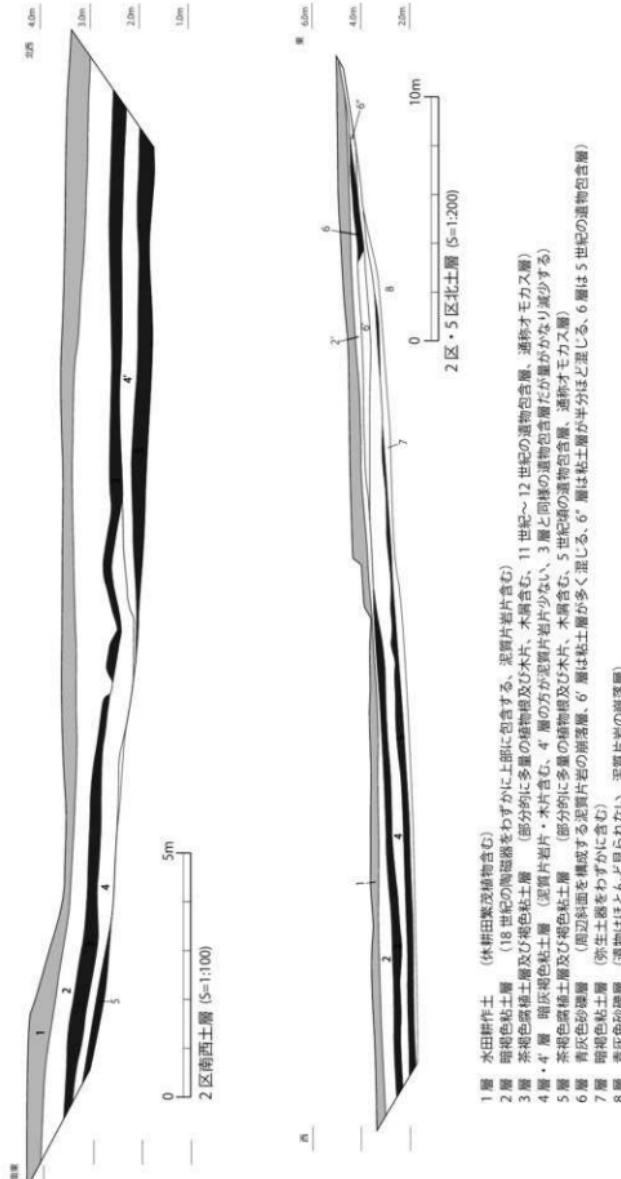
現地調査期間は平成27年10月1日から平成28年2月10日、調査面積は1,461m<sup>2</sup>、調査体制は調査員1名と調査補助員2名である。

## 2. 基本層序(第18図)

基本層序は地形によって異なるが、遺構や遺物が確認された1区と2区の基本層序は以下の通りである。地表下に、上から1層水田耕作土層、2層暗褐色粘土層、3層茶褐色腐植土層及び褐色粘土層、4層暗灰褐色粘土層、5層茶褐色腐植土層及び褐色粘土層、6層青灰色砂礫層、7層暗褐色粘土層、8層青灰色砂礫層である。4層と6層にはそれぞれ泥質片岩や粘土層が含まれる割合によって層を分けている。このうち主な遺物包含層は3層と5層の腐植土層で、調査中は通称オモカス層と呼んでいた湿地の縁辺部分に繁茂する植物と木片、木屑などが堆積する層である。オモカスは出雲平野の腐植土に対して呼ばれていた呼称であるが、便宜上調査時はこの名称を用いている。



第17図 角落し遺跡 調査区配置図 (S=1:1500)

第18図 角落し遺跡土層図 ( $S=1:100, S=1:200$ )

遺物はこの2面の腐植土層を中心に上下の層から出土している。3層は11世紀～12世紀、5層は5世紀の遺物が含まれる。6層は周辺斜面から崩落してきた泥質片岩を主とする層であるが、5世紀の遺物が多く含まれる。

3区の7層には弥生土器がわずかに含まれる。8層結晶片岩の崩落層で、ほとんど遺物は含まれなかった。

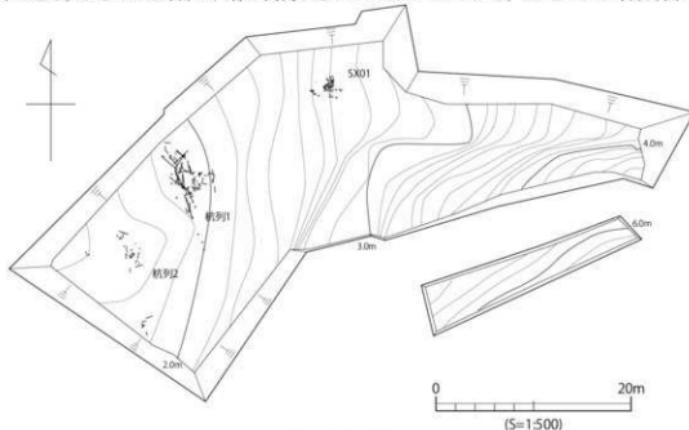
**3. 検出した遺構と遺物** 本遺跡の調査では、1区の杭列1、2区の杭列2、5区のSX01が確認された。その他に木製品が流木と共に出土しているが、出土状況から判断して遺構では無く、上流あるいは下流から流れ込んでたまたものと考えている。

#### SX01（第20図）

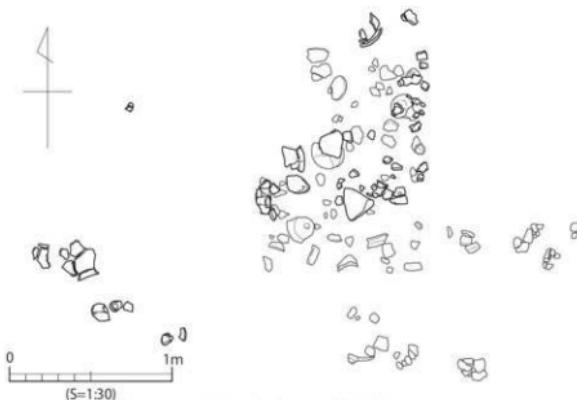
SX01は5区の中央、1区よりで確認された土器溜まりである。外部から流入してきた6層の上面にまとめて土器が出土したもので、土器は2.1mから2.3mほどの範囲に特に密集して出土している。土器の堆積は10cm内に収まり、ほぼ一回の検出で全部の土器が確認できた。出土した土器の表面は非常に風化しており、破損も進んでいる。破面は丸く風化しているものも多い。焼土や柱穴などは検出されず、土器が数多く出土している。2点礫が確認されている。出土遺物は須恵器の高杯の脚部が1点と多数の土師器の环、高杯、壺、甕が出土している。6層が調査区外からの流入でその上面に土器がまとめて出土していること、柱穴などの住居などの床面に表れる遺構が見られないことから、本遺跡の北側斜面に形成されていた遺構が斜面の崩落で土砂と共に遺跡内に流入したものと考えられる。

#### SX01出土遺物（第21図・第22図）

第21図1は須恵器の高杯の脚部である。環部は古い時期の欠損により残っていない。透かしが四方に外面側から穿たれている。透かしは長方形である。2から8は土師器の环である。2と3は口縁部が外反していくをなしている。4もわずかに口縁部が内傾し外反している。5と8は口縁部が内傾し内湾するもので、6と7は内湾しつつ上方に伸びるものである。9から19は土師器の高杯である。9と10は環部の口縁が内湾するワイングラスタイルで、11と13は環部外面に段を



第19図 角落し遺跡 遺構配置図 (S=1:500)



第20図 角落し遺跡 SX01 検出状況 (S=1:30)

持つ。12と14、15も段が退化したものである。口縁部の形状は様々で11の外反するもの、12の先端が細くなるもの、13のように直線上に開くものが存在する。高环は9と10は环部の器厚が11から15に比べて薄い。脚部の形状も9や10、12のように脚部の径が大きいものと、11のように細長く立ち上がるものが存在する。14も11と近い形状と考えられる。16から19は高环の脚部で、径の大きさから10に近いと考えられる。

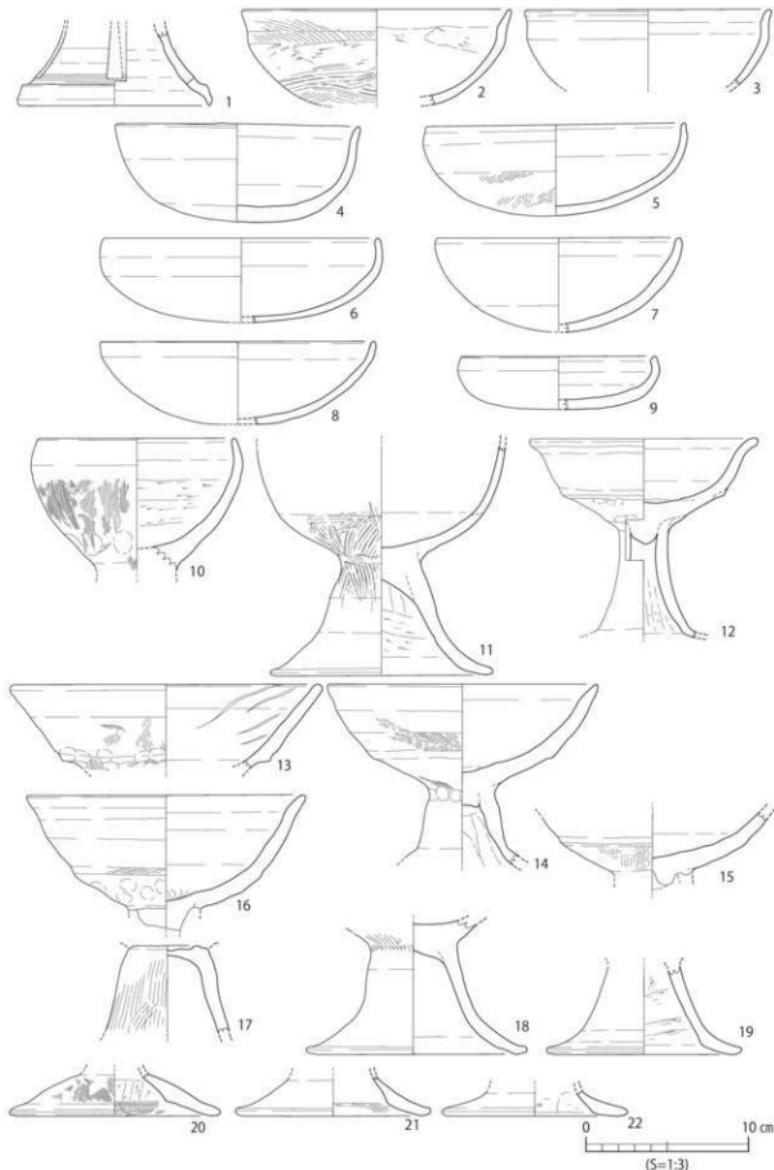
第22図1と2は小型壺で、3は無頸壺、4から8は甕である。9から11は甕等の底部である。1と2は益田編年では鉢となっている。3はこの地域ではほとんど見かけない形状の壺である。口縁はわずかに外反するのみで上方に立ち上がっている。壺と甕の調整は外面がヨコナデとハケ目で、内面はヘラ削りである。9と10は甕あるいは壺底部で外面にヘラ描きにより2丈の線刻が見られる。10は外面にハケ目が見られないことから高环の环部の可能性もある。11は瓶形土器の底部の可能性がある。

#### 杭列1(第23図)

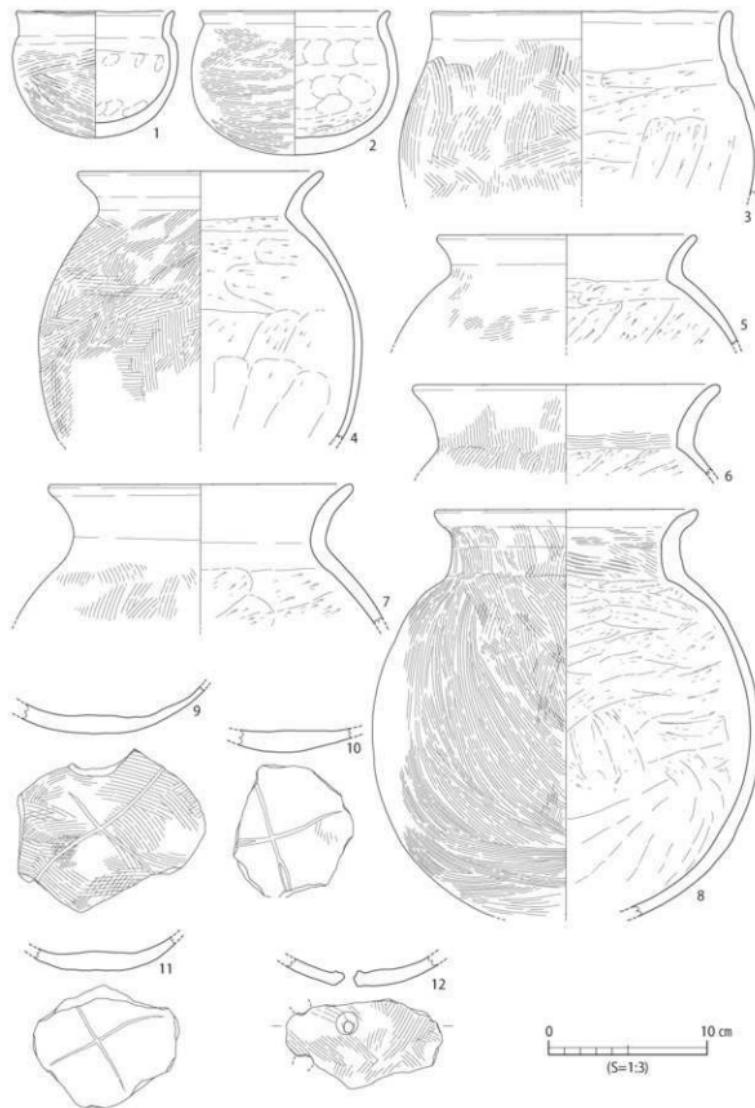
杭列1は1区と2区の境で確認された杭列である。北西から南東へ杭列が並び、杭列に関係すると思われる自然木が周間に集中していた。杭列はA列とB列に2分され、間には杭が打たれていない。両列とも杭の間隔が狭く多数打たれているのが特徴である。杭の太さや打ち込まれた杭の底面の深さは一定で無い。第23図のうちB列の断面図、左から4本目と6本目の杭は下方に例り込みのある木製品を転用していた(第24図1・2)。この2点は本来一本の木製品であったと考えられる。杭列の上半分に絡むように出土した自然木は多数であったが、明確な木製品は出土していない。比較的長い自然木が多く、自然木を利用したしがらみ状遺構の可能性もある。このように上面から出土した自然木の出土状況からは杭列1の性格を明らかにすることはできないが、A列とB列の間の空間は意図的に空けられていると考えられる。空間の両側の杭列は非常に密集して連續的に打たれていることを考えると、杭を連續で打つことで強度を増す意図があったとも考えられる。1区より上方の5区の谷地形からの流水をせき止めるための施設の可能性がある。

#### 杭列1出土遺物(第24図)

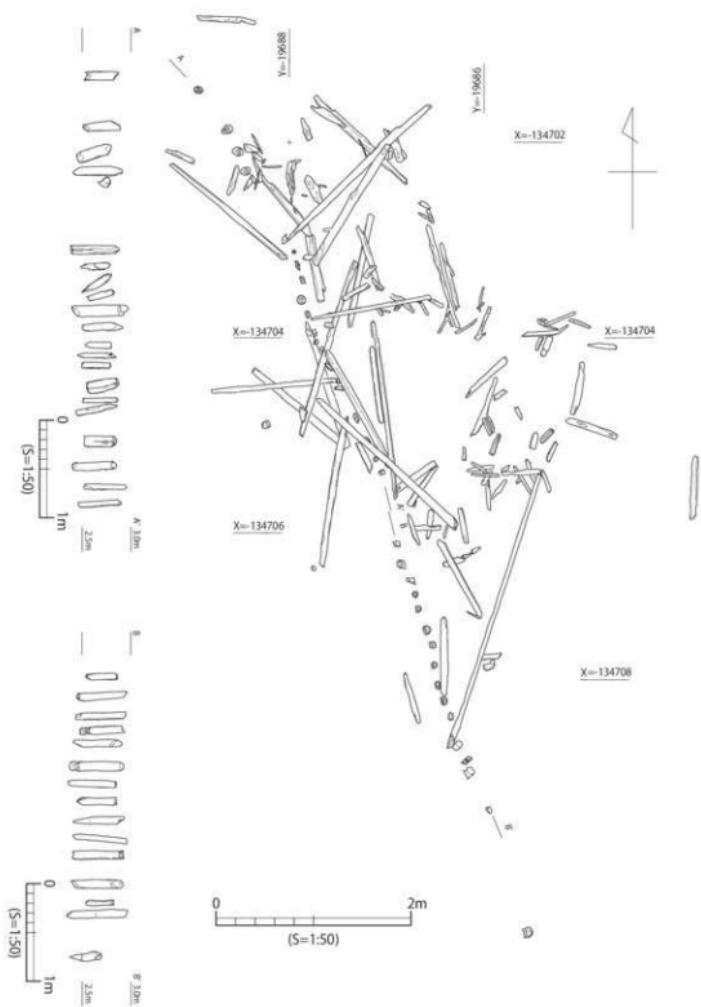
第24図は杭列1出土遺物である。共に杭列を構成していた転用材である。クスノキ科の樹木を



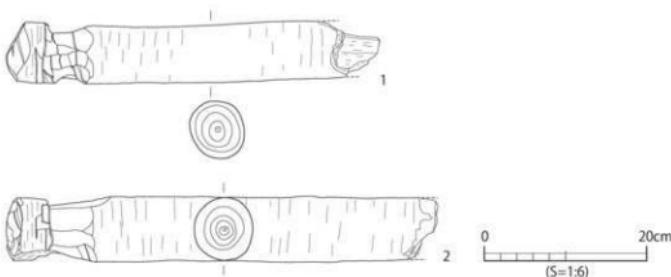
第21図 角落し遺跡 SX01 出土遺物実測図 1(S=1:3)



第22図 角落し遺跡 SX01 出土遺物実測図 (S=1:3)



第23図 角落し遺跡杭列検出状況 (S=1:50)

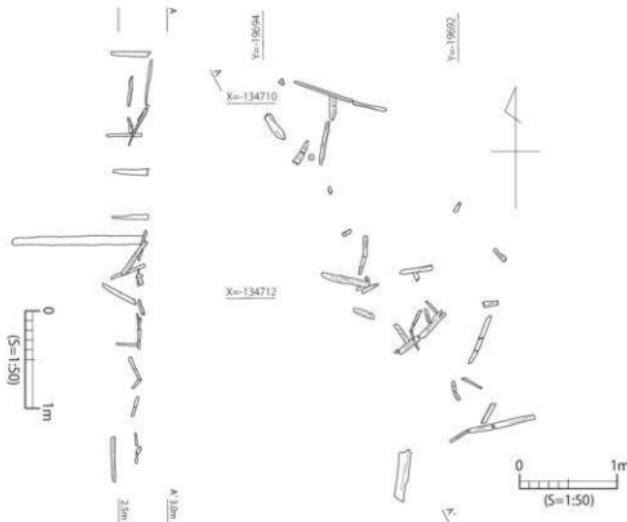


第24図 角落し遺跡杭列1出土遺物実測図 (S=1:6)

用いている。表皮は残っており、先端を残した状態で刎り込みを入れている。1と2は刎り込み側を下方にして地面に打たれていた。1と2は本来同一個体であったが、分割され杭として再利用されたと考えられる。

#### 杭列2（第25図）

杭列2は2区で確認された遺構である。5層の上面かそれより上層から打ち込まれていると考えられる。杭列1に比べ杭の本数や密度、周囲から出土する木材の量は格段に少ない。およそ中央の杭は深く打ち込まれていた。杭は杭列1に比べ細く短い。上端は欠損している可能性もある。杭列1とほぼ並行しているが、検出された土層は深く、古墳時代中期まで下る可能性がある。三閑川河口の後背湿地の汀線に打たれていた杭列と考えたい。

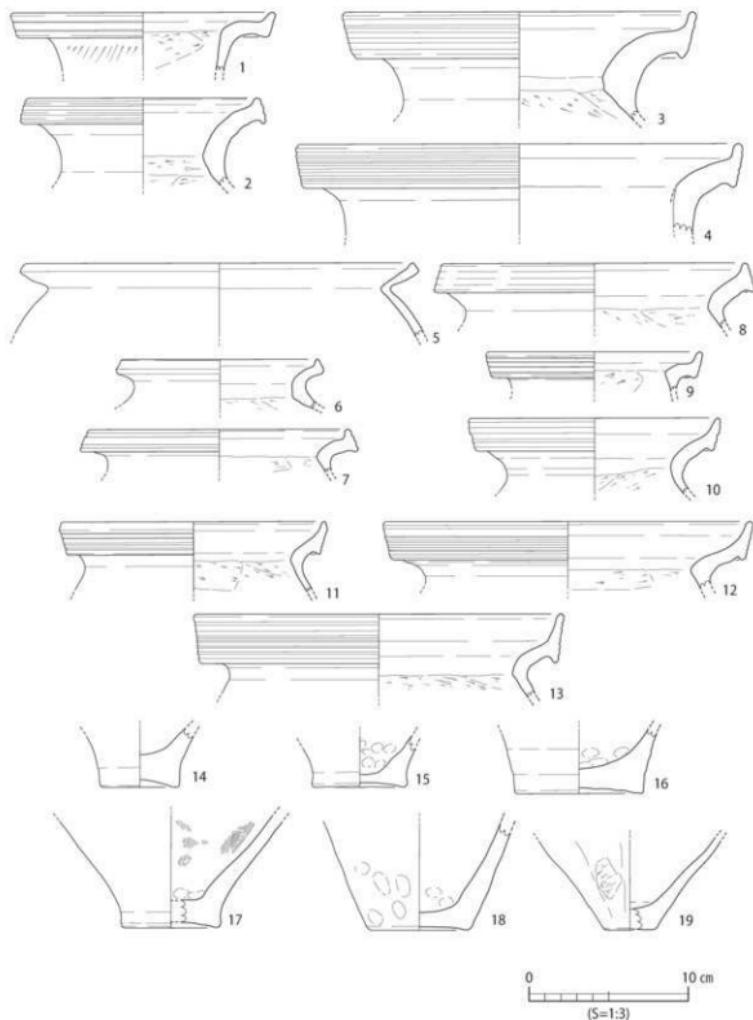


第25図 角落し遺跡杭列2検出状況 (S=1:50)

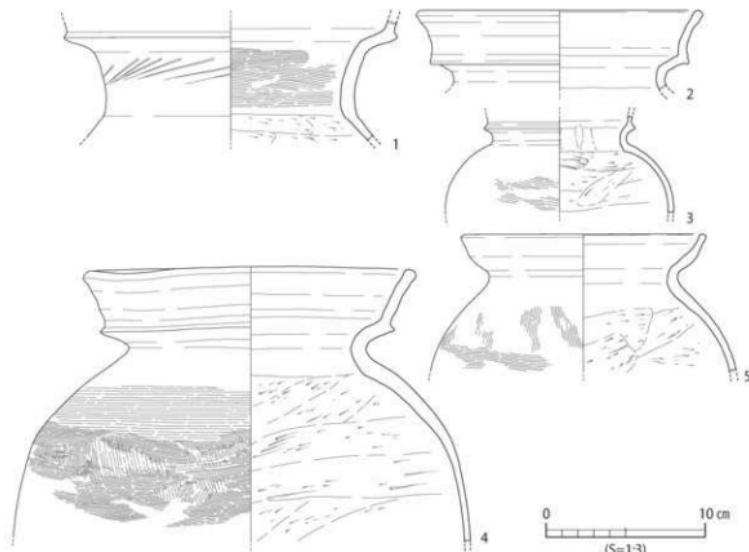
## 包含層出土遺物（第26図～第47図）

## 弥生土器（第26図）

第26図は弥生土器である。1から4は壺である。5から14は甕である。15から19は壺か甕の底部である。壺は全て胴部以下が欠損している。内面は頸部から下方がへら削りで、口縁外面には凹線文が横方向に施されている。4は頸部の径が大きい。1から4はV-1・2様式に含まれるもの。



第26図 角落し遺跡 出土遺物実測図 1(S=1:3)

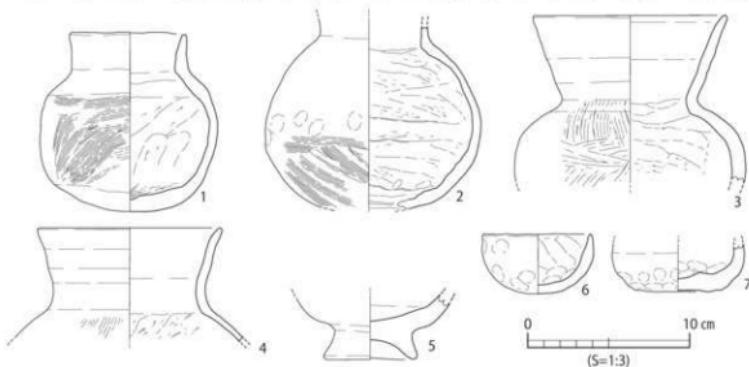


第27図 角落し遺跡出土遺物実測図2(S=1:3)

のと考えられる。5はIII-2様式の甕である。6から13はV-1様式の甕で、胸部はほとんど残っていない。14は口縁部が欠損していて確実では無いがV-4様式の甕と考えられる。15から18は底部で胎土に砂を多く含む。内面の調整はヘラ削りでは無い。弥生時代前期頃の壺か甕の底部の可能性がある。19は器厚が薄く、胎土に砂粒が少ないとから弥生時代中期の壺か甕の底部と考えられる。

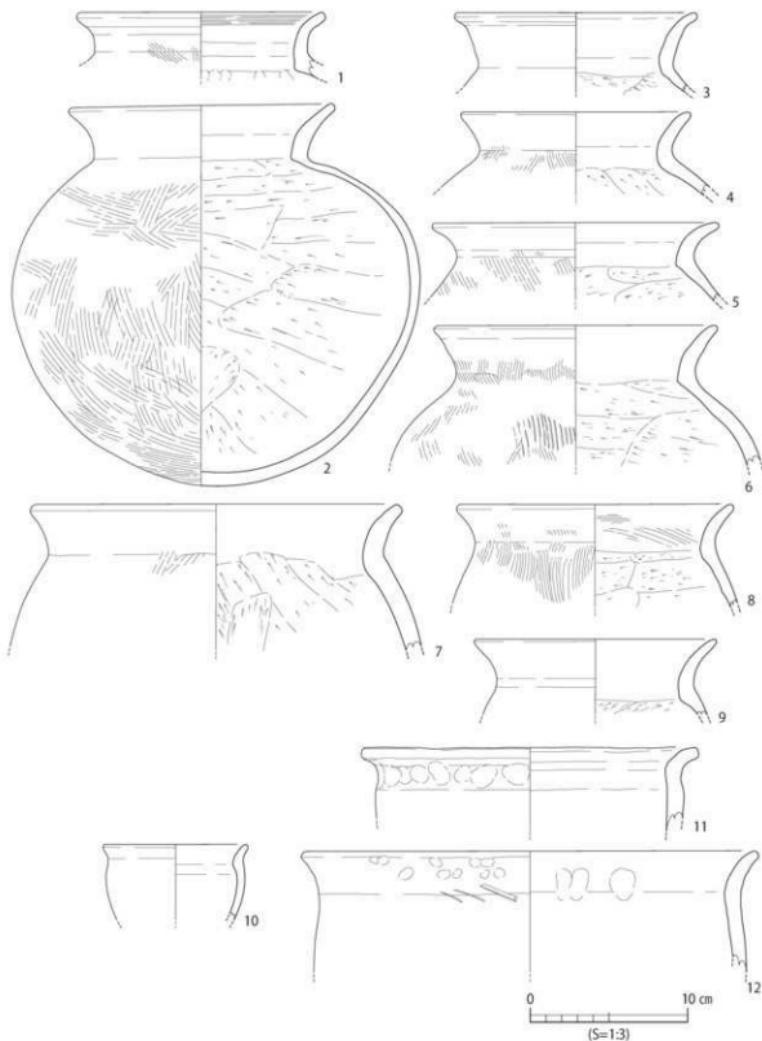
## 土師器（第27図～第35図）

第27図から第35図は土師器である。第27図は土師器の甕である。口縁の形状が二重口縁と

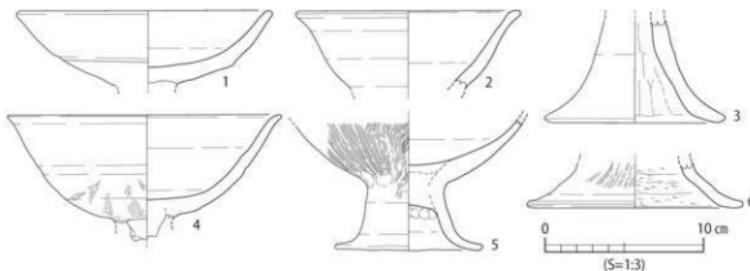


第28図 角落し遺跡出土遺物実測図3(S=1:3)

なるもので、1が壺、2から5が甕である。器厚は一定で厚く、2と4の口唇部は尖らず丸みを帶びている。2と3はV-4様式になる可能性もあるが、益田1期の土師器としておく。5は二重口縁が退化した形状で、益田3期の土師器の甕である。第28図は土師器の壺と手づくね土器である。1から4は直口壺である。3区の谷部に堆積した砂礫層から出土している。1と2は頸部から直上



第29図 角落し遺跡出土遺物実測図4(S=1:3)

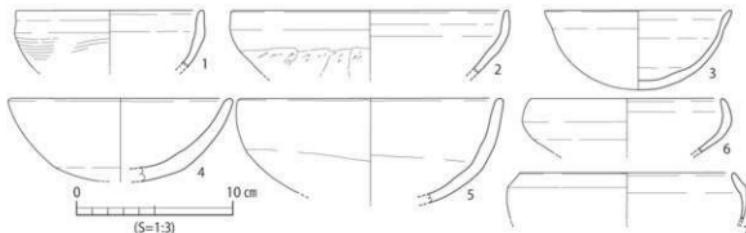


第30図 角落し遺跡出土遺物実測図5(S=1:3)

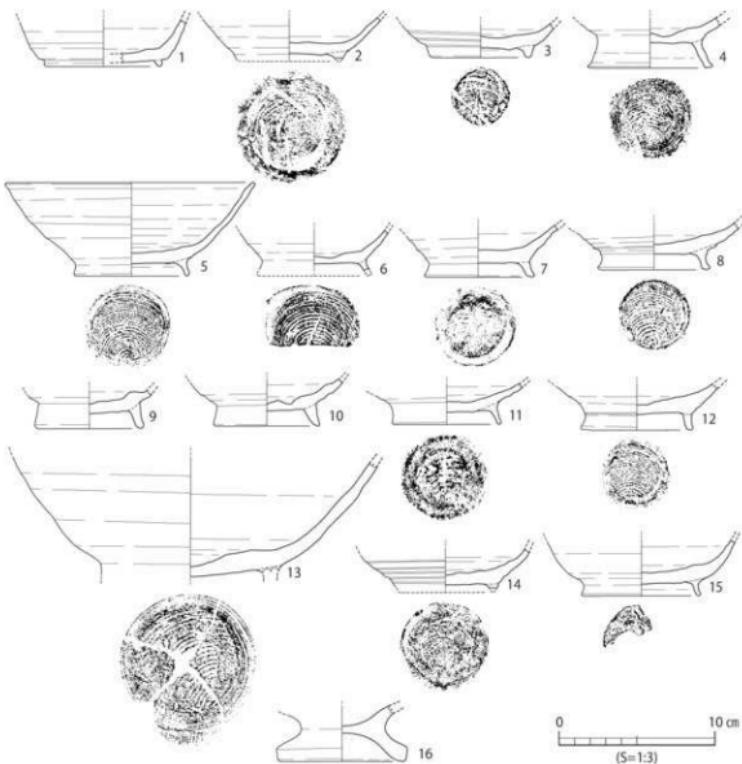
に口縁が立ち上がる。外面の調整はハケ目、内面はヘラ削りである。1の胴部は球体で、2は胴部の重心が1より低くなっている。3と4は口縁が開く直口壺である。1と2は同様に内面は頸部以下はヘラ削りで調整している。4は胴部の欠損が大きく形状が不明であるが、3の胴部の重心は高い。6と7は手づくね土器である。内外面に指頭圧痕とナデが見られる。1から4は益田3期頃と考えられる。第29図も土師器の甕である。2は胴部の肩が張る形状である。1と3から9までは胴部が大きく欠損しているが、胴部は2ほど肩が張らない。10は小型の甕である。内外面の調整はナデで、3から9の甕は内外面の調整はヘラ削りで行っているのに比べると違いが顕著である。11と12は土器の最大径が胴部で口縁部にならないものである。胴部は頸部からすぼまっている。甕と言うより「鍋」と呼べるものである。また、外面に指頭圧痕とナデが見られ、内面調整は11がナデ、12がナデとヘラ削り後にナデでいるものがあり、3から9とは明らかに系譜が異なる。1と2、11、12は出土地点が1区で腐植土層とその直下の砂礫層で、この4点は古代から中世の土師器と考えられ同じ層から出土している須恵器や土師器、陶磁器の年代から11世紀末から12世紀前半の土師器の甕であると考えられる。

第31図は土師器の鉢である。1と2は口縁部が屈曲し上方に立ち上がる。3は口縁が外傾する。4と5は器壁が厚く丸みを帯びるもので、6と7は内湾する。古墳時代中期頃の鉢と考えられるが、3は11世紀末から12世紀前半の遺物とともに出土しており、口縁部の形状も違うことから古墳時代ではない可能性がある。

第32図は土師器の高台付き壺である。1は底部が平坦で斜めに立ち上がる壺である。底部とその周囲は厚く、高台は小さい。2～15は回転ロクロ成形で器壁に凹凸が見られる。13は非常に



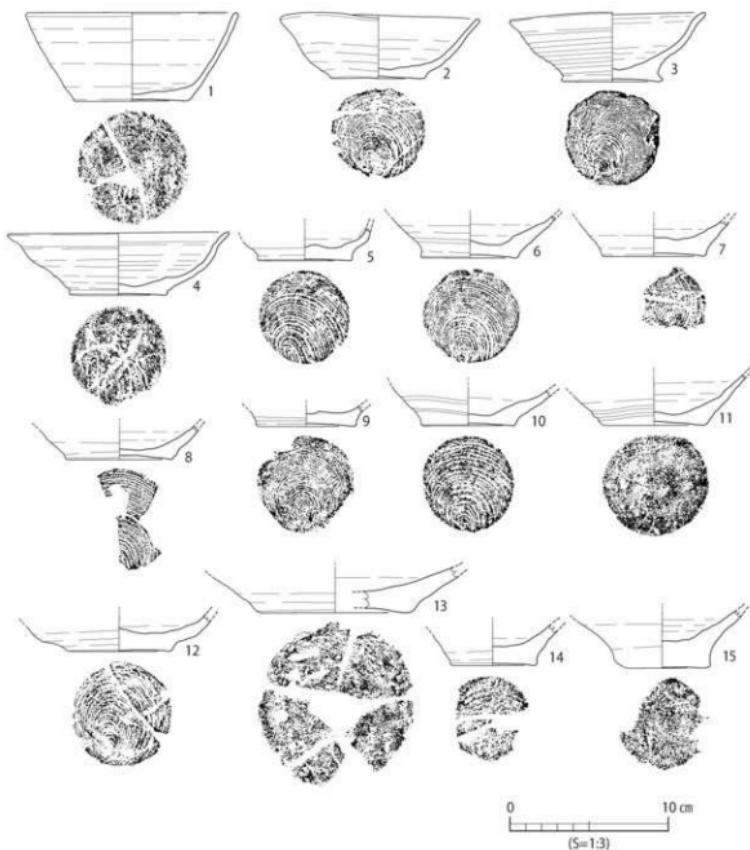
第31図 角落し遺跡出土遺物実測図6(S=1:3)



第32図 角落し遺跡出土遺物実測図7(S=1:3)

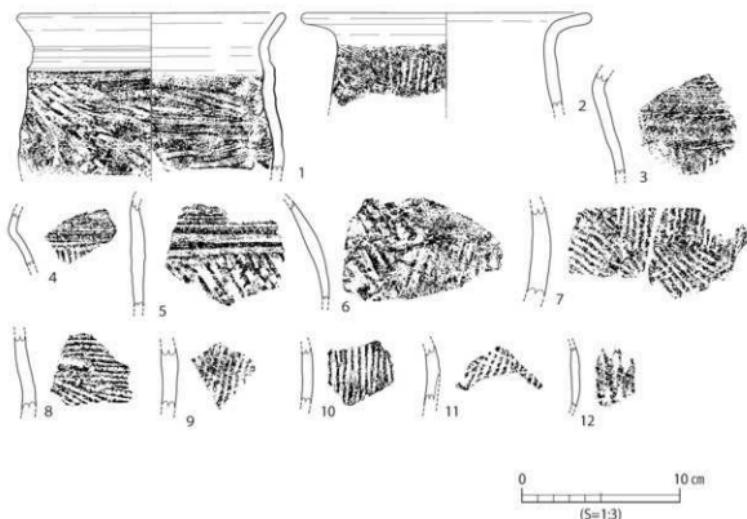
大きく、口径は23cm以上である。高台は全て貼り付け高台で、三角形の2と14、台形の3、ハの字状に外に広がる4~12、15、先端の尖る10がある。ほとんどは底部を回転糸切りで成形時に切り離しているが、1と9.10には回転糸切り痕は残っていない。5は唯一口縁から高台まで復元できた遺物である。高台は貼り付け高台で外に広がり細身を帯びる。底部内面は平坦では無く緩やかに外傾し立ち上がる。やや内湾しつつ、口縁端部はやや外反する。器壁にはロクロ痕跡が残り、底部外面には回転糸切り痕が見られる。16は低脚の杯であろうか。

第33図は土師器の杯である。高台は無く、全て回転糸切り痕を底部外面に残している。1は外傾し直線状に立ち上がるが、やや内湾している。他の杯に比べゆがみが少なくロクロ目を器壁にほとんど残さない。2~15は1ほど立ち上がりがなく、口径が大きく広がる形状である。口縁まで復元できた2~4ではロクロによる成形の痕跡が器壁に残り凹凸が目立つ。また焼成時までの器体のゆがみがそれぞれに見られる。このゆがみは5~15の口縁部まで残っていない杯であっても認められる。多少の器体のゆがみがあつても使用されていたものと考えられる。13は特に大型で杯というより盤といつてもいいかもしれない。



第33図 角落し遺跡出土遺物実測図 8(S=1:3)

第34図は製塙土器として利用された土師器の甕である。底部まで復元できたものは無かった。土師器の甕や壺との分類が難しいが、胴部内外面に残された調整の痕跡、當て具の痕跡を元に製塙土器と認定した。1は口縁が外傾する。頸部から胴部にかけてやや寸胴で胴部下半が若干膨らむ形状である。外面には格子状の叩き具か長方形状の叩き具を用いている。内面はヘラ削りに近い強いハケ目であると考えられる。2は口縁が大きく広がる。胴部は下方に向かって広がっているが胴部下半は残存していない。外面は平行叩き痕である。内面はナデで調整されている。3は1と同様の上方に広がる口縁部になるとされる。4と12の器壁は薄い。平行叩き痕は4と7～10、12である。12は平行叩きの痕跡のうち、個々の叩きの痕跡がレンズ状に中心が膨らむ。1の格子状叩きは斜位に施されるというある程度の規則性が存在する。6や7のように格子状叩きや平行叩き痕が不規則に並ぶものもある。



第34図 角落し遺跡出土遺物実測図 9(S=1:3)

第35図は移動式かまどの基底部である。外面はナデ、内面はヘラ削りを用いている。器壁は底部にかけて分厚くなっている。底径が24cm前後に復元されている。

#### 須恵器（第36図～第41図）

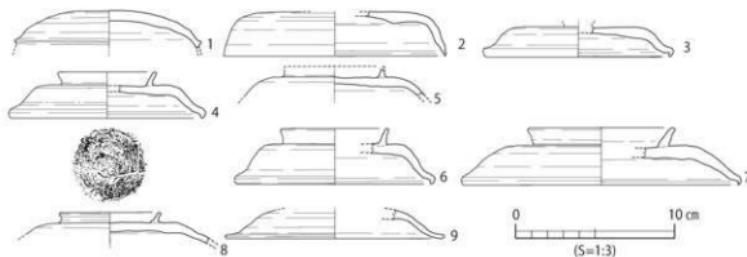
第36図～第41図は須恵器である。第36図は須恵器の蓋である。蓋環の蓋と考えられる。1はつまみが無く、2と3は宝珠つまみであろう。4～9は輪状つまみである。輪状つまみは幅が広い形態が多い。1は古墳時代の蓋環の蓋で、外面に段を持つ。対となる蓋環は本遺跡では出土していない。2は天井が深い蓋である。底部先端が細く尖っている。3～9の天井部は平坦である。3～7は先端部に返しがつくが、9には無い。1は石見2期、2は石見3期、3～8は9期、9は10期以降に属すると考えられる。

第37図は須恵器の高台付きの蓋環である。1～3は底部から急角度に立ち上がり、4～9は外側に広がる外傾となっている。7も高台付き環である。口縁部まで残っており、先端は細く尖る。10と11も高台付きの環としたが、底部は丸く平坦面が小さい。別器種になる可能性もある。8の高台は他の環の高台に比べ断面が三角形で小さい。これも环では無く壺などである可能性もある。1は底部外面に炭が付着しており転用窯の可能性がある。

第38図は高台の無い須恵器の环である。1は口縁部近くが屈曲し広がる。口縁部が外傾し、わずかに内湾する2や、3や6のように底部から広がり、一度外側に折れて開く形状のものもある。



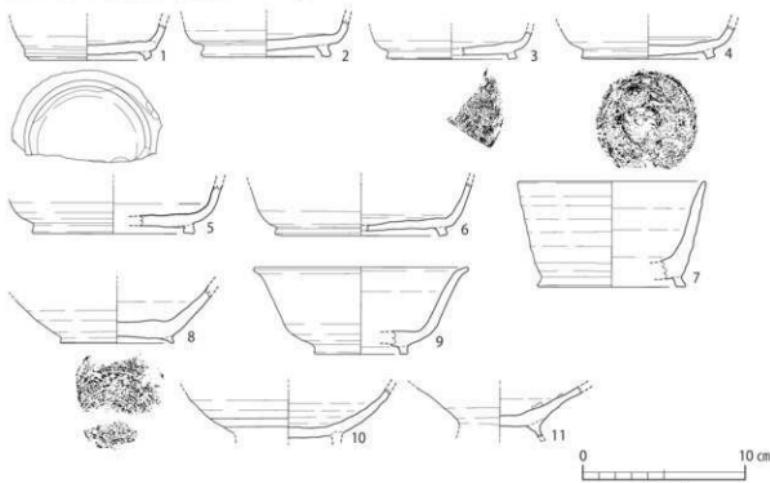
第35図 角落し遺跡出土遺物実測図 10(S=1:3)



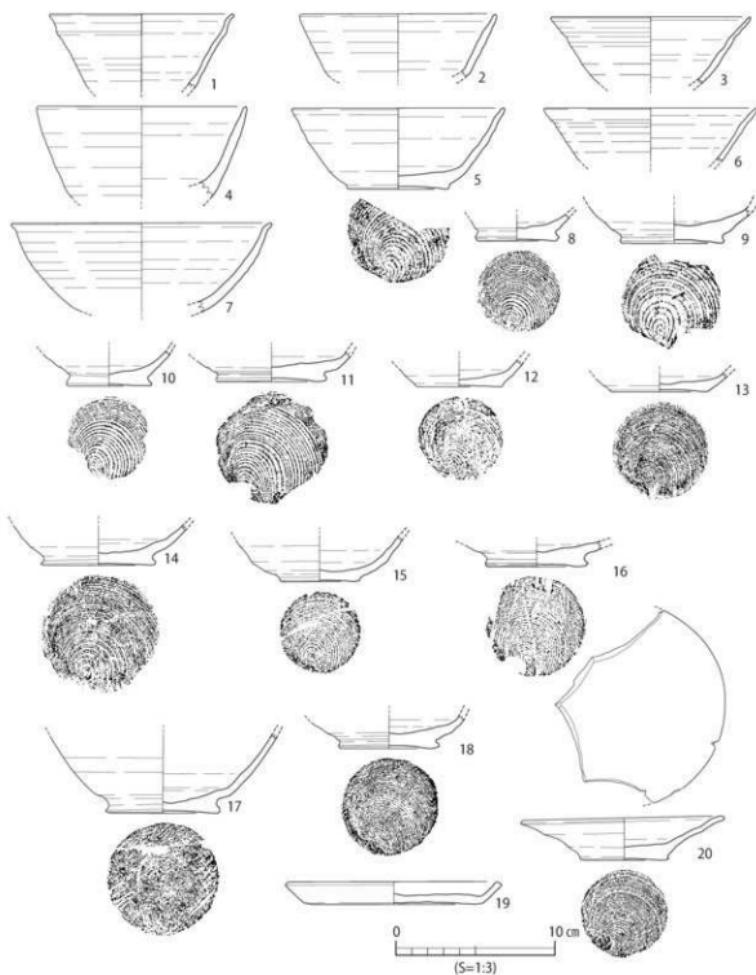
第36図 角落し遺跡出土遺物実測図 11(S=1:3)

7は口縁部先端が外反する。口縁部から底部まで復元可能な5では底部と环部の境に内外面とも屈曲部を持つことがわかる。この屈曲部は8~11、14~18、20のように底部が突起するものと、12と15のように突起が発達しないもの、1~3は屈曲がないものに分類できる。13は屈曲が無い。底部が残る8~20までのうち、19以外は全て回転糸切り痕を残している。また全て上げ底になっているが回転糸切り痕が残っていることから、意図的に上げ底にしたものでは無く、乾燥時あるいは焼成時に环の内側に底部が引き寄せられたため上げ底になったものと考えられる。19は环というよりは皿になると考えられる。底部外面には回転にと切り込んでは無く、ヘラ起こし後にナデを行っている。20は大きく開く环である。底部内面に墨書の可能性がある痕跡が見られる。何が書かれているかは不明である。

第39図は須恵器の高环である。1は环部が急激に上方に立ち上がる。环部外面には沈線による段もあり、その上下にはカキ目が見られる。内面にはカキ目は見られないが、环部の底部内面に研磨痕があり、再利用された可能性もある。2も环部外面にカキ目を有する高环である。3は环部が大きい高环で内外面に自然釉がかかること。



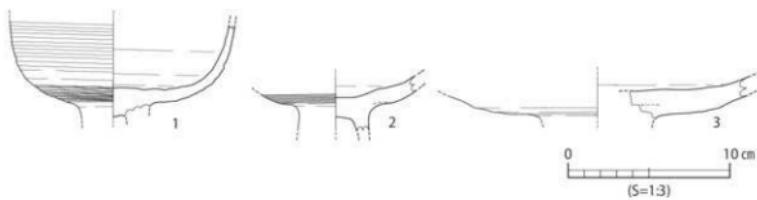
第37図 角落し遺跡出土遺物実測図 12(S=1:3)



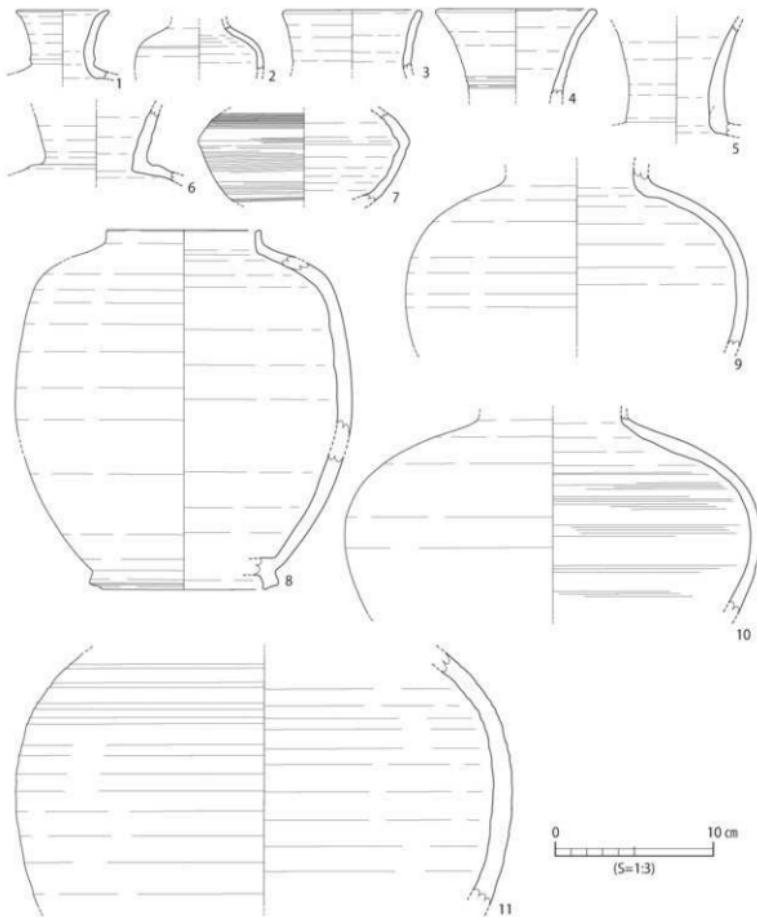
第38図 角落し遺跡出土遺物実測図13(S=1:3)

第40図は須恵器の壺である。1と2は小型である。1と3～6は口縁部が外に開く形状である。8は短頸壺である。12の外側には鉄袖に似た自然袖が付着し、玉垂れを起こしている。胴部の形状は様々で算盤玉状に折れ曲がる7や、肩の張る9や10、提灯状の8、球形の11がある。

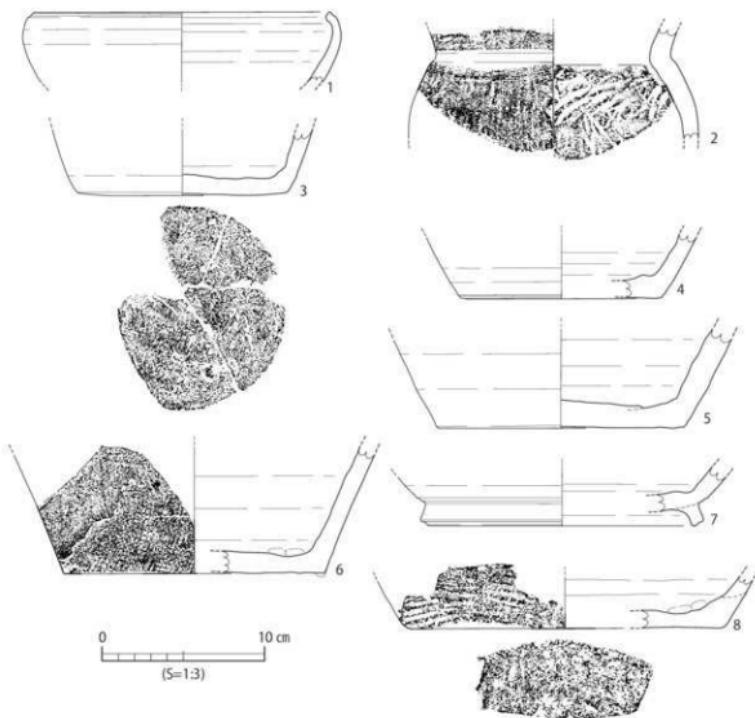
第41図1は鉢である。口縁部先端に向かって内側に内傾し、内湾している。底部は無いが浅いものと考えられる。2は甕と考えられる。口縁と胴部の間がくびれ、頸部となっている。胴部外側には横位のカキ目と縦位の平行叩き目が施され、その上に3段の波状文が施されている。3～8は底部である。底径の大きさから壺や甕の底部と考えられる。7は高台がつくが、それ以外は平底



第39図 角落し遺跡 出土遺物実測図 14(S=1:3)



第40図 角落し遺跡 出土遺物実測図 15(S=1:3)



第41図 角落し遺跡出土遺物実測図 16(S=1:3)

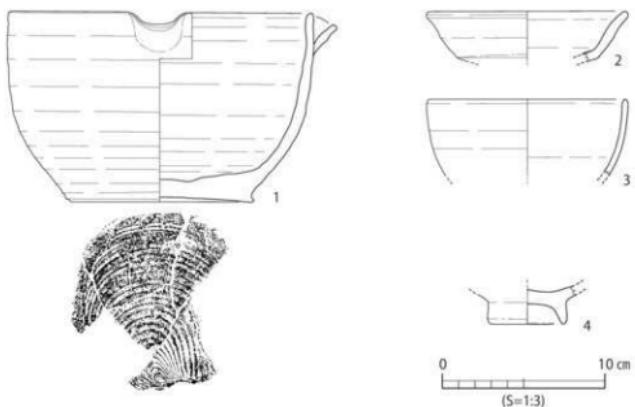
である。3と4は若干の上げ底になっているが、それ以外は平坦である。4は底部と胴部の境界に沈線状の段が認められる。5と6は底部と胴部の境界の角が明瞭である。7は高台がつき第40図8の壺と類似する。

#### 陶器（第42図）

第42図は陶器である。1は片口鉢である。焼成は良好で硬質、無釉である。底部外面には回転糸切り痕が残る。片口はロクロ成形後、外側に押し広げられたものである。2は皿である。底部外面を除き灰釉が施されている。3は碗である。底部は残っていないが全面に施釉されている。4は疊付のみ無施釉で、外面は熱を受けている。

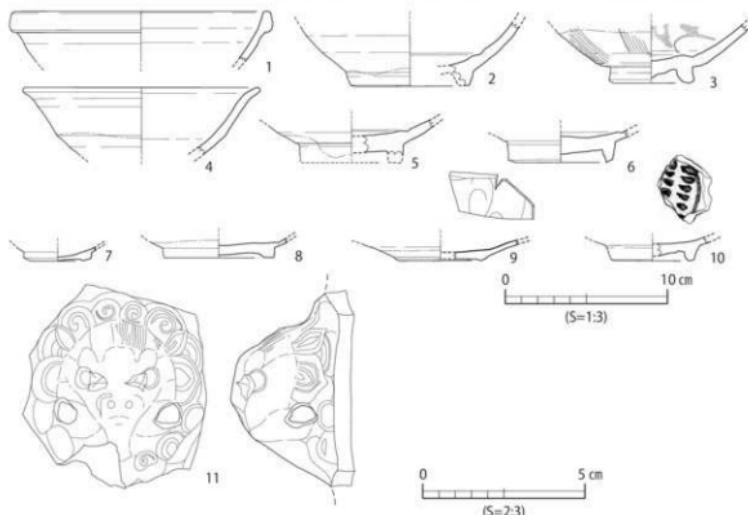
#### 磁器（第43図）

第43図は磁器である。1は白磁で口縁が玉縁になる。釉薬の色調は浅黄橙色で焼成が悪い。2と3は青磁である。2は青磁の碗である。見込みに沈線が1条施されている。高台は無釉である。高台は断面が逆台形となる。3は内面に花文状の施文が、外面にも放射状に平行する施文が見られる。4～9は白磁である。4は口縁部先端に向かって外反するものである。5は底部のみで内面に段を持つ。6も5と同様に内面に段が存在する。7は小型の碗である。底部から高台にかけて無釉



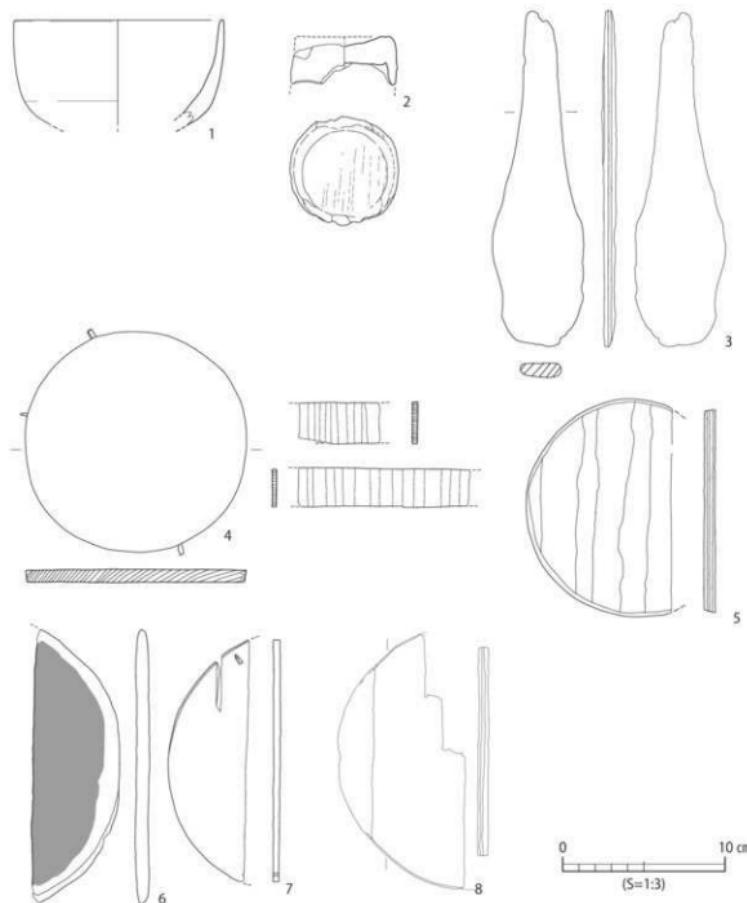
第42図 角落し遺跡出土遺物実測図 17(S=1:3)

である。見込みは平坦ではなく、丸くなつておりそのまま上方へ持ち上げられている。8と9は白磁の皿である。底面内部は平坦で、胸部は外に広がる。9は蓮瓣底状になっている。10は染付の碗である。底部内面は圈線が1条描かれ、その内側に列点文が描かれている。第43図の高台の残るものは全て削り高台である。11は青磁である。器種は大型の香炉や風炉、火鉢などの特殊品と考えられる。胸部には型押し成形された獅子と思われる動物の顔が貼り付けられている。獅子の両頬は穿孔されており、この穿孔部を本来は円形の把手が通っていたものと考えられる。把手は陶器や金属と考えられるが、穿孔部分に材質を同定しうる痕跡は残っていなかった。獅子は目鼻口の表

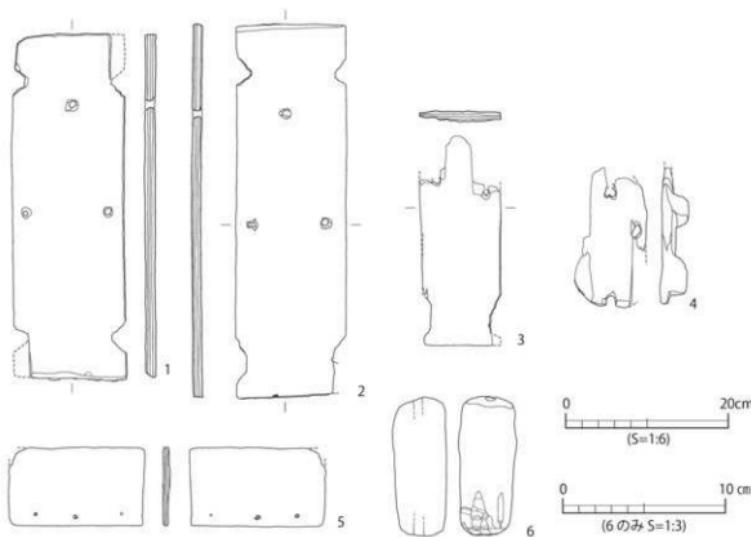


第43図 角落し遺跡出土遺物実測図 18(S=1:3、S=2:3)

現だけでなく、両耳、たてがみの表現もある。たてがみは円形を一単位としその中に渦文を施す一群が額の周囲に巡らされている。また、額の側面には葉文のような一群も存在する。前頭部に頭頂部から垂れ下がる連続する直線もたてがみの一種であろう。このようにたてがみには数種類があり、精巧に表現されていることがわかる。両目とも円形で表現され、両方の目頭側にくぼみが作られている。両目の下方には弧が描かれている。これは鼻と口が前方への突出する表現を表しているものと考えられる。口は折れ線により「へ」の字に強く結ぶ表現がとられている。頬は細るように面取され、線刻が胴部近くで施されている。内面は無釉である。外面は施釉されているが、穿孔部は開口部に流れ込んでいるが、内部全体に施釉されているわけでは無い。獅子の顔正面、目から口にかけて摩耗により鮮明さに欠ける。これは使用による摩耗か使用後に土中で攪乱を受けたのか不明で



第44図 角落し遺跡出土遺物実測図 19(S=1:3)



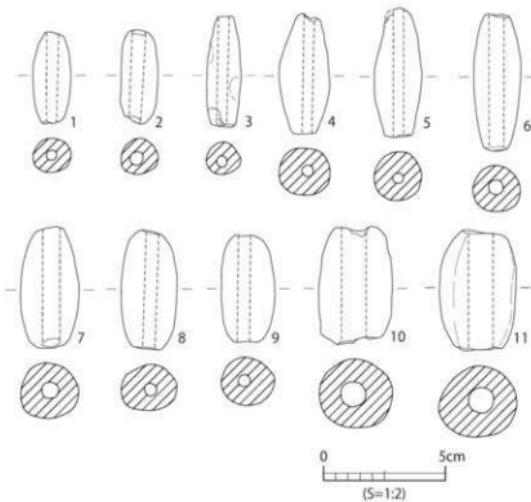
第45図 角落し遺跡出土遺物実測図 20(S=1:3、S=1:6)

ある。内面が無釉であることから香炉などが想定されるが、貼り付けられた顔とその胸部以外ほとんどを失っており本来の形状は全くわからない。胸部の径は残存部分がわずかであり、器体そのものの形状が円形なのかもわからぬため不明である。釉薬や胎土の様子から中国製青磁の可能性が高いと指摘されているが、産地や作成時期は不明である。

#### 木製品（第44図～第45図）

第44図と第45図は木製品である。第44図1と2は漆塗りの椀で1は椀部のみ、2は高台のみである。

1は内外面赤漆、2は内面と底部外面を除く外面に黒漆が塗布してある。二つとも柾目である。3は杓文字状の木製品である。柄は長楕円形の断面で、先端はわずかに薄くなりつつ聞く。板目である。4からは桶の部材である。7は蓋で、それ以外は底板で、4は側板も含む。4は側板を止める目釘が底板側面に打ち込まれている。側板は内面に工具で連続する直線が引かれ、内湾しやすいよう工夫が見られる。5は断面が台形になる。6は縁が細くなる蓋である。片面には漆が付着している。7は底板の2ヶ所に穿孔があり、その孔には樹皮か皮革の紐が通してある。8には目釘等は見られない。第45図1から3は田下駄である。幅はほぼ同だが、2の方が長い。穿孔は共に3ヶ所で、側縁から削り込み4ヶ所に抉りが見られる。3は幅の狭い田下駄で半分は欠損していると考えられる。穿孔は2ヶ所に見られる。4は下駄である。破損が著しく形状は不明である。穿孔は3ヶ所で、腐朽しているが2本の歯が残る。板目である。5は箱の側板と考えられる。目釘穴が3ヶ所残り、うち1ヶ所には目釘が刺さったままで出土した。板目である。6は不明木製品である。大きさと形状は木錠とも言えるが、小口側から穿孔されており、側面に穿孔や削り込みの見られないため、用途不明の木製品とした。木製品はほぼ上層の腐植土層から出土しており、年代は平安時代



第46図 角落し遺跡 出土遺物実測図 21(S=1:2)

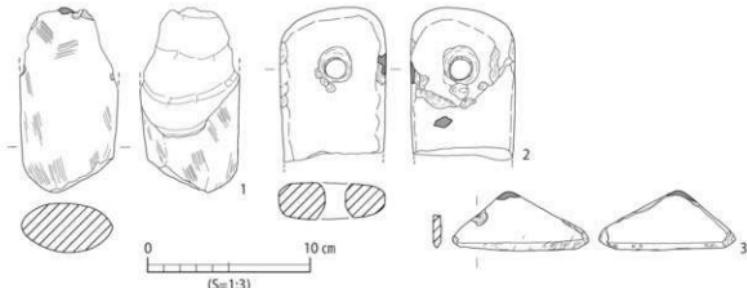
未から鎌倉時代初めと考えられる。

#### 土製品（第46図）

第46図は土錘である。1～2は中型、3は細身のもの、4～6は3より長いもの、7～9は中太、10と11は大型である。細く小型のものは無い。横断面は全て円形で、穿孔は10と11が大きく、その他は多少のばらつきはあるが1センチほどである。土錘は出土層位から平安時代末から鎌倉時代初めである可能性がある。

#### 石器（第47図）

第47図は石器である。1は磨製石斧である。基部側が欠損しており長さは不明である。この欠損は基部側からの作用により大きく斧の中心で割れたものである。刃部の大部分が摩滅している。これは斧としての利用の結果の使用痕と考えられ、本来の刃部形状がわかるのは3分の1ほどである。丸鑿状の刃部であったと考えられる。摩滅は刃部の3分の2に限定され、大きく刃部形状



第47図 角落し遺跡 出土遺物実測図 22(S=1:3)

を変えており、斧としての利用は石斧の長軸に対して斜め方向に打ちつけられたものと考えられる。弥生時代の石斧であろうか。2は穿孔のある有孔石器である。断面が長楕円形で縦長の縫の全周を研磨している。一部に敲打痕が残り研磨前に敲打が施されていたことがわかる。したがって、計画的に形状を整えている可能性が高い。穿孔は横方向の粗い研磨で行われ、横方向に太い線条痕が残っている。穿孔は両面から施されている。時期は不明であるが、縄文時代の石器の可能性も否定できない。3は石製穂積具で、いわゆる石庖丁である。穿孔の段階で破損したようで、穿孔を途中で中止している。研磨により刃部が形成されているが、穿孔の前か後か不明である。したがって、石庖丁の未製品、または製作途中に破損したが石庖丁としての使用に耐えられると判断されたものの可能性がある。弥生時代に属するであろう。

## 第4節 小結

角落し遺跡では、三隅川河口から続く後背湿地と丘陵斜面との境に多数の土器や木製品が出土した。遺構は、5区の古墳時代中期頃の住居跡が調査範囲外の斜面から土砂崩れによって流入したものと考えられる土器だまりであるSX01と、1区の古代末から中世初めの杭列、2区の古墳時代中期頃の杭列が確認された。出土遺物は弥生時代前期から見られるが、主な出土遺物の時期は弥生時代中期後半から後期、古墳時代中期、11世紀末から12世紀前半である。平成29年度に調査が実施された同遺跡6区では多量の木製品とともに建築部材が多数出土している。土器の出土数は非常に少なく、6区は隣接する1区や2区に比べ居住空間から離れていると判断される。谷奥の3区でも遺物が出土することから、角落し遺跡では谷奥と丘陵斜面を居住空間としていたが、幾度となく斜面の崩落が起り、下方に遺物が流出したと考えられる。遺跡の立地は三隅川河口付近であり、外洋へ移動しやすい場所である。小さな集落を形成するには適した場所であったと考えられる。

これまで浜田市三隅町地内で本格的な発掘調査はほとんど無かった。第3章記載の海石西遺跡でも低湿地遺跡の調査が行われ、この地域では低地に遺跡が残されていること、丘陵斜面は崩落を繰り返しており、遺物が下方へ流出している事例も明らかとなった。今後の当地での遺跡のあり方を考える上で貴重な成果と言える。

最後に、第43図11の青磁は壺か香炉の胴部に貼り付けられた獅子の獣面である。把手が頬を貫通するもので、日本国内では類例がほぼ無い。生産地や時期も不明であるが、袖や胎土からは中国青磁であろうとの指摘が多い（注1）。当地は中世に石見地区で益田氏と朝を競った三隅氏の勢力範囲で、また、三隅川河口は山陰を中心に広域に経済活動を行っていた大賀氏が拠点としていた。この青磁が奢侈品の可能性が高く、貿易の結果、当地に持ち込まれたと考えるなら三隅氏や大賀氏との関係が深い遺物であると考えられる。類例の増加が待たれる。

（注）山本信夫氏・田中克子氏のご教示による。

## 第5章 回り田遺跡の発掘調査

### 第1節 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置 調査対象地は、浜田市三隅町岡見に所在する。益田市の市境近くの丘陵の尾根に位置している。丘陵は東西に延びており独立している。北麓には国道9号が東西に通っている。丘陵の頂部の標高が約91.8m、丘陵裾部の標高は約70mで比高差は20m程度である。丘陵上からは樹木の繁茂が無ければ東は岡見の集落へつづく峠まで視界が開けており、西は益田市との境になる上田川と馬橋付近を臨むことができる。発掘調査は三隅益田道路の事業地内である丘陵の尾根上で行った。

2. 地理的環境 調査区は高低差があり、調査前の測量では最も高い地点で約91.8m、低い地点で約97.0mである。東西延びた尾根の北側と東側の斜面は急峻でところどころ斜面崩落の痕跡が見られた。斜面の窪みや段状の地形は斜面崩落や数度の地滑りにより形成されたものと考えられる。南と西側には一定の広さで緩斜面が続き、急激に傾斜し丘陵を構成している。本遺跡の麓では国道9号線が直線に建設されている。この建設に伴い丘陵北側に延びていた尾根筋は削平されている。

### 第2節 発掘調査と整理作業の経過

1. 発掘調査の経過 本遺跡の発掘作業は平成28年に実施した。調査前は山林で檜の植林が行われていた。平成24年度の分布調査によって丘陵上に2ヶ所の高まりが確認されていた。続いて平成27年度の試掘調査によって2ヶ所の高まりは盛土によって形成されていること、高まりの間に平坦面が存在することが明らかとなり、発掘調査を行うことになった。調査面積1,223m<sup>2</sup>で調査区の設定は行わず、全体を同時に掘削している。表土掘削後、2ヶ所の高まりと平坦面の調査に着手し、11月11日に調査を終えた。出土遺物は無く、遺構の調査のみであった。調査終了に先立ち、ラジコンヘリによる空中写真撮影を行っている。その後、平成29年度1月25日には国土交通省へ現地を引き渡した。

2. 整理等作業の経過 平成28年度の冬期と平成29年度は埋蔵文化財調査センターにて発掘現場で記録した図面や写真等の整理検討を行い、遺構のトレース、写真、割付、原稿執筆を行った。画像処理・図版作成・編集等にはAdobe社のソフトを使用した。

### 第3節 発掘調査の概要

1. 調査の方法 調査前の現地の状況は山林で、尾根上には高まりが2ヶ所見られた。試掘確認調査の結果に基づいて、表土掘削を行うこととし、高まり周辺については人力により、平坦面やその他の斜面はバックホーを用いて表土の掘削を行った。

重機掘削は、バケットに平爪を装着して、少しづつ漉き取るようにして面的に掘り下げる。植林の根株が大量に残っていたが、地山や遺構を木津つけない範囲で重機により掘り起こした。表土と地山の間に遺物が含まれる可能性がある層が堆積していたため、この層についてはベルトコンベ

アーを設置し、スコップ・ジョレンを用いた人力による掘削を行った。

遺構の検出については主に草削りとジョレンを使用し精査を行った。遺構の断ち割りなどのトレチ調査はスコップと草削り、移植ごてを併用した。遺構の埋土掘削には移植ゴテ・草削りを使用した。掘削にあたっては基本的にベルトを設定するか半裁、断ち割りを行い、土層観察を行いつつ掘り下げた。土層断面については写真撮影を行い、必要に応じて断面図を作成した。

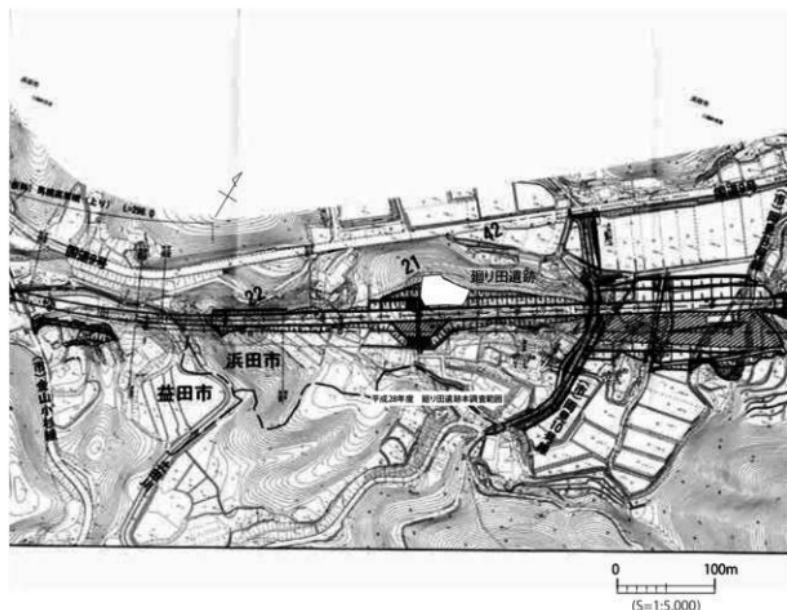
遺構の平面図及び地形測量図は、コンピュータ・システム株式会社の遺跡調査システム「SITE」を用いて測量し、出力後補正を行った。断面実測図についてはオートレベルを用いて測量を行い、高低差のある壁面については平面図と同様に調査システムを用いた記録作成を行った。遺構等の写真は、原則として報告書に掲載が見込まれるものは $6 \times 7$ 判フィルム（モノクロネガ・カラーポジフィルム）による撮影を行い、それ以外はデジタルカメラで撮影した。

現地調査期間は平成28年9月14日から11月11日、調査面積は1,223m<sup>2</sup>、調査体制は調査員1名と調査補助員2名である。

**2. 基本層序** 第52図は試掘確認調査時の土層である。1層とした表土の下に、2層が堆積するかあるいは地山層に到達する非常に単純な土層である。

### 3. 検出した遺構

調査の結果、塚状遺構2ヶ所、溝状遺構2本、SX01を確認した。塚状遺構が土を盛られており、その他の遺構は地山層を掘り込んで造られている。



第48図 廻り田遺跡の調査位置図 (S=1:5000)

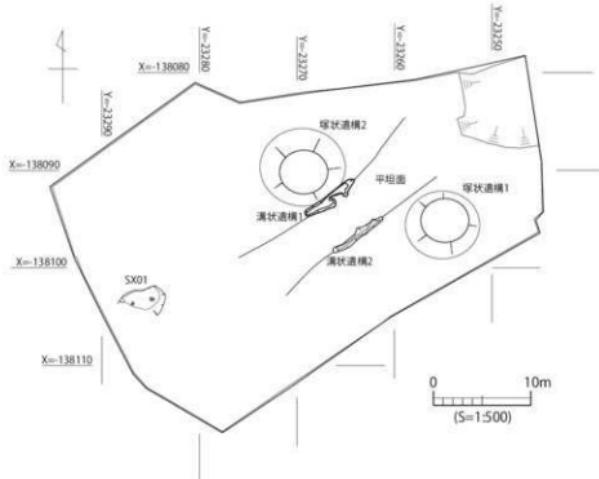
## 塚状遺構1（第53図）

東側の塚状遺構である。直径約4.0mで高さ約0.9mである。旧表土層の上に基本層序の地山である赤褐色土層に似た色調の土を盛り上げ塚状に構築した遺構である。盛土は固い層と柔らかい層を互層に堆積するなどの規則性は無く、単純に旧表土層から上部に土をかぶせていったものと考えられる。塚上面や盛土内で遺物は出土せず、埋設された施設や、塚上面に墓穴など上から掘り込まれた遺構も確認できなかった。遺構頂部から裾部、またその斜面下方に亜角礫や亜円礫、円礫が散布していたが、原位置を保っているものは確認できなかった。本来は塚状遺構の表面に貼られていた可能性はあるが、出土状況からは判断できなかった。

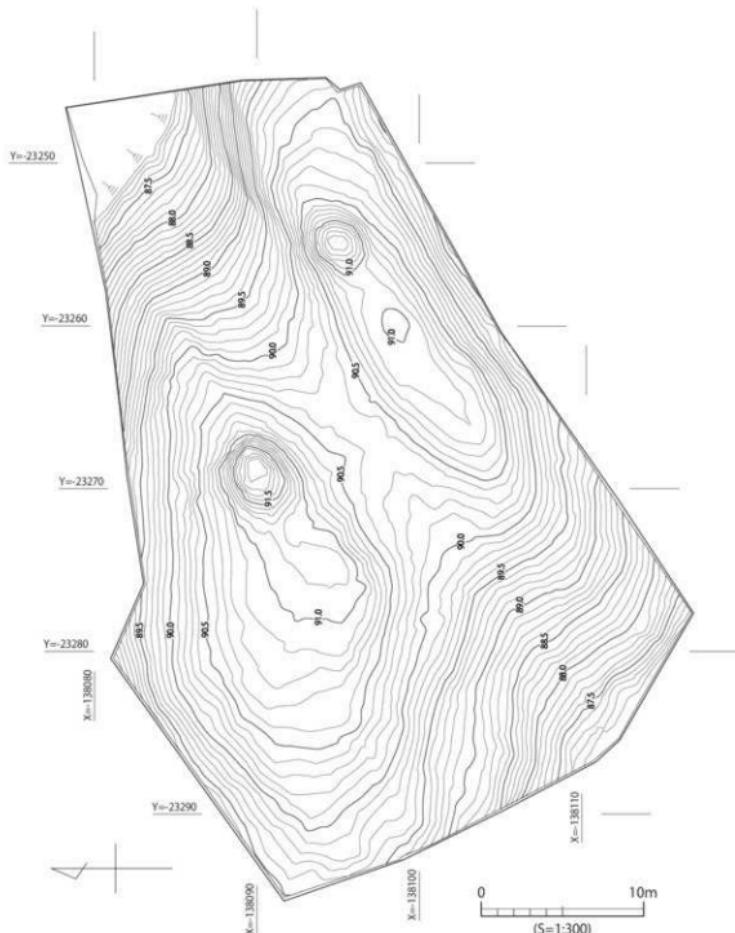
以上から、塚状遺構1は盛土によって造られた高まりであるということは明らかにできたが、出土遺物も無く築造年代や遺構の性格を検討可能な構造物や遺物は確認できなかった。

## 塚状遺構2（第54図）

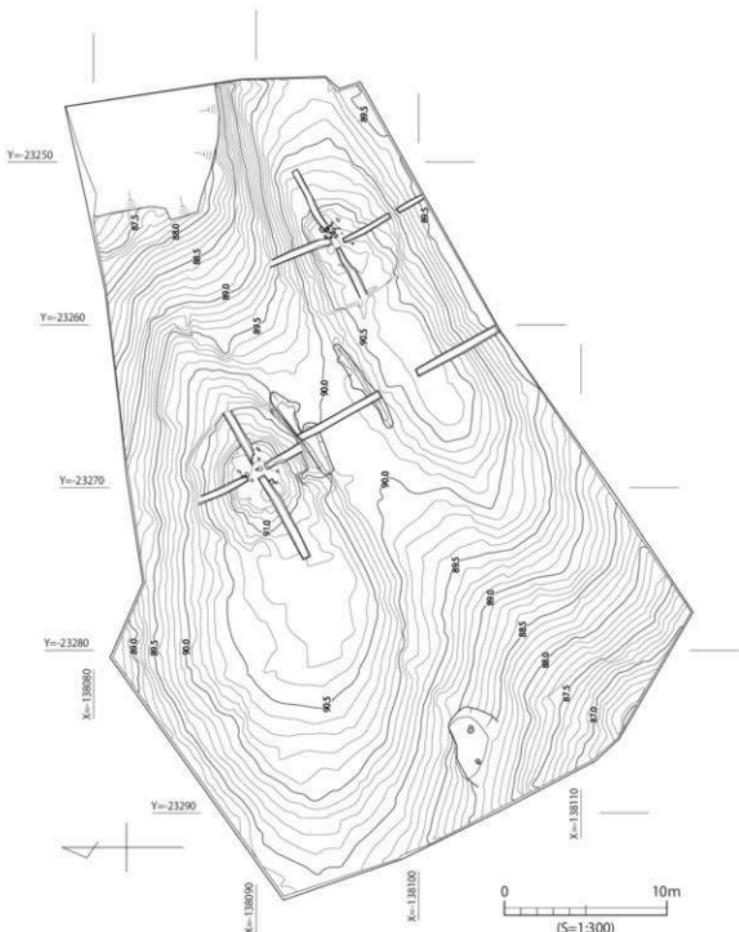
西側の塚状遺構である。直径約5.0mで高さ約0.9mである。塚状遺構1より若干大きい。基本構造は塚状遺構1と同様で、石室などの施設や墓壇などの掘削した遺構、また出土遺物も確認できなかった。盛土は塚状遺構1と同様に旧表土層の上に土が盛られていた。盛土の堆積には規則性は無く、下部から順に土を盛り上げているだけである。盛土内と盛土上面で礫が出土したが盛土内の礫については盛土時に地山に含まれた礫と共に盛り上げた結果であると考えられ、何らかの遺構とはならない。本遺構の頂部には板状の大型礫が据えられていたが、盛土及び表土層から一部が浮き上がり安定感が無かった。この板状の礫は原位置を保っていないものと考えられる。塚状遺構の裾部には長方形に近い礫も数点検出されたが、列石として塚状遺構の裾部に巡らされていたとの判断はできなかった。以上から、塚状遺構2も盛り土によって造られた土の高まりと断定できるが、塚状遺構1と同様に遺構の性格や築造年代を特定することができなかった。



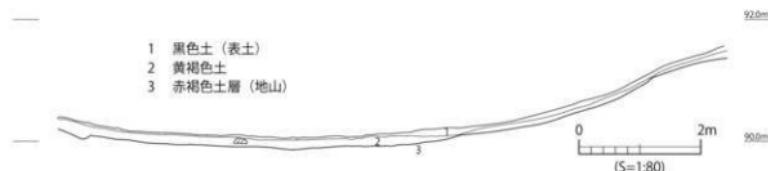
第49図 回り田遺跡遺構配置図 (S=1:500)



第50図 廻り田遺跡 調査前測量図 (S=1:300)



第51図 廻り田遺跡調査後測量図 (S=1:300)



第52図 廻り田遺跡土層図 (S=1:80)

#### 平坦面

塚状遺構1と塚状遺構2に挟まれた空間が、調査前から平坦になっており平坦面として土層の堆積などの確認を行った。土層の堆積は表土層の下に黄褐色土層が堆積している。その下は地山層で非常に単純な堆積状況である。出土遺物は無く、人工的に掘削した痕跡は見られなかった。しかし尾根を斜めに横切るように平坦面がわずか見られることと、2ヶ所の塚状遺構がその平坦面の両側に築かれていることから平坦面も遺構の可能性があると考えた。遺構であった場合、出土した遺物が無いため年代が特定できない。

#### SD01・SD02(第55図)

SD01とSD02は塚状遺構1と2に挟まれた平坦面の両脇で確認された遺構である。地山である赤褐色土層を掘り込んでいる。遺構の埋土も地山とほぼ同じ赤褐色土層で、掘られてすぐ埋められたか、周囲から地山が流れ込んで埋まつたものと考えられる。平面形は整っておらず、人工的に掘られた遺構では無く流水により地面がくぼんだ結果として溝状遺構のようになった可能性もある。出土遺物はなく遺構の時期は不明である。

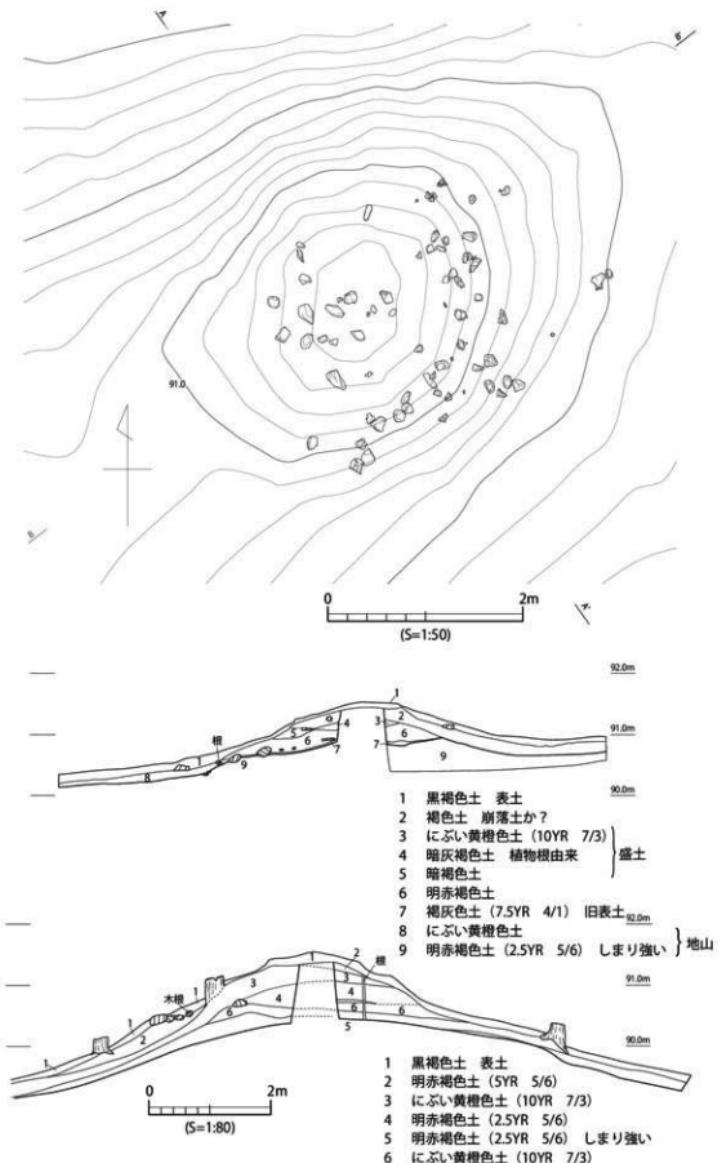
#### SX01(第56図)

調査区西側の斜面で検出された遺構である。斜面を削り出し平坦面を作り出している。不定形な平面で幅約3.9m、最大の奥行き約2.0m、掘り込まれた深さ最大0.4mで、床面に2つのピットが確認された。このピットは非常に浅く、柱穴だと断定はできない。出土遺物も無く遺構の性格や年代は不明である。

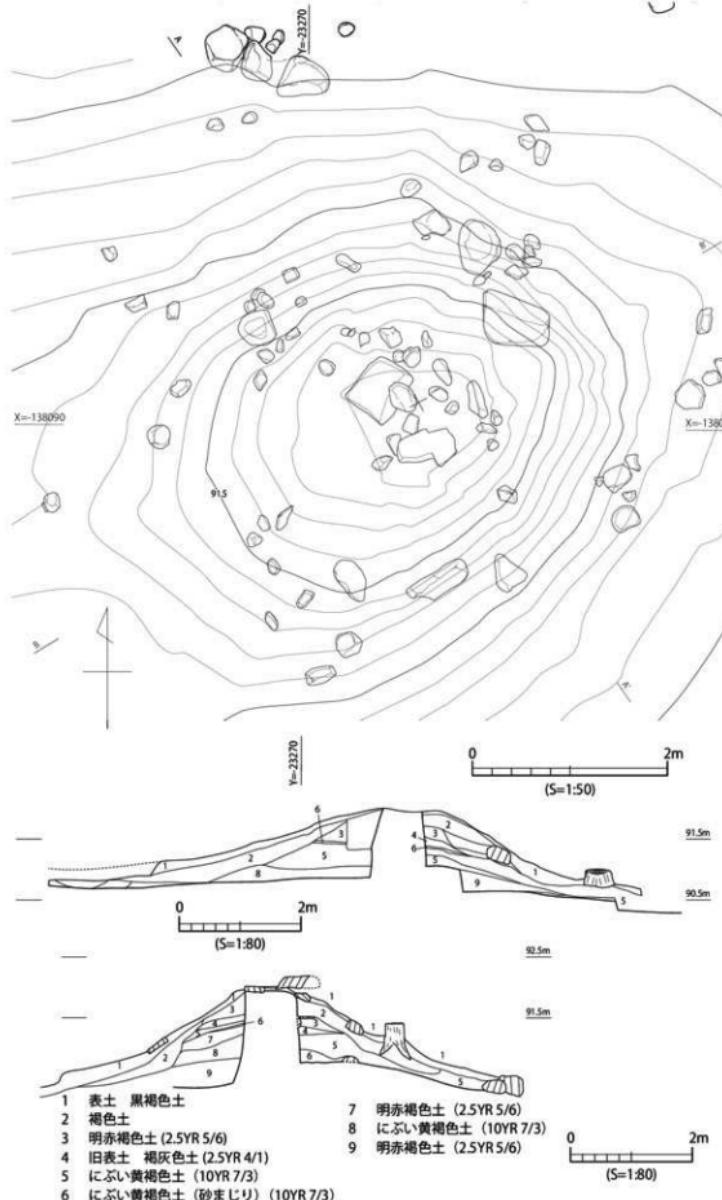
## 第4節 小結

今回の発掘調査で廻り田遺跡では塚状遺構2ヶ所と溝状遺構などが確認された。出土遺物は無く遺構の年代は不明である。塚状遺構は丘陵の尾根の旧表土層に盛土を施し築かれている。したがって、人為的な遺構であることは確実である。塚状遺構の直径はそれぞれ3.9m前後と4.0m前後で、遺構の上には礫が散乱しており、礫が貼られていた可能性がある。

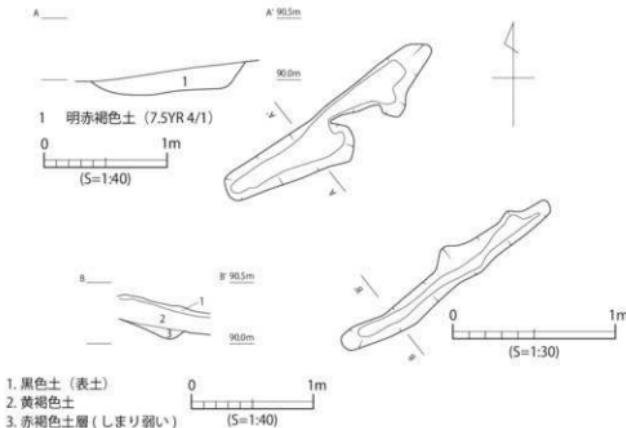
ここでは、塚状遺構の性格を考えてみたい。廻り田遺跡は塚状遺構の土地から一里塚を想定して発掘調査を行った。本遺跡が所在する丘陵の北側には近世山陰道跡推定地が東西にある。現在は丘陵の裾の地形が国道9号により大きく改変を受けているため、あくまで推定地となっている。2基の塚状遺構の間は平坦面が存在し、平坦面と塚状遺構の境には溝状遺構が存在する。溝状遺構に挟まれた平坦面の幅は4m程度である。平坦面には盛土や砂利や礫などが敷かれていた形跡は無く、溝状遺構も人為的に掘られた溝と断定できず、流水による地山のくぼみの可能性も否定できない。



第53図 回り田遺跡塚状遺構1実測図1(平面図 S=1:50、土層図 S=1:80)



第54図 回り田遺跡塚状遺構2実測図1(平面図 S=1:50、土層図 S=1:80)



第55図 回り田遺跡 SD01・SD02 検出状況(平面図 S=1:30、土層図 S=1:40)



第56図 回り田遺跡 SX01 検出状況(S=1:30)

したがって、塚状遺構が一里塚で、遺跡が街道に関係するであるとの確証は得られなかった。次に近隣の一里塚の発掘調査事例では、広島県東広島市の近世山陽道跡と日向一里塚の調査がある。この調査では近世山陽道のこの地点には側溝ではなく道幅は3mから4.5mであった。この近世山陽道を挟む2対の高まりが日向一里塚と呼ばれ、塚間の道幅は4.5mであった。北塚は直径約6mで周囲に礫が貼られており、平坦面に盛土を施し築かれている。では、回り田遺跡の調査結果と比較してみたい。塚状遺構1の直径は4.0m前後、2の直径が5.0m前後であり、日向一里塚の北塚より規模が一回り小さい。また日向一里塚には礫が丁寧に貼られているが、回り田遺跡では礫は散布している状況であった。塚間の平坦面の距離は約5mで、二つの溝状遺構の間は約4.4mであった。

溝が無い塚状遺構間の距離は長いが、溝状遺構の間は近世山陽道跡と大きな差はない。このように近世山陽道跡と日向一里塚との比較では塚の規模と構造に相違点が見られる。次に、文献からも検討してみたい。国立国会図書館蔵の石見国絵図は正保年間の国絵図と考えられている。この国絵図は赤で街道が描かれ、街道を挟むように2点が対となった黒点表示が一定の距離で描かれている。この黒点は一里塚であるが、絵図は実際の地形を細かく反映しておらず、ある程度の位置関係しか参考にできない。本遺跡のある浜田市三隅町岡見については、「岡見」の表示があり、かつ美濃郡と那賀郡の郡境表示もあり、ある程度の位置は確認できる。その「岡見」近くに描かれた街道を挟む黒点表示があり、絵図には岡見周辺に一里塚が存在していることになっている。また伊能図では、伊能隊の測量道程は廻り田遺跡からはずれているようである（注1）。伊能隊によって行われた文化年間（1800年初頭）の測量時に廻り田遺跡には街道が通っていない可能性が高いが、江戸幕府による一里塚の整備が開始されたのは1604年と言われており、伊能隊が測量を行った1800年代初頭とは開きがある。今回の発掘調査で確認された平坦面は街道とは言えないが、2基の塚状遺構をわざわざ盛土で造成していることを考えると街道として整備し一時期利用されたが、新たに丘陵裾部を街道とした可能性は無いかと考えてみたい。

今回の調査でも確証は得られなかったが、島根県西部の近世山陰道を検討する上で貴重な資料を得ることができたと考えている。

（注1）阿部志朗氏のご教示による。

【参考文献】

財団法人広島県教育事業団埋蔵調査室 2003『近世山陰道跡・日向一里塚・石立塚窯跡』

# 第6章 近世山陰道跡（馬橋地区）の発掘調査

## 第1節 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置 本遺跡は益田市土田町に所在する。土田町は益田市の東端、隣接する浜田市との境に存在する。日本海の海岸と丘陵地帯で町内は占められており、中心地はJR 鎌手駅と国道9号線の周辺となる。日本海には無人島である高島が浮かんでいる。JR 益田駅から遺跡までは車で20分程度の距離である。

2. 地理的環境 本遺跡は益田市と浜田市の市境に流れる土田川及びその支流によって形成された丘陵の斜面に立地している。丘陵は南西から北東方向へ張り出しており、その東斜面に位置している。遺跡の東側には土田川に支流が地点があり、そこに「馬橋」と呼ばれる橋が架かっていたとされている。現在も土田川を渡る橋は馬橋と言われている。この馬橋から延びる市道が遺跡のある丘陵の裾を通り、谷奥の集落に繋がっている。この市道は近世山陰道の推定地となっており、分布調査前までは市道部分に近世山陰道が存在していたが現在は確認できないものと考えられていた。丘陵の斜面には斜面崩落による土砂崩れの痕跡が至る所に見られる。実際周辺住民からの聞き取りによると昭和58年の水害で斜面が大きく崩落し、道が埋まったため現在の位置に市道を振り替えたとする話を聞くこともできた。したがって、自然災害による地形の変化が著しい地域だということがわかる。

## 第2節 発掘調査と整理作業の経過

1. 発掘調査の経過 本遺跡の作業は平成28年5月19日から9月14日にかけて実施した。調査区は山林と荒れ地であった。表土掘削後、人力による包含層掘削と遺構検出、遺構掘削を実施した。遺跡の性格が街道跡ということで、遺物の出土がほとんどなく、街道の路面である石敷きや、数カ所で確認された石垣や平坦面の掘削及び遺構検出、遺構掘削を行い9月14日に調査が終了した。終了に先立ち、ラジコンヘリによる空中写真撮影を行っている。10月14日に国土交通省へ引き渡しを行っている。

2. 整理等作業の経過 遺物の水洗・注記・接合作業は現地調査に並行して実施し、冬期は埋蔵文化財調査センターにて前述した作業を継続し、統いて復元・実測等の整理作業を行った。平成29年度に本遺跡の出土品を通覧して遺物実測・写真撮影を行っている。現地調査終了後に整理した図面・写真等の記録類についても、出土品と併せて総合的な整理検討を行い、遺構・遺物のトレース、写真、割付、原稿執筆を行った。画像処理・図版作成・編集等にはAdobe社のソフトを使用した。

## 第3節 発掘調査の概要

1. 調査の方法 調査前の現地の状況は、山林と荒れ地であった。表土層は試掘確認結果から重機により掘削を行ったが、街道跡の存在が想定される範囲は表土層の掘削も人力で行った。重機掘削

は、バケットに平爪を装着して、少しづつ漉き取るようにして面的に掘り下げた。土層観察を行なながら、包含層あるいは遺構面まで若干余裕を持たせたところで掘削を停止した。その後はベルトコンベアを設置し、スコップ・ジョレンを用いた人力による掘削を行った。

遺物包含層についてはスコップを用いたが、竹の根が多かったため鍬も用いて人力で掘り下げた。出土遺物の取り上げに際しては地点名と層位の記録のみを行った。遺構検出は、ジョレンにより大雑把に精査した後、草削りを用いて丁寧に削り、遺構の検出に努めた。遺構の埋土掘削には移植ゴテ・草削りを使用した。掘削にあたっては基本的にベルトを設定し、土層観察を行いつづけた。石敷きや石垣の精査には移植ゴテ以外にハケなども使用している。土層断面については写真撮影を行い、必要に応じて断面図を作成した。遺構の平面図は、(株) CUBIC の「遺構くん cubic」を用いて測量し、出力後に補正を行った。断面実測図についてはオートレベルを用いて測量を行い、高低差のある壁面については平面図と同様に調査システムを用いた記録作成を行った。石垣の正面図作成にはデジタルカメラで正面から撮影を行い、Adobe 社の PhotoshopCC により画像補正を行ったのち、画像をトレースしたものを現地で修正して正面図を作成している。遺構等の写真是、原則として報告書に掲載が見込まれるものは  $6 \times 7$  判フィルム（モノクロネガ・カラーポジフィルム）による撮影を行い、それ以外はデジタルカメラで撮影した。

現地調査期間は平成 28 年 5 月 19 日から 9 月 14 日、調査面積は 1,315m<sup>2</sup>、調査体制は調査員 1 名と調査補助員 2 名である。

**2. 基本層序** 石敷き周辺の基本層序は上から表土、黄褐色土層、その下層は石敷きや溝などの遺構、あるいは岩盤層である。西側の平坦面は、上から表土層、水田耕作土層、不透水層で、その下は岩盤層の上部に堆積する岩盤風化層となる。



第 57 図 近世山陰道跡の調査位置図 (S=1:3000)

3. 検出した遺構と遺物 調査の結果、石敷き、石垣、溝跡を確認した。遺構の多くは、地山あるいは岩盤上で検出した。

#### 石敷き（街道跡）（第62図）

近世の山陰道と想定される位置に敷かれていた石敷きの路面である。平成27年の試掘調査時に平坦な礫を敷き詰めた路面が検出されていたものである。今回の発掘調査の結果、昭和35年頃に当時の電電公社が道の下部に電話線を埋設する工事を行っており、電話線の埋設に伴い道を改修した状態が検出された石敷きであることが判明した。

石敷きは馬橋方向から丘陵斜面に沿って徐々に上っている。馬橋側の端は標高40m、反対は標高46m前後で途切っていた。石敷きは途切れていながら電話線の埋設はさらに遺跡外の西方へ延びていることが明らかとなった。路面は直径10～50cm前後の礫を半裁し作り出した平坦面を上面に向け路面として幅1～1.2mに敷き並べている。礫の平坦面には楔の打ち込まれた痕跡が残るものも見られた。礫の間にはコンクリートの目張りが施されていた。礫は安山岩や輝石安山岩などを用いており、遺跡周辺で採集できる石材ではなく非常に良質なものであった。

路面の礫を除去すると礫の直下にコンクリートが薄く流されており、その上に礫を設置していることが判明した。このコンクリートの下には箱掘りで電話線埋設溝が掘られており、溝底面近くに電話線が埋設されていた。電話線は真砂で覆われ溝を上部まで溝たされ、その上にコンクリートを15cm程度平坦に流し込み電話線の上部を保護している構造となる。

石敷きの路面の両側には溝が掘られていた。この溝は排水用の溝と考えられるが、掘削された時期は不明である。路面の山側に掘られた溝跡は断面が楕円形となっており、丘陵から路面から流れる水を下方に流す役割があったものと考えられる。一方路面の谷側の溝跡は岩盤を掘り込んでおり、断面形状も一定せず、溝と断定できないほどであったが、不整形な溝跡が存在すると考えている。岩盤の硬度により山側ほど明確な溝にできなかった可能性がある。二つの溝跡には昭和以降の瓶など近年廃棄されたものしか出土しなかった。

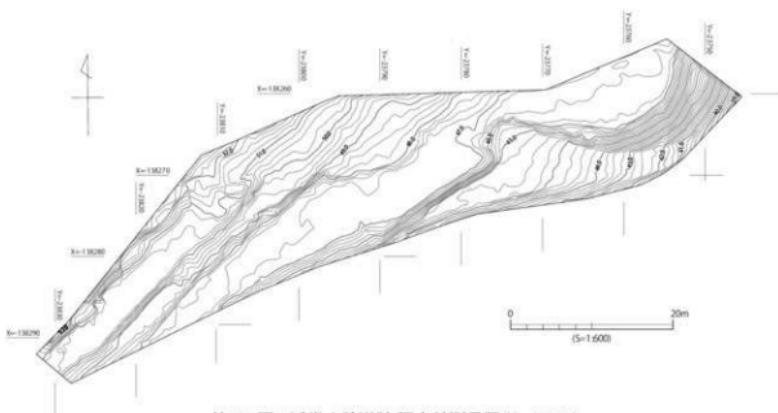
石敷きの直下には丘陵を構成する岩盤層があるが、岩盤層表面には道路状遺構に見られる連続するピットや土坑、歓状の凹凸、砂や砂利の堆積は見られなかった。このように石敷き以前の道の痕跡は見つけることができなかった。

#### 石垣4（第63図）

石垣4は、石敷きの路面の山側に積まれていた。石敷きに沿っており路面を意識した石垣と考えられる。直径10～40cmの亜角礫や亜円礫で構成され、石垣の底面は比較的大型の礫が積まれていた。直方体や亜円礫などであるが、礫は横位置で据えられているものが多い。石垣最上部の礫は中段に積まれている礫よりも直径が大きくなるものが多い。最上段も横方向を意識して礫が積まれていると考えられるから、この石垣がさらに高くなることは無いと考えられる。石垣の右方側の礫は小さく、中央の礫は大きいことから、右方は崩落したのちに積み上げられた可能性もある。石垣の裏込めは無く、斜面に貼り付ける状態で積み上げている。礫は加工していない野面積み、石垣の積み方は布積ではないが、横方向を若干意識した乱積みである。

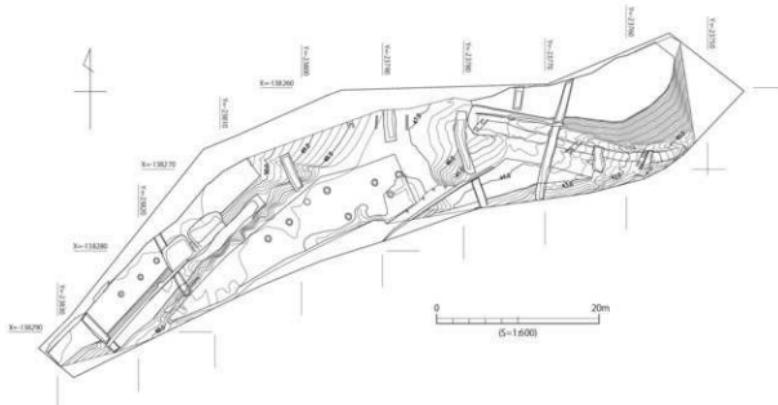
#### 石垣1・2・3・5（第63図）

石垣4以外に数か所の石垣が遺跡から検出されている。斜面に平坦面を造り山側に分割した礫を積み上げたものである。裏込めは見られなかった。平坦面には不透水層と考えられる層が地山面

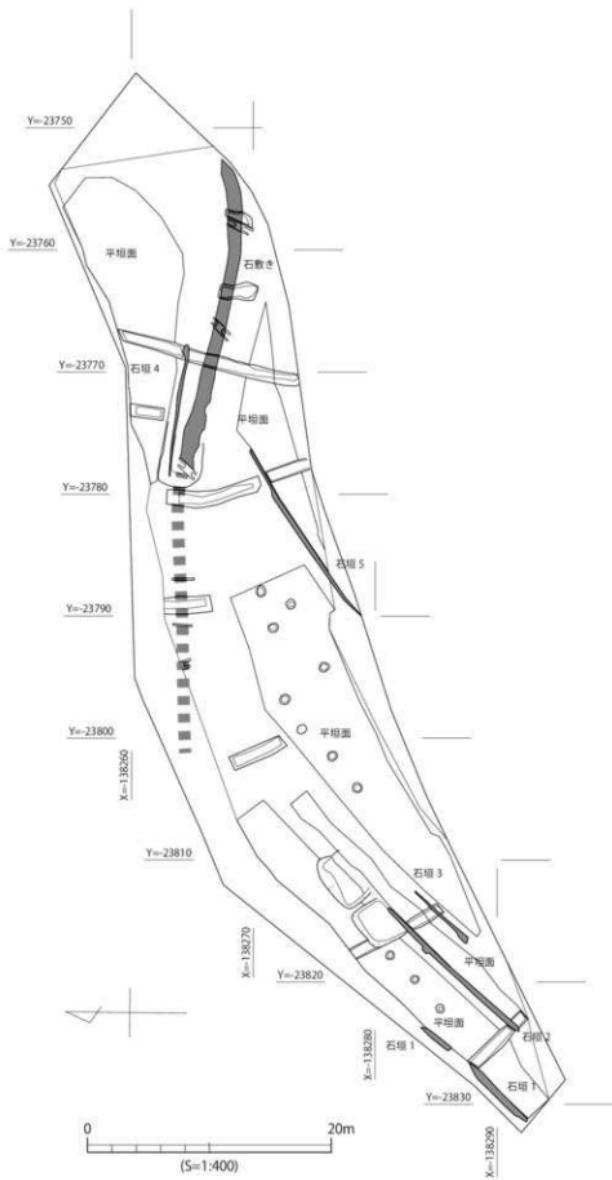


第58図 近世山陰道跡 調査前測量図 (S=1:600)

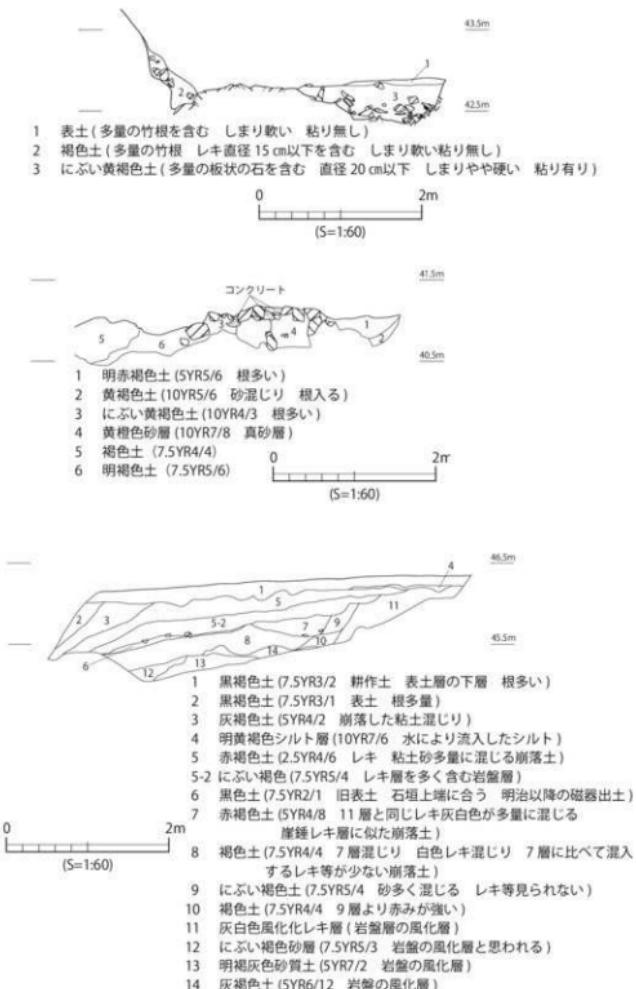
の上層に平坦に堆積していた。この石垣は昭和58年の斜面崩落までこの丘陵で行われていた棚田に伴う石垣と考えられる。棚田が形成された時期は不明で、石垣が構築された時期も不明である。石垣を構成する礫はどの石垣もほぼ同様で、礫を半分に分割し、分割した平らな面を谷側に向け、石垣の正面の凹凸を抑えている。礫を加工する打込接ぎで、積み方は乱積みである。石材は安山岩や輝石安山岩などを用いており、遺跡周辺で採取される石材では無く、外部から持ち込まれた可能性が高い。石垣底面は石敷きの路面を構成している礫の石材及び加工方法が類似している印象を受けた。



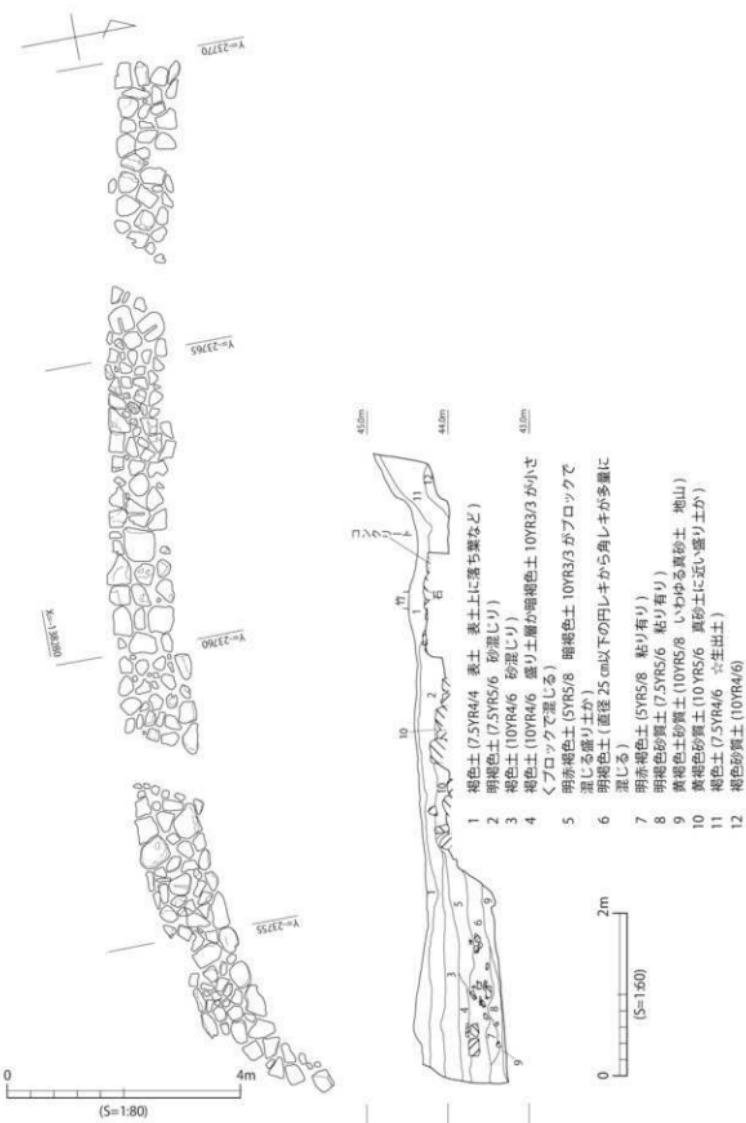
第59図 近世山陰道跡 調査後測量図 (S=1:600)



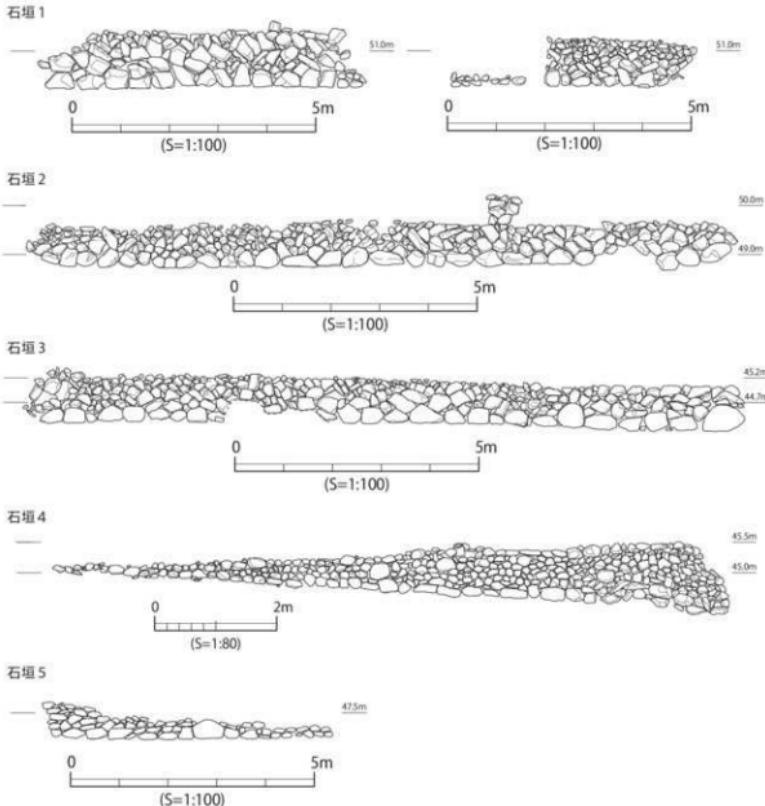
第60図 近世山陰道路遺構配置図 (S=1:300)



第61図 近世山陰道跡土層図 (S=1:60)



第62図 近世山陰道路石畳実測図 (S=1:80)

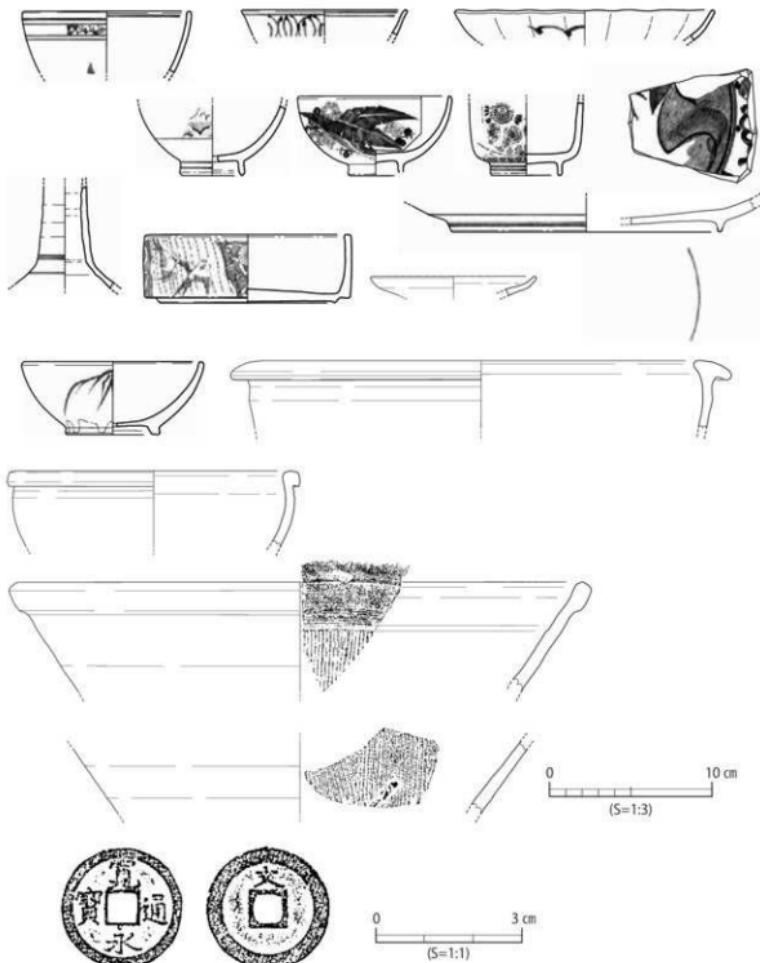
第63図 近世山陰道跡石垣1～5実測図 ( $S=1:80$ 、 $S=1:100$ )

#### 4. 包含層出土遺物（第64図）

第64図1～3、7、8、13は肥前系陶磁器である。江戸時代の遺物である。15も江戸時代で須佐産の擂鉢である。16は寛永通宝である。新寛永である。これら以外は近代に属する。

### 第4節 小結

本遺跡の発掘調査では調査区内に近世まで確実に年代がさかのぼる遺構は確認できなかった。調査で検出された石敷き遺構は、昭和35年の電話線埋設により路面が改修されて敷かれたもので、古い街道の痕跡は残っていなかった。また、昭和58年に丘陵斜面が大規模に崩落しており、周辺の地形も大規模に変化してしまったため街道が存在していたと想定される斜面そのものが残っていない。

第64図 近世山陰道跡出土遺物実測図 ( $S=1:1$ 、 $S=1:3$ )

なかった。昭和に行われた電話線の埋設は当時の主要街道を優先的に行ったという証言もあり、以前の街道は今回検出した石敷き周辺を通っていたことはほぼ間違いない。今回調査を行った丘陵のうち、土田川に近い斜面で街道が敷設できる程に地形を改変しているのは、今回の調査で検出した石敷きとそれに伴う平坦面の他に無く、近世においても調査範囲を通っている可能性は高いと考えられる。

石敷きの山側斜面には石垣4が積み上げられている。石垣4の礫は遺跡周辺で採取可能な礫を

用いていること、個々の礫は小さく、面取などの加工を施さない礫を野面積みであること、若干横方向を意識した乱積みであることなど石垣4を除く石垣を構成する石材は外部から持ち込まれた既に面取などの加工を施された礫を乱積みで積み上げる違いがある。石垣の様相だけで単純な比較はできないが石垣4は他の石垣に比べ古い様相を呈している可能性があり、近世にさかのぼる可能性も考慮しなければいけないと考えている。

以上のことから今回調査を行った近世山陰道跡（馬橋地区）では、近世山陰道の路線が石敷きが設置されている部分を通っていた可能性が非常に高く、近世山陰道推定地としての立地と石垣4の存在、近世に属する遺物も出土している点から、近世までさかのぼって遺跡内に近世山陰道が通っていた可能性は高いと考えている。

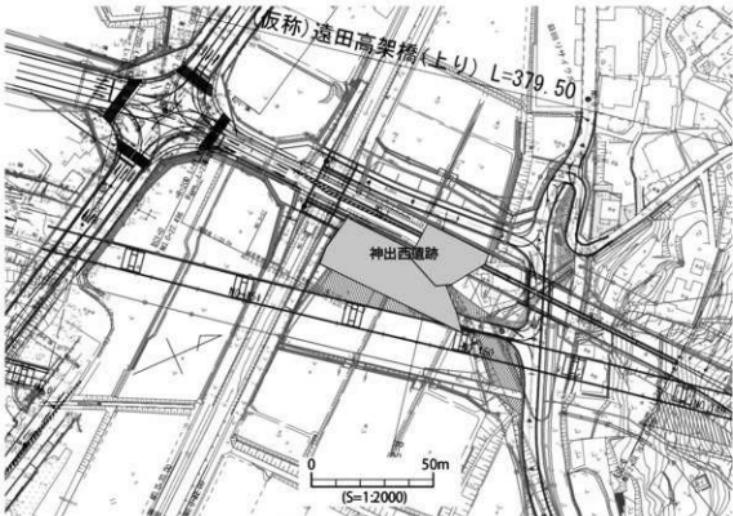
このように、仮定の上に成り立ってはいるが、発掘調査の成果から近世山陰道の路線やその利用を知ることができた。土田地区を含め、益田市東部や浜田市西部は幾度となく災害に遭い、その都度地形の大きな変化を受けてきた。今回の発掘調査でも災害の痕跡が残っており街道そのものが流出または埋没していた。調査前に行われた地域住民の聞き取りでは遺跡内に街道の存在を示唆する情報はごくわずかで、街道の位置はほとんどの地域住民には知られていなかった。このように、半世紀ほどで地域の様相は忘れ去られていくことが今回の発掘調査では明らかとなった。地域の景観や文化を後世に語り継ぐために景観の資料化も今後検討すべきかもしれない。

## 第7章 神出西遺跡の発掘調査

### 第1節 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置 調査対象地は、国道9号線と益田道路が接続する遠田ICの東側の平地に位置する。この平地には北上して日本海に注ぐ2級河川遠田川が流れしており、川の町側に水田や宅地が形成されている。遺跡の範囲は遠田川の右岸の水田部分に広く形成されているものと考えられている。発掘調査は三隅益田道路に事業地内である水田部分と遠田ICに繋がる市道部分で行った。

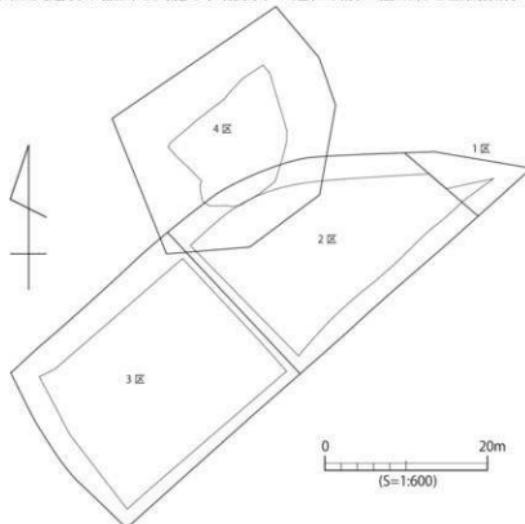
2. 地理的環境 調査前の遺跡の標高は高いところで約8.8m、低いところで約10.5mである。遠田川に向かって数段に形成された水田面が広大に広がっており、南北の見通しは確保できる。遠田川の東西には南北に低丘陵が日本海近くまで延びており、東西方向の見通しはあるまい。広大な水田面は昭和58年に島根県西部を襲った大水害以降に実施された圃場整備により大規模に造成されたもので、圃場整備前は遠田川の周辺は湿地帯で、水稻やイ草の栽培が行われていたと聞き及んでいる。また、圃場整備前は東から西に石敷きの小道が通っており、遠田川を渡っていたようである。この小道は現在も遺跡の東側の丘陵に石敷きの一部が残っているが、近世から利用されてきた山陰道の名残であると考えられている。この山陰道は過去に行われた近世山陰道の調査でも調査地をかすめるように通っていたのでは無いかと推定されている。遠田川の西側に存在する水路は山陰道推定線に沿っており、山陰道のルートを推定する手がかりになる可能性がある。



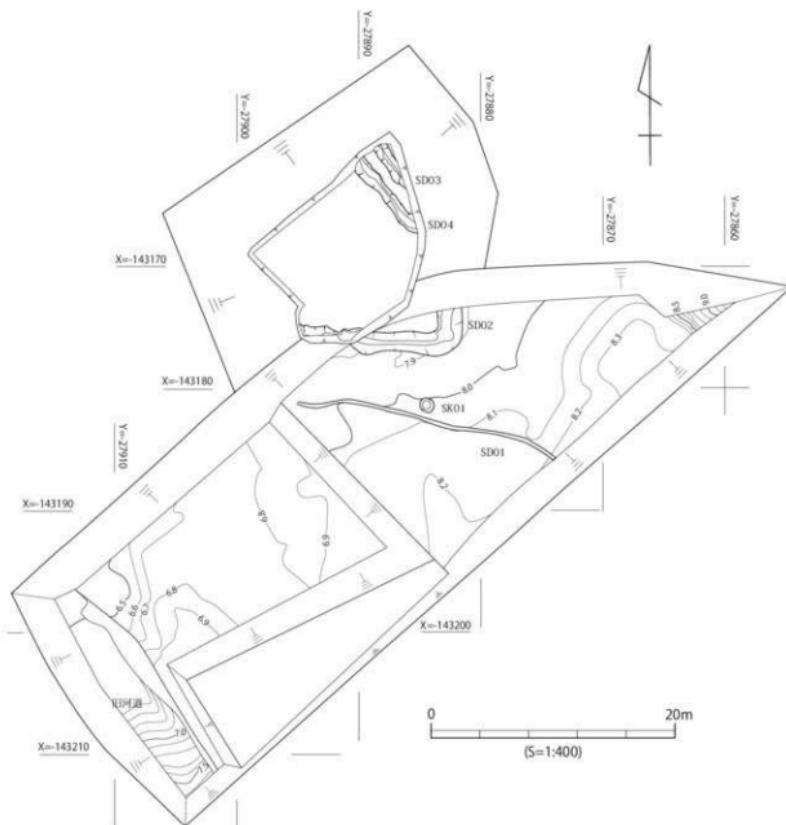
第65図 神出西遺跡の調査位置図 (S=1:2000)

## 第2節 発掘調査と整理作業の経過

1. 発掘調査の経過 本遺跡の作業は平成27年度と28年度の2カ年にわたって実施した。平成27年度は7月1日から10月2日かけて実施した。調査区は水田が3面すでに休耕田となっていた。3面を1区から3区とし、同時に表土掘削を行った。掘確認結果から表土層は重機により掘削を行った。表土層除去後、人力による包含層掘削と遺構検出、遺構掘削を各区で実施した。1区は非常に狭く7月22日には調査を終えた。2区の包含層掘削は7月10日から行い、3区は8月6日から実施した。2区は遺構面である明黄褐色土層を掘り込む数条の溝状遺構を検出し、遺構掘削を行っている。3区の東側は圃場整備により削平を受けているようで遺構や遺物はほとんど出土しなかったが、遠田川に近い調査区の西側で旧遠田川の旧河道を検出し調査を行った。旧河道内からは自然流木が多量に出土したが、その中に弥生中期から古墳時代の遺物が出土している。また、現堤防に非常に近い調査区の西端で旧河道の護岸と考えられる板列と、板列を沿って構築された部材が確認された。この部材には木製品の転用材が含まれており、こちらの測量も行っている。3区の調査が先行し行われ9月18日に調査が終了した。終了に先立ち、ラジコンヘリによる空中写真撮影、及び高所作業車による高所からの写真撮影を行っている。2区は最後に古墳時代の溝状遺構(SD02)の調査を終え10月2日に1区から3区の調査を終了した。その後、埋め戻しなどを経て10月5日には国土交通省へ現地を引き渡した。2区で確認されたSD02は調査範囲外に延びていることが発掘調査の結果から市道部分の発掘調査が必要と判断された。国土交通省との協議の結果、平成28年度に改めて市道部分について発掘調査を行うこととなった。便宜上その調査部分を4区とした。平成28年度は11月7日から4区の発掘調査を実施した。市道の舗装部分については事前に国土交通省が撤去を実施し、舗装下の近世以前の盛土層を重機掘削により実施した。



第66図 神出西遺跡 調査区配置図 (S=1:600)



第67図 神出西遺跡遺構配置図 (S=1:400)

遺物包含層の掘削は11月15日から実施し、数条の溝状遺構が検出されたため、遺構掘削も実施している。調査にあたっては遺構の実測や写真撮影を随時行い、高所作業車やラジコンヘリによる写真撮影も併せて行っている。全ての発掘調査は12月21日に終了し、埋め戻し後、平成29年1月16日に国土交通省へ引き渡しを行っている。

2. 整理等作業の経過 遺物の水洗・注記・接合作業は現地調査に並行して実施し、冬期は埋蔵文化財調査センターにて前述した作業を継続し、続いて復元・実測等の整理作業を行った。平成29年度に神出西遺跡全区の出土品を通して遺物実測・写真撮影を行っている。現地調査終了後に整理した図面・写真等の記録類についても、出土品と併せて総合的な整理検討を行い、遺構・遺物のトレース、写真、割付、原稿執筆を行った。画像処理・図版作成・編集等にはAdobe社のソフトを使用した。

### 第3節 発掘調査の概要

1. 調査の方法 調査前の現地の状況は、1区から3区は水田、4区は市道である。試掘確認調査の結果に基づいて、各区で包含層や遺構面までバックホーを用いて表土及び造成土を取り除く必要があった。重機掘削は、バケットに平爪を装着して、少しずつ漉き取るようにして面的に掘り下げた。土層観察を行いながら、包含層あるいは遺構面まで若干余裕を持たせたところで掘削を停止した。その後はベルトコンベアを設置し、スコップ・鍬・ジョレンを用いた人力による掘削を行った。

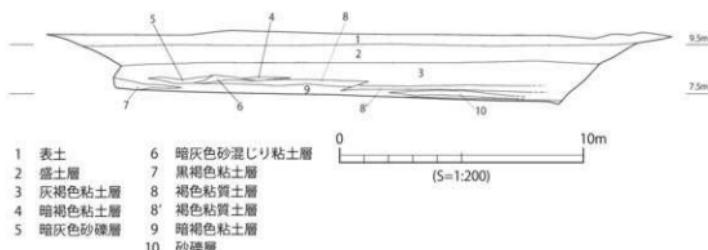
遺物包含層についてはスコップを用いて人力で掘り下げたが、遺物が集中する力所については移植ゴテ・草削り・片手鎌により掘り下げた。出土状況の有意性が低いものは、取り上げに際しては層位の記録のみを行った。遺構検出は草削りを用いて丁寧に削り、遺構の検出に努めた。出土する遺物の粗密に応じて適宜移植ゴテ等の道具を併用した。

遺構の埋土掘削には移植ゴテ・草削り・片手鎌を使用した。掘削にあたっては基本的にベルトを設定するか半裁をし、土層観察を行いつづけた。土層断面については写真撮影を行い、必要に応じて断面図を作成した。遺構からの出土遺物については、必要に応じて出土状況を記録した後、取り上げ№を振って取り上げた。

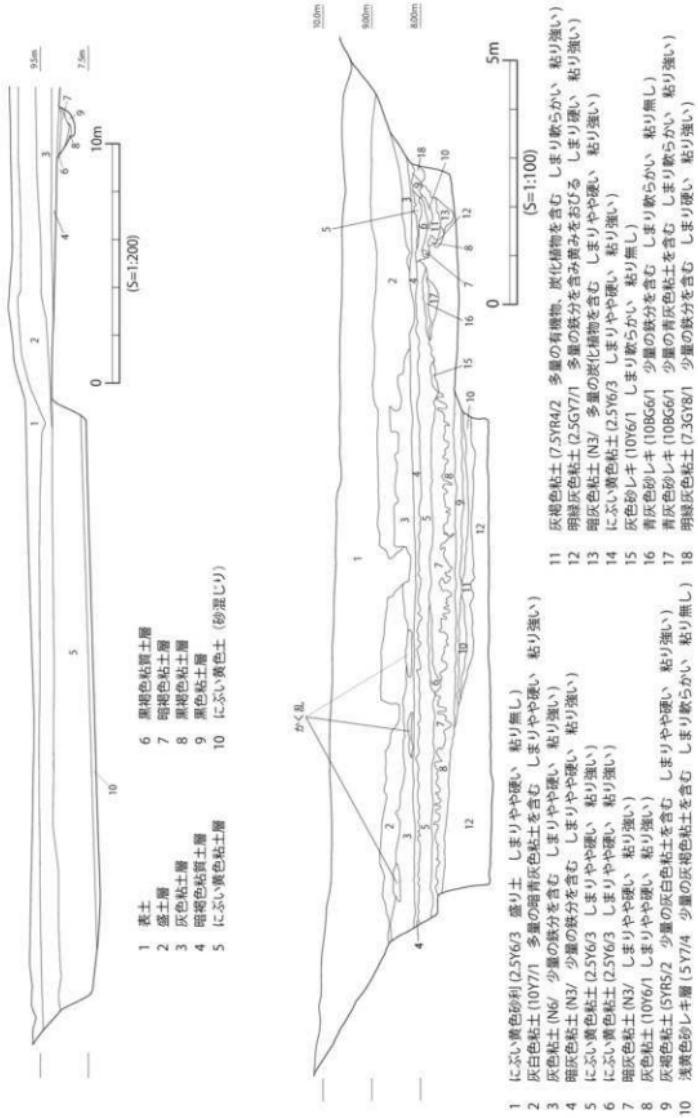
遺構の平面図は、コンピュータ・システム株式会社の遺跡調査システム「SITE」及び(株)CUBICの「遺構くん cubic」を用いて測量し、出力後補正を行った。断面実測図についてはオートレベルを用いて測量を行い、高低差のある壁面については平面図と同様に調査システムを用いた記録作成を行った。遺構等の写真は、原則として報告書に掲載が見込まれるものは6×7判フィルム(モノクロネガ・カラーポジフィルム)による撮影を行い、それ以外はデジタルカメラで撮影した。

現地調査期間は平成27年度は7月1日から10月2日、調査面積は1,300m<sup>2</sup>、調査体制は調査員1名と調査補助員2名である。平成28年度は11月7日から12月21日、調査面積は1,000m<sup>2</sup>、調査体制は調査員1名と嘱託職員1名、調査補助員2名である。

2. 基本層序 第68図と第69図は神出西遺跡の基本層序である。地表下に、1・2層が表土や造成土、3～5層が遺物包含層である暗褐色系土層、その下に明黄褐色粘土の基盤層(地山)が堆積している。3～5層は暗褐色系の粘質土、暗黄褐色粘質土等が、厚いところで1mほど堆積していた。



第68図 神出西遺跡土層図1(S=1:200)

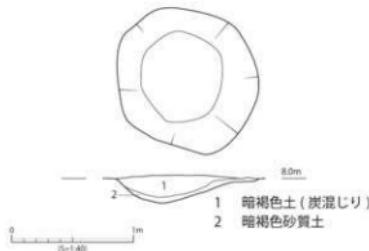


第69図 神出西遺跡土層図 2(S=1:200)

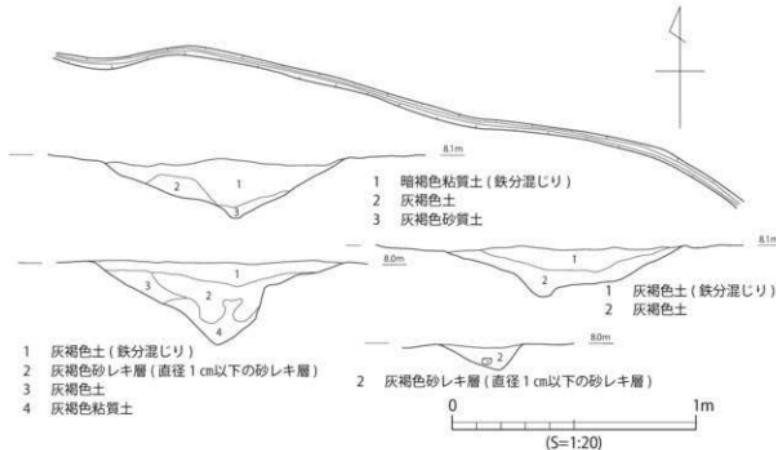
3. 検出した遺構と遺物 調査の結果、  
2区で溝状遺構（SD01・SD02）、土坑、  
3区で旧河道、4区で溝状遺構（SD03・  
SD04）を確認した。

## SK01（第70図）

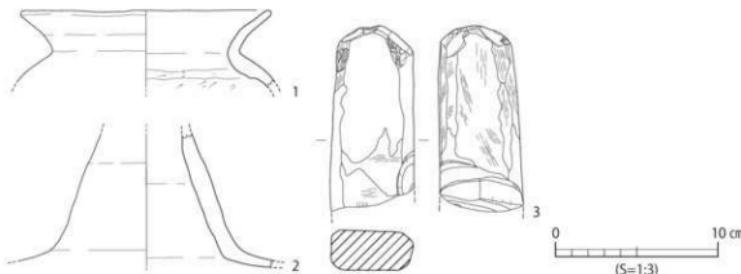
2区で検出した土杭で、直径1.2mで  
浅い。底面に砂礫が混じる土が堆積して  
おり、SD01やSD04と類似する。検出  
面で土師器が出土しているが、底面近く



第70図 神出西遺跡 SK01 検出状況（平面図 S=1:40）



第71図 神出西遺跡 SD01 検出状況（平面図 S=1:150、断面図 S=1:20）

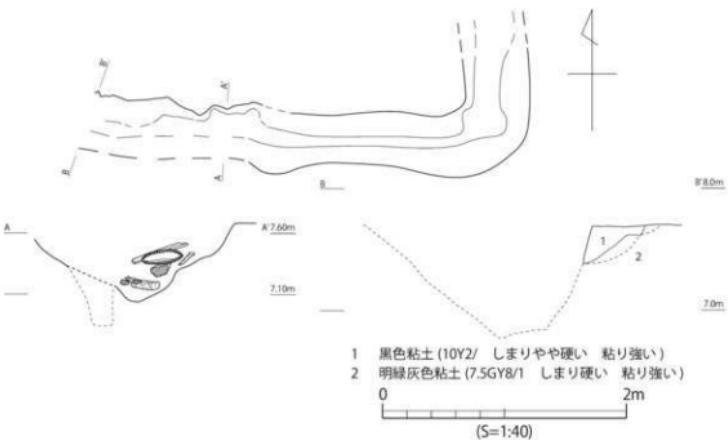


第72図 神出西遺跡 SD01 出土遺物実測図 (S=1:3)

で弥生土器と見られる土器片が出土している。

## SD01（第71図）

2区を南北方向に貫く溝状遺構である。蛇行しており規則性は無い。断面は逆三角形で底面近く



第73図 神出西遺跡 SD02 検出状況(平面図 S=1:20)

に砂礫層が堆積している。砂礫層の上には鉄分が混ざる土層が堆積しており当初水が流れる環境にあったものが埋没したものと考えられる。遺構の深さは35cm前後で非常に浅く、SD01は深い溝であったものが埋没し、その後、上部が削平されていると考えられる。埋土の砂礫層から小片の弥生土器と石斧が出土し、1層からは土師器の甕などが出土している。4区で検出したSD04と関係のある溝状遺構の可能性がある。

#### SD01出土遺物(第72図)

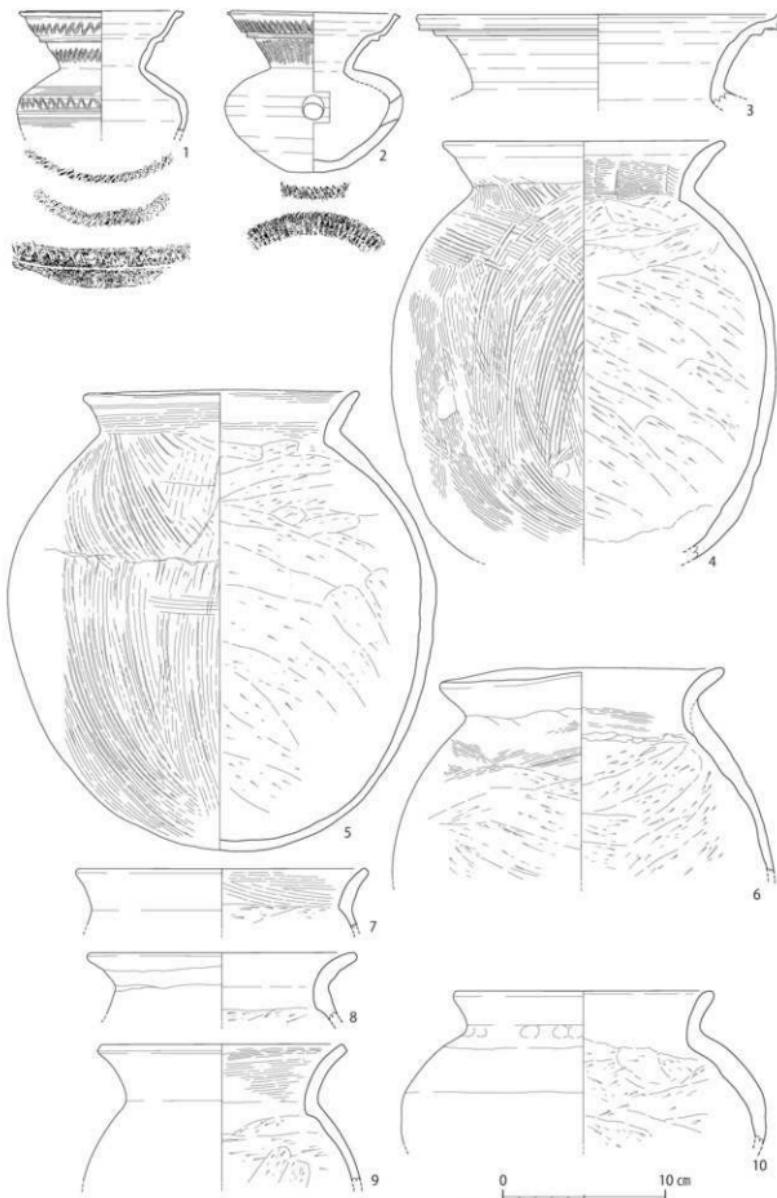
第72図はSD01出土の土師器である。1は甕である。胴部以下ほとんど欠損している。胴部内面はヘラ削りである。2は高環の脚部である。脚部の先端へ向けて外へ向けて屈曲する。

#### SD02(第73図)

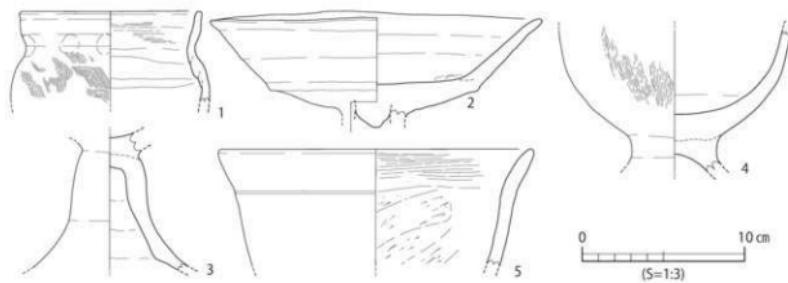
2区から4区へ向けて検出された溝状遺構である。南北方向に掘られ、90度近く折れ曲がり西方向へ向きを変えまっすぐ掘られていた。2区と4区の調査区間を通り、調査区外へ伸びていることがわかる。2区の壁際から屈曲部までは浅く深さは30cmほどで、屈曲部から4区へ向けて深く掘られていた。土層の断面は逆三角形であった。堆積土は黒褐色粘土層で多くの遺物が含まれていた。砂層は見られず水が流れた形跡は見られなかった。

#### SD02出土遺物(第74図~第76図)

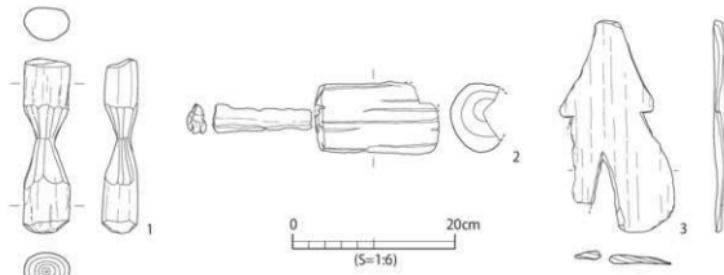
第74図~第76図はSD02出土遺物である。第74図1と2は須恵器のハソウである。1は口縁部と頸部、胴部に波状文、2は口縁部と頸部に波状文を施す。3は須恵器の甕の口縁部である。3は口縁外部に段を持ち、4~10は土師器甕である。胴部内面は全てヘラ削りである。外面は強いハケ目が施されているものが多い。胴部の形状は様々で4は楕円形、5は球形、7~9は幅が短く胴部が張らない。10は胴部の肩が張る形状で器壁が厚い。第75図も土師器である。1は甕、2~4は高環である。5は腹か甕であろうか。1は口縁が若干内湾する甕である。2は見込みが平坦になる高环である。楕部には明瞭な段が形成される。3は2の高环に類する高环の脚部である。4



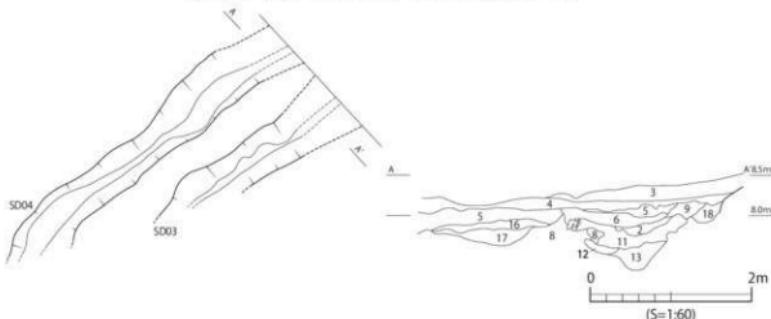
第74図 神出西遺跡 SD02 出土遺物実測図 1(S=1:13)



第75図 神出西遺跡 SD02出土遺物実測図 2(S=1:3)



第76図 海石西遺跡 SD02出土遺物実測図 (S=1:6)



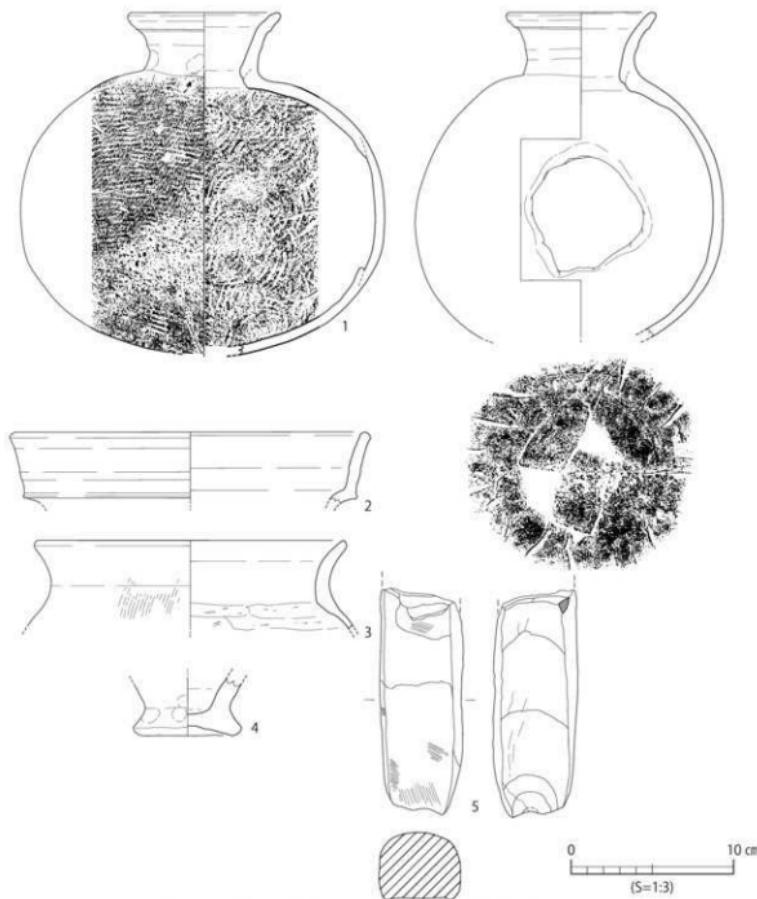
- 2 灰白色粘土 (10Y7/1 多量の暗青灰色粘土を含む しまりやや硬い 粘り強い)
- 3 灰色粘土 (N6/ 少量の鉄分を含む しまりやや硬い 粘り強い)
- 4 暗灰色粘土 (N3/ 少量の鉄分を含む しまりやや硬い 粘り強い)
- 5 灰白色粘土 (10Y7/1 多量の暗灰色粘土を含む しまりやや硬い 粘り強い)
- 6 灰白色粘土 (7.5Y7/1 多量の黒色粘土を含む しまりやや硬い 粘り強い)
- 7 オリーブ灰白色粘質土 (10Y5/2 多量の砂を含む 生物痕か しまりやや硬い 粘り強い)
- 8 灰オリーブ色粘質土 (7.5Y6/2 多量の鉄分、砂を含む 生物痕か しまりやや硬い 粘り強い)
- 9 明オリーブ灰色粘土 (7.5Y7/1 多量の暗灰色粘土を含む しまりやや硬い 粘り強い)
- 10 灰色粘土 (N4/ 少量の鉄分、炭化物を含む しまりやや硬い 粘り強い)
- 11 灰色粘土 (N4/ 多量の砂を含む 生物痕か しまりやや硬い 粘り強い)
- 12 灰色粘質土 (N4/ 多量の砂を含む 生物痕か しまりやや硬い 粘り強い)
- 13 暗灰色粘土 (N3/ 多量の炭化植物を含む しまりやや硬い 粘り強い)
- 14 青灰色砂レキ (10BG6/1 少量の鉄分を含む しまり軟らかい 粘り無し)
- 15 明緑灰色粘土 (7.5GY8/1 少量の鉄分を含む しまり硬い 粘り強い)

第77図 神出西遺跡 SD03・SD04 実測図 3(S=1:30)

は椀部が丸い高壺である。5は壺の上半部ではないかと思われる。口縁部が外傾し外に開く。口縁部と胴部との境には沈線が見られる。第76図はSD02で出土した木製品である。1は木鍤である。くびれ部を削り込み面取りしている。2は横槌である。槌部と柄が分離しているが本来一個体であったものと考えられる。3は又歛である。先端は欠けている。第74図から第75図の出土遺物は益田平野3B期～3C期に属すると考えられる。

## SD03 出土遺物（第78図）

第78図1と2はSD03で出土した土師器である。1は須恵器の横瓶である。胴部が約3分の1欠損している。胴部外面には平行叩きが施され、斜位に同心円状カキ目が入る。口縁部は内外面とも回転ナデである。胴部内面には同じ円文の当て具の痕跡が全面に残る。2は甕である。胴部以下

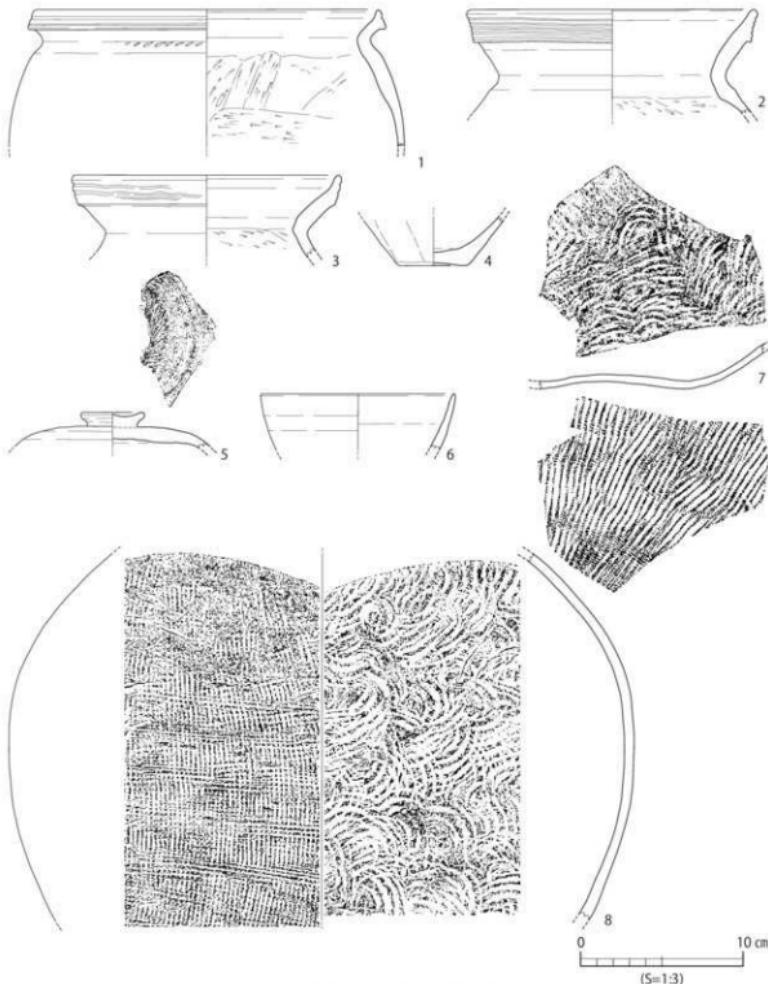


第78図 神出西遺跡 SD03・SD04 出土遺物実測図 (S=1:3)

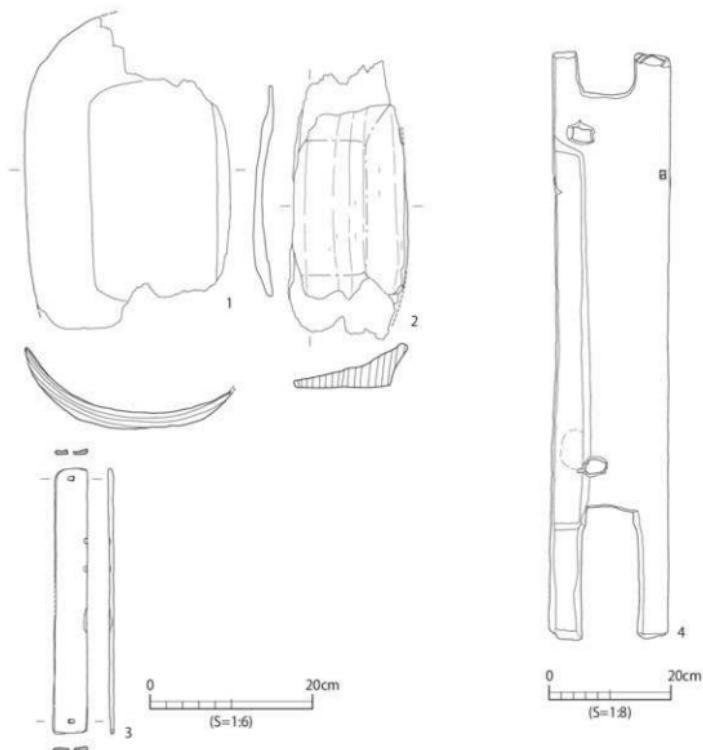
は欠損している。口縁部は二重口縁になっており外傾している。先端は尖らない。3も甕である。単純口縁で胴部内面はヘラ削りで器壁を薄く成形している。益田平野2期であろうか。

#### SD04出土遺物（第78図）

第78図4はSD04出土の弥生土器である。壺か甕の底部と考えられる。胎土に砂粒を多く含む。時期は弥生時代前期の可能性があるが明らかにできない。5は磨製石斧である。先端からの打撃により大きく欠損している。



第79図 神出西遺跡旧河道跡出土遺物実測図1(S=1:3)



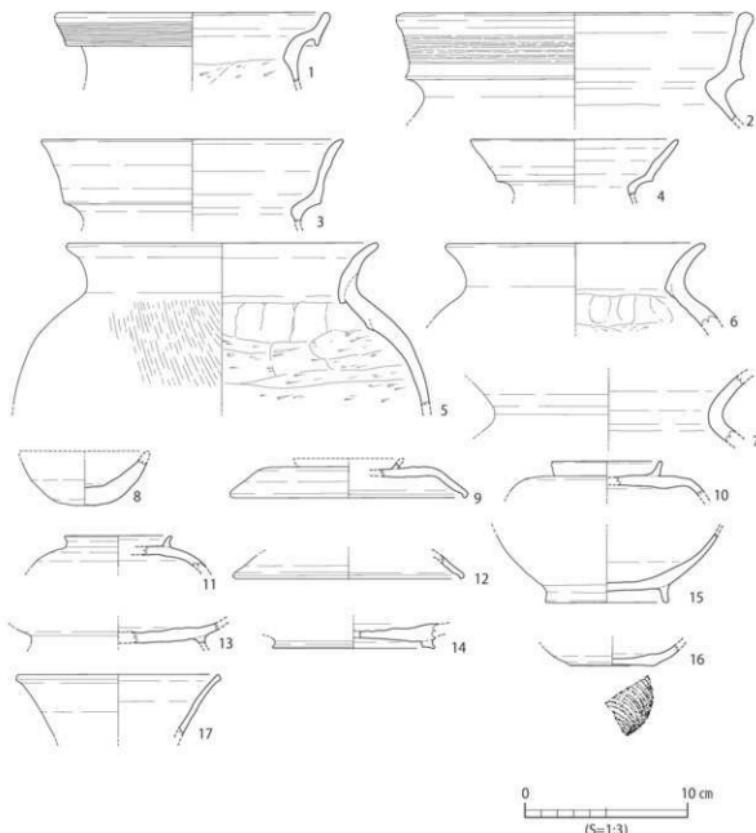
第80図 神出西遺跡旧河道跡出土遺物実測図 2(S=1:6、S=1:8)

## 旧河道出土遺物（第79図・第80図）

第79図と第80図は遠田川の旧河道で出土した遺物である。第79図1～4は弥生土器、5～8は須恵器である。1の口縁部は内傾し短く立ち上がる。胸部は球形である。2と3は頸部が長く壺の可能性もある。口縁部は外傾し立ち上がる。2は外反、3は内湾する。5は須恵器の蓋である。壊の蓋であろうか。つまみ周辺に連続刺突文が施されている。つまみは退化した宝珠つまみである。6は椀である。7と8は甕の胴部である。7は焼成時のゆがみが見られる。底部に近いであろうか。8は球系の胴部で最大径が約38cmである。第80図は木製である。1と2は槽で、1は丁寧につくられ、2は風化している。3は不明木製である。薄いつくりで上下に2ヶ所穿坑されている。4は楣である。観音開きの扉の上部の板で、両側の凹部に辺材がはまり、扉板をとめる。扉軸穴が2ヶ所存在する。扉当りはなく、扉の可動範囲はくぼんでいる。

## 4. 包含層出土遺物（第81図・第82図）

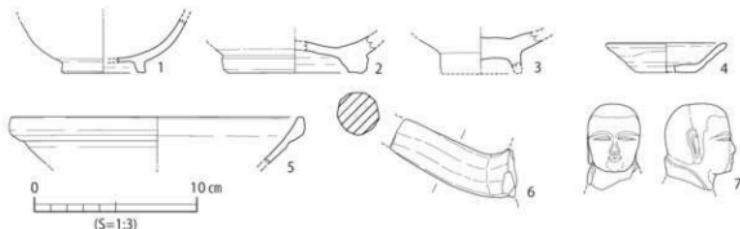
第81図1と2は弥生時代後期の甕である。1の口縁部は外傾し、外面に擬凹線が7条程度施さ



第81図 神出西遺跡出土遺物実測図1(S=1:3)

れる。石見V-2の弥生土器と考えられる。2の口縁部は肥厚して丸くなる。口縁部内面はヨコナデである。口縁部に擬凹線が7本程度施されている。石見V-3と考えられる。3と4は石見V-4と考えられる。3は甌、4は壺である。両者とも口縁部が外傾して立ち上がり、口縁端部が薄く尖り気味である。5と6は土師器の甌である。8は土師器のてづくね土器である。7と9～17は須恵器である。7は甌の頸部である。9から12は蓋環の蓋で9から11は輪状つまみである。12はつまみが欠損しており残っていない。13～15は高台付き坏で13と14は底部が比較的平坦で、15は椀部が16は高台の無い坏である。底部外面には回転糸切り痕が残る。17は壺の口縁であろうか。口縁部は外傾外反し薄く成形されている。9～14は石見9～10期であろうか。

第82図1は陶器で鉄袖が施袖されている。2は陶器の鉢である。3は陶器の椀の底部である。4は青磁の皿である。5は白磁の碗である。口縁部は玉縁になる。白磁IV類の碗である。6は須恵



第82図 神出西遺跡出土遺物実測図2(S=1:3)

器の柱状の突起である。瓶の把手の可能性がある。7は土製品で地蔵菩薩の頭部であろう。いぶし瓦と同様に作られたもので、近世以降の遺物と考えられる。

#### 第4節 小結

神出西遺跡では、弥生時代、古墳時代中期、古墳時代後期の溝状遺構を確認した。個々では順に神出西遺跡の土地利用についてまとめていきたい。

本遺跡は、遠田川の氾濫原が埋まった後に形成された自然堤防に位置する遺跡と考えられる。2区のSD01と4区のSD04は弥生時代の遺物を伴い、埋土に砂利が含まれる。出土遺物は小片の弥生土器と石斧で共通点も多い。弥生時代に掘削され、古墳時代には埋没していたと考えられる。埋土に砂が含まれていることから水流があったことがわかる。共に平面は直線では無く、遺構の性格は不明であるが、排水を目的とした溝であろうか。古墳時代中期には1区と4区にかかるSD02が掘られている。埋土は粘土層で滯水による堆積を示している。遺構の底部近くから土師器や須恵器、木製品は良好な遺存状態で出土している。遺構の性格は明確ではないが、区画を意図した溝などの可能性がある。3区では弥生時代中期後半から古墳時代後期頃の遺物を含む遠田川旧河道が確認された。旧河道の護岸状遺構で出土した木材の年代測定では古墳時代中期から後期との結果が提示されている。旧河道出土遺物と年代的な齟齬は無い。旧河道からは弥生土器も出土しており遠田川周辺は弥生時代には開発が始まったと考えられる。3区の中央には自然堤防が存在していたと考えられ、遺物はほとんど出土なかった。4区のSD03は古墳時代後期の溝状遺構である。弥生時代のSD04とほぼ並行しており、区画溝の可能性が高い。

以上のように、神出西遺跡では弥生時代中期から古墳時代後期にかけての生活の痕跡が明らかとなった。集落を構成する住居跡の確認には至らなかったが、東側の丘陵部に集落が形成されている可能性は高い。遠田川をさかのぼると石見部最大級の古墳である大元1号墳が存在する。全長約86mで埴輪と葺石を伴う大型前方後円墳であり4世紀の築造と考えられている。共に遠田川流域に遺跡が位置することから、何らかの関係があったと考えられる。当地の古墳時代と解明する上で貴重な成果を得ることができた。

# 第8章 自然科学的分析

## 第1節 神出西遺跡発掘調査に係る花粉及び植物珪酸体分析

渡辺正巳：文化財調査コンサルタント（株）

### はじめに

神出西遺跡は島根県西部の益田市遠田町に位置する。遠田川下流域の谷底平野内に立地し、調査前には水田が広がっていた。本報は、遺跡周辺での古植生などの古環境変遷を推定する目的で、島根県教育庁埋蔵文化財センターが、文化財調査コンサルタント株式会社に委託・実施した花粉分析及び植物珪酸体分析の概報である。

### 分析試料について

分析試料採取地点及び採取層準を、第1図に示した。分析試料は全て、島根県教育庁埋蔵文化財調査センターとの協議の上、文化財調査コンサルタント（株）が採取した。また、第1図（平面図）及び第2図（断面図）は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センターより提供を受けた原図をもとに作成したものである。

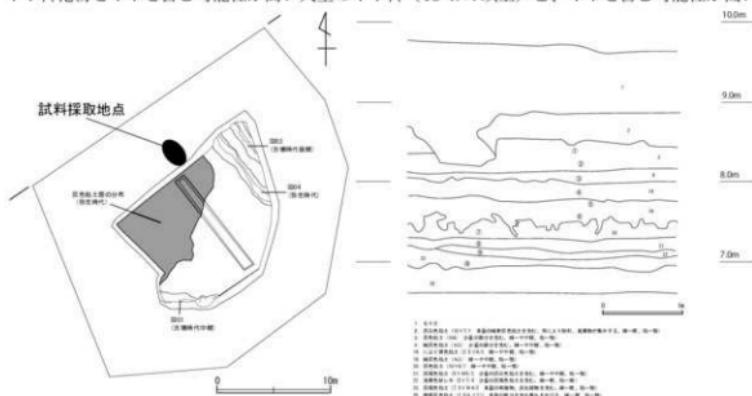
### 分析方法

#### 1. 微化石概査方法

花粉分析用プレパラート及び花粉分析処理残渣を顕微鏡下で観察し、花粉（胞子）、植物片、炭、珪藻、植物珪酸体、火山ガラスの含有状況を、5段階で示した。

#### 2. 花粉分析方法

渡辺（2010）に従って実施した。花粉化石の観察・同定は、光学顕微鏡により通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍を用いて実施した。原則的に木本花粉総数が200粒以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本・胞子化石の同定も行った。また中村（1974）に従って、イネ科花粉をイネを含む可能性が高い大型のイネ科（40ミクロン以上）と、イネを含む可能性が低い



第83図 試料採取地点・採取層準（左：トレンチ平面図 右：分析試料採取地点近辺の断面図）

小型のイネ科(40ミリ未満)に細分した。

### 3. 植物珪酸体分析方法

藤原(1976)のグラスピーズ法に従って実施した。プレバラートの観察・同定は、光学顕微鏡により常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍を用いて実施した。同定に際して、母植物との対応が明らかでない、イネ亜科の機動細胞を中心とした分類群(第1表)を対象とした。また、植物珪酸体と同時に計数したグラスピーズの個数が300を超えるまで計数を行った。

### 分析結果

#### 1. 微化石概査結果

微化石概査結果を第2表に示す。

何れの試料でも花粉化石、植物片の検出量が多かった。一方、炭片、珪藻の検出量は少なく、ブラント・オパール、火山ガラスの検出量は、やや少なかった。

#### 2. 花粉分析結果

花粉分析結果を第3表、第84図に示す。

何れの試料でも、花粉化石の含有量が多く、統計処理に十分な量の木本花粉が検出できた。花粉ダイアグラム(第84図)では、分類群ごとの百分率(百分率の算出には、木本花粉総数を基準にしている)を、スペクトルで表している(木本(針葉樹)は黒、木本(広葉樹)は暗灰、草本・藤本は明灰、胞子は白のスペクトルで表した)。[総合ダイアグラム]では「木本(針葉樹)」、「木本(広葉樹)」、「草本・藤本」と「胞子」の割合を示すグラフを示した。[含有量ダイアグラム]では「木本」、「草本・藤本」、「胞子」「花粉・胞子(全ての合計)」ごとに含有量(湿潤試料1g中の粒数)の変化を示している。

### 3. 植物珪酸体分析結果

分析結果を第4表、第85図に示す。

第3図(植物珪酸体ダイアグラム)では、検出量を1gあたりの含有数に換算した数を、検出した分類群ごとにスペクトルで示した。

試料No.7(20層)から上位でイネが検出された。特に試料No.1では検出量が多く、4000粒/gの検出密度を示した。

樹木起源の植物珪酸体として、シイ属型、イスノキ属型、マツ科型が検出された。

表5 微化石概査結果

試料No.	花 粉	炭	植物片	珪 藻	植物珪酸体	火山ガラス
1	○	△×	○	×	△	△
2	○	△×	○	△×	△	△
3	○	△	○	×	△	△
4	○	△×	○	×	△	△
5	○	△×	○	×	○	○
6	○	△×	○	△×	○	△
7	○	△×	○	×	△	○
8	○	△×	○	△×	△	△
9	○	△×	○	×	△×	△
10	○	△×	○	×	△	△

凡例 ○: 十分な数量が検出できる ○: 少ないが検出できる △: 非常に少ない

△×: 極めてまれに検出できる ×: 検出できない

表4 植物珪酸体分析同定対象分類群

用語/バーコード	用語	用語	用語/バーコード
3	イネ	イネ	イネ
1	イネ科属(種の未記載)	ムクゲ属(種の未記載)	コメダグサ属
21	ムクゲ属(種の未記載)	コメダグサ属	オオイモ属
41	アオイ科(イコカビヒニ型)	キビ属	コビヒニ属
61	キビ属	キビ属	ヒユ・アツフキ・キビ
自然植物との対応	キビ属	ヒユ・アツフキ・キビ	ヒユ
が明らかな分類群	ヒユ・アツフキ・キビ	ヒユ	ヒユ
84	ヒコロギ属型	ヒコロギ属型	サトウホビ
84	ウツクサ属	ウツクサ属	モロコシ
91	モコロコシ属	モコロコシ属	ハトヨモ
11	モコロコシ属	モコロコシ属	モコロコシ属
12	モコロコシ属	モコロコシ属	モコロコシ属
13	ヤコモ属	ヤコモ属	ヤコモ
21	ヨシ属	ヨシ属	ヨシ
22	アヤメ属	アヤメ属	アヤメ
23	アザガヤ属	アザガヤ属	アザガヤ
51	シダ属	シダ属	シダ属
71	トチノキ属	トチノキ属	トチノキ属
81	ムクゲ属	ムクゲ属	ムクゲ属
83	ウツクサ属	ウツクサ属	ウツクサ属など
208	メタセコイア属	メタセコイア属	メタセコイア
209	モササギ科	モササギ科	モササギ科
209	モササギ科型	モササギ科型	モササギ科・シマザサ科
209	ミセサザギ科	ミセサザギ科	ミセサザギ科
209	マツケヤ科	マツケヤ科	マツケヤ
300	カヤツリギ科(シダ属など)	カヤツリギ科	カヤツリギ
300	クスノキ科	クスノキ科	クスノキ
300	ブナ科(シノノミ)	ブナ科	シノノミ
503	ブナ科(アシガシ他属)	ブナ科	カシ類
510	カシノ科	カシノ科	ハリコブシなど(カシ・カシ科)
520	アズキノキ科(イヌキノキ属)	アズキノキ科	アズキノキ科
530	アブクマ科	アブクマ科	アブクマ科
540	モクレン属	モクレン属	モクレン属
570	マツ科	マツ科	マツ科
580	マツ科型	マツ科型	マツ科





IV带で、アカガシ亜属とともに高率を示すクリ属・シノキ属・マテバシイ属について、これらは「虫媒花」であり、スギ属やアカガシ亜属などの「風媒花」に比べ花粉の散布距離が短い。今回検出された量から、調査地点の近くにこれらの樹木が生育していたことは、明らかである。局地的な植生が認められたことも、從来と異なる花粉化石群集が得られた原因であろう。今回の調査地点は幅200-300mの谷底平野に立地し、アカガシ亜属の生育に適した丘陵が迫っている。一方、從来の調査地は沖積平野内に立地し、スギの生育により適していたと考えられる。この様な、調査地の立地も、異なる花粉化石群集が得られた原因の一つと考えられる。

從来の分析結果で、今回の分析結果に最も近い花粉化石群集を探した場合、駿前町のMGS2-II带b亜帯・浜寄・地方遺跡のIV帶が挙げられる。いずれもスギ属が減少しアカガシ亜属が増加しており、おおよそ縄文時代後期～晚期を示している。今回のIV帶・III帶は弥生時代以前の時期を示しており、矛盾はない。今後年代測定を実施して確認する必要はあるが、この層準に対比される可能性がある。

## ②II帶

下位のIV・III帶が、駿前町のMGS2-II带b亜帯・浜寄・地方遺跡のIV帶に対応するとすると、スギ属が高率を示すII帶は、駿前町のMGS2-II带a亜帯・浜寄・地方遺跡のIII帶に対比できる。駿前町のMGS2-II带a亜帯は縄文時代後期末から古代・浜寄・地方遺跡のIII帶は、2200yrBP以前の時期を示しているとされており、今回のII帶が示す時期（弥生時代～中世）と重なる。

## ③I帶

中世以降にマツ属が高率を示す特徴は、浜寄・地方遺跡のII帶の特徴と一致し、対比可能である。また、駿前町の試料では、中世以降の堆積物が欠如しており、今回のI帶に対比できる時期の花粉化石群集は得られていない。

花粉分析に適した沼沢湿地の堆積物（腐植質粘土）では、通常1g当たり数万粒の花粉・胞子化石が含まれる。一方今回の分析試料では、花粉・胞子化石含有量は100粒/gに至らず、木本花粉含有量は1.8粒～0.6粒/gと、極めて少なかった。

## 古植生及び土地利用（堆積環境）について

神出西遺跡で実施した花粉分析・植物珪酸体分析結果を基に、神出西遺跡周辺における縄文時代後期頃から中世（あるいはそれ以降）の古環境を推定する。また、時間軸に沿って古い時期から新しい時期へと示すために、ここでは下位のIV帶から示す。

### (1) IV帶期：縄文時代後期～晚期

#### ① 堆積時期について

前述のように、駿前町のMGS2-II带b亜帯・浜寄・地方遺跡のIV帶に対比される可能性がある。両地点の年代測定結果から、それぞれの花粉帯は、おおよそ縄文時代後期～晚期の植生を示していると考えられ、IV帶も同時期の植生を示していると考えられる。

#### ② 堆積環境

下位の23層（試料No.10）は有機物に富む粘土であり、新鮮な面は青灰色を帯びることから、堆積後にグライ化を受けていた事が分かる。珪藻化石の含有量が少ないものの、花粉化石の含有量はやや少ない程度であり、グライ化の程度はさほど強くなかったようである。草本花粉の割合が極めて少ないとから湿地で堆積したとは考えにくく、三日月湖のような湖沼内で堆積した可能性があ

る。上位の22層(試料No.9)は有機物に富む礫層である。こちらでは草本花粉の検出量がやや増え、遠田川の氾濫に伴って、周辺の土壤を巻き込んで堆積したものと考えられる。

### ③ 古植生の推定

#### 1) 周辺の植生

草本花粉がほとんど検出されなかつことから、調査地は開放的な水域内に位置していたと考えられる。岸部近くにはヨシ類が僅かに分布していたと考えられるほか、ハリイ類やホタルイ類などのカヤツリグサ科草本が僅かに分布していたと考えられる。また、僅かに検出されたテイイカズラ属はつる性木本(藤本)で、一般には「二次林、植林内で林床や樹木に絡まって生育し、開花には十分な光量が必要。」と言われるが、日当たりの良い岩場や、棚田の石垣、宅地の垣などに絡まって生育して開花している個体も珍しくない。湖沼に迫る林縁に生育していたと考えられる。

#### 2) 森林植生

従来の報告から益田平野の低所ではスギが優先していたと考えられるが、今回の調査地近辺の丘陵は、カシ類を中心とした照葉樹林で覆われていたと考えられる。また、調査地近辺では植物珪酸体の検出されたシノキ類やクスノキ類、イスノキも混淆していたものと考えられる。一方で、林内のギャップにはクリやナラ類、シデ類が生育していたと考えられる。また、クリ属花粉やシノキ属・マテバシイ属花粉が一定量検出されていることから、湖沼に迫る林縁にクリやシイ類が生育していたと考えられる。

#### (2) Ⅲ帯期：縄文時代後期～晩期

##### ① 堆積時期について

前述のように、花粉層序学的検討から下位のIV帯とともに駿前町のMGS2-Ⅱ帯b亜帯、浜寄・地方遺跡のIV帯に対比される可能性がある。両地点の年代測定結果から、それぞれの花粉帯は、およそ縄文時代後期～晩期の植生を示していると考えられ、Ⅲ帯も同時期の植生を示していると考えられる。

##### ② 堆積環境

下位の21層(試料No.8)は有機質粘土、上位の20層(試料No.7)は粘土であった。一方、上位の20層の新鮮な面は緑灰色を帯び、珪藻化石は含まれないものの花粉化石は多量に含まれることから、軽度にグラウイ化を受けていたことが分かる。

草本花粉の割合が徐々に大きくなることから、三日月湖が徐々に埋まり、湿地環境に変化していくものと考えられる。

### ③ 古植生の推定

#### 1) 周辺の植生

前述のように、調査地近辺周辺の湿地には、植物珪酸体が検出されたヨシ類のほか、ハリイ類やホタルイ類などのカヤツリグサ科草本、イボクサ類が生育していたと考えられる。また、フサモ類などの沈水植物も生育していたと考えられる。

#### 2) 森林植生

調査地近辺の丘陵は、カシ類を中心とした照葉樹林で覆われていたと考えられる。また、調査地近辺では植物珪酸体の検出されたシノキ類やクスノキ類、イスノキも混淆していたものと考えられる。一方で、林内のギャップにはクリやナラ類、シデ類が生育していたと考えられる。また、出

現率が減少するもののクリ属花粉やシノキ属・マテバシイ属花粉がいまだ一定量検出され、湖沼に迫る林縁にクリやシイ類が生育してたと考えられる。下位の試料No.8ではモチノキ属が多く検出され、モチノキ類も近辺に多く生育していたものと、考えられる。この外、スギ属花粉が増加傾向示す。スギが、調査地周囲の低地で分布を広げ始めたものと考えられる。

### (3) II带期：弥生時代～中世頃

#### ① 堆積時期について

出土遺物から、弥生時代～中世の植生を示していると考えられる。

#### ② 堆積環境

下部の19層（試料No.6, 5）と上部の4層（試料No.4）は有機質に富む粘土、中部の14層（試料No.4）は粘土であった。一方、中部の14層の新鮮な面は緑灰色を帯び、珪藻化石は含まれないものの花粉化石は多量に含まれることから、軽度にグライト化を受けていたことが分かる。

草本花粉の割合は木本花粉と同程度まで増加し、イネ科やカヤツリグサ科などの湿性草本・藤本花粉の出現率も高くなっていることから、いずれも湿地環境で堆積したものと考えられる。イネ科（40ミロン以上）花粉の出現率が33～58%とやや高い傾向にあり、イネ植物珪酸体も若干量であるが検出されることから、調査地点が水田であった可能性も指摘できる。

また、20層と上位の19層、14層と上位の4層の境界面の変形が激しい。一連の地層が水田耕土であるとすると、踏み込みなどの可能性もあるが、万寿地震地や浜田地震による液状化などの可能性も指摘され、軟X線写真観察などによる確認が必要である。

#### ③ 古植生の推定

##### 1) 周辺の植生

前述のように、イネを含むイネ科（40ミロン以上）花粉がやや高い出現率を示し、オモダカ属やセリ科などの水田雑草を含む分類群も検出されている。一方、イネ植物珪酸体も検出されるがその量は多くない。これらのことから、一連の地層が水田耕土であった可能性は指摘できるが、近傍に存在した水田から、湿地（調査地点）へ流れ込んだ可能性もある。

水田が調査地、あるいは近傍に存在した。水田や湿地内には、植物珪酸体の検出されたヨシ類のほか、サジオモダカ類やオモダカ類、アカバナ類、セリ類などが生育していた。また、畦や周辺のやや乾燥した場所には、植物珪酸体の検出されたススキ類のほか、チドメグサ類、オオバコ類、ヨモギ類が生育していたと考えられる。

##### 2) 森林植生

木本花粉の含有量が減り、調査地近辺の丘陵の開発が進み、カシ類を中心とした照葉樹林が伐採されていったと考えられる。伐採跡は徐々に、アカマツを主要素とする薪炭林に置き換わっていったと考えられる。ただし、調査地近辺では植物珪酸体の検出されたシノキ類やクスノキ類、イスノキが僅かに生育していたものと考えられる。またスギは、調査地周囲の低地や谷筋に分布していたものと考えられる。

### (4) I带期：中世以降

#### ① 堆積時期について

出土遺物から、中世以降の植生を示していると考えられる。

#### ② 堆積環境

3層（試料No.2、1）は有機質粘土であった。草本花粉の割合は高く、特にイネ科（40ミリ以上）花粉の出現率が200%程度と特に高い傾向にあり、イネ植物珪酸体も検出されるなど、3層が水田作土であった可能性が高い。

### ③古植生の推定

#### 1)周辺の植生

前述のように、調査地には水田が広がっていたと考えられる。水田内にはサジオモダカ類、オモダカ類やイボクサ類、キカシグサ類、セリ類などの「水田雑草」が生育していた可能性が高く、現在ほど集約的な稲作は行われていなかったと思われる。このため、イネ植物珪酸体の検出密度はさほど高くなかったと考えられる。

一方、ソバ属のほか、アカザ科・ヒユ科、ナデシコ科、アブラナ科、ナス科など、畑作物を含む分類群も数%の出現率を示している。ソバが栽培されたことは明らかであるが、そのほかの分類群に属する「雜穀」や野菜が、裏作や休耕田、あるいは畦を用いて栽培された可能性が指摘できる。

#### 2)森林植生

木本花粉の含有量が更に減少し、調査地近辺の丘陵はアカマツやコナラ類を主要素とする薪炭林に覆われ、僅かにカシ類を主要素とする照葉樹林が残存していたと考えられる。ただし、調査地近辺では植物珪酸体の検出されたシノキ類やクスノキ類、イスノキが僅かに生育していたものと考えられる。

#### まとめ

神出西遺跡で実施した花粉、植物珪酸体分析の結果、以下の事柄が明らかになった。

- (1) 花粉分析結果を基に、I～IV带の局地花粉帯を設定した。
- (2) 益田平野内での従来の花粉分析結果と今回のI～IV带を比較した結果、堆積年代が分からなかつたIV帶、III帶が、共に縄文時代後期～亜晩期の植生を示すことが分かった。
- (3) I帶とした3層は、水田耕作土と考えられた。一方、II帶とした4～19層は、水田作土と湿地環境での堆積の、両方の可能性が指摘できた。
- (4) I帶の時期には畑作が行われた可能性もあり、ソバ栽培が行われ、可能性は低いものの、アカザ（ヒユ）ナデシコ、ナタネ、ナス類が栽培された可能性が指摘できた。
- (5) 19層、4層下面の変形について、踏み込みの可能性もあるが、万寿地震地や浜田地震による液状化などの可能性も指摘できる。今後、軟X線写真観察などによる確認が必要である。

#### 引用文献

- 中村 純（1974）イネ科花粉について、とくにイネを中心として、第四紀研究、13,187-197.
- 藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－、考古学と自然科学、9、15-29
- 渡辺正巳（2006）浜寄・地方遺跡発掘調査に伴う花粉分析およびプラント・オパール分析、一般国道9号建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書2浜寄・地方遺跡、131-173、国土交通省中国地方整備局・鳥取県教育委員会。
- 渡辺正巳・石賀裕明（2008）鳥取県西部益田平野における過去6400年間の環境変遷、植生史研究、16、3-10.
- 渡辺正巳（2010）花粉分析法、必携 考古資料の自然科学調査法、174-177、ニュー・サイエンス社。

## 第2節 三隅益田道路発掘調査出土木製品の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

### はじめに

本業務では、木質遺物の保存処理対象とされた三隅益田道路発掘調査に伴って出土した木製品11点について、樹種同定を実施した。

#### 1. 試料

試料は、木製品11点（処理No.1～11）である。このうち、処理No.8の曲物は、側板と底板とが確認されたため、それぞれの部材を対象に樹種同定を実施している。なお、試料の詳細（処理番号、仮番号、器種、法量など）は同定結果とともに表1に示したので参考されたい。

#### 2. 分析方法

資料（木製品）の木取りを観察した後、剃刀を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を直接採取する。切片をガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）、Wheeler他（1998）、Richter他（2006）を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995-1999）を参考にする。

#### 3. 結果

同定結果を表1に示す。木製品は、針葉樹2分類群（スギ、ヒノキ）と広葉樹3分類群（クスノキ科、ツバキ属、ウツギ属）に同定された。以下に、各分類群の解剖学的特徴等を記す。

##### ・スギ (*Cryptomeria japonica* (L.f.) D. Don) スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成さ

表8 分析資料一覧

処理番号	仮番号	種別	部位	法量(cm)			木取り	種類 (分類群)
				長さ	幅	厚み		
1	角1	田下駄	—	42.5	13.5	4.5	板目	スギ
2	角2	田下駄	—	25.5	9.6	1.5	板目	スギ
3	角3	不明	—	8.3	3.5	3.1	芯持丸木	ウツギ属
4	角4	曲物	蓋	16.7	5.3	0.9	柾目	ヒノキ
5	角5	曲物	底板	14.7	4.7	0.6	柾目	ヒノキ
6	角6	曲物	底板	20.0	9.7	1.0	板目	スギ
7	角7	下駄	—	17.0	9.0	3.3	板目	ヒノキ
8	角8	曲物	側板	—	—	0.3	板目	スギ
			底板	14.0	13.9	1.0	柾目	スギ
9	角9	不明	—	46.0	7.0	7.0	芯持丸木	クスノキ科
10	角10	不明	—	53.0	8.0	7.0	芯持丸木	クスノキ科
11	神1	横槌	—	22.5	8.7	6.5	芯持丸木	ツバキ属

れる。分野壁孔はスギ型で、1分野に2-4個。放射組織は単列、1-10細胞高。

・ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晚材部への移行は緩やか～やや急で、晚材部の幅は狭い。樹脂細胞は晚材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、1分野に1-3個。放射組織は単列、1-10細胞高。

・クスノキ科 (Lauraceae)

散孔材で、道管は単独または2-3個が放射方向に複合して散在する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1-2細胞幅、1-20細胞高。柔組織は周囲状および散在状。柔細胞には油細胞が認められる。

・ツバキ属 (Camellia) ツバキ科

散孔材で、管壁は薄く、横断面では多角形～角張った楕円形、単独および2-3個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列～階段状に配列する。放射組織は異性、1-3細胞幅、1-20細胞高。放射組織には結晶が認められる。

・ウツギ属 (Deutzia) ユキノシタ科

試料は芯持丸木で柾目が出ていないため、木口と板目の2面のみ採取した。散孔材で、道管はほぼ単独で散在する。道管は階段穿孔を有する。放射組織は異性、1-4細胞幅、40-100細胞高以上のものまである。放射組織には鞘細胞が認められる。

#### 4. 考察

木製品は、伊東・山田（2012）の木器分類を参考にすると、工具（横槌）、農耕土木具（田下駄）、服飾具（下駄）、容器（曲物）、その他（不明）に分けられる。これらの木製品からは、針葉樹2分類群と広葉樹3分類群の計5分類群が確認された。このうち、針葉樹のスギは、湧水地周辺や谷筋等に生育する常緑高木であり、木材は木理が直通で割裂性と耐水性が比較的高い。ヒノキは、山地や丘陵地の尾根筋を中心に生育する常緑高木であり、木材は木理が直通で割裂性と耐水性が高い。広葉樹のクスノキ科は、常緑性の種類が多いが、落葉性の種類も含まれる。また、高木になる種類から低木の種類まで含まれ、木材の材質も比較的重硬なものから軽軟なものまで幅広い。ツバキ属は、山地や丘陵地の斜面等に生育する常緑小高木であり、木材は重硬・緻密で強度が高い。ウツギ属は、林縁部等の日当たりの良い環境に生育する落葉低木であり、木材はやや重硬な部類に入る。

器種別の樹種構成について見ると、横槌はツバキ属に同定されたことから、重硬・緻密な木材の利用が推定される。ツバキ属の横槌は、前田遺跡（八雲村）の古墳時代後期の資料、西川津遺跡（松江市）の時期不明の資料、姫原西遺跡（出雲市）の弥生時代後期～古墳時代前期の資料、青木遺跡（出雲市）の鎌倉時代の資料、大倉IV遺跡（斐川町）の古墳時代中期～平安時代初期の資料などに確認されており、島根県内ではアカガシ亜属と共に横槌に比較的よく利用される樹種である（伊東・山田, 2012）。

田下駄は、2点ともにスギの板目板が利用される。スギ材の利用背景としては、比較的軽く浮力があること等が考えられる。また、板目板の利用については、年輪が層状に入り、柾目板に比べて割れ難いことから、意図的に板目板を利用した可能性がある。田下駄は、島根県内各地で弥生時代から古代にかけての資料が確認されているが、一部にヒノキ、ヒノキ属、マツが認められ

るもの、スギの利用が多数を占める（伊東・山田,2012）。

下駄は、台と歯を一本で作る連歎下駄である。ヒノキが利用されることから、加工性や耐水性の高い木材の利用が窺える。島根県内における下駄の木材利用についてみると、前田遺跡の古墳時代後期とされる下駄2点が最も古く、スギとカヤに同定されている。その後、古墳時代末期～平安時代初期では、才ノ峰遺跡（松江市）の資料にヒノキ、出雲国府跡（出雲市）の資料にケヤキ、古墳時代末期～平安時代では、中野清水遺跡（出雲市）の資料にモミ属、三田谷I遺跡（出雲市）の資料にスギ、鎌倉時代では出雲国府跡の資料にクリ、室町～江戸時代では青木遺跡の資料にヒノキ、ホオノキ、ムクロジ、鎌倉～江戸時代初期では酒屋原遺跡（益田市）の資料にスギとヒノキ属が確認されている（伊東・山田,2012）。

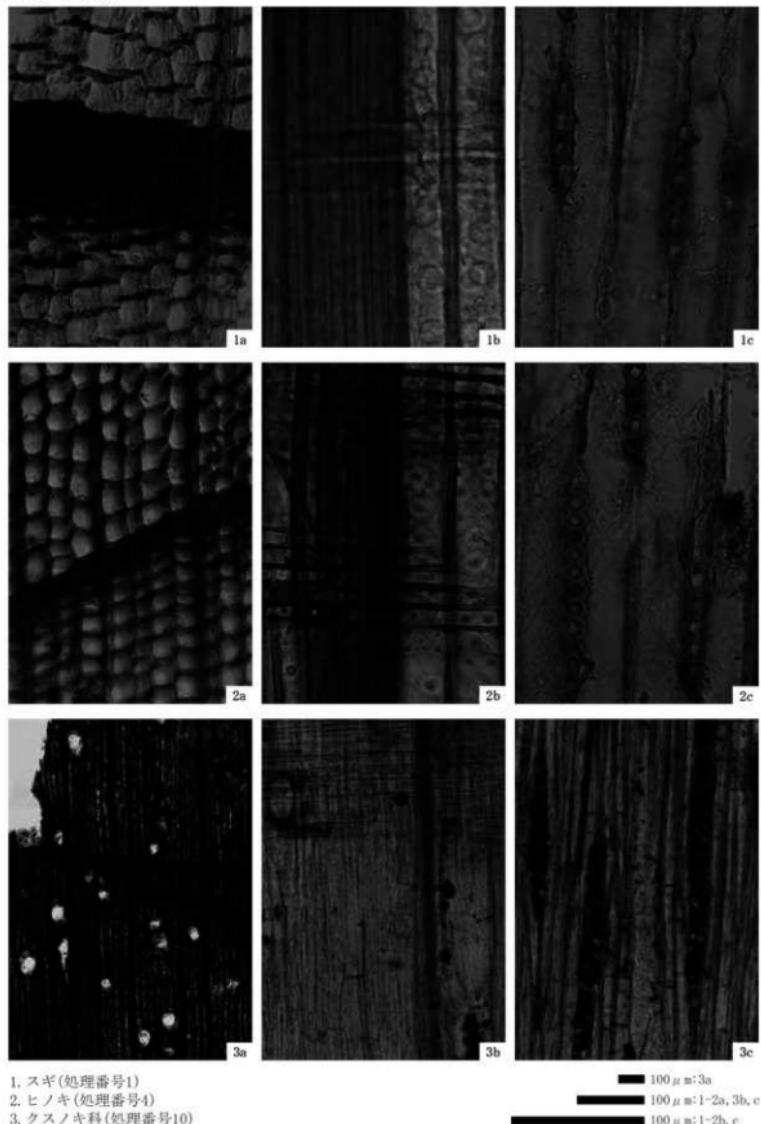
容器の曲物は、蓋、底板、側板から構成される。側板と底板から構成される処理No.8は、いずれもスギに同定された。また、底板のみの資料2点はスギとヒノキ、蓋1点はヒノキに同定された。スギとヒノキは、いずれも木理が通直であり、板状加工が容易なこと、耐水性が比較的高いことから、これらの材質的特徴などが利用背景として考えられる。島根県内における調査事例をみても、曲物にはスギとヒノキが多く利用される傾向にある（伊東・山田,2012）。

不明（木製品）は、処理No.3が芯持丸木を呈する資料であり、中央部に孔を有する。本資料はウツギ属に同定されたが、ウツギ属は隨が腐りやすく、自然に隨が無くなり孔が生じる場合や、このような特徴を利用して木製品（例えば、羅宇など）として利用される場合がある。処理No.9,10は、いずれも樹皮が残る芯持丸木であり、一方の端部が有頭状に加工される。2資料はいずれもクスノキ科に同定されたことから、同様の用途に利用された可能性がある。

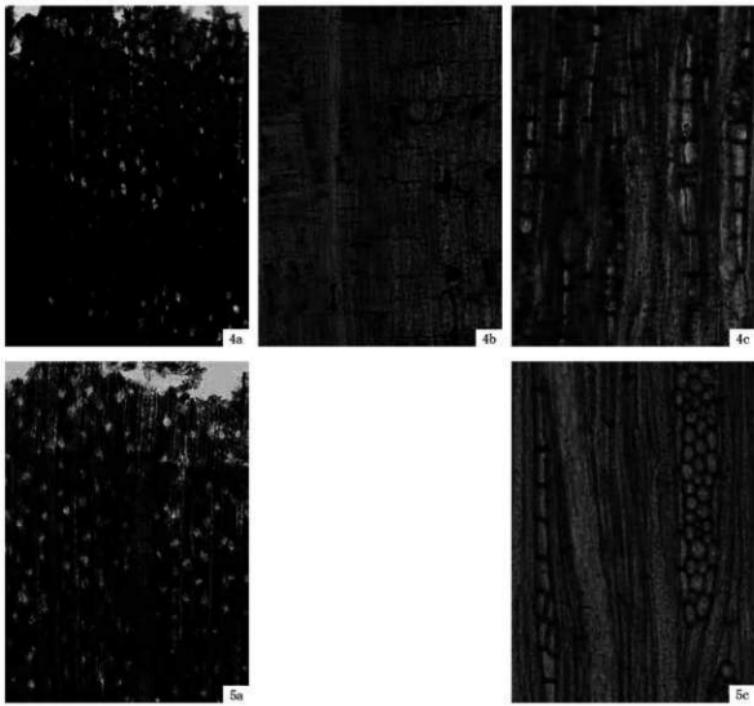
#### <引用文献>

- 林 昭三,1991,日本産木材 跡微鏡写真集.京都大学木質科学研究所.
- 伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ.木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.
- 伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ.木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所,66-176.
- 伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ.木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.
- 伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ.木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.
- 伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ.木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.
- 伊東隆夫・山田昌久(編),2012,木の考古学 出土木製品用材データベース,海青社,449p.
- Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(編),2006,針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト,伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修),海青社,70p. [Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.,2004IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
- 島地 謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織.地球社,176p.
- Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(編),1998,広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト,伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修),海青社,122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.,1989,IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

図版1 木材(1)



図版2 木材(2)



4. ツバキ属(処理番号11)

5. ウツギ属(処理番号3)

a:木口, b:柾目, c:板目

## 第3節 神出西遺跡における放射性炭素年代 (AMS測定)

(株) 加速器分析研究所

### 1 測定対象試料

神出西遺跡は、島根県益田市遠田町に所在する。測定対象試料は、遠田川旧河道の護岸の部材とみられる板材から採取された木片1点である(表9)。推定年代は、弥生時代中期から古墳時代中期である。

### 2 測定の意義

旧河道護岸の形成時期を明らかにする。

### 3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸 (AAA : Acid Alkali Acid) 処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常  $1\text{mol/l}$  (1M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO<sub>2</sub>) を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。
- (6) グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

### 4 測定方法

加速器をベースとした 14C-AMS 専用装置 (NEC 社製) を使用し、14C の計数、13C 濃度 (13C/12C)、14C 濃度 (14C/12C) の測定を行う。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

### 5 算出方法

- (1)  $\delta$  13C は、試料炭素の 13C 濃度 (13C/12C) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (%) で表した値である(表1)。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) 14C 年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中 14C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年 (OyrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期 (5568 年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。14C 年代は  $\delta$  13C によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。14C 年代と誤差は、下 1 術を丸めて 10 年単位で表示される。また、14C 年代の誤差 ( $\pm 1\sigma$ ) は、試料の 14C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2% であることを意味する。
- (3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の 14C 濃度の割合である。pMC が小さい (14C が少ない) ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上 (14C の量が標準現代炭素と同等以上) の場合 Modern とする。この値も  $\delta$  13C によって補正する必要があるた

め、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。

(4) 历年較正年代とは、年代が既知の試料の<sup>14</sup>C濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の<sup>14</sup>C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。历年較正年代は、<sup>14</sup>C年代に対応する較正曲線上の历年年代範囲であり、1標準偏差( $1\sigma = 68.2\%$ )あるいは2標準偏差( $2\sigma = 95.4\%$ )で表示される。グラフの縦軸が<sup>14</sup>C年代、横軸が历年較正年代を表す。历年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない<sup>14</sup>C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、历年較正年代の計算に、IntCal13データベース(Reimer et al. 2013)を用い、OxCalv4.3較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。历年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。历年較正年代は、<sup>14</sup>C年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

## 6 測定結果

測定結果を表9、10に示す。

試料17の<sup>14</sup>C年代は、 $1530 \pm 20\text{yrBP}$ 、历年較正年代( $1\sigma$ )は、が $435 \sim 577\text{cal AD}$ の間に3つの範囲で示される。古墳時代中期から後期頃に相当し(佐原2005)、推定年代と重なる。

試料の炭素含有率は56%の適正な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

表9 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$  補正值)

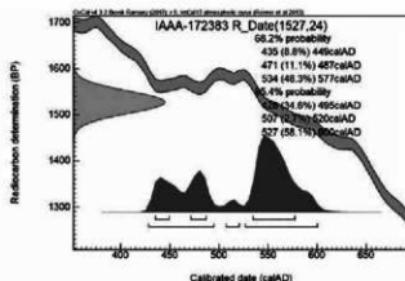
測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-172383	17	遺構：護岸	板材	AAA	-29.09 ± 0.44	1,530 ± 20	82.69 ± 0.26

[IAA 登録番号 : #8939]

表10 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$  未補正值、歴年較正用  $^{14}\text{C}$  年代、較正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		歴年較正用 (yrBP)	$1\sigma$ 歴年年代範囲	$2\sigma$ 歴年年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-172383	1,590 ± 20	81.99 ± 0.24	1,527 ± 24	435calAD - 449calAD (8.8%) 471calAD - 487calAD (11.1%) 534calAD - 577calAD (48.3%)	527calAD - 600calAD (58.1%) 507calAD - 520calAD (2.7%) 527calAD - 600calAD (58.1%)

[参考値]



第86図 歴年較正年代グラフ（参考）

## 文献

- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon 51(1), 337-360
- Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP. Radiocarbon 55(4), 1869-1887
- 佐原真 2005 日本考古学・日本歴史学の時代区分、佐原真、ウェルナー・シュタインハウス監修、独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所編集、ドイツ展記念概説 日本の考古学 上巻、学生社、14-19
- Suiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of  $^{14}\text{C}$  data. Radiocarbon 19(3), 355-363

## 第4節 蛍光X線分析

海石西 炭だまり No.1 150612 No.1 (Pbフィルタ)

[測定条件]

測定装置	SEA1200VX
測定時間 (秒)	100
有効時間 (秒)	70
試料室雰囲気	大気
コリメータ	φ 8.0mm
励起電圧 (kV)	50
管電流 ( $\mu$ A)	56
フィルタ	Pb用
マイラー	カバー
ピーキングタイム	8.0usec
コメント	

[スペクトル]

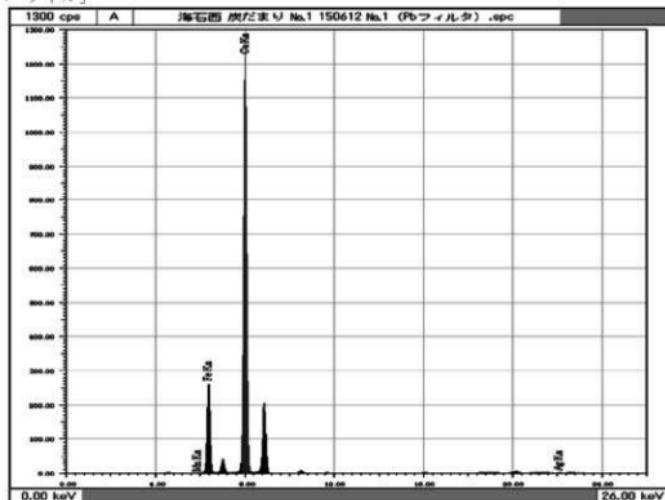


表11 分析結果 (Pb フィルタ)

Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	R O I (keV)
25	Mn	マンガン	K $\alpha$	17.714	5.75- 6.05
26	Fe	鉄	K $\alpha$	1961.709	6.25- 6.55
29	Cu	銅	K $\alpha$	10111.479	7.87- 8.21
47	Ag	銀	K $\alpha$	18.861	21.85-22.35

## 海石西 炭だまり No.1 150612 No.1 (Cdフィルタ)

[測定条件]

測定装置	SEA1200VX
測定時間 (秒)	100
有効時間 (秒)	69
試料室雰囲気	大気
コリメータ	Φ 8.0mm
励起電圧 (kV)	50
管電流 (μA)	806
フィルタ	Cd用
マイラー	カバー
ピーキングタイム	8.0usec
コメント	

[スペクトル]

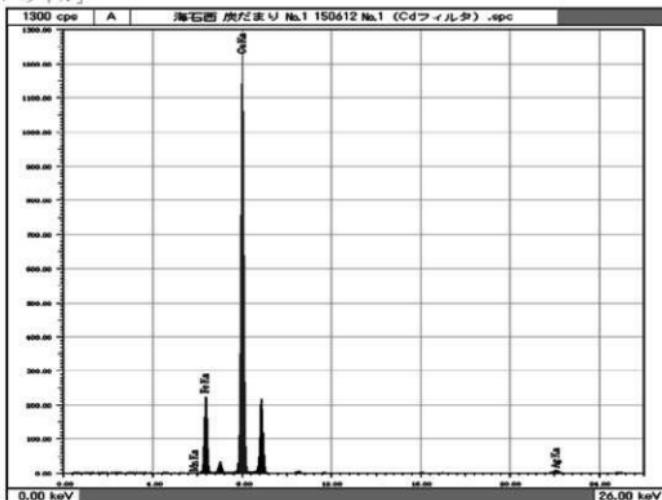


表12 分析結果 (Cd フィルタ)

Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	R O I (keV)
25	Mn	マンガン	K α	18.531	5.75-6.05
26	Fe	鉄	K α	1685.301	6.25-6.55
29	Cu	銅	K α	10045.556	7.87-8.21
47	Ag	銀	K α	132.598	21.85-22.35

## 第9章 総括

### 第1節 三隅川下流域における遺跡の形成

今回の三隅益田道路の改築に伴う発掘調査及び事前に行われた分布調査と試掘調査も含めると浜田市三隅町内で数多くの調査が行われた。これらの調査からこれまで発掘調査がほとんど行われていなかった三隅町内の遺跡の立地の特徴についてまとめてみたい。

平成23年の時点で、三隅町内で確認されていた遺跡は95か所である。このうち、城跡は40か所、製鉄遺跡は14か所、窯業遺跡は6か所で町内の遺跡のほとんどを占めている。今回の調査で、低地の遺跡2ヶ所、丘陵の遺跡1ヶ所の遺跡の発掘調査を行った。これまで三隅町内の遺跡の立地は主に丘陵や山間部で、低地の遺跡はほとんど知られていなかった。さらに丘陵は土砂崩れなどの斜面の崩落で遺跡が残っていないと考えられてきた。今回の調査で確認された角落し遺跡のSX01の遺物の出土状況が隣接する斜面から流出してきた土砂に遺物が多く含まれている土器だまりであったことから斜面の崩落が遺跡に与える影響がよくわかる資料だと言える。特に角落し遺跡周辺の岩盤層である結晶片岩層は水分を含むと剥落しやすい性質を持っており、角落し遺跡で出土した多くの遺物は谷奥や丘陵から流入したものと考えられる。同様に低地で調査を行った海石西遺跡でも遺跡周辺の丘陵部に集落が存在していた可能性は高いが、現在も丘陵部に遺跡が残っているか不明である。

このように三隅町内には崩壊しやすい地質地帯が多く、現在遺跡が残っていない場所であっても本来遺跡が存在していた可能性がある。また、崩落した遺跡が谷地形に埋没している可能性があり、現状の地表面の観察だけでは遺跡を発見することも困難であるといえる。平地で調査が行われた海石西遺跡には集落の中心で見られる建物跡などの遺構は確認されなかった。このように三隅町内は谷部や水田、荒蕉地になっている地点であっても遺跡が埋没している可能性が他の地域より高いと考えられ、特に注意する必要がある。

### 第2節 近世山陰道推定地について

今回の調査では、近世山陰道跡そのものの確認はできなかった。しかし近世山陰道に關係する可能性のある遺跡の調査が行われた。一つは近世山陰道跡（馬橋地区）で、もう一つは廻り田遺跡である。近世山陰道跡（馬橋地区）は昭和の改修で街道の古い様相が全く残っていないことが明らかとなった。しかし近世山陰道が通っていた可能性は高く、近世にさかのぼると推定する石垣も確認できた。一方、廻り田遺跡は2ヶ所の塚状遺構は確認されたが、他に特筆すべき遺構も無く、遺物も出土しなかったため、遺跡の時期も特定できなかった。しかし、2ヶ所の塚が築かれている丘陵の麓には近世山陰道推定地が存在しており、そこに面した丘陵上に対となる高まりが存在していると、一里塚の可能性については考慮すべきであろう。過去の街道調査で廻り田遺跡の麓を通っていると想定された近世山陰道推定地でも、当地はルートが確定できない地域となっていた。伊能図や米軍撮影の空撮写真・地籍図などの資料と、近隣に存在する通称「六地蔵」を含め現地調査の結果、推定ルートを設定している。現在は国道9号で過去に存在していたであろう丘陵の一部も削

られており往事の近世山陰道はなかなか復元できないのが実情である。廻り田遺跡が一里塚では無いと考えられる理由としては、一つに伊能図の存在があげられる。伊能図の内、当該地域を確認すると離れた地点を測量しているようである。伊能隊の当該地域の測量は1800年代初頭であり、その段階で廻り田遺跡の丘陵上に街道は存在していなかったと考えられる。遺跡の北側の斜面を観察すると鋭く落ち込んでおり、過去に大きく崩落した痕跡と考えられる。この崩落部分は二つの塚状遺構の間に広がる平坦面の延長上にある。本来は斜面がもう少し緩く傾斜していたのではないかと考えており、ここからは想像の域を出ないが、丘陵に一里塚と街道を築き一時期は利用していたものの、斜面が大きく崩壊した可能性はないか考えている（注1）。今後の事例の増加を待ちたい。

今回の調査から、現在見ることができる地形は過去の自然災害の結果であることが多く、発掘調査の対象としている時代の当時の自然景観から大きく変わっているのは想像に難くない。今回発掘調査を行った浜田市西部から益田市東部は現地形を目視による確認では遺跡の存在を見逃す可能性もある。現在近世山陰道と捉えられている街道についても様々な要因で道の位置は変動しており、今回の発掘調査を行った近世山陰道跡（馬橋地区）のように、現在利用されている道の上方の斜面に過去の街道が埋もれている可能性もある。特に斜面が崩落しやすい地域は注意する必要があろう。

（注1）阿部志朗氏の現地での指導では廻り田遺跡が近世山陰道跡に関する遺跡である可能性は低いとご教示を受けている。

#### 【参考文献】

島根県教育委員会 1997『山陰道Ⅲ』









種類	共	道府/市町	種別	固有	固有	固有	固有	固有	固有	固有	固有	固有
									固有	固有	固有	
37.3	1	オモカズ	固有種	固有種	(D)固	(D)固	(D)固	(D)固	固有種	固有種	固有種	良
37.4	1	スリガタウニ	固有種	固有種	固有種	7.3	(D)固	(D)固	固有種	固有種	固有種	高内山原種 山絆種
37.5	2	オモカズ	固有種	固有種	固有種	0.80	(D)固	(D)固	固有種	固有種	固有種	良
37.6	5	ヒメトマト	固有種	固有種	固有種	9.7	(D)固	(D)固	固有種	固有種	固有種	良
37.7	1	オモカズアシダ	固有種	固有種	(D)固	6.5	固有種	固有種	固有種	固有種	固有種	良
37.8	1	オモカズ	固有種	固有種	固有種	0.80	(D)固	(D)固	固有種	固有種	固有種	平良
37.9	1	ヒメトマト	固有種	固有種	(D)固	5.4	固有種	固有種	固有種	固有種	固有種	20%絶滅~高内山
37.10	1	オモカズ	固有種	固有種	固有種	0.10	固有種	固有種	固有種	固有種	固有種	20%絶滅~高内山
37.11	1	オモカズスミレ	固有種	固有種	(D)固	0.2	固有種	固有種	固有種	固有種	固有種	近畿内自生 地被種
38.1	3	小路	固有種	固有種	(D)固	(D)固	(D)固	(D)固	固有種	固有種	固有種	良
38.2	1	ヒメトマト	固有種	固有種	固有種	0.20	固有種	固有種	固有種	固有種	固有種	良
38.3	1	小路	固有種	固有種	(D)固	固有種	固有種	固有種	固有種	固有種	固有種	良
38.4	2	オモカズ	固有種	固有種	固有種	0.10	固有種	固有種	固有種	固有種	固有種	良
38.5	1	オモカズ	Paco 102	固有種	固有種	0.20	(D)固	(D)固	固有種	固有種	固有種	良
38.6	1	オモカズ上面	固有種	固有種	(D)固	0.40	固有種	固有種	固有種	固有種	固有種	20%絶滅~高内山
38.7	2	結晶點上種(小石)	固有種	固有種	(D)固	0.80	固有種	固有種	固有種	固有種	固有種	良
38.8	2	結晶點上種	固有種	固有種	固有種	4.8	(D)固	固有種	固有種	固有種	固有種	20%絶滅
38.9	1	オモカズ	固有種	固有種	固有種	5.4	(D)固	固有種	固有種	固有種	固有種	良
38.10	1	オモカズ	固有種	固有種	固有種	0.2	(D)固	固有種	固有種	固有種	固有種	20%絶滅~高内山
38.11	3	水路	固有種	固有種	(D)固	0.30	固有種	固有種	固有種	固有種	固有種	良
38.12	1	オモカズ(2)	固有種	固有種	(D)固	5.4	(D)固	固有種	固有種	固有種	固有種	良
38.13	1	オモカズ上面	固有種	固有種	固有種	5.8	(D)固	固有種	固有種	固有種	固有種	20%絶滅
38.14	1	オモカズ(2), Paco 128	固有種	固有種	固有種	6.9	(D)固	固有種	固有種	固有種	固有種	20%絶滅~高内山
38.15	1	固有種	固有種	固有種	固有種	4.7	(D)固	固有種	固有種	固有種	固有種	良
38.16	1	水路	固有種	固有種	固有種	5.5	(D)固	固有種	固有種	固有種	固有種	20%絶滅
38.17	1	オモカズ下種	固有種	固有種	固有種	6.7	(D)固	固有種	固有種	固有種	固有種	40%絶滅~高内山
38.18	1	オモカズ上面	固有種	固有種	固有種	5.6	(D)固	固有種	固有種	固有種	固有種	20%絶滅
38.19	1	オモカズ下種	固有種	固有種	(D)固	0.20	固有種	固有種	固有種	固有種	固有種	良
38.20	1	オモカズ	固有種	固有種	(D)固	5.6	固有種	固有種	固有種	固有種	固有種	20%絶滅~高内山
39.1	1	結晶點上	固有種	固有種	固有種	12.9	固有種	固有種	固有種	固有種	固有種	40%絶滅~高内山
39.2	1	結晶點上種	固有種	固有種	固有種	4.3	(D)固	固有種	固有種	固有種	固有種	20%絶滅~高内山
39.3	2	結晶點上	固有種	固有種	固有種	2.0	固有種	固有種	固有種	固有種	固有種	20%絶滅
40.1	1	オモカズ	固有種	小型類	鳥居	0.20	固有種	固有種	固有種	固有種	固有種	20%絶滅~高内山
40.2	1	オモカズ	固有種	種	固有種	0.20	固有種	固有種	固有種	固有種	固有種	10%絶滅~高内山
40.3	1	オモカズ	固有種	固有種	固有種	0.20	固有種	固有種	固有種	固有種	固有種	10%絶滅~高内山
40.4	1	結晶點上種	固有種	固有種	固有種	0.20	固有種	固有種	固有種	固有種	固有種	10%絶滅~高内山
40.5	1	オモカズ	固有種	固有種	固有種	0.20	固有種	固有種	固有種	固有種	固有種	内・外一品 自生種
40.6	1	オモカズ	固有種	固有種	固有種	0.20	固有種	固有種	固有種	固有種	固有種	10%絶滅~高内山
40.7	1	オモカズ	固有種	種	固有種	0.20	固有種	固有種	固有種	固有種	固有種	10%絶滅
40.8	1	オモカズ上面	固有種	固有種	(D)固	0.20	固有種	固有種	固有種	固有種	固有種	内・外自生種 地被
40.9	2	結晶點上	固有種	固有種	固有種	0.20	固有種	固有種	固有種	固有種	固有種	10%絶滅
40.10	1	オモカズ上面	固有種	固有種	固有種	0.20	固有種	固有種	固有種	固有種	固有種	20%絶滅
40.11	2	オモカズ	固有種	固有種	固有種	0.20	固有種	固有種	固有種	固有種	固有種	20%絶滅
41.1	1	結晶點上種	固有種	固有種	固有種	0.20	固有種	固有種	固有種	固有種	固有種	10%絶滅~高内山
41.2	3	水路	固有種	種	固有種	0.40	固有種	固有種	固有種	固有種	固有種	20%絶滅~高内山
41.3	1	オモカズ上面	固有種	固有種	固有種	13.0	(D)固	固有種	固有種	固有種	固有種	10%絶滅~高内山







# 写真図版

図版 1 海石西遺跡



上空から見た海石西遺跡（西から）



調査前状況（南東から）



遺跡と背後の丘陵（北東から）



遺跡と東側の丘陵（南西から）

図版3 海石西遺跡



土層堆積状況（北東から）



北壁土層堆積状況（南東から）

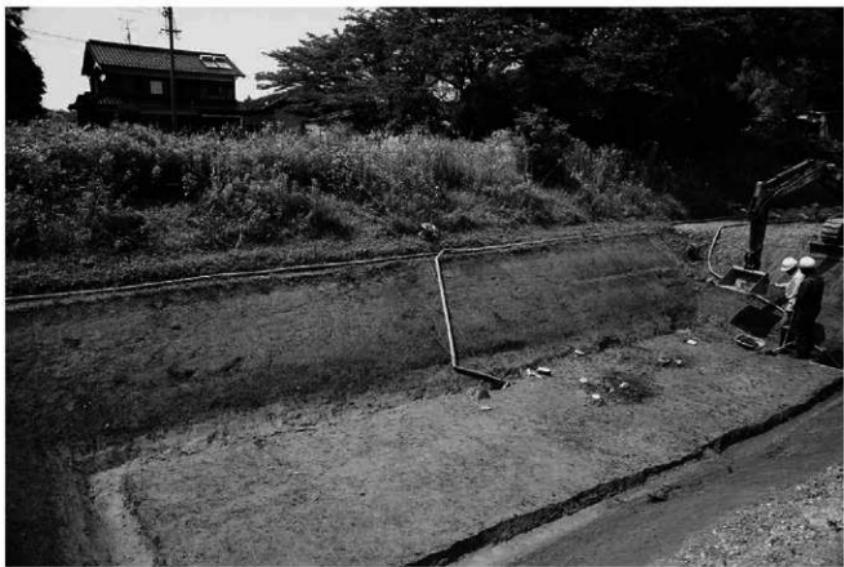


遺物出土状況（南東から）



遺物出土状況（南東から）

図版5 海石西遺跡



遺物出土状況（南から）



完掘状況（西から）



遺物出土状況（南から）



遺物出土状況（東から）

図版 7



遺物出土状況（南から）



遺物出土状況（上から）



遺物出土状況（南から）

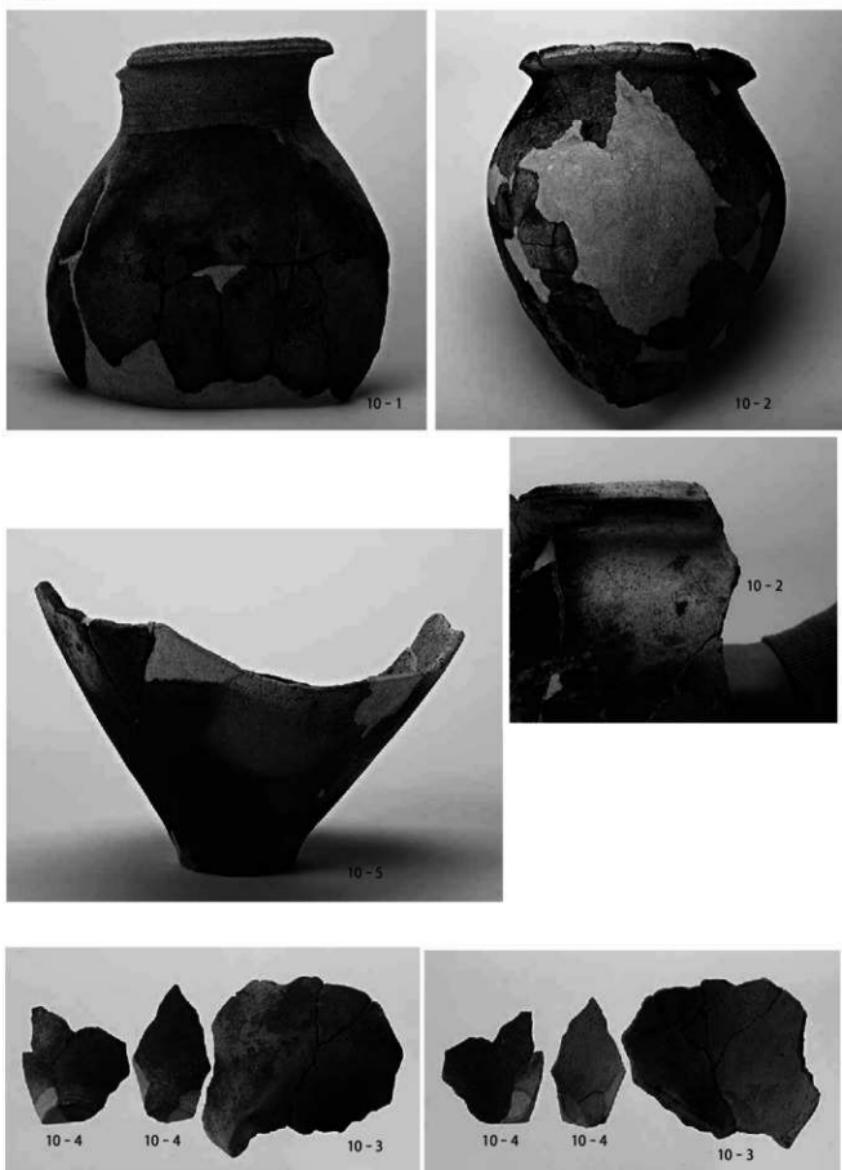


調査状況（南西から）

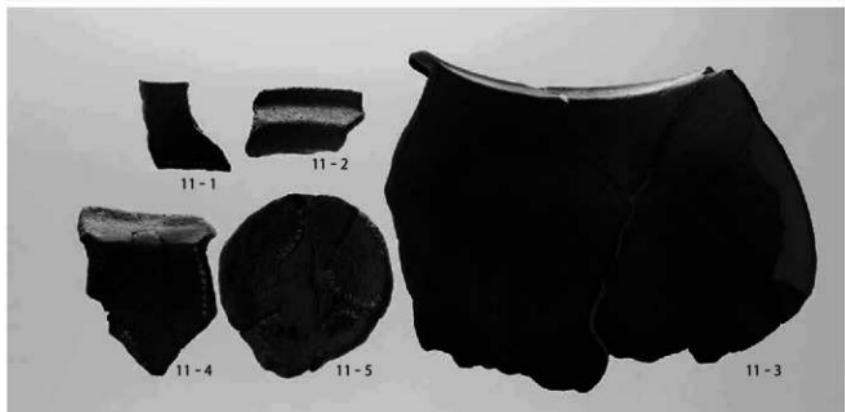


調査状況（西から）

図版9

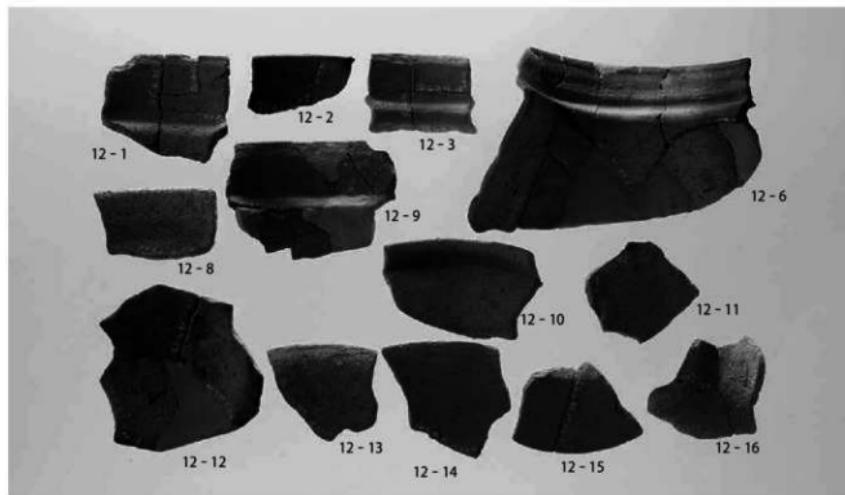
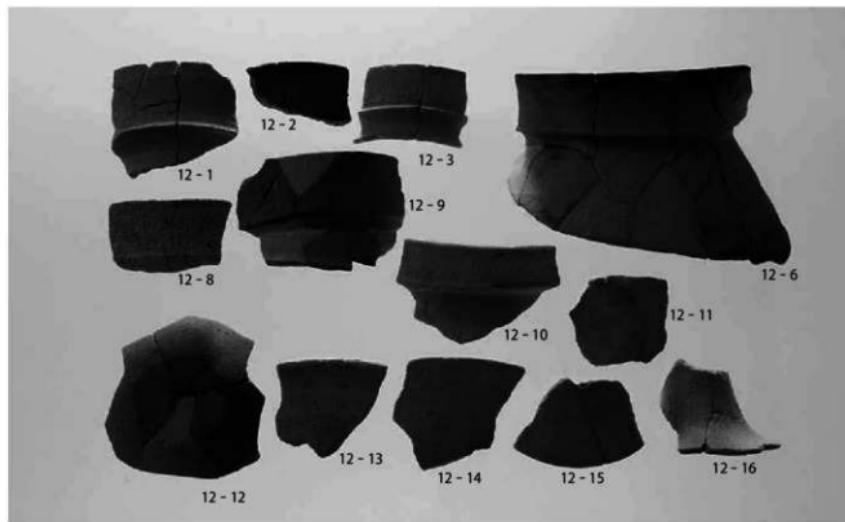


出土遺物(1)

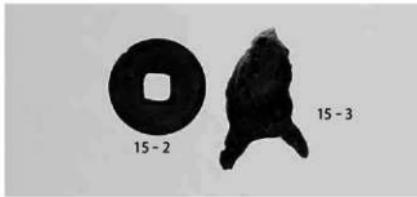
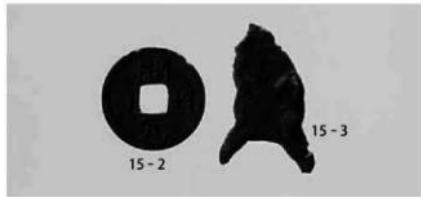
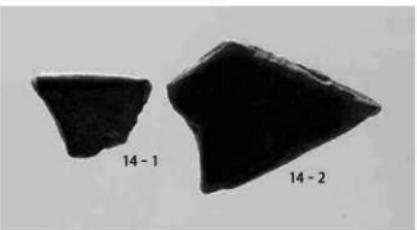
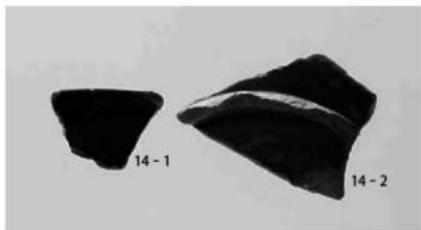
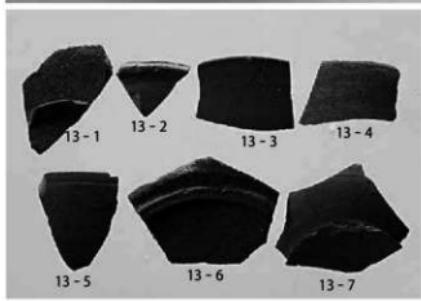


出土遺物 (2)

図版 11 海石西遺跡



出土遺物 (3)



出土遺物 (4)

図版 13 角落し遺跡



角落し遺跡を上空から臨む（東から）



角落し遺跡を上空から臨む（南から）



角落し遺跡を上空から臨む（西から）

図版 15 角落し遺跡



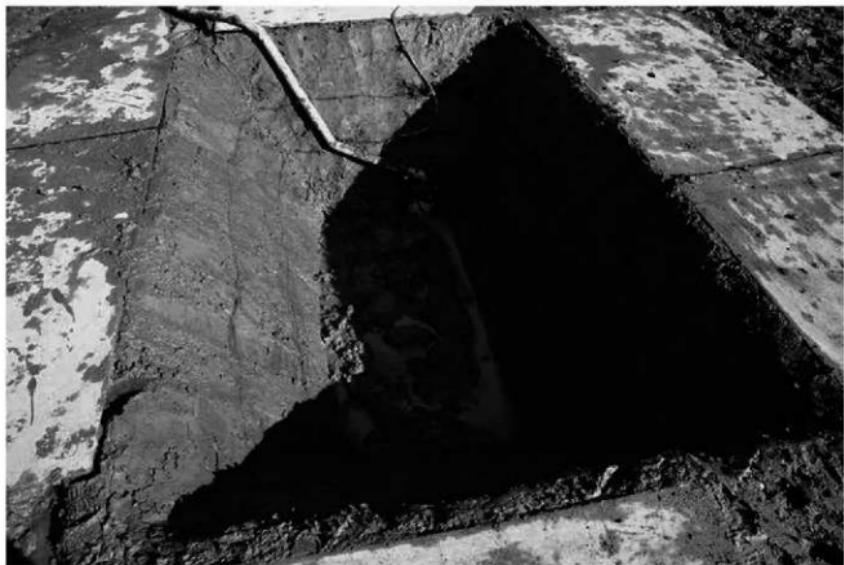
調査前状況（東から）



2区南西壁面土層堆積状況（北東から）



1区サブトレンチ土層堆積状況（北から）



2区下層土層堆積状況（西から）

図版 17 角落し遺跡



SX01 検出状況（北西から）



SX01 検出状況（南から）



上層杭列検出状況（北から）

図版 19 角落し遺跡



上層杭列検出状況（南西から）



上層杭列検出状況（西から）



上層杭列検出状況（北から）



上層杭列検出状況（西から）

図版 21 角落し遺跡



下層杭列検出土状況（西から）



下層杭列検出状況（東から）



遺物出土状況（上から）



遺物出土状況（上から）

図版 23 角落し遺跡



遺物出土状況（南から）



遺物出土状況（南西から）



遺物出土状況（北西から）



遺物出土状況（北から）

図版 25 角落し遺跡



遺物出土状況（北西から）



遺物出土状況（南から）



遺物出土状況（東から）



発掘調査状況（南東から）

図版 27 角落し遺跡



1 区上層遺物出土状況（南西から）



2 区下層調査状況（南西から）



1区・2区調査状況（南から）



角落し遺跡から日本海を臨む（南東から）

図版 29 角落し遺跡



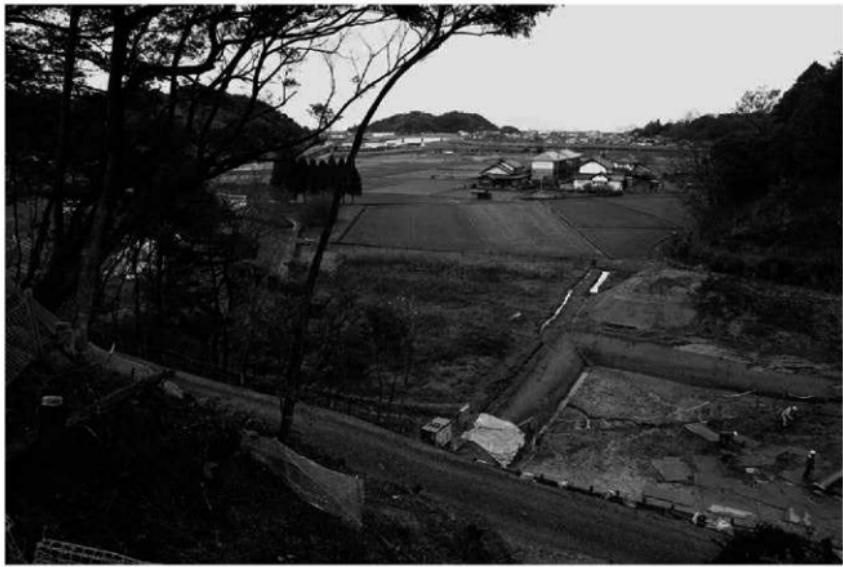
2区完掘状況（南東から）



3区調査状況（東から）

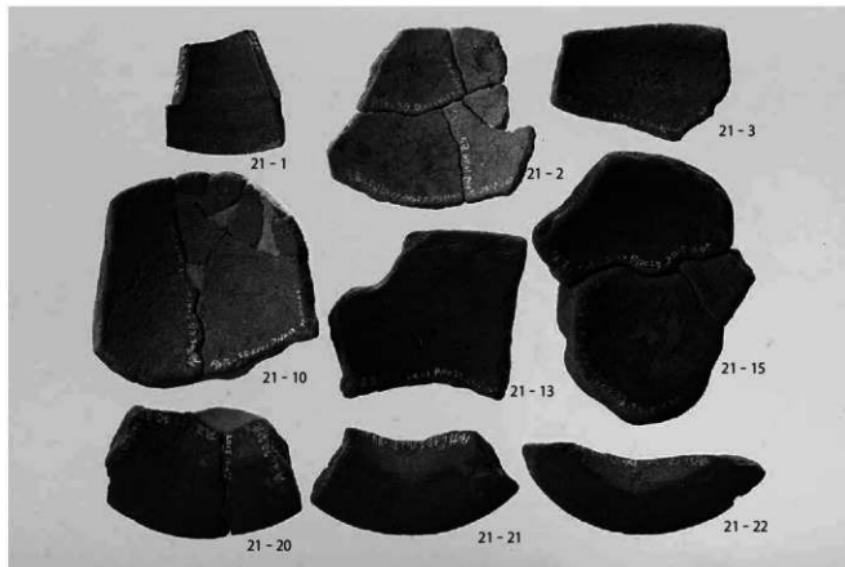
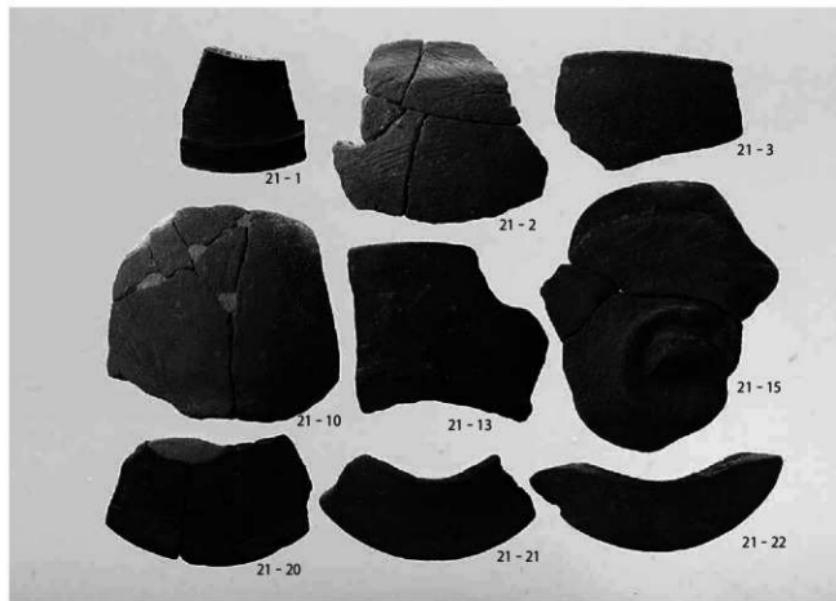


上空から見た角落し遺跡  
(上から)

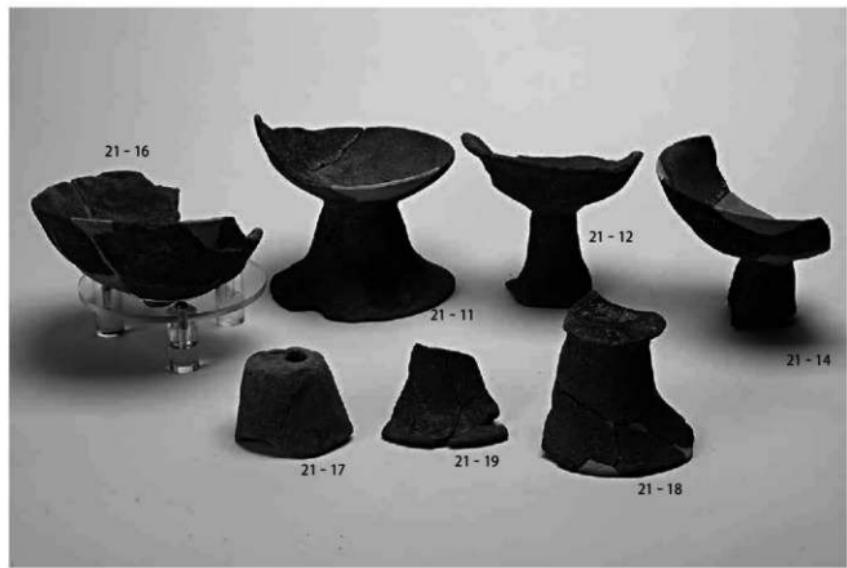


2区と6区〔未調査区〕(南東から)

図版 31 角落し遺跡



出土遺物 (1)

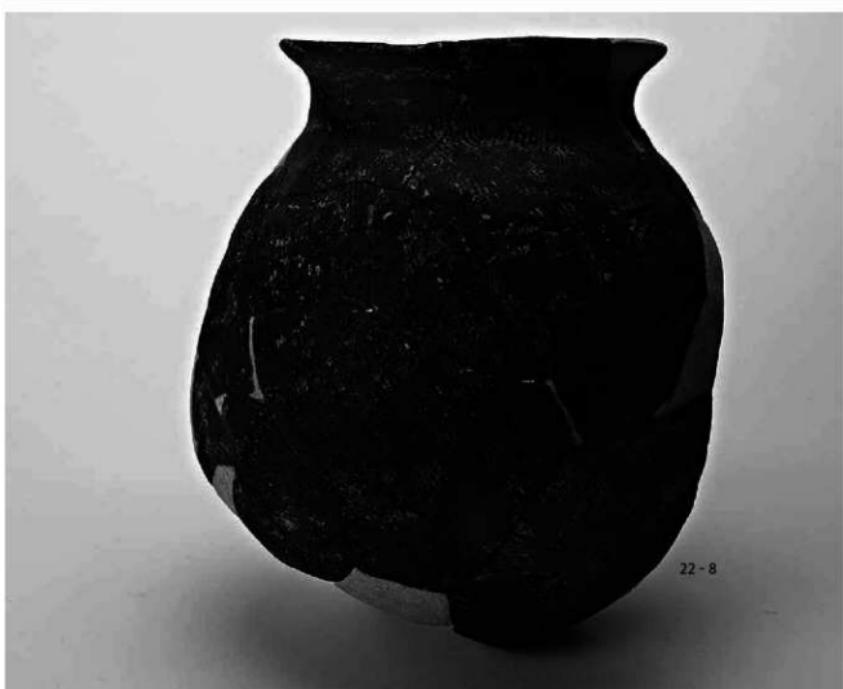


出土遺物 (2)

図版 33 角落し遺跡

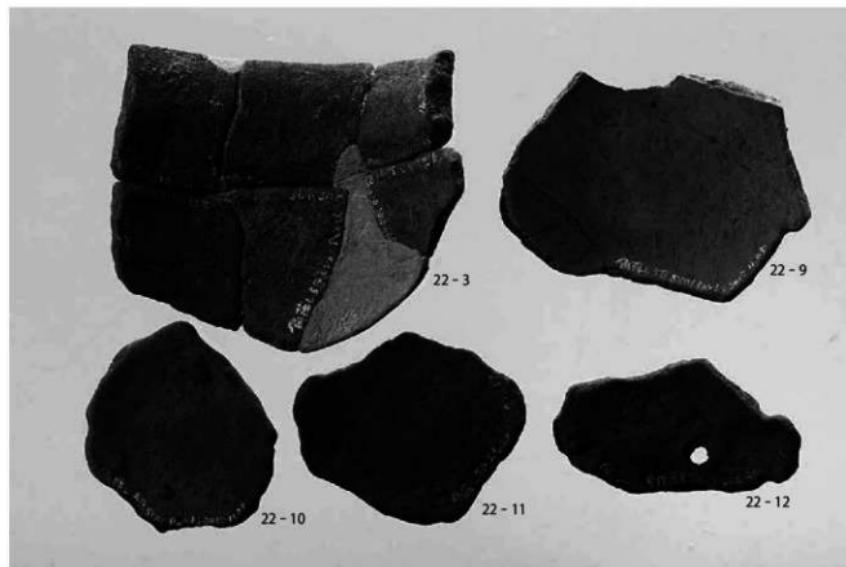
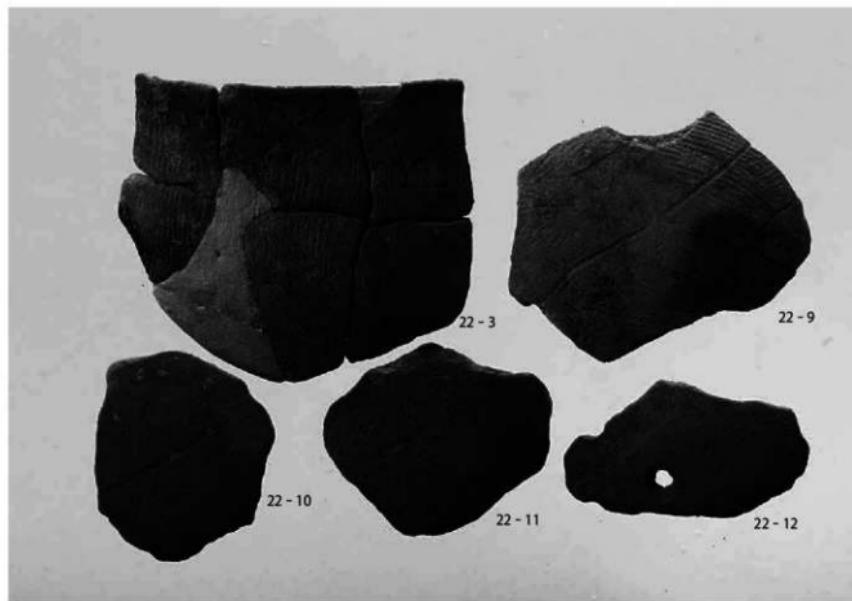


出土遺物 (3)

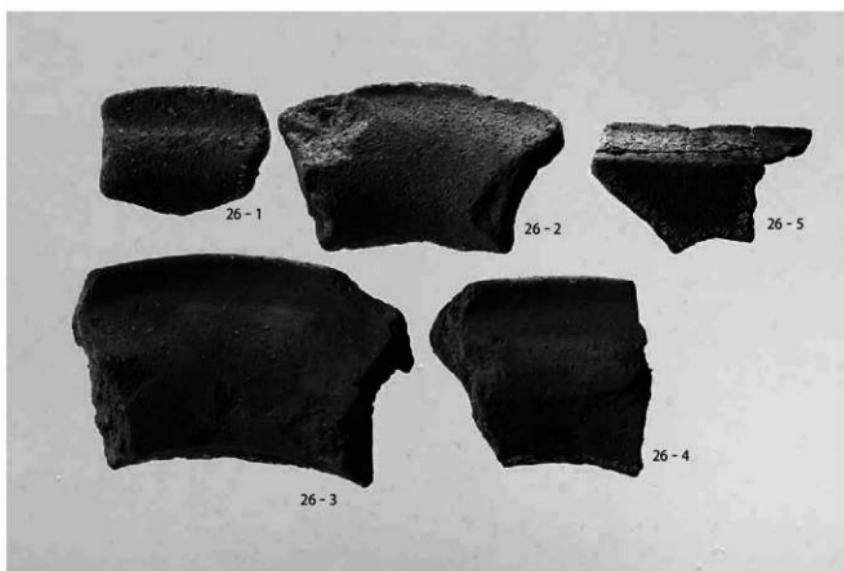
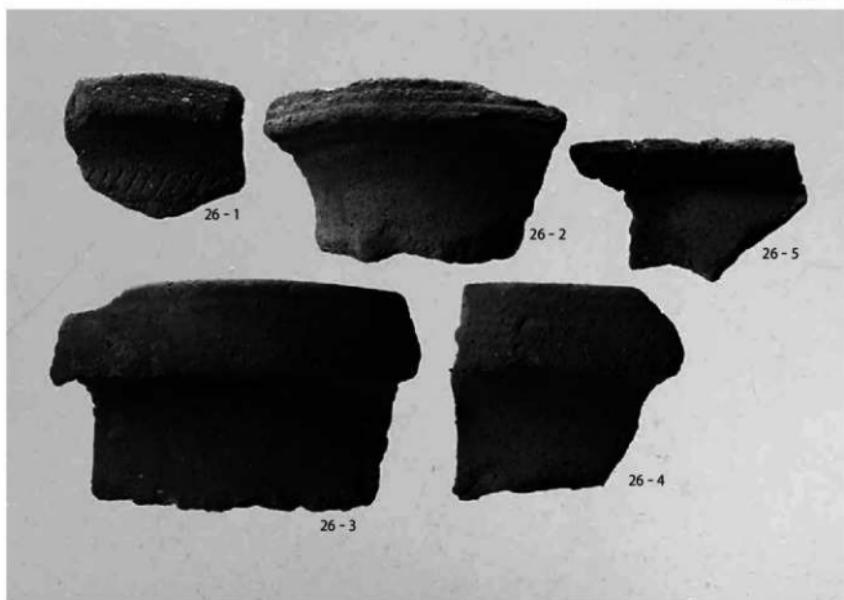


出土遺物 (4)

図版 35 角落し遺跡

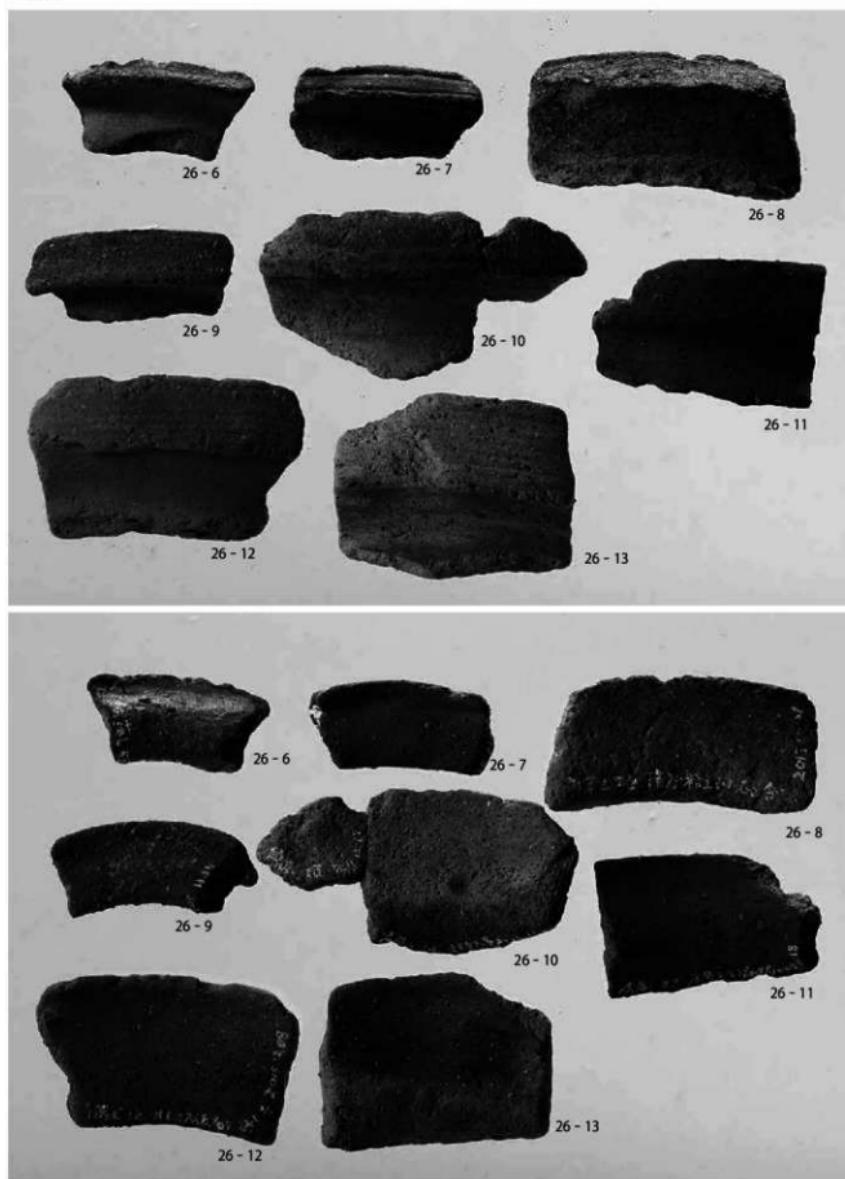


出土遺物 (5)

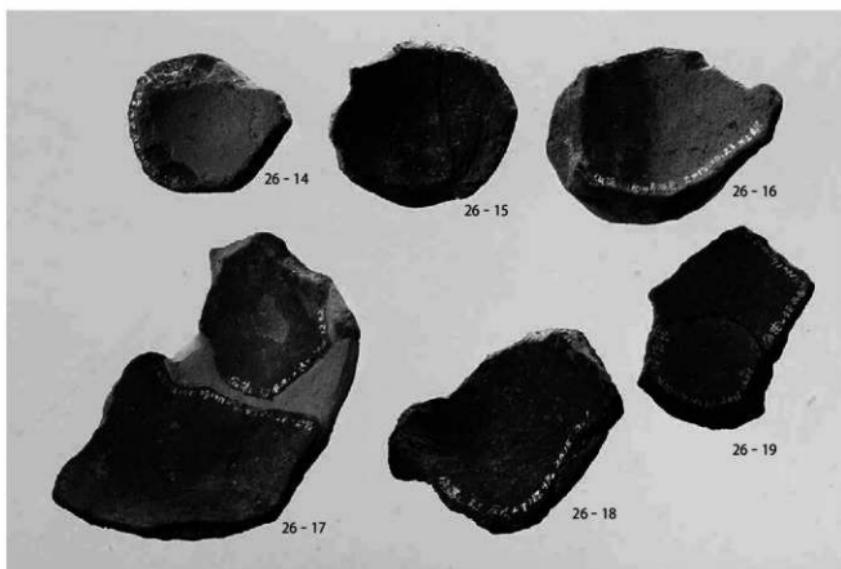
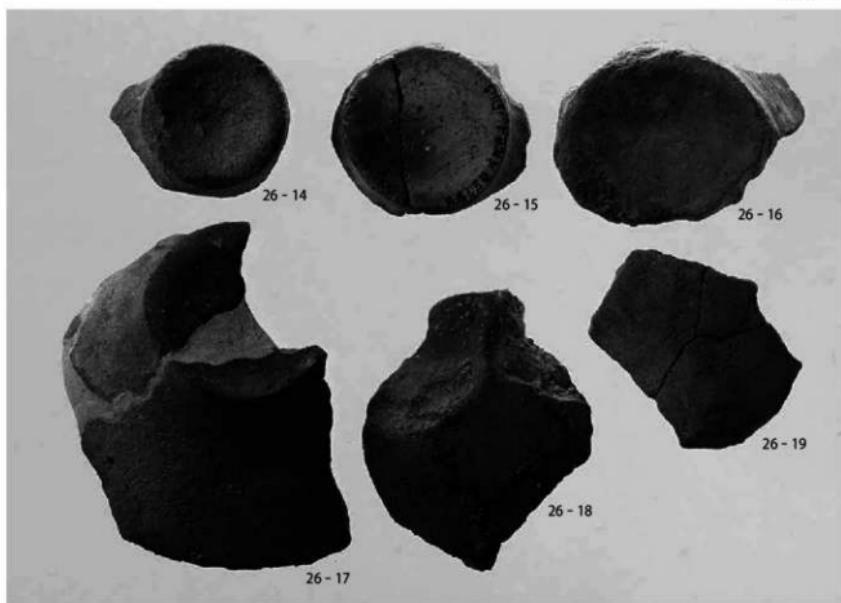


出土遺物 (6)

図版 37 角落し遺跡

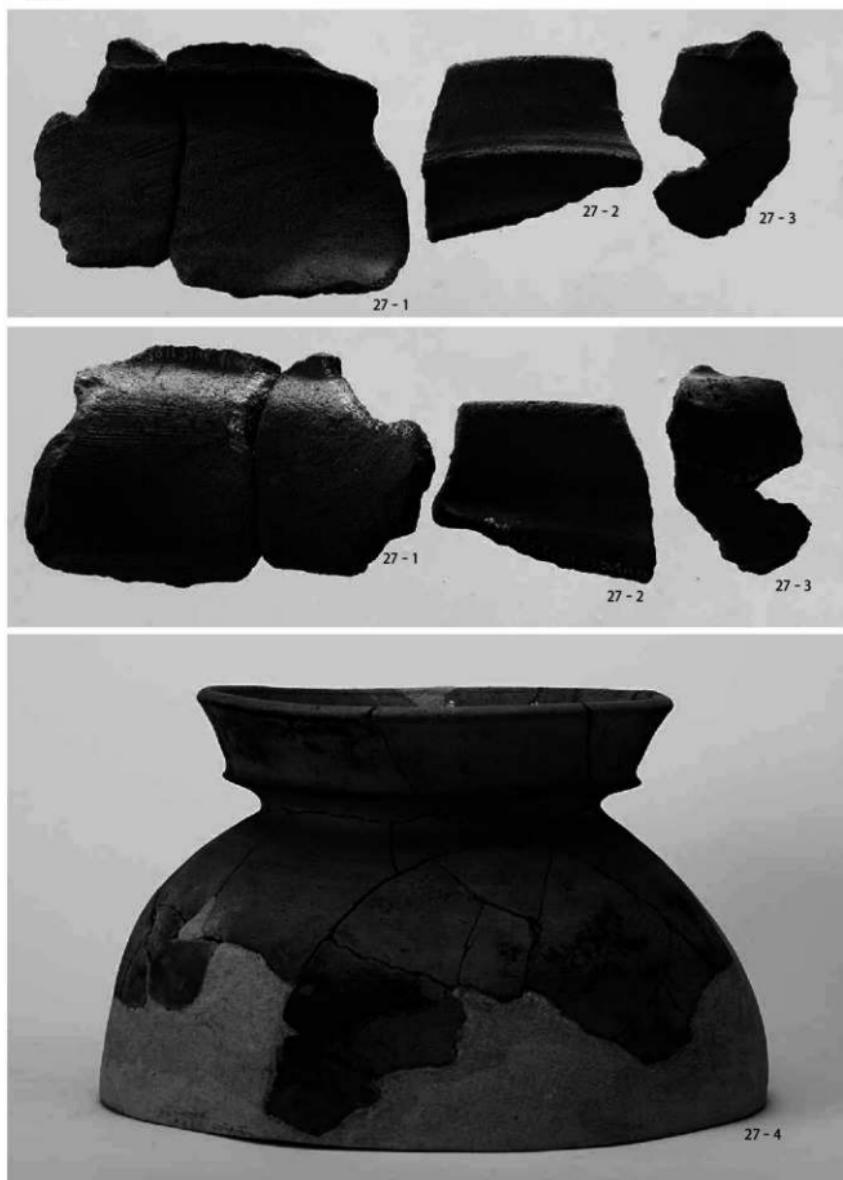


出土遺物 (7)

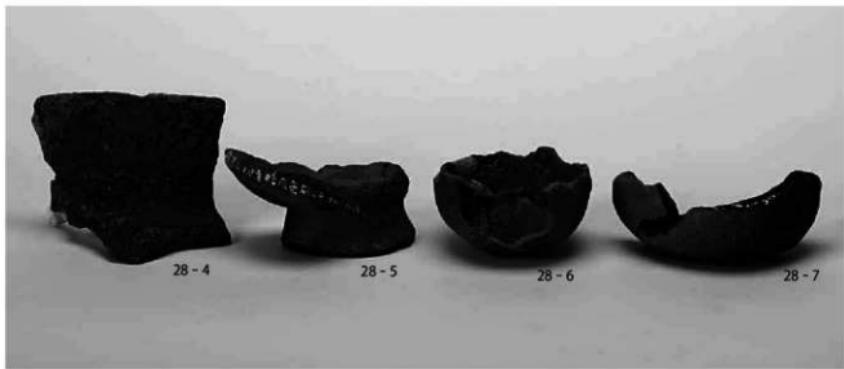


出土遺物 (8)

図版 39 角落し遺跡

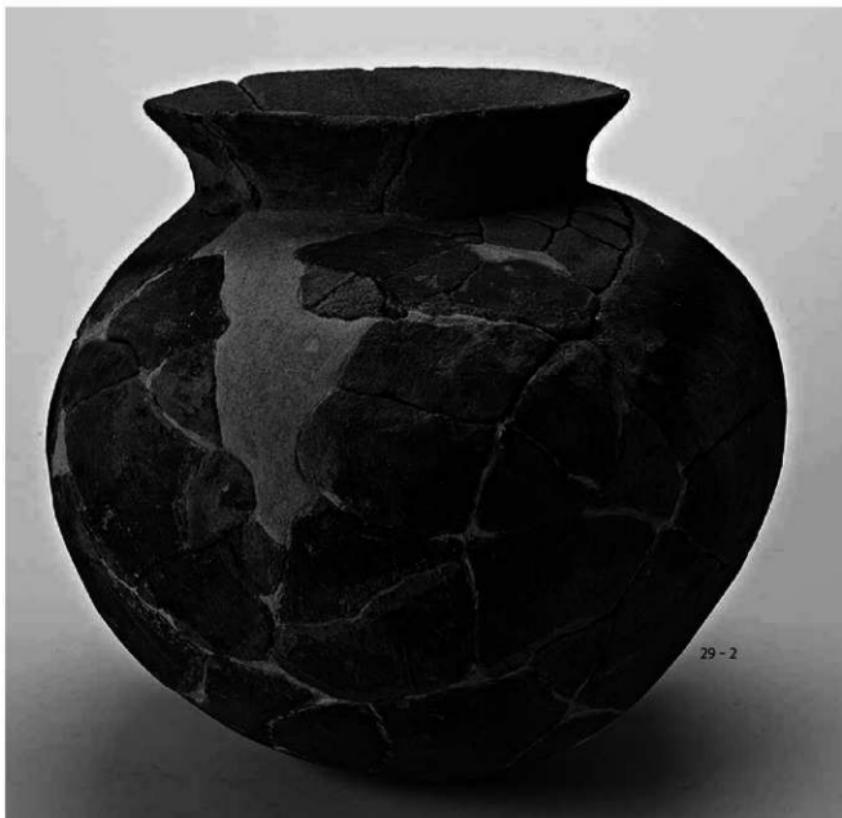


出土遺物 (9)

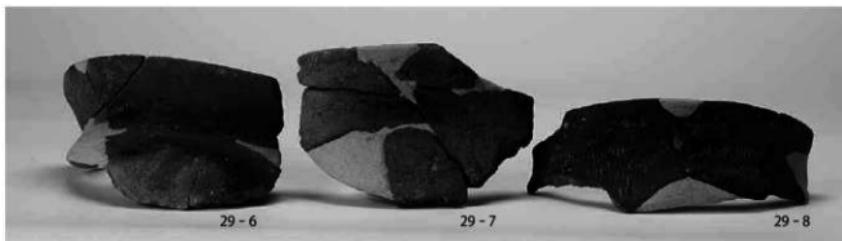


出土遺物 (10)

図版 41 角落し遺跡



29-2

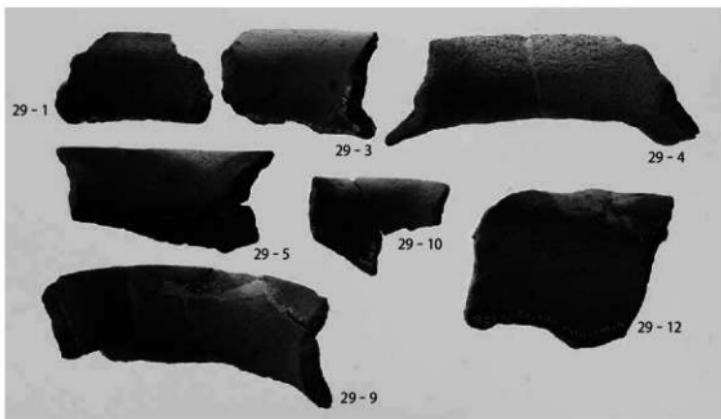
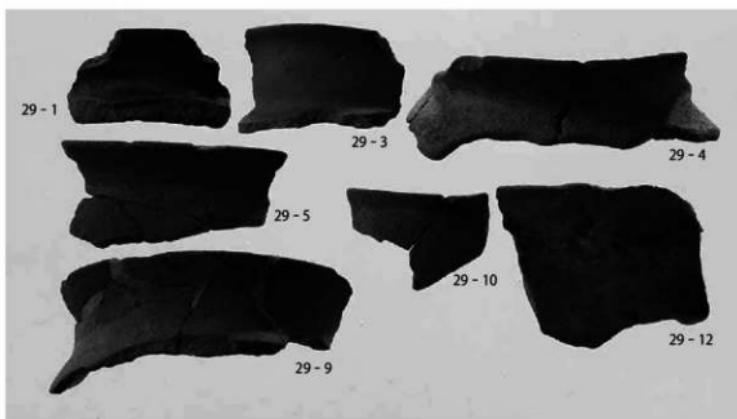


29-6

29-7

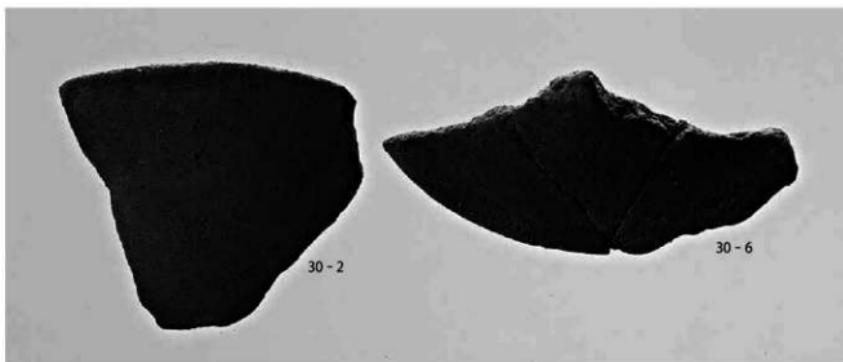
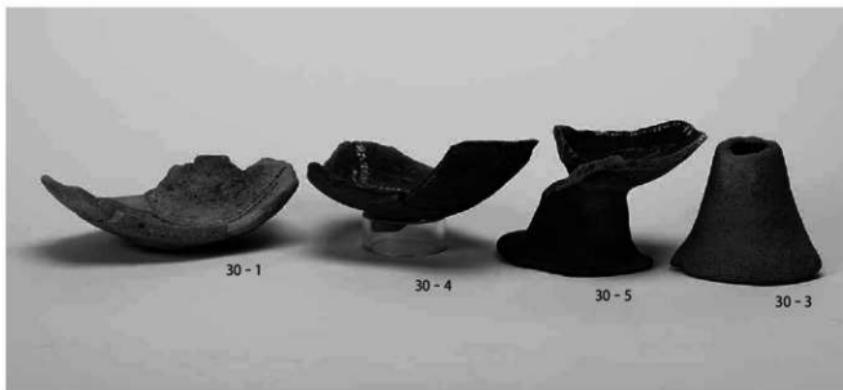
29-8

出土遺物 (11)

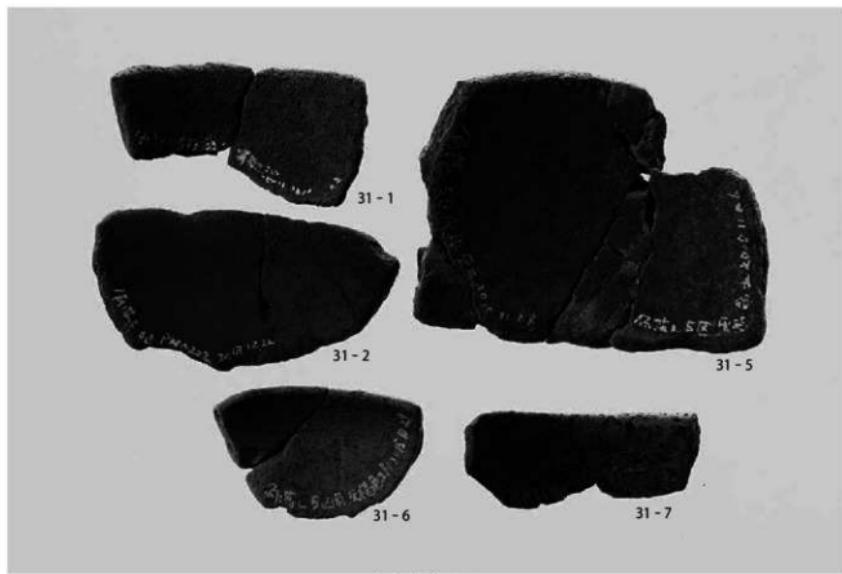
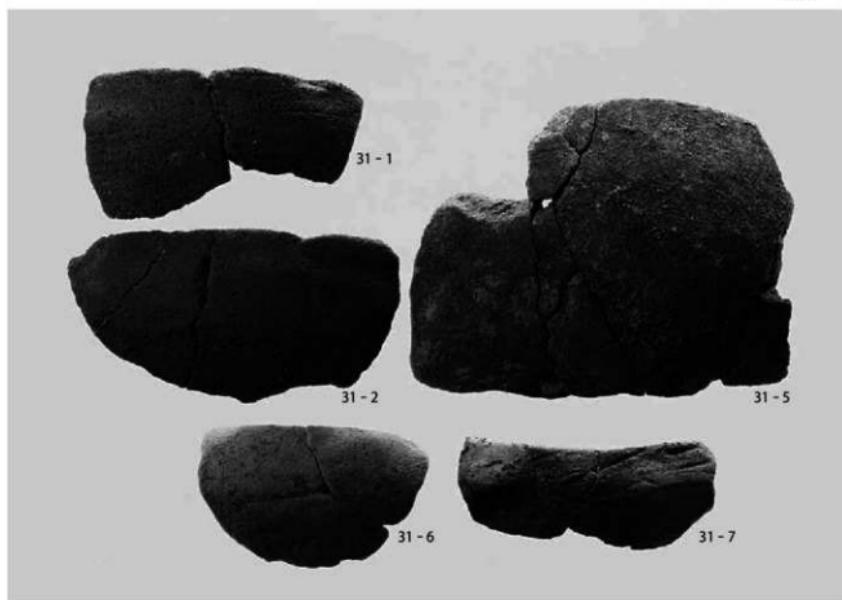


出土遺物 (12)

図版 43 角落し遺跡



出土遺物 (13)

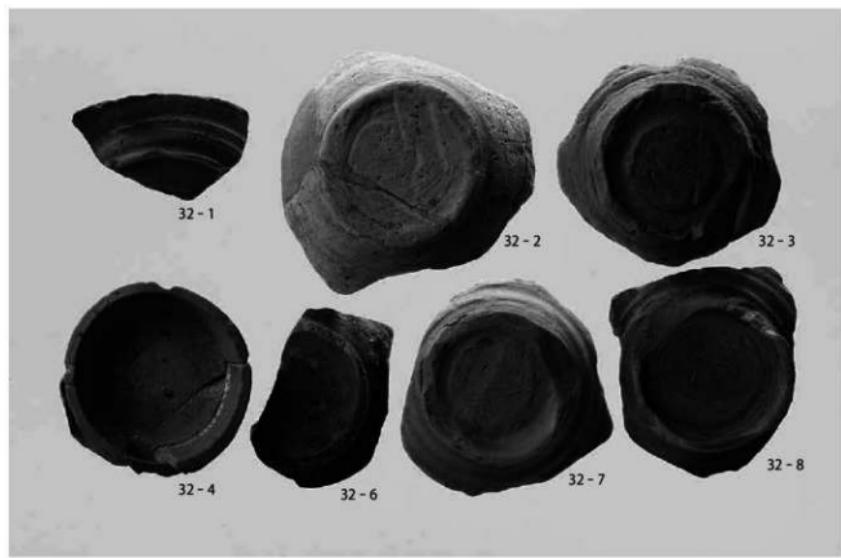
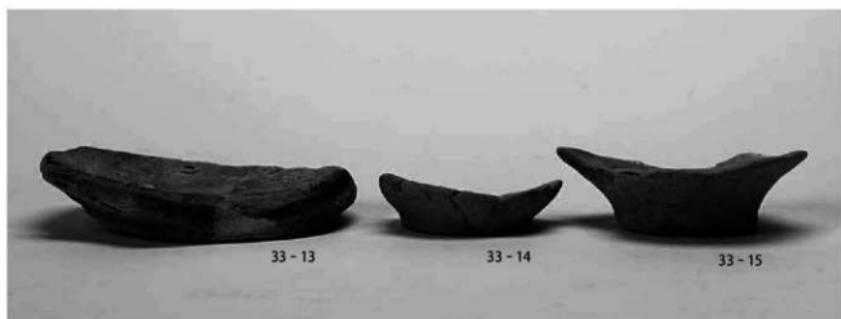
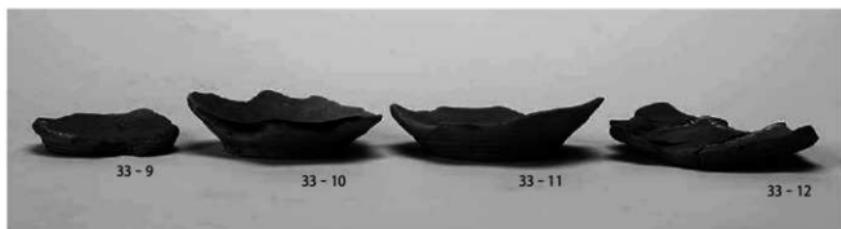


出土遺物 (14)

図版 45 角落し遺跡

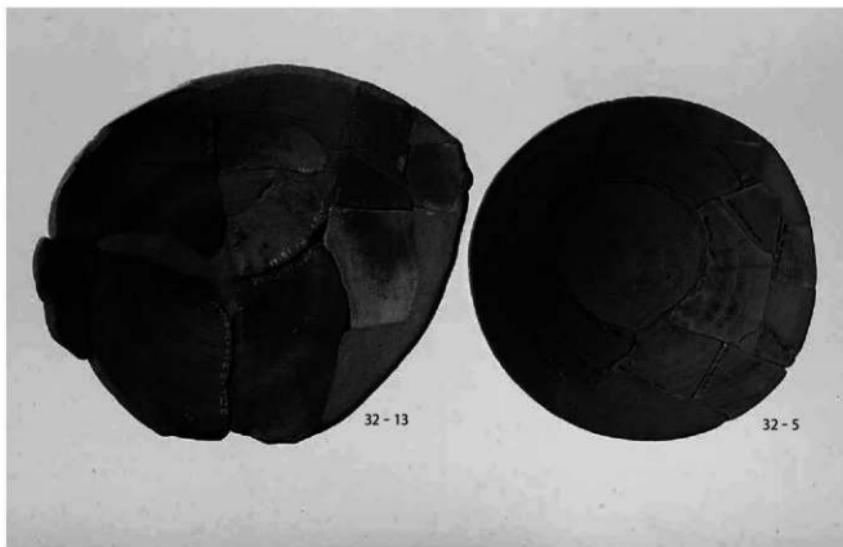
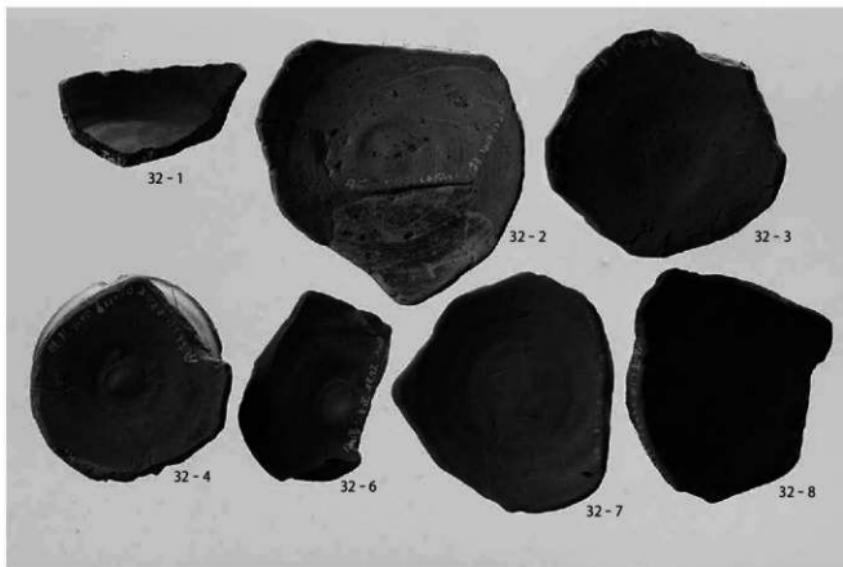


出土遺物 (15)

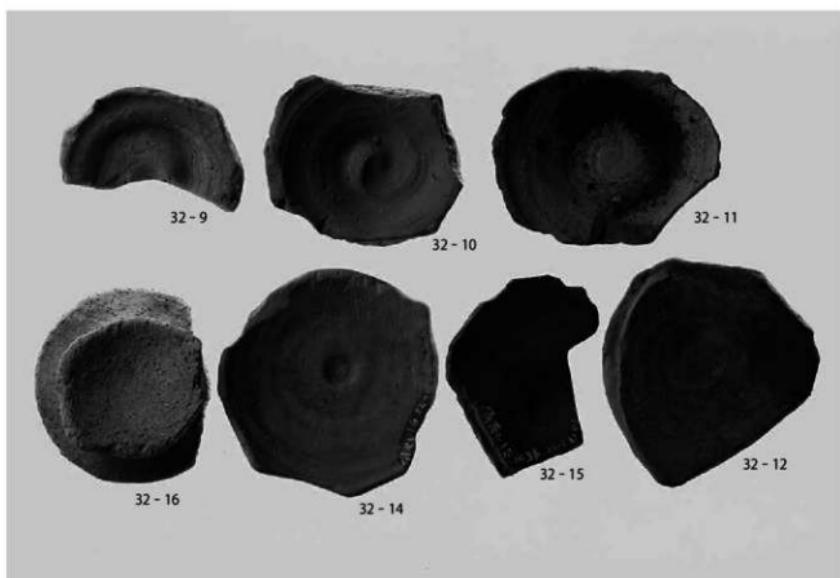
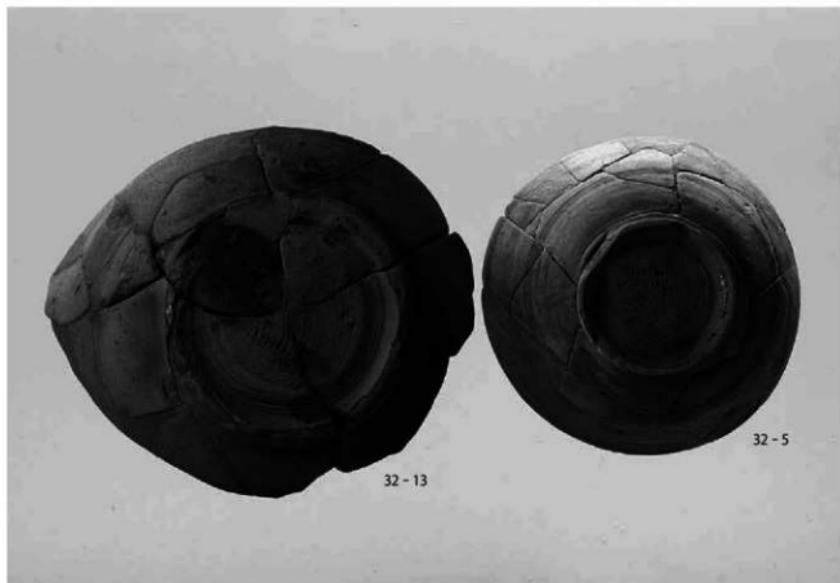


出土遺物 (16)

図版 47 角落し遺跡

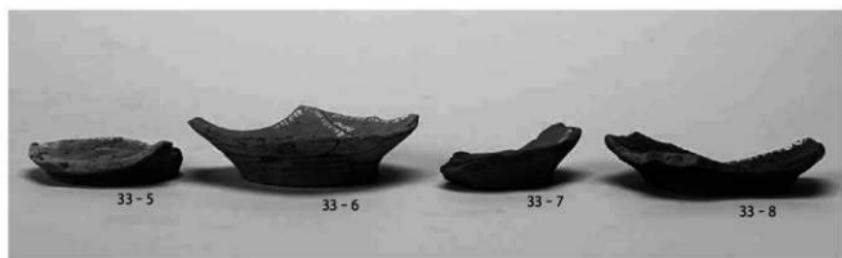
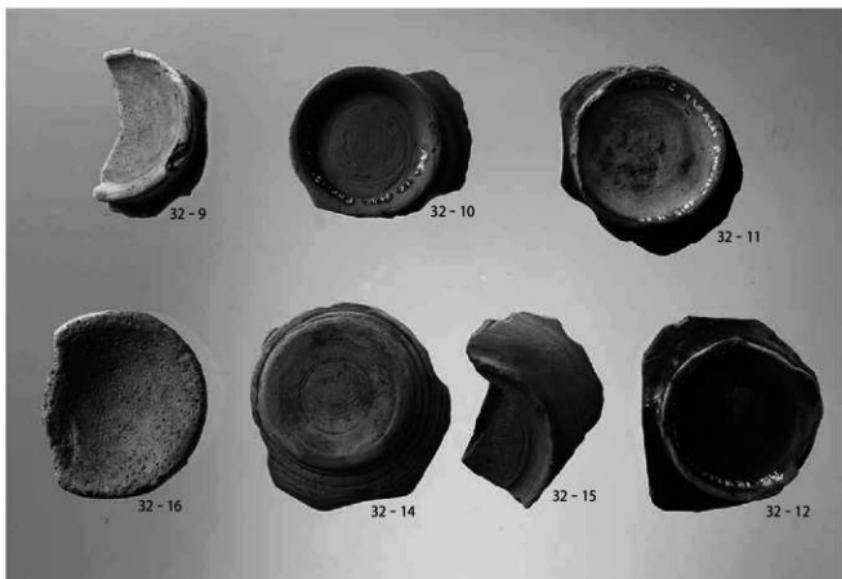


出土遺物 (17)

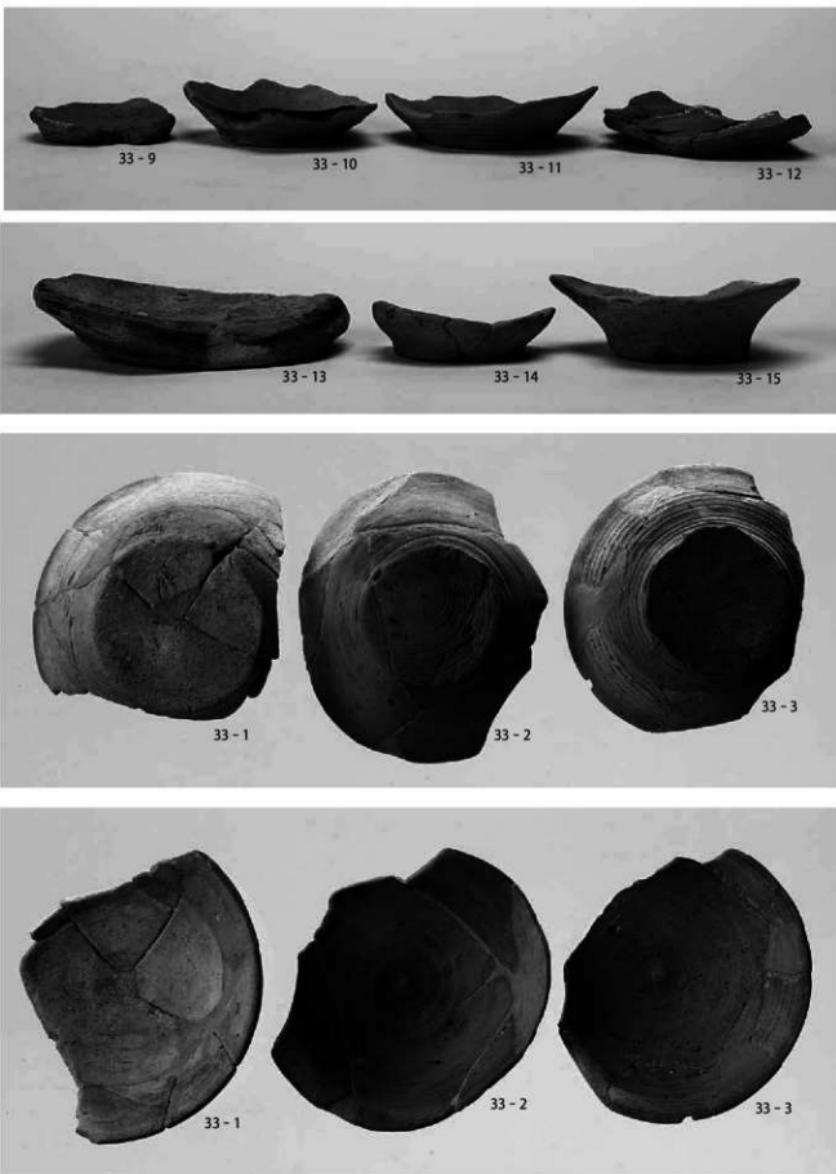


出土遺物 (18)

図版 49 角落し遺跡

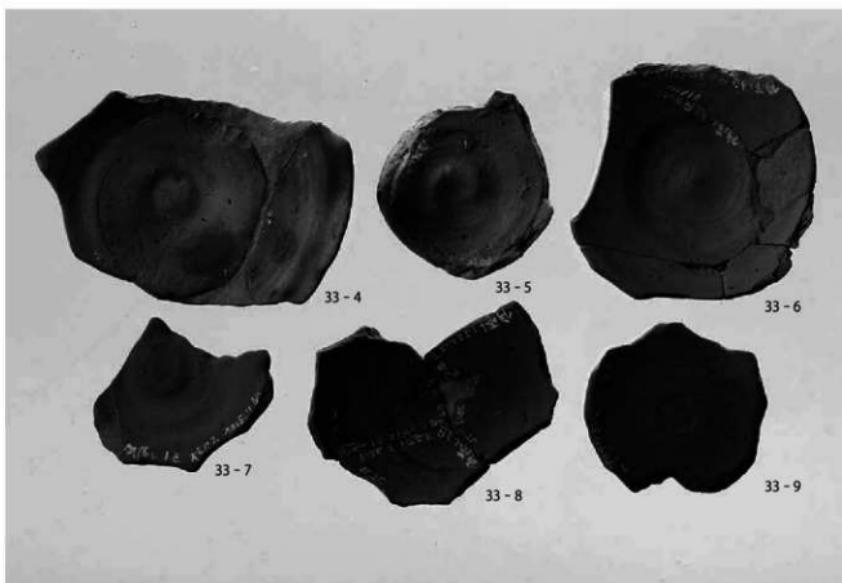
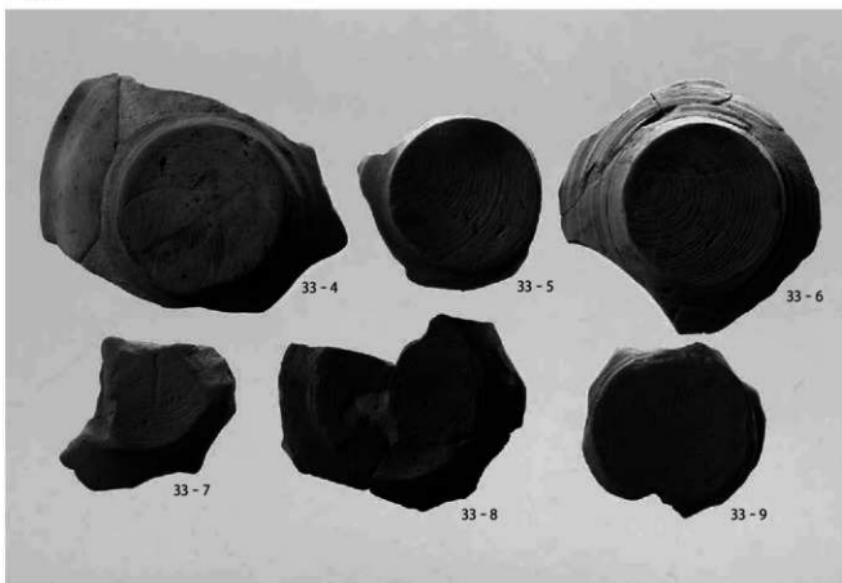


出土遺物 (19)

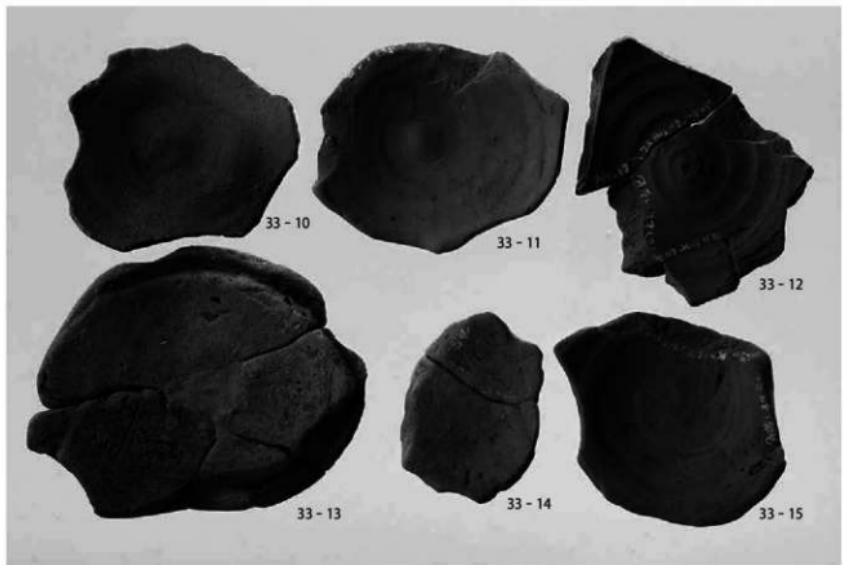
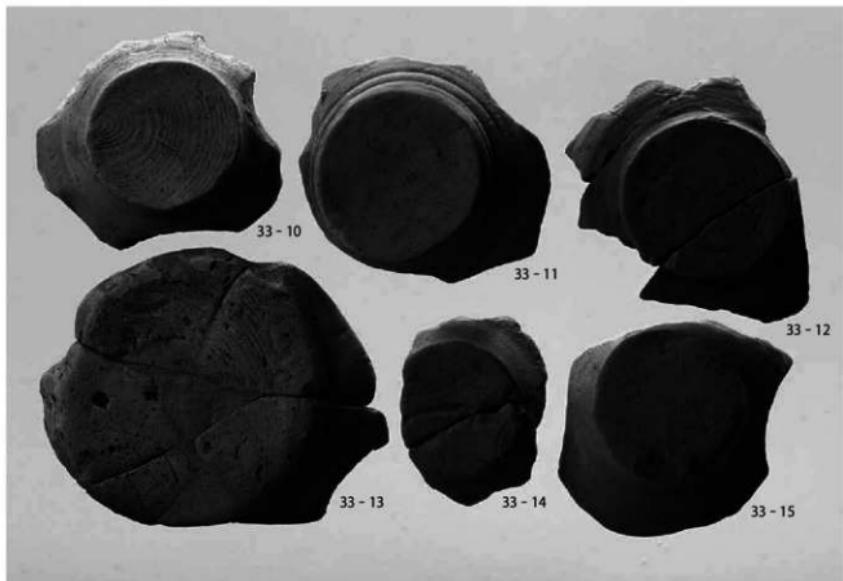


出土遺物 (20)

図版 51 角落し遺跡

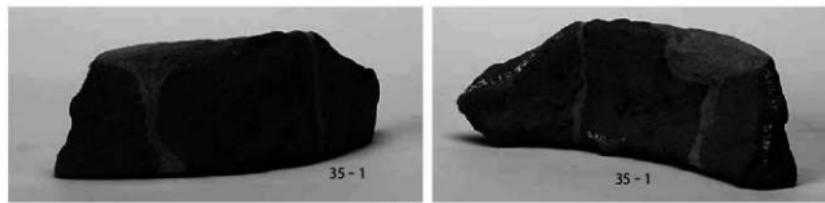
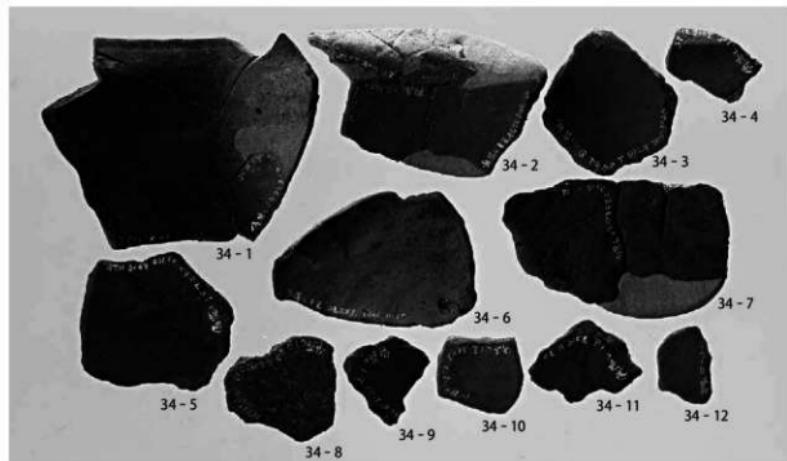
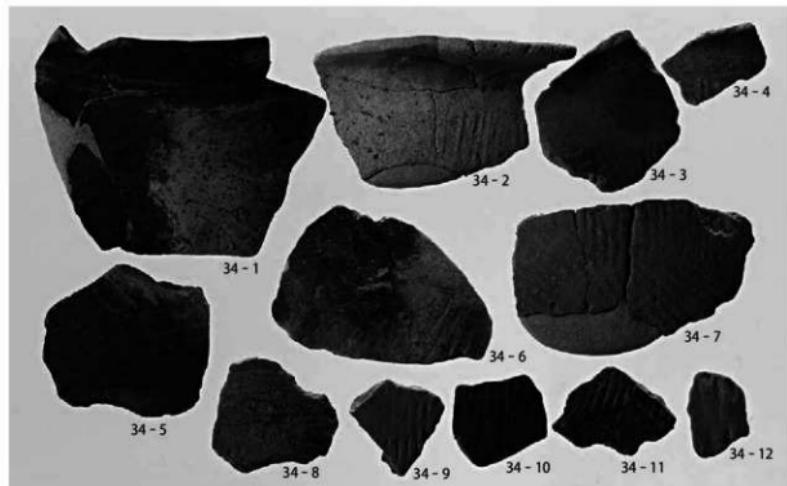


出土遺物 (21)

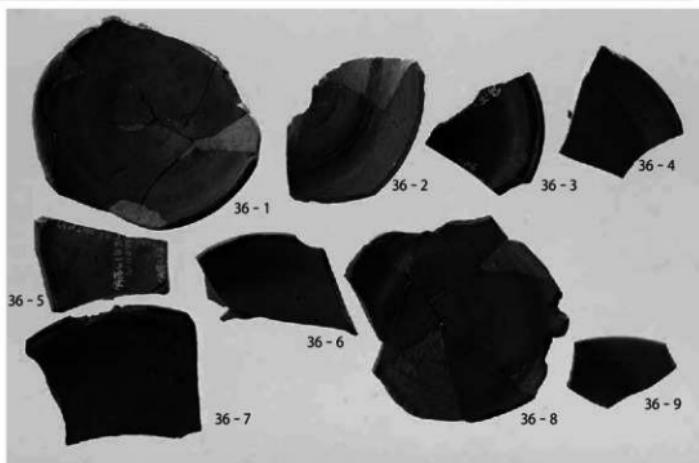
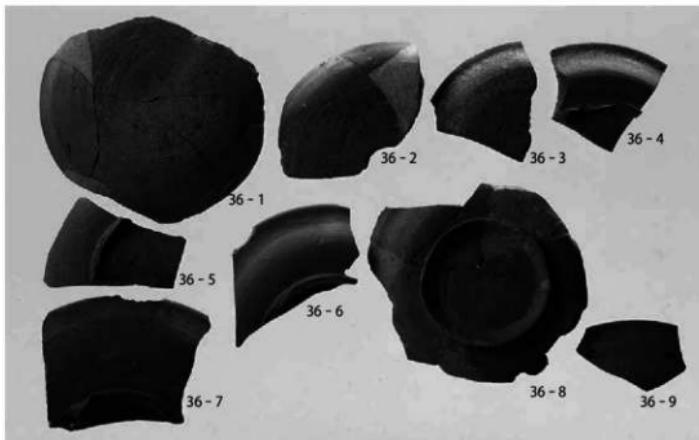
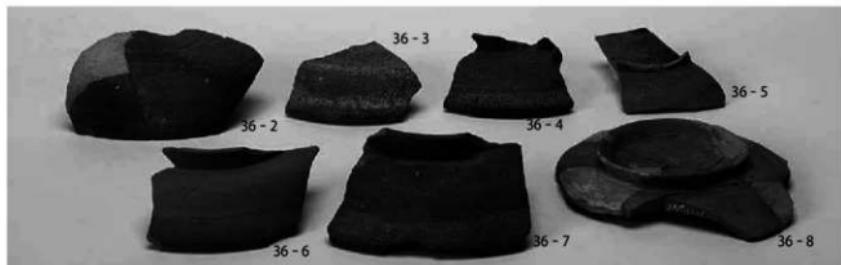


出土遺物 (22)

図版 53 角落し遺跡

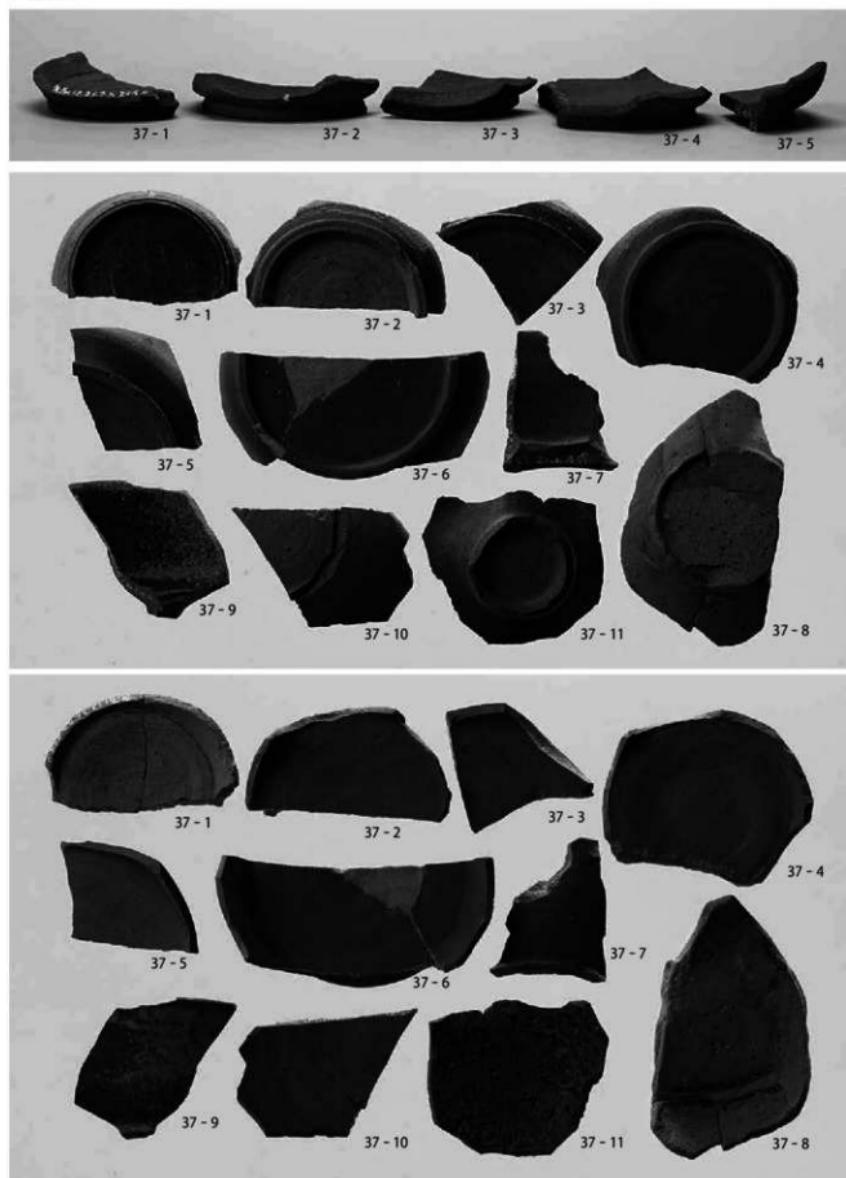


出土遺物 (23)

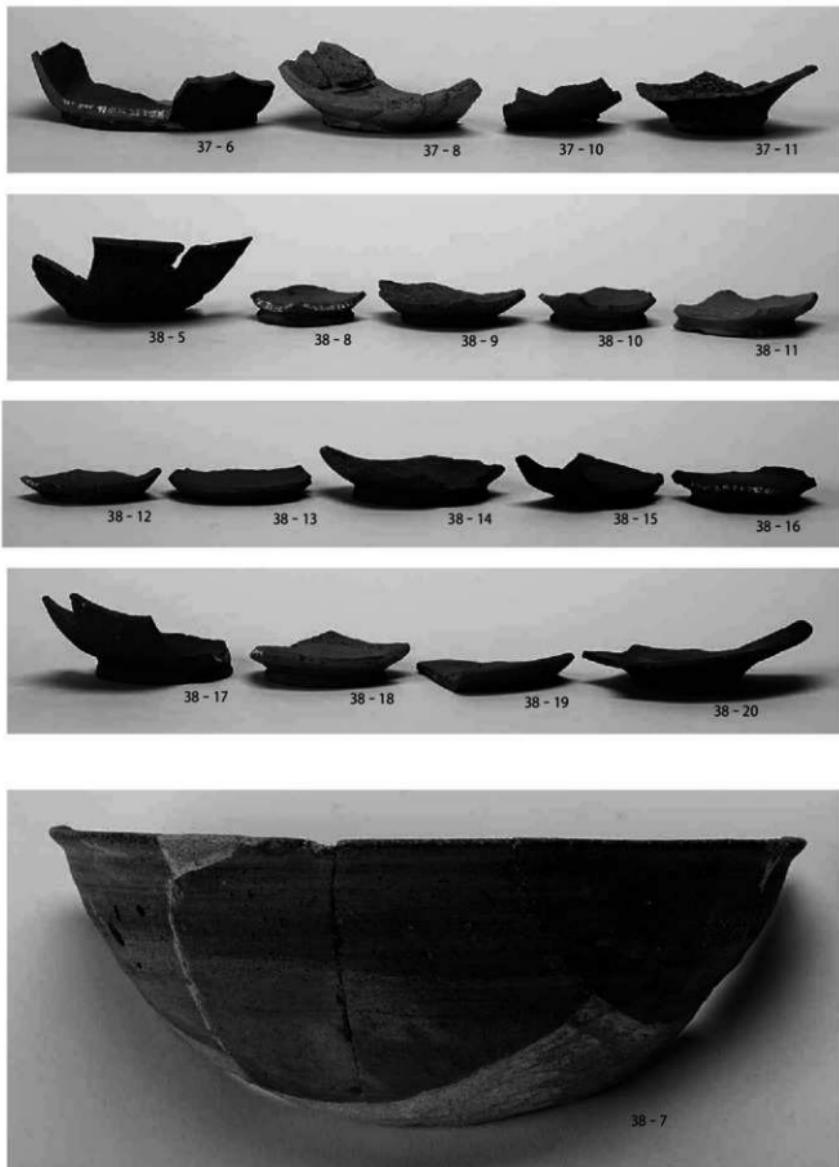


出土遺物 (24)

図版 55 角落し遺跡

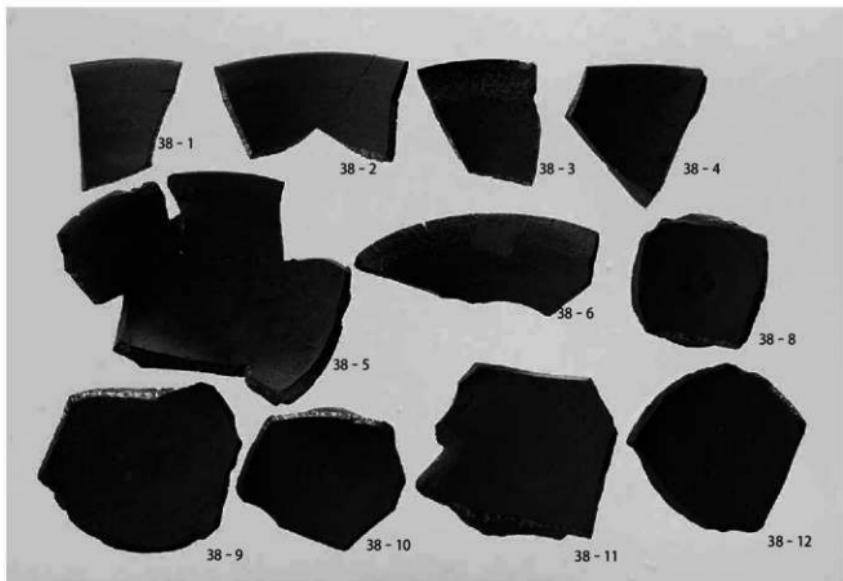
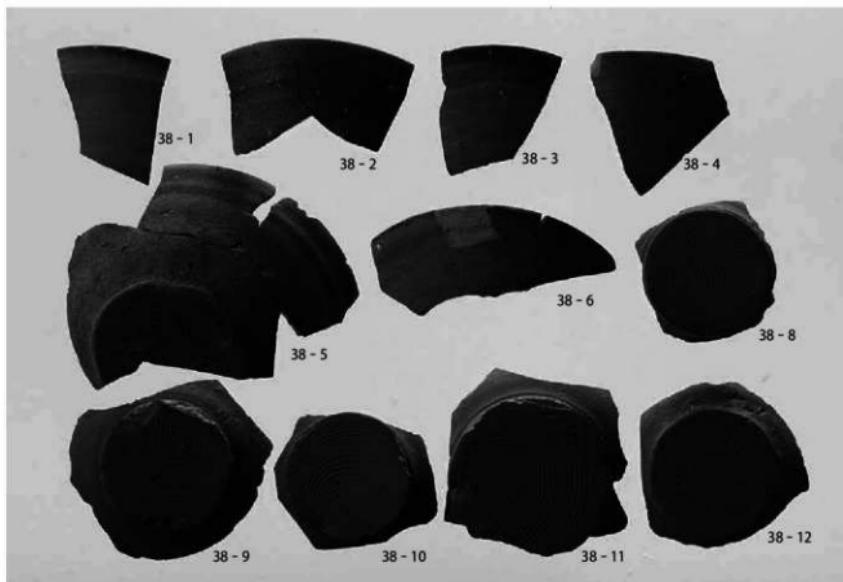


出土遺物 (25)

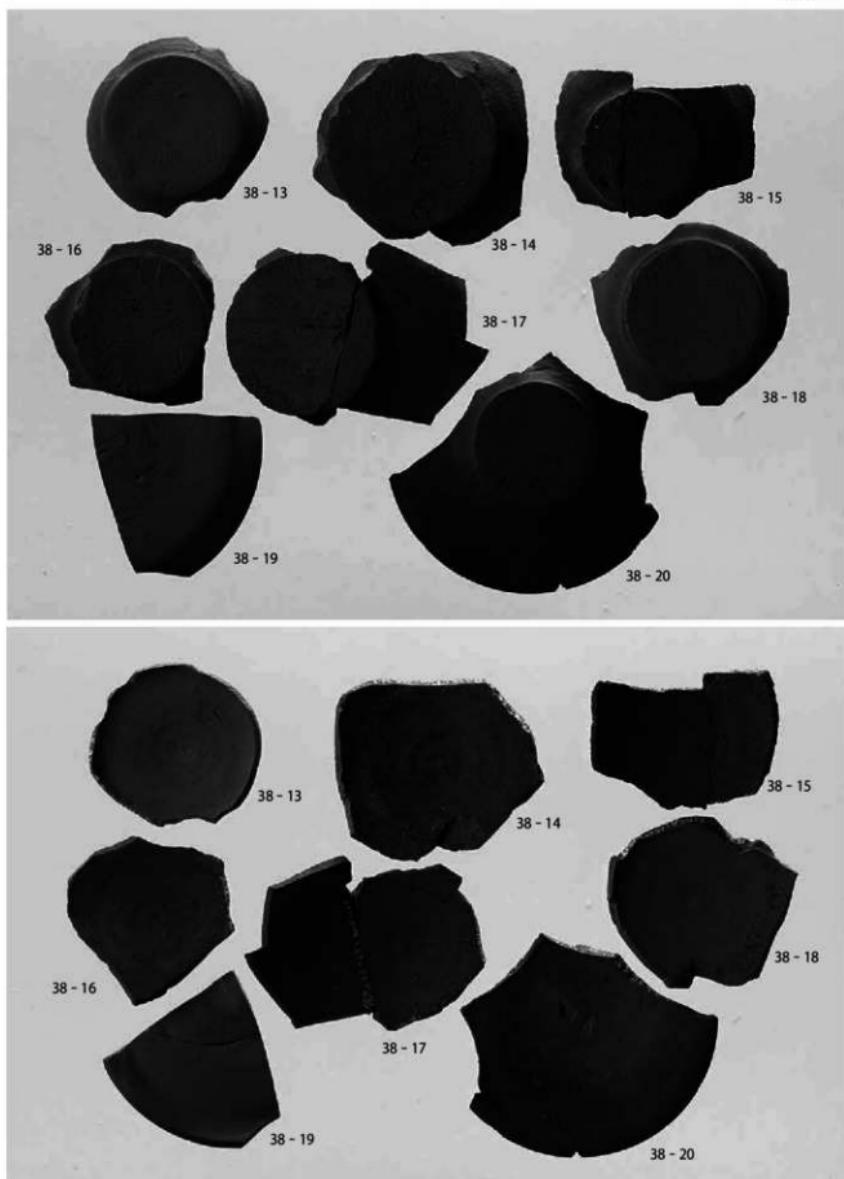


出土遺物 (26)

図版 57 角落し遺跡

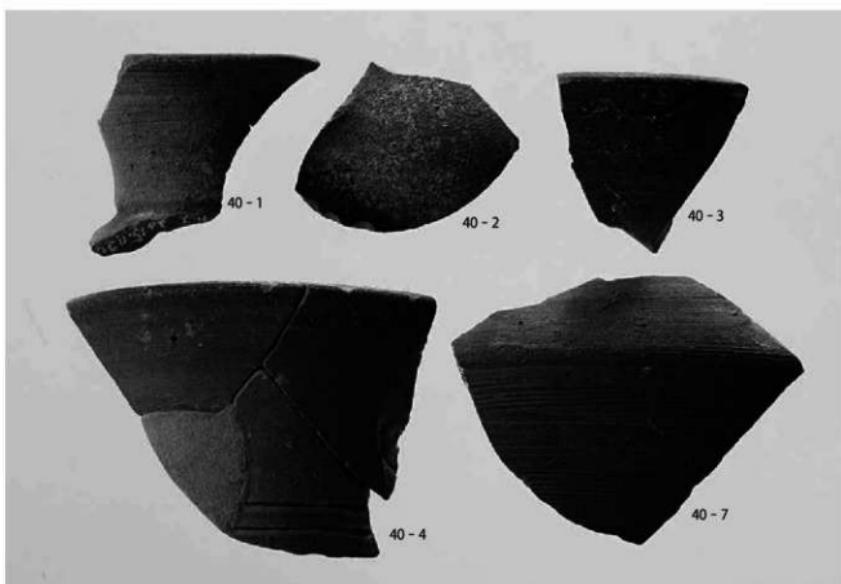
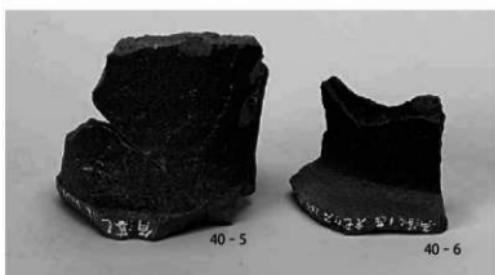
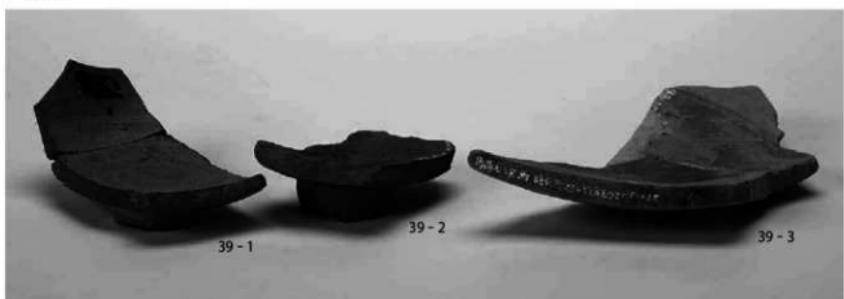


出土遺物 (27)

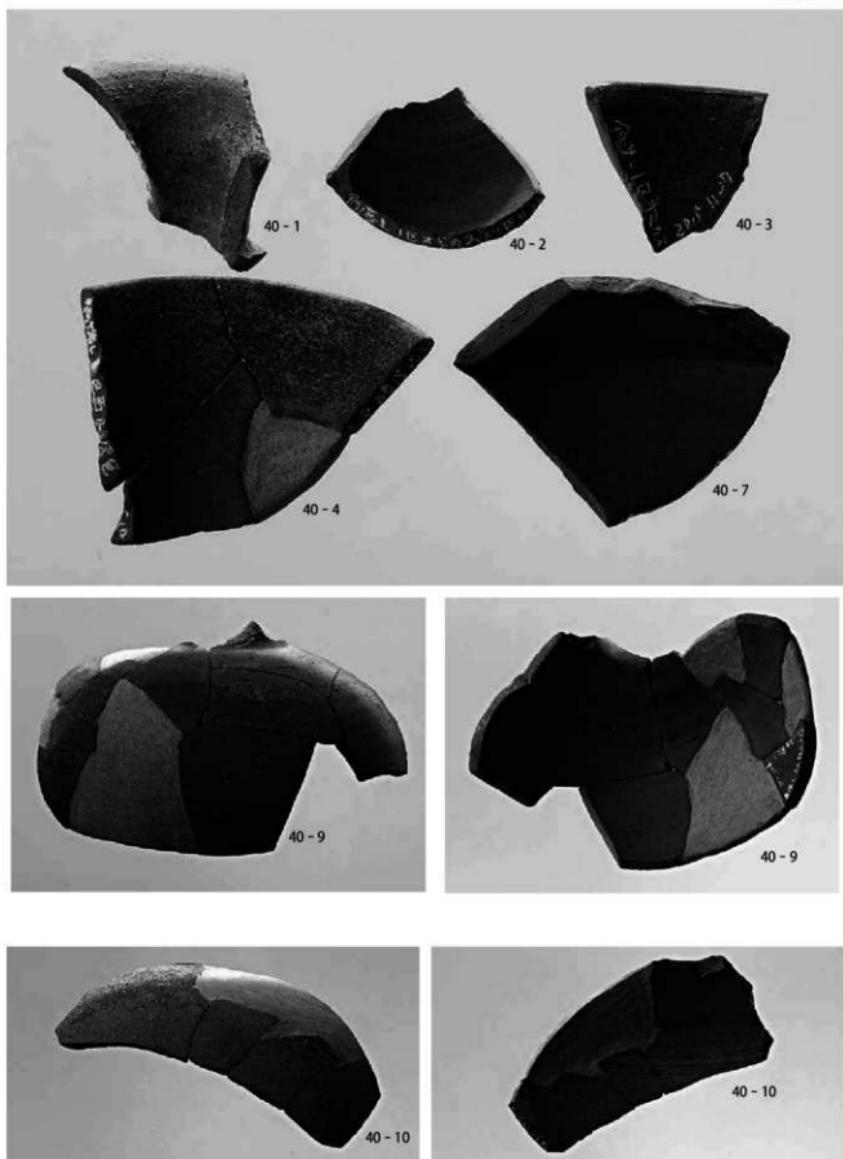


出土遺物 (28)

図版 59 角落し遺跡

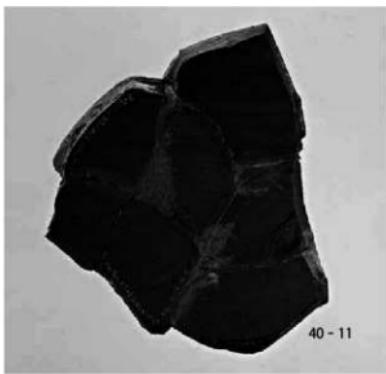
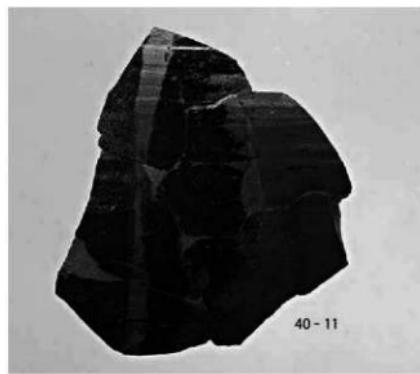


出土遺物 (29)

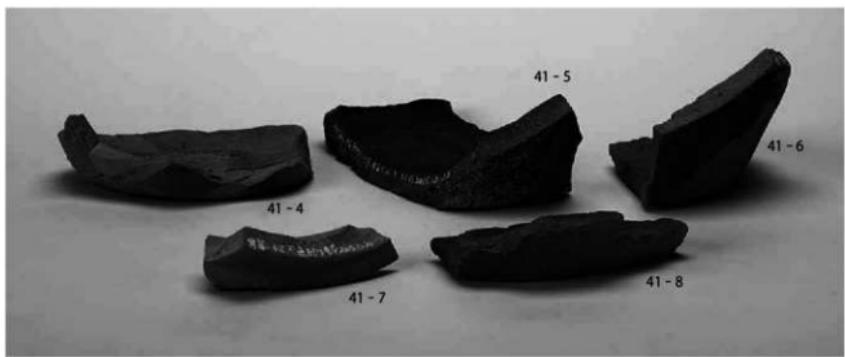
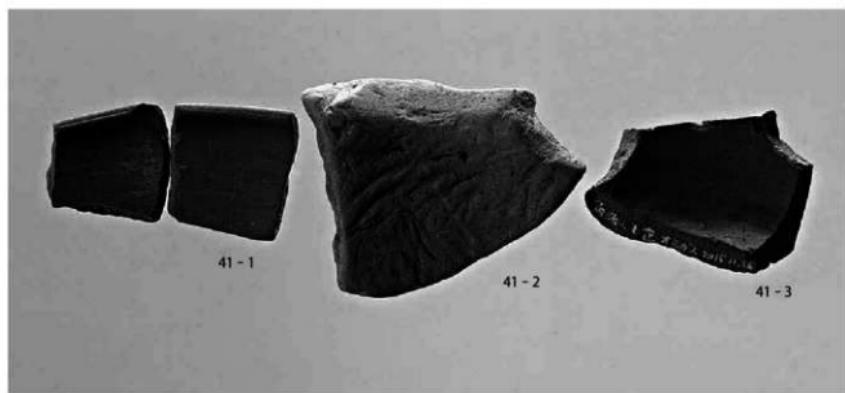
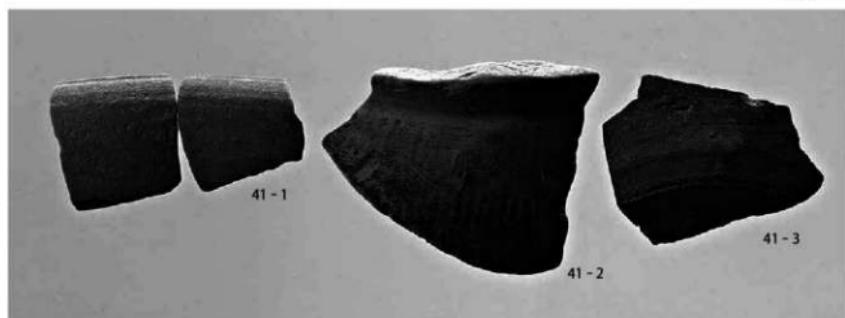


出土遺物 (30)

図版 61 角落し遺跡

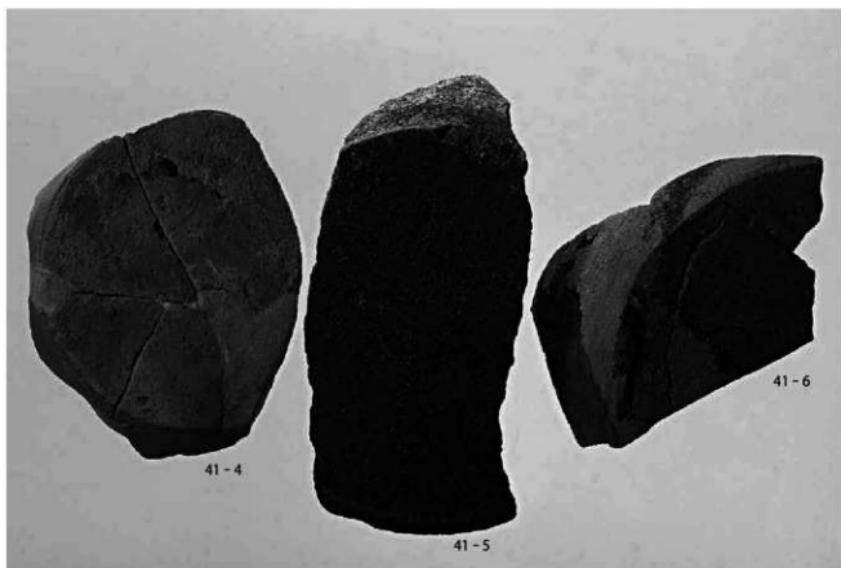
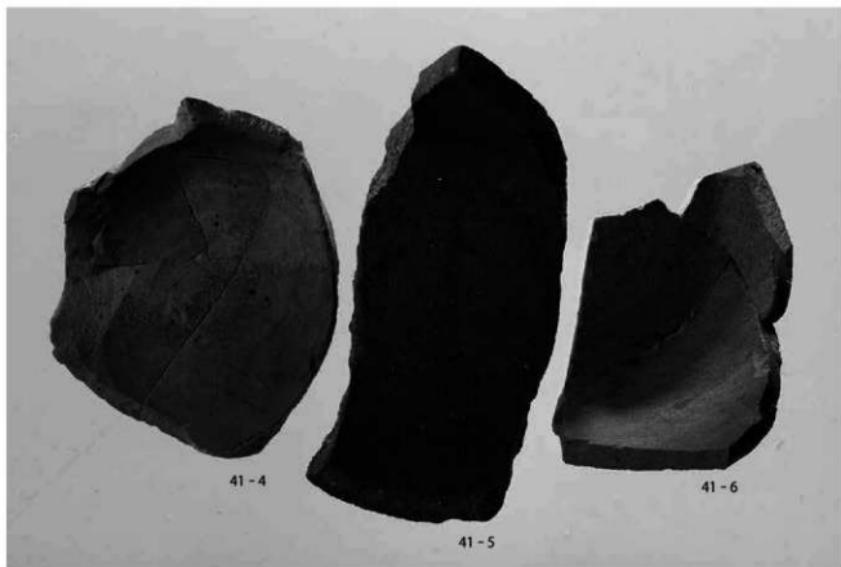


出土遺物 (31)

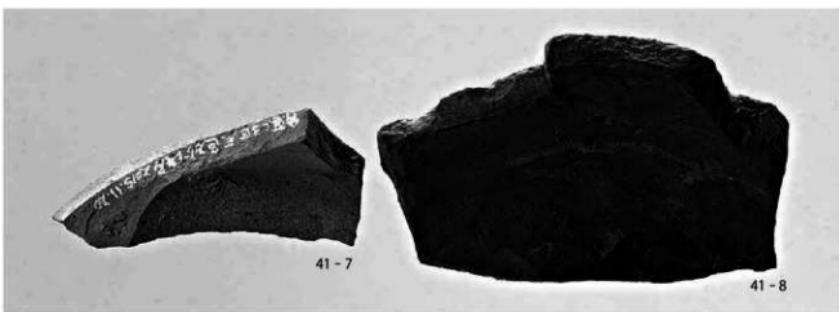
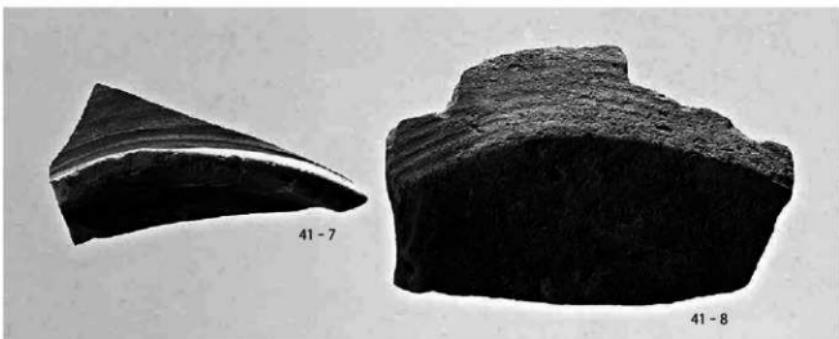


出土遺物 (32)

図版 63 角落し遺跡



出土遺物 (33)

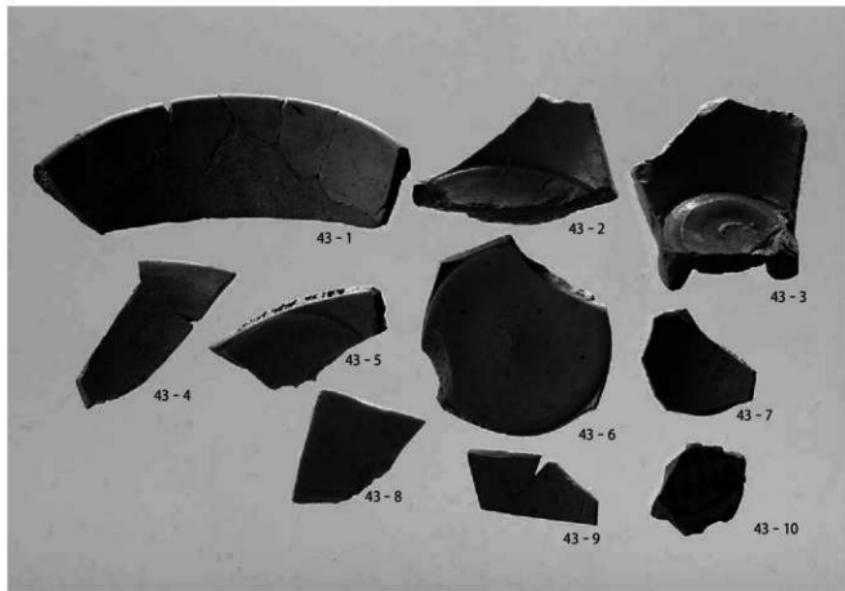
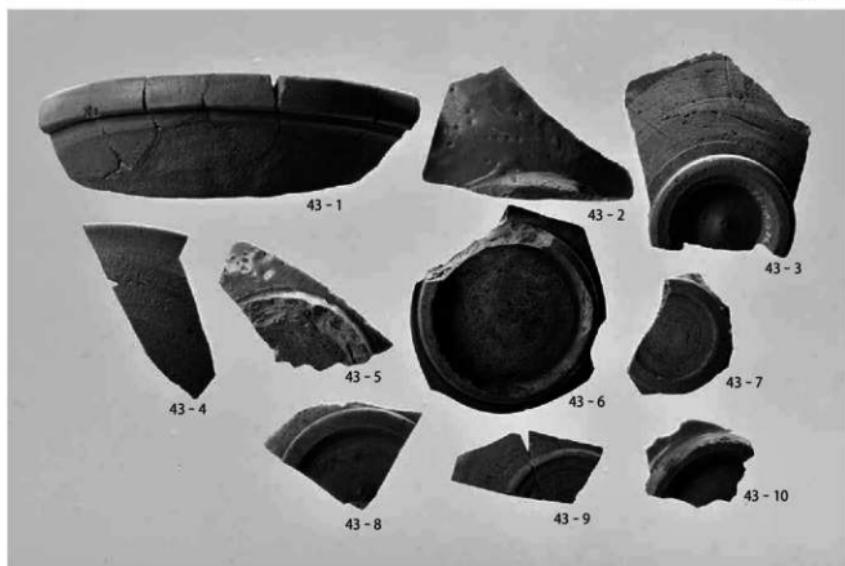


出土遺物 (34)

図版 65 角落し遺跡

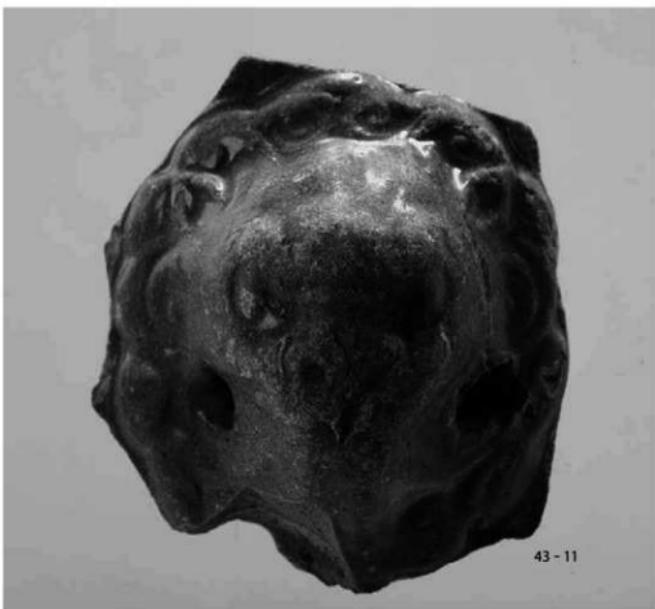


出土遺物 (35)

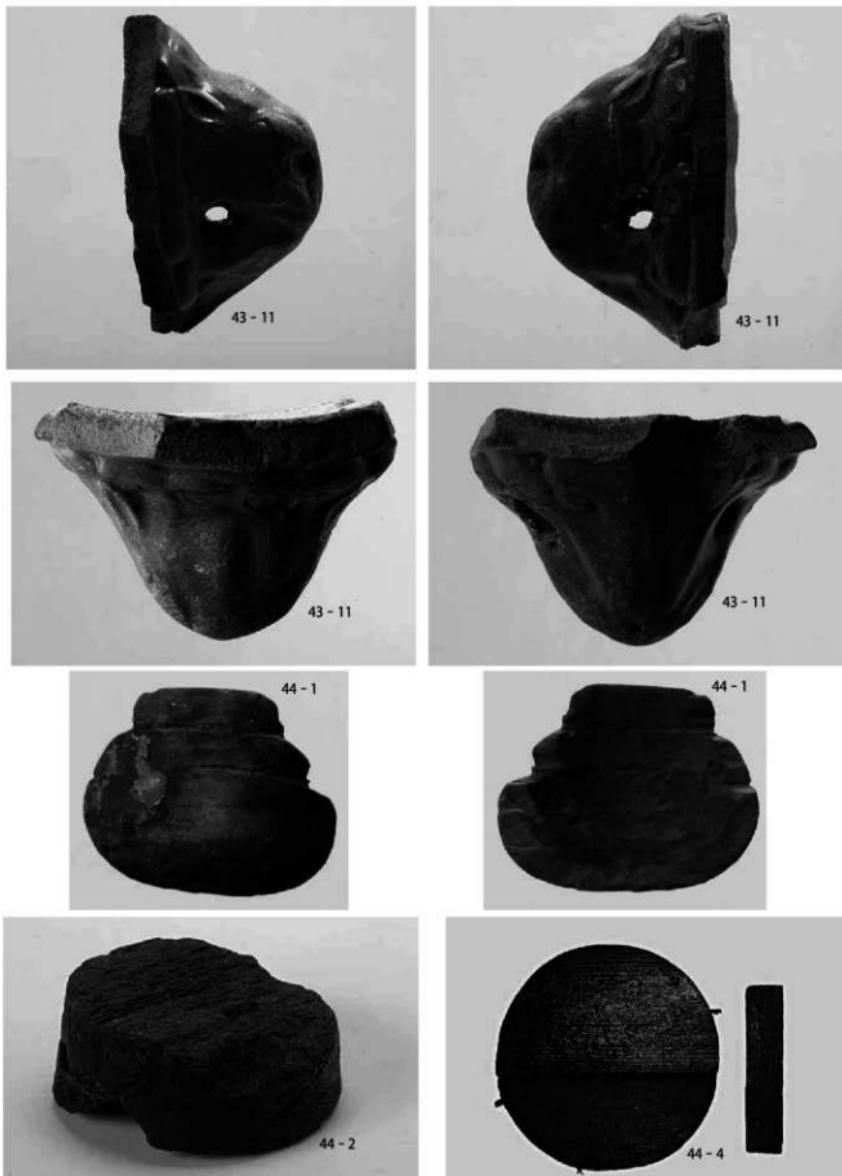


出土遺物 (36)

図版 67 角落し遺跡

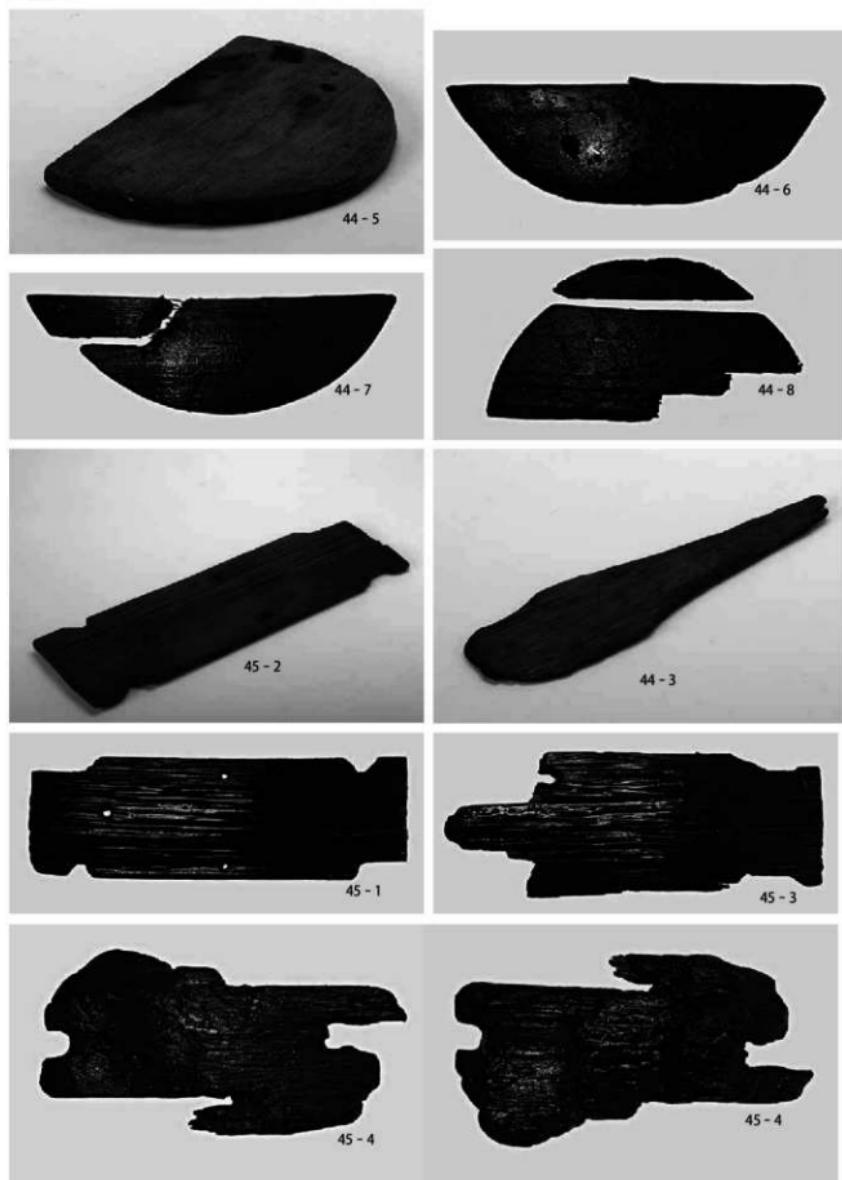


出土遺物 (37)

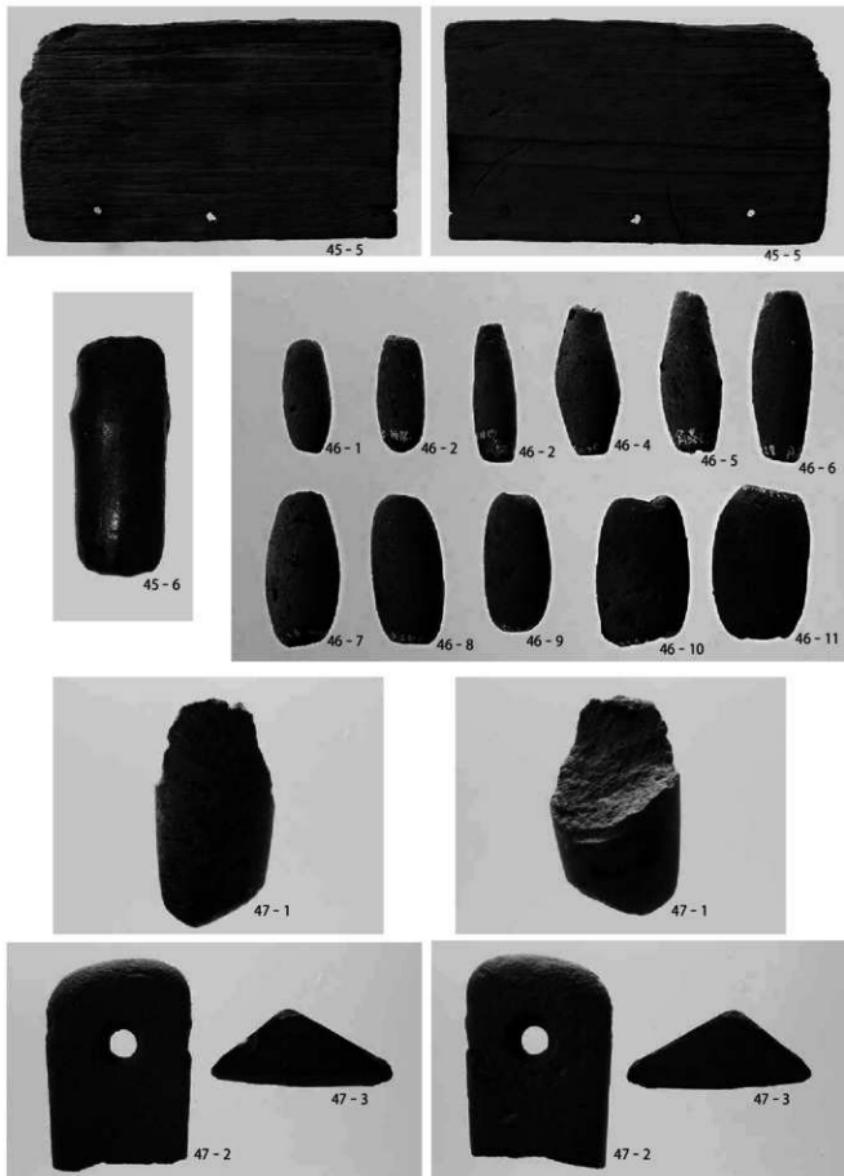


出土遺物 (38)

図版 69 角落し遺跡



出土遺物 (39)



出土遺物 (40)

図版 71 回り田遺跡



調査前塚状遺構（東から）



益田方面を臨む（北東から）



完掘状況(上空から)



浜田方面を臨む(南西から)

図版 73 回り田遺跡



調査前状況（北東から）



調査前状況（南西から）



調査前状況（東から）



調査状況（東から）



表土除去状況（東から）



表土除去状況（西から）

図版 75 回り田遺跡



平坦面表土除去後状況（南西から）



表土除去状況（東から）



塚状遺構 1 表土除去状況（東から）



塚状遺構 1 表土除去状況（南東から）



塚状遺構 1 磯散布状況（北西から）

図版 77 回り田遺跡



塚状遺構 1 北側土層堆積状況（北東から）



塚状遺構 1 西側土層堆積状況（北西から）



塚状遺構 1 盛土除去後状況（北西から）



塚状遺構 1 旧表土除去後状況（南西から）



塚状遺構 2 表土除去状況（北から）



塚状遺構 2 表土除去後状況（北から）

図版 79 回り田遺跡



塚状遺構 2 表土除去後状況（西から）



塚状遺構 2 表土除去後状況（南東から）



塚状遺構 2 表土除去後状況（西から）



塚状遺構 2 西側土層堆積状況（西から）



塚状遺構 2 西側土層堆積状況（南西から）



塚状遺構 2 土層堆積状況（南東から）

図版 81 回り田遺跡



塚状遺構 2 東側土層堆積状況（東から）



塚状遺構 2 盛土除去後状況（西から）



塚状遺構 2 旧表土除去後状況（西から）



平坦面土層堆積状況（西から）

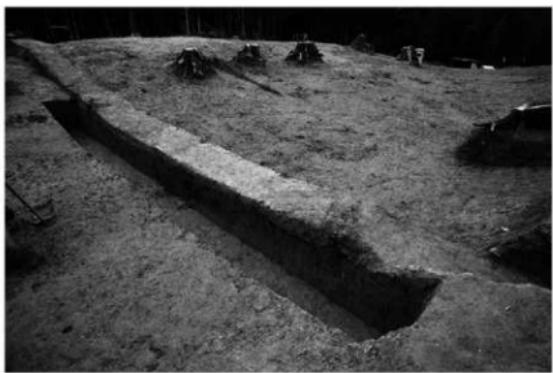


平坦面土層堆積状況（南東から）



平坦面土層堆積状況（北東から）

図版 83 回り田遺跡



平坦面土層堆積状況（北から）



平坦面完掘状況（南西から）



平坦面完掘状況（西から）



溝状遺構 1 検出状況（北東から）



平坦面と溝状遺構 2 完掘状況（南西から）



溝状遺構 1 完掘状況（南西から）

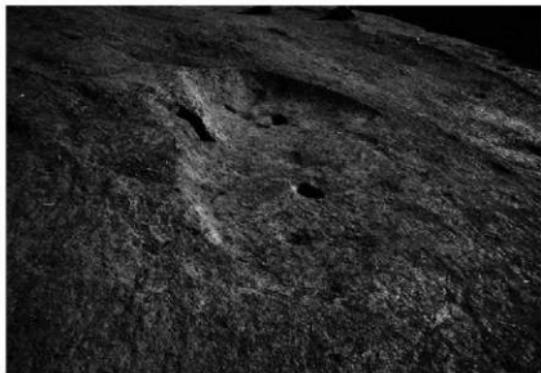
図版 85 回り田遺跡



溝状遺構 2 完掘状況（南西から）



SX01 土層堆積状況（北東から）



SX01 完掘状況（西から）



近世山陰道跡（馬橋地区）を臨む（南東から）



同上（西から）

図版 87 近世山陰道跡（馬橋地区）



近世山陰道跡（馬橋地区）を臨む（南から）



石垣 1・2 検出状況（南東から）



近世山陰道路（馬橋地区）調査前状況（西から）



石敷き検出状況（東から）

図版 89 近世山陰道跡（馬橋地区）



石敷き検出状況（北から）



石敷き検出状況（東から）



石敷き検出状況（南東から）



石敷き検出状況（東から）

図版 91 近世山陰道跡（馬橋地区）



石敷き検出状況（東から）



石敷き検出状況（西から）



石敷き下部検出状況（東から）



石敷き下部完掘状況（南東から）

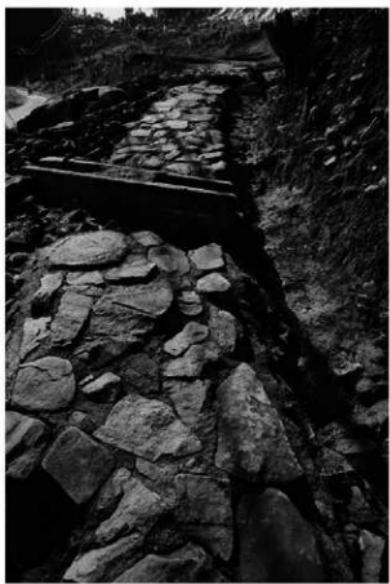
図版 93 近世山陰道跡（馬橋地区）



石敷き完掘状況（東から）



石敷き完掘状況（東から）



石敷き完掘状況（東から）



石敷き完掘状況（東から）



石敷き完掘状況（東から）



石敷き完掘状況（東から）

図版 95 近世山陰道路（馬橋地区）



石敷き・溝跡完掘状況（東から）



石敷き・溝跡完掘状況（東から）



石敷き完掘状況（北から）



石敷き完掘状況（北から）

図版 97 近世山陰道路（馬橋地区）



溝跡 1・石垣 4 完掘状況（南東から）



溝跡 1 土層堆積状況（南東から）



溝跡 2 検出状況（東から）



石敷き周辺土層堆積状況（北東から）

図版 99 近世山陰道路（馬橋地区）



石敷き及び溝跡 1・2 検出状況（南東から）



溝跡 1・石垣 4 検出状況（南東から）



石垣 4 検出状況（南西から）



石垣 4 完掘状況（南東から）

図版 101 近世山陰道跡（馬橋地区）



石垣 4 検出状況（南西から）



石垣 4 上部・平坦面 5 土層堆積状況（南から）



石垣 1 完掘状況（東から）



石垣 1 完掘状況（南から）

図版 103 近世山陰道路（馬橋地区）



石垣 1・平坦面 1 完掘状況（南西から）



石垣 2・平坦面 2 完掘状況（南から）



石垣 3 完掘状況（南東から）



石垣 3 完掘状況（南西から）

図版 105 近世山陰道跡（馬橋地区）



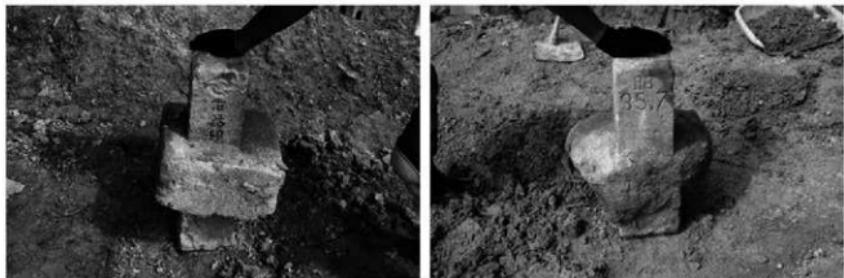
平坦面 5 完掘状況（西から）



水路（石敷き）検出状況（南から）



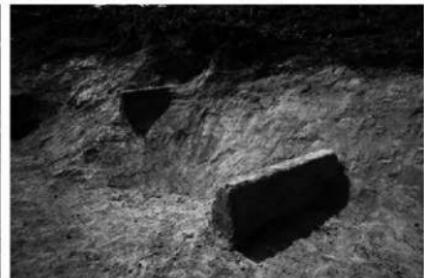
石敷き完掘検出状況（南東から）



標柱出土状況

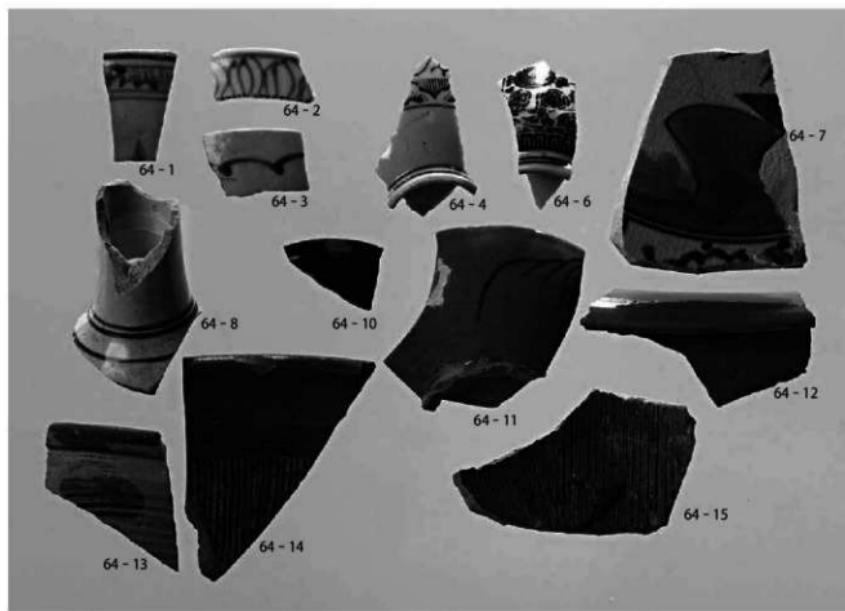


コンクリート壁検出状況（西から）

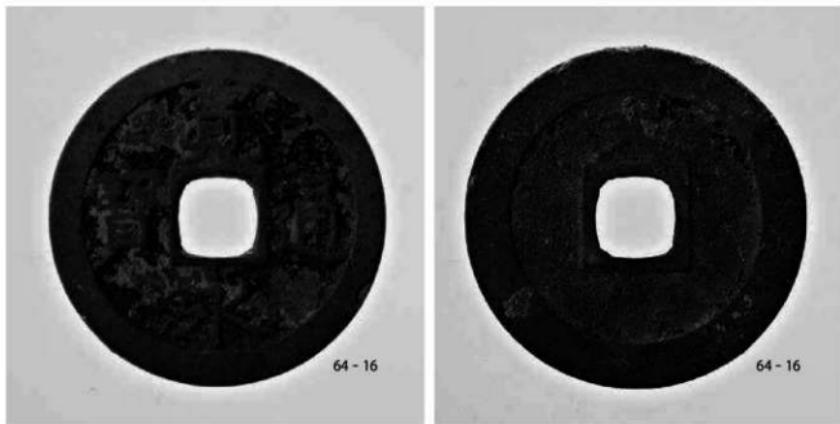
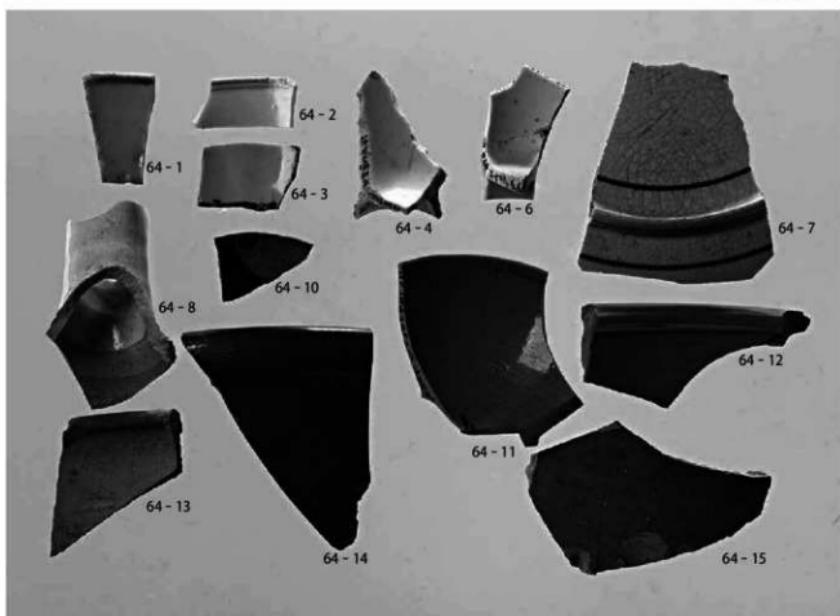


コンクリート壁検出状況（南東から）

図版 107 近世山陰道跡(馬橋地区)



出土遺物(1)



出土遺物 (2)

図版 109 神出西遺跡



神出西遺跡 1 区から 3 区を臨む（北東から）



神出西遺跡 1 区から 3 区を臨む（北西から）



神出西遺跡 4 区完掘状況（北から）

図版 111 神出西遺跡



神出西遺跡 1 区から 3 区を臨む（上から）



神出西遺跡 1 区から 3 区を臨む（南西から）



神出西遺跡 2区・3区北西壁土層堆積状況（北東から）

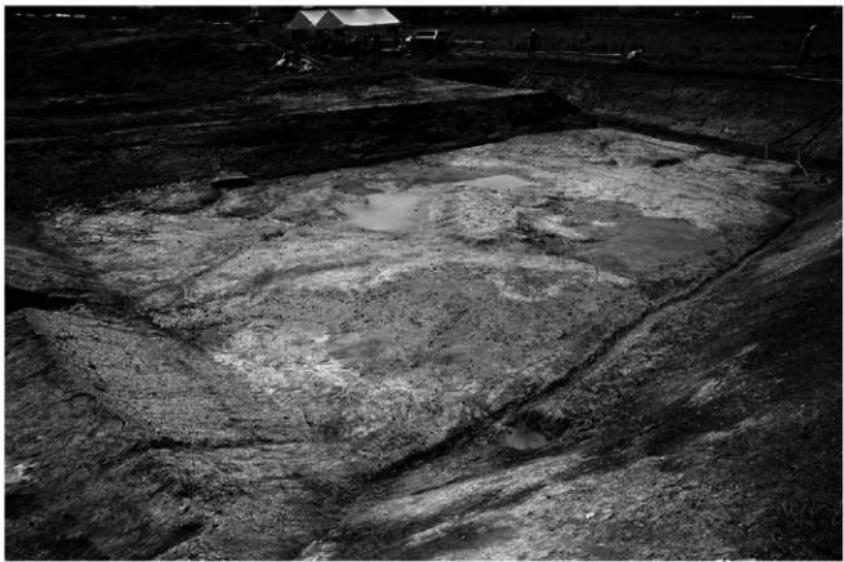


神出西遺跡 4区東壁土層堆積状況（西から）

図版 113 神出西遺跡



神出西遺跡 1 区完掘状況（北西から）



神出西遺跡 3 区完掘状況（北東から）



神出西遺跡 4 区完掘状況（南東から）



神出西遺跡 4 区完掘状況（北から）

図版 115 神出西遺跡



神出西遺跡 SD01 検出状況（南東から）



神出西遺跡 SD01 土層堆積状況（北西から）



神出西遺跡 SD01 遺物出土状況（北から）



神出西遺跡 SD01 調査状況（南東から）

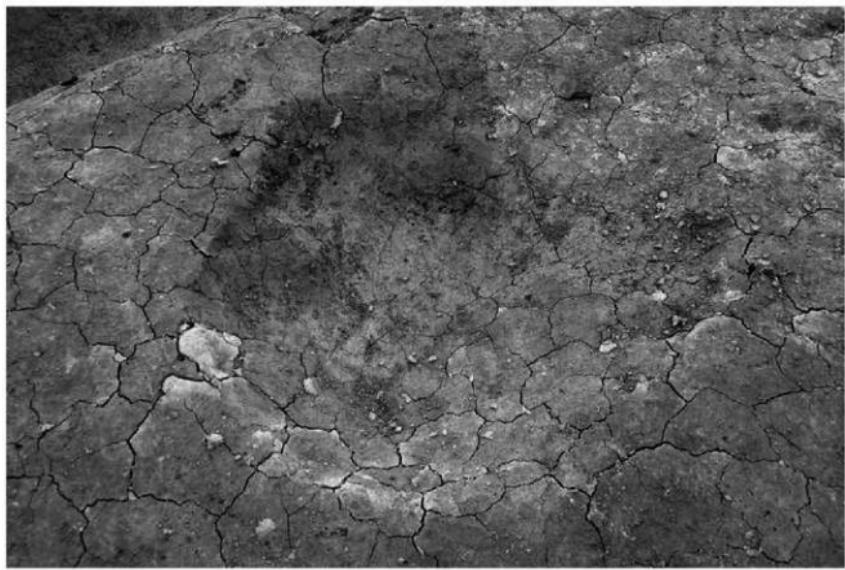


神出西遺跡 SD01 完掘状況（北西から）

図版 117 神出西遺跡



神出西遺跡 SKO1 土層堆積状況（北西から）



神出西遺跡 SKO1 完掘状況（南東から）



神出西遺跡 SD02 調査状況（東から）



神出西遺跡 SD02 完掘状況（南西から）

図版 119 神出西遺跡



神出西遺跡 SD02 完掘状況（西から）



神出西遺跡 SD02 完掘状況（東から）



神出西遺跡 SD02 遺物出土状況（南東から）



神出西遺跡区 SD02 遺物出土状況（上から）

図版 121 神出西遺跡



神出西遺跡 SD02 遺物出土状況（南から）



神出西遺跡 SD02 検出状況（西から）



神出西遺跡 SD02 遺物出土状況（北東から）



神出西遺跡 SD02 土層堆積状況（東から）



神出西遺跡 SD02 完掘状況（上から）



神出西遺跡 SD03・04 完掘状況（南東から）



神出西遺跡 SD03・04 完掘状況（南東から）

図版 123 神出西遺跡



神出西遺跡 SDO3・SDO4 土層堆積状況（南東から）



神出西遺跡 SDO4 遺物出土状況（南東から）



神出西遺跡 SDO4 遺物出土状況（上から）



神出西遺跡旧河道遺物出土状況（南東から）



神出西遺跡旧河道遺物出土状況（南東から）

図版 125 神出西遺跡



神出西遺跡旧河道土層堆積状況（南東から）



神出西遺跡旧河道遺物出土状況（北東から）

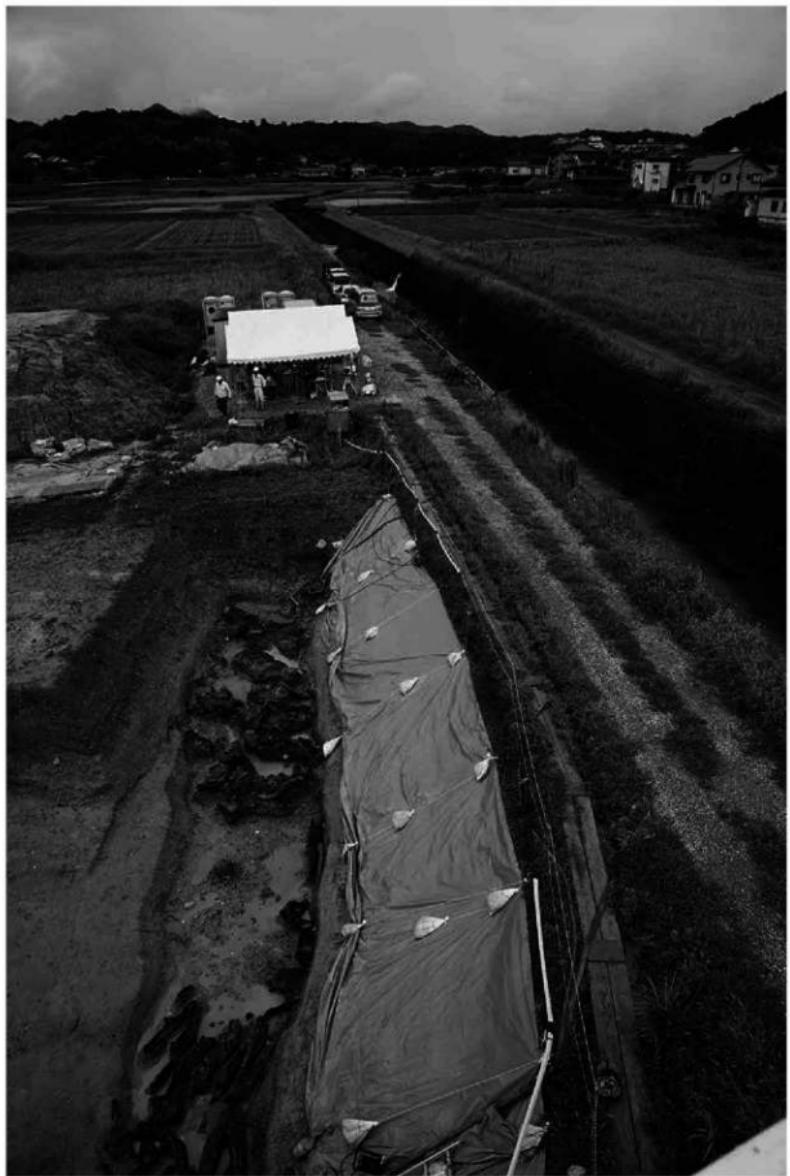


神出西遺跡旧河道遺物出土状況（南東から）



神出西遺跡旧河道遺物出土状況（北東から）

図版 127 神出西遺跡



神出西遺跡旧河道遺物と遠田川（北西から）



神出西遺跡 3区調査状況（南西から）

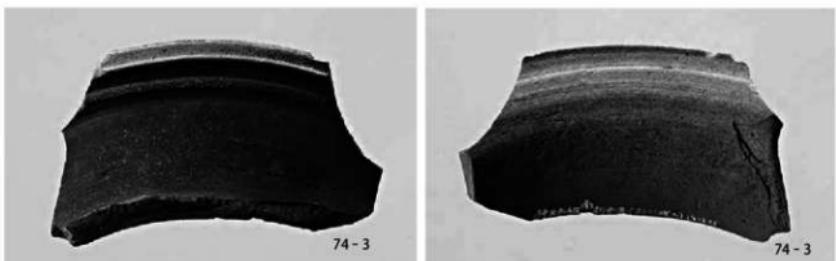


神出西遺跡旧河道と遠田川（南東から）

図版 129 神出西遺跡

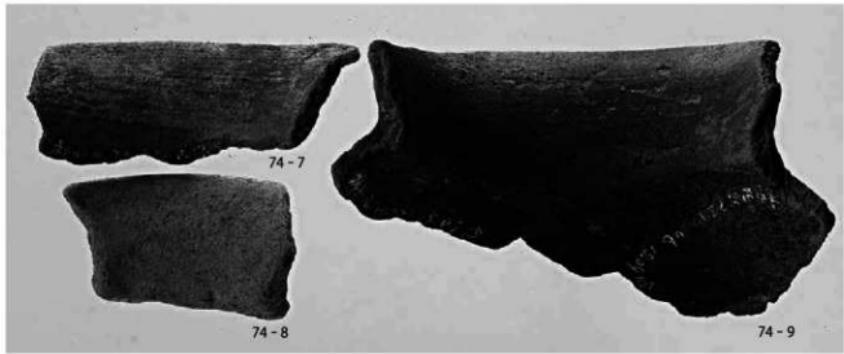
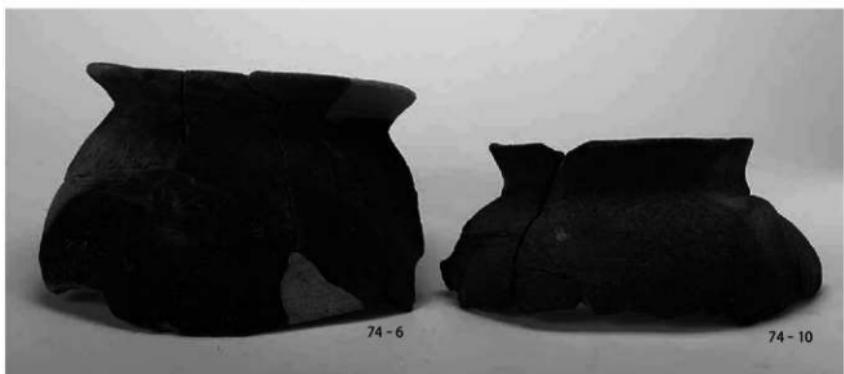


出土遺物 (1)

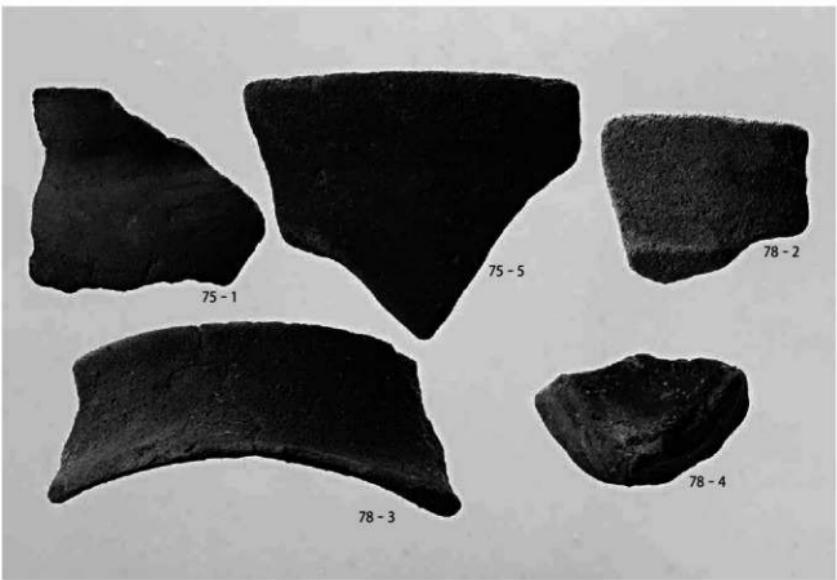


出土遺物 (2)

図版 131 神出西遺跡

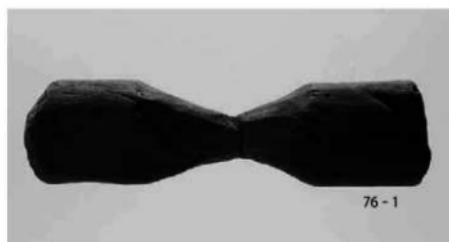
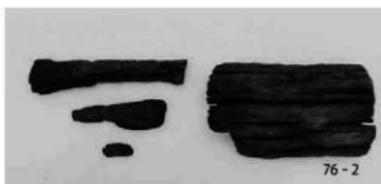
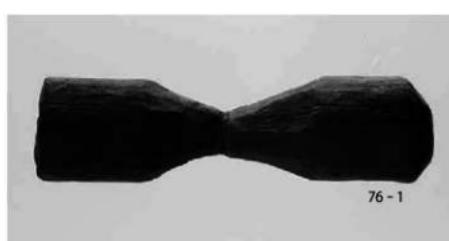
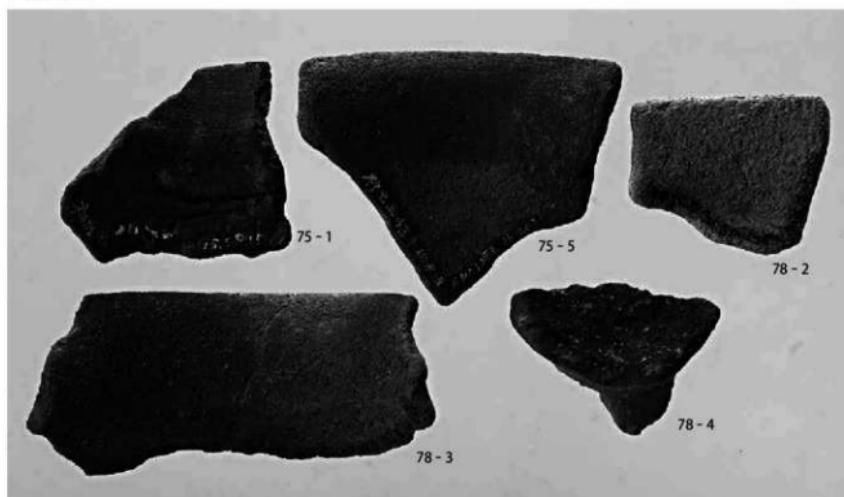


出土遺物 (3)



出土遺物(4)

図版 133 神出西遺跡

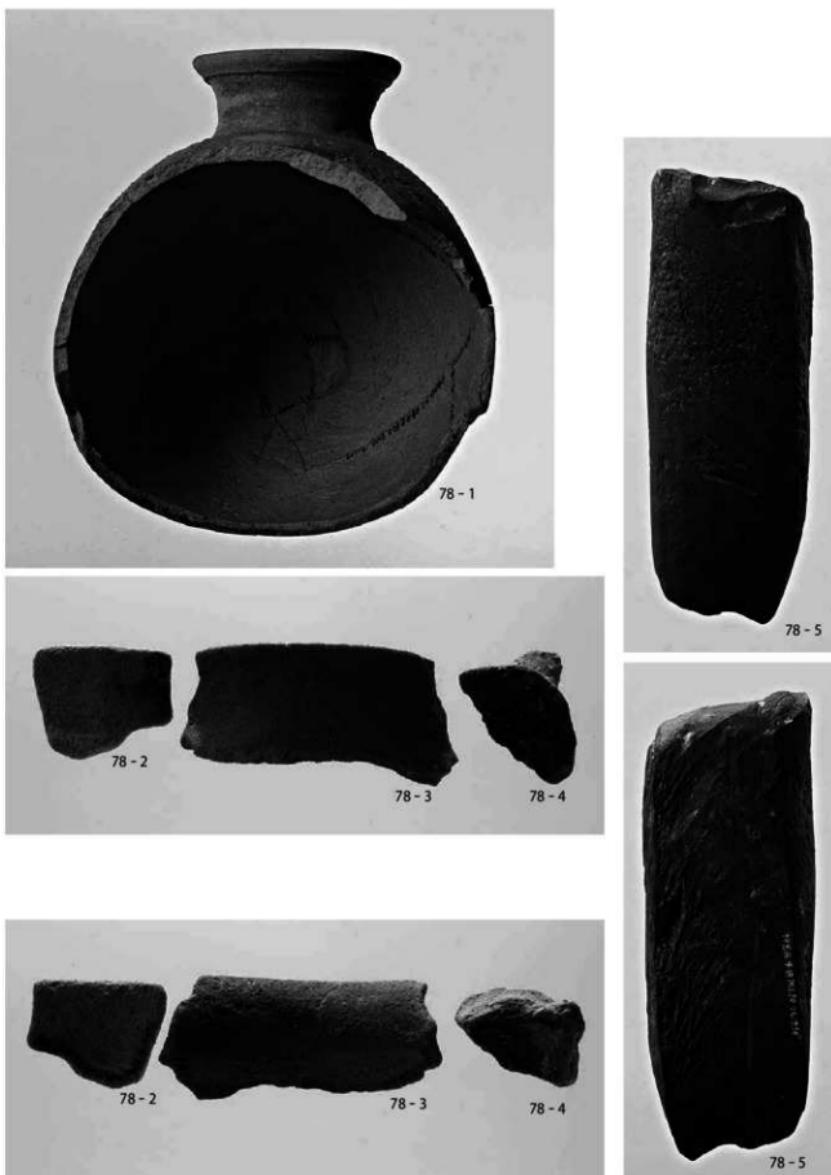


出土遺物 (5)

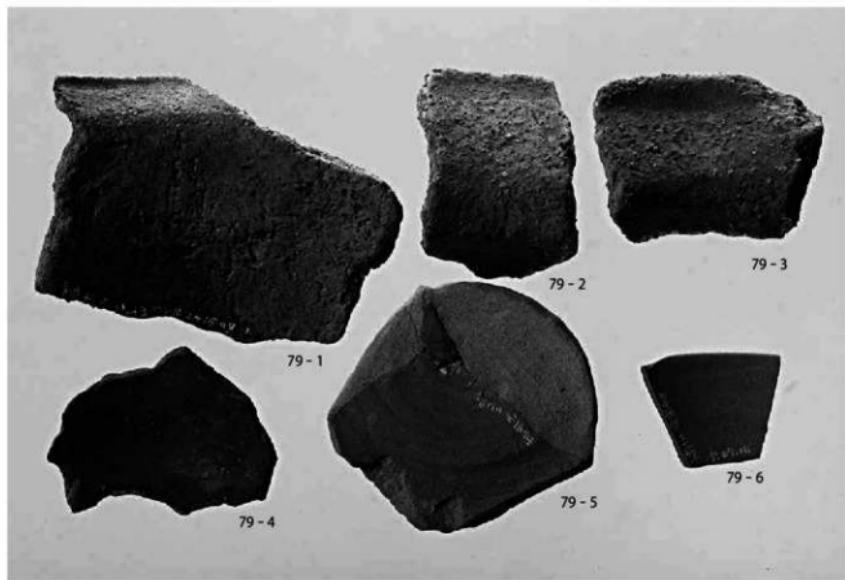
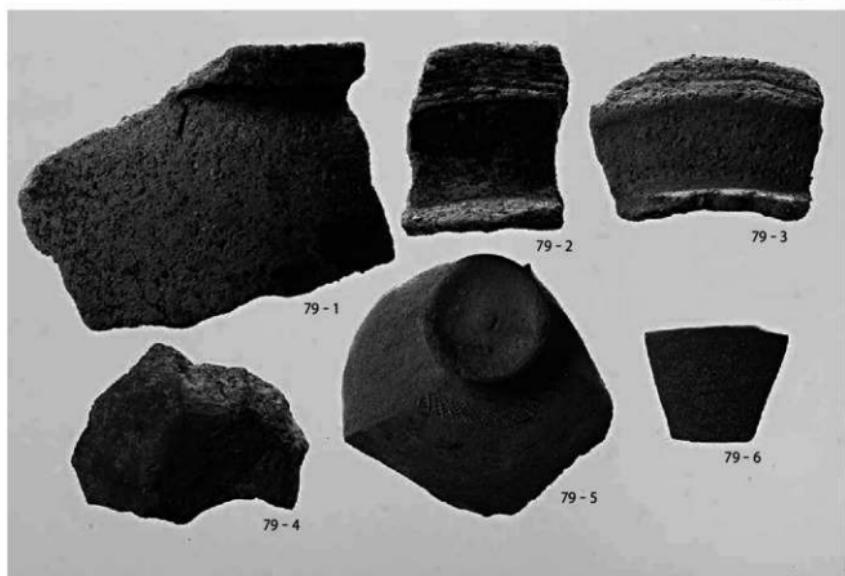


出土遺物 (6)

図版 135 神出西遺跡

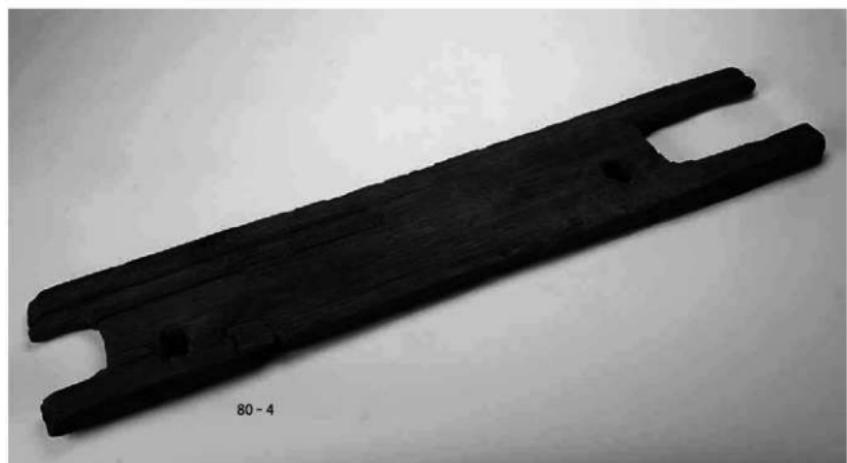
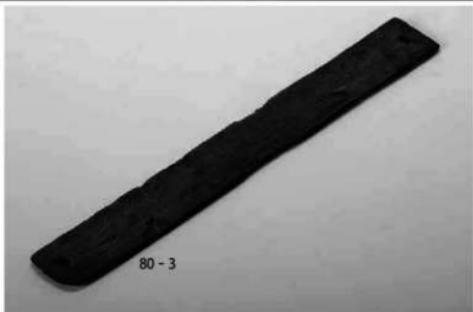


出土遺物 (7)

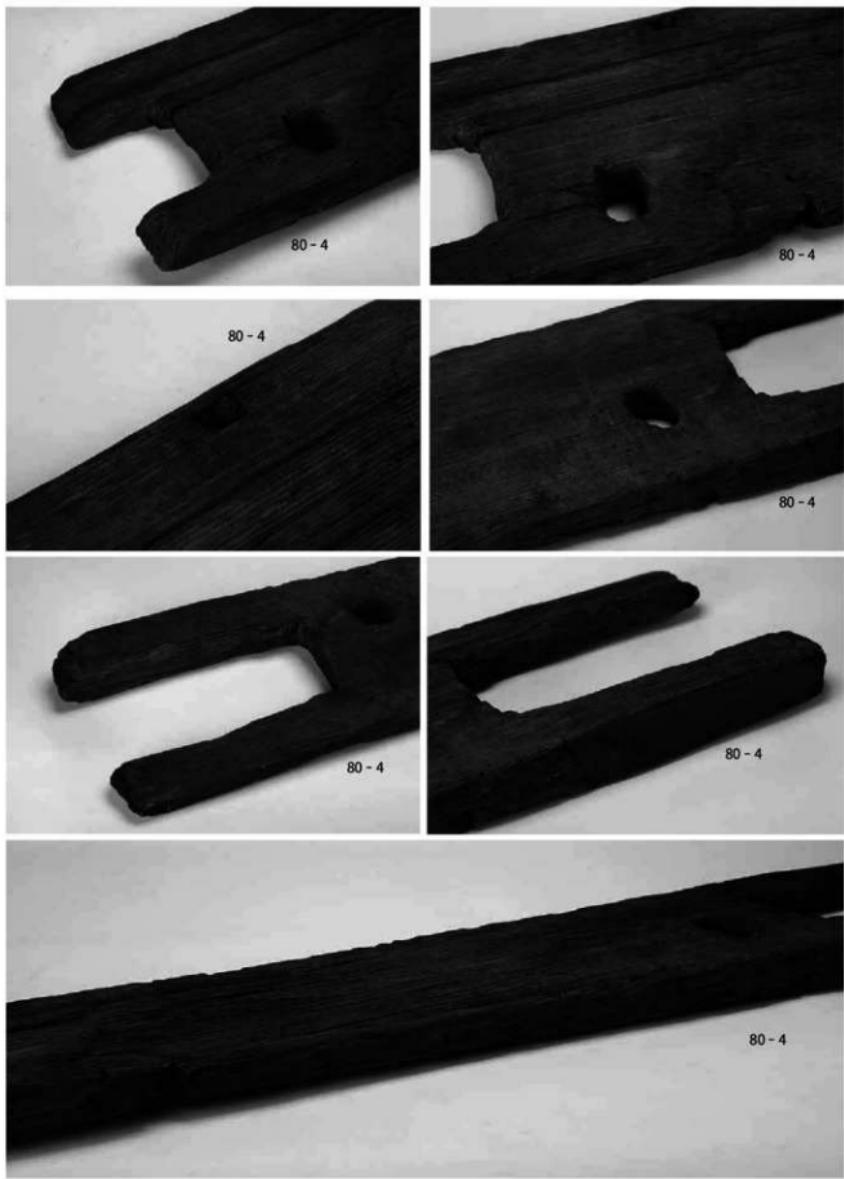


出土遺物 (8)

図版 137 神出西遺跡



出土遺物 (9)



出土遺物 (10)

図版 139 神出西遺跡

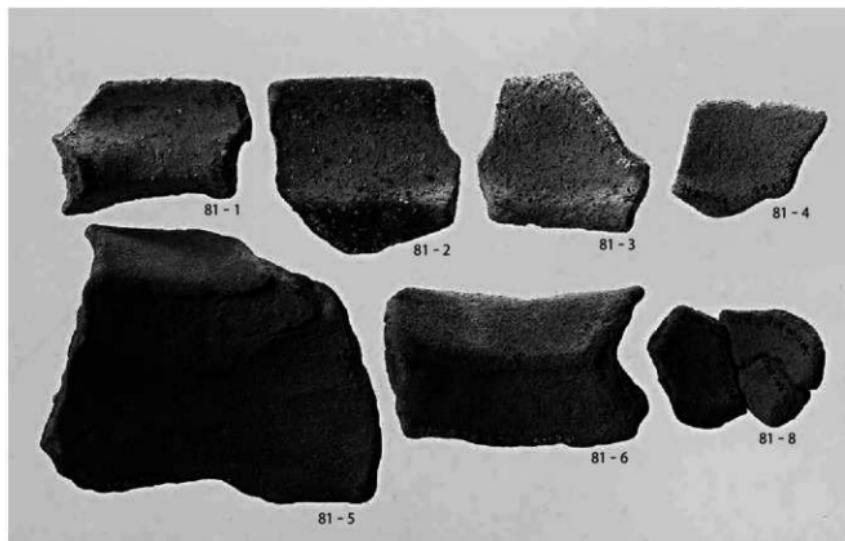
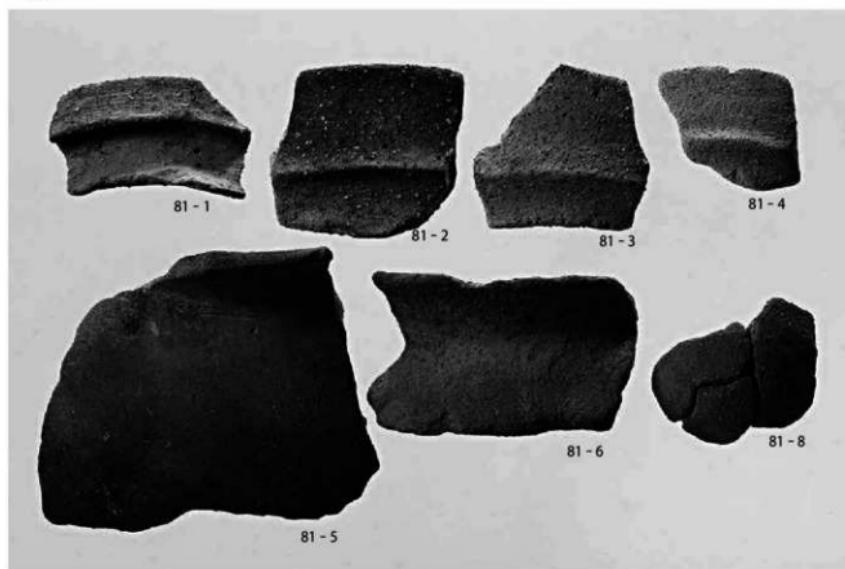


出土遺物 (11)

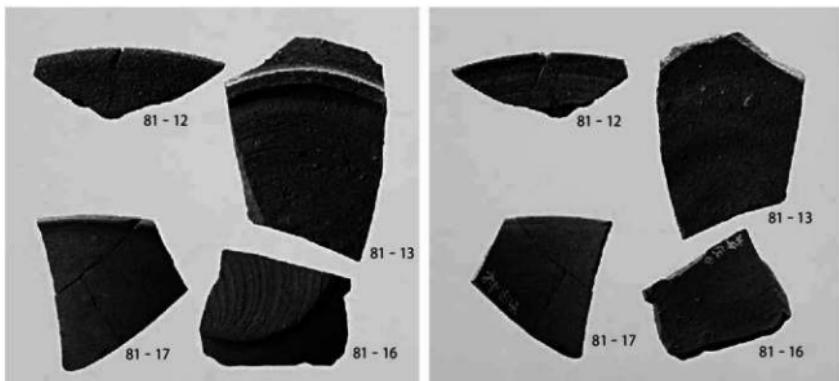
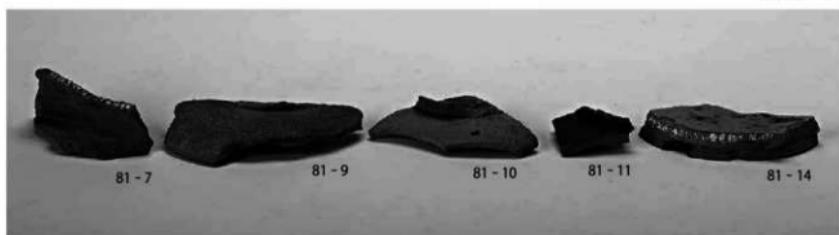


出土遺物 (12)

図版 141 神出西遺跡

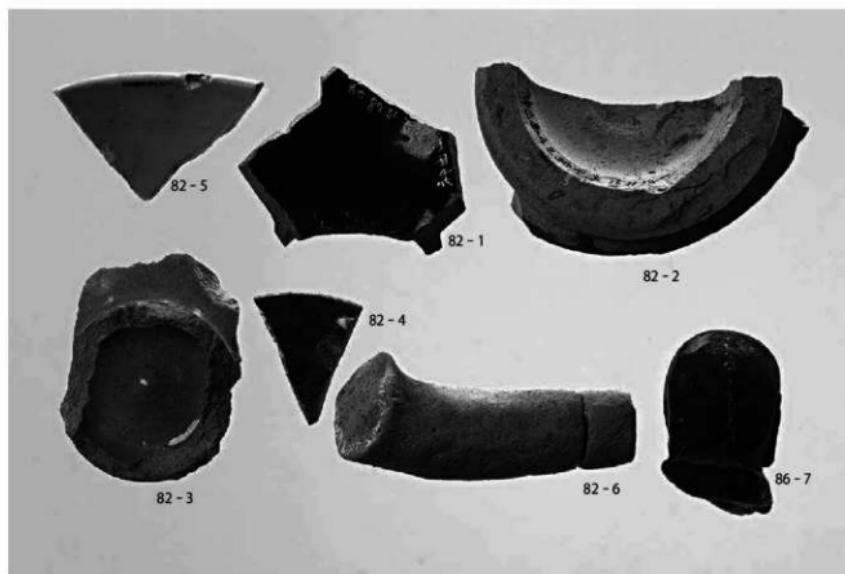


出土遺物 (13)



出土遺物 (14)

図版 143 神出西遺跡



出土遺物 (15)

## 報告書抄録

「アガサ」	ウミジンシイセキ フノヨシシイセキ マツダシイセキ キンセイサンシイワク (クマバシチ) ジンジンシイセキ							
書名	海石西遺跡 角落し遺跡 剥り田遺跡 近世山陰道路 (馬橋地区) 神出西遺跡							
副書名								
シリーズ名	一般国道9号 (三鷹・益田道路) 建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	I							
編著者名	伊藤浩正、渡辺正巳、ハリノ、サーヴェル・イケ、㈱加速器分析研究所							
編集機関	島根県教育庁理藏文化財調査センター							
URL	<a href="http://www.pref.shimane.lg.jp/mizubunkazai">http://www.pref.shimane.lg.jp/mizubunkazai</a>							
所在地	〒 690-0131 島根県松江市打田町33番地 TEL: 0852-36-8608 E-mail: mizubus@pref.shimane.lg.jp							
発行年月日	2018年3月22日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
		市町村	遺跡番号					
海石西遺跡	島根県 浜田市 三隅町	32202	097	34° 29° 15°	131° 96° 05°	20150601 ~ 20150630	120	一般国道9号 (三鷹・益田道路) 改築工事
角落し遺跡	島根県 浜田市 三隅町	32202	096	34° 28° 54°	131° 95° 15°	20151001 ~ 20160210	1,461	一般国道9号 (三鷹・益田道路) 改築工事
剥り田遺跡	島根県 浜田市 三隅町	32202	099	34° 75° 51°	131° 91° 27°	20160914 ~ 20161111	1,223	一般国道9号 (三鷹・益田道路) 改築工事
近世山陰道路 (馬橋地区)	島根県 益田市 土田町	32204	Q286	34° 75° 34°	131° 90° 71°	20160519 ~ 20160914	1,315	一般国道9号 (三鷹・益田道路) 改築工事
神出西遺跡	島根県 益田市 遠田町	32204	Q353	34° 70° 89°	131° 86° 21°	20150701 ~ 20151002 20161107 ~ 20161221	1,300 1,000	一般国道9号 (三鷹・益田道路) 改築工事
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
海石西遺跡	集落跡	弥生時代 古墳時代 平安時代	自然河道	弥生土器、土師器、須恵器 縄袖陶器、金属製品			低湿地遺跡 縄袖陶器2点出土	
角落し遺跡	集落跡	弥生時代 古墳時代 平安時代 鎌倉時代	杭列2 土器(主)	弥生土器、土師器、須恵器 中世土師器、輸入陶磁器 陶器、木製品、石器			11世紀末から12世紀 前半と古墳時代中期の 低湿地遺跡 青磁の壺か香炉の獅子 頭状把手が出土	
剥り田遺跡	その他の 遺跡	江戸時代	環状遺構2 平坦面				対になる環状遺構2ヵ所	
近世山陰道路 (馬橋地区)	その他の 遺跡	江戸時代	石敷き 石垣	陶器			昭和に改修された街道 路	
神出西遺跡	集落跡	弥生時代 古墳時代	漢状遺構4 土坑1 環状遺構 旧河道	弥生土器、土師器、須恵器 白磁、木製品、石器				
要約	<p>島根県浜田市三隅町から益田市遠田町にかけて発掘調査を実施した5遺跡の調査記録である。</p> <p>海石西遺跡は低湿地遺跡で自然河道周辺から弥生時代中期から古墳時代初頭の土器が出土している。縄袖陶器も出土しており、周辺に古墳時代の土器が存在する可能性がある。</p> <p>角落し遺跡は三隅川河口周辺の低湿地遺跡である。古墳時代中期と平安時代から鎌倉時代にかけての土器や木製品が出土している。</p> <p>剥り田遺跡は丘陵上に位置する遺跡である。平坦面を挟む2ヵ所の高まりが確認されたが、出土した遺物はなく、遺跡の時期は不明である。丘陵裾は近世山陰道推定地が通っており、一里塙の可能性がある。</p> <p>近世山陰道路 (馬橋地区) は昭和に改修された街道の跡が確認された。丘陵斜面に改修前から存在していたと考えられる石垣もあり、近世までさかのぼる可能性が高い。</p> <p>神出西遺跡は遠田川流域の氾濫原が埋没後形成された遺跡である。弥生時代と古墳時代の構が検出されている。近隣に集落が存在していると考えられる。</p>							

※北緯・東経は、世界測地系にによる

一般国道9号（三隅・益田道路）建設予定地内  
埋蔵文化財発掘調査報告書1

海石西遺跡 角落し遺跡  
廻り田遺跡 近世山陰道跡（馬橋地区）  
神出西遺跡

発行 2018（平成30）年3月  
発行者 国土交通省中国地方整備局浜田河川国道事務所  
島根県教育委員会

編集 島根県教育庁埋蔵文化財調査センター  
〒690-0131 島根県松江市打出町33番地  
電話 0852-36-8608

印刷 さんきゅう印刷 株式会社